

平成 26 年度

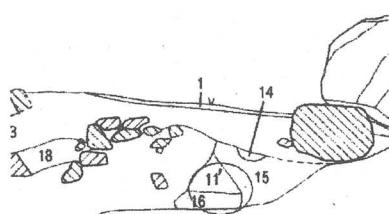
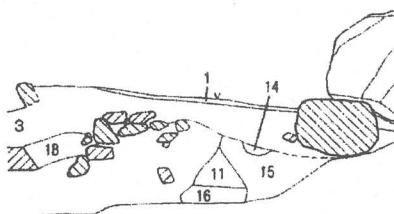
芦屋市内遺跡発掘調査報告書

八十塚古墳群第 153 地点
城山・三条古墳群第 118 地点

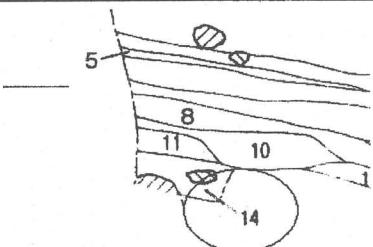
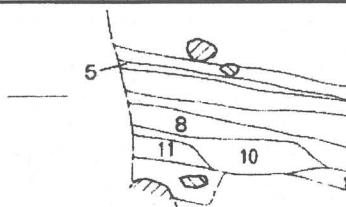
2016 年 3 月
芦屋市教育委員会

芦屋市文化財調査報告第104集 正誤表

頁・行	誤	正
報告書抄録 八十塚古墳群第 153地点 調査期間	2014085	20140805
1頁 左段 下から2行目	芦屋市はその兵庫県	芦屋市は兵庫県
3頁 左段 8行目	20・25	20・22・25
3頁 左段 9行目	67・73	67・71・73
3頁 左段 下から22行目	浅岡1881	浅岡1981
3頁 左段 下から19行目	S8地点で豊穴	S2地点で豊穴
3頁 右段 19行目	涼塚	涼塚
3頁 右段 21行目	寺ノ内A・B墳	寺ノ内A墳(2号墳)・B墳(1号墳)
5頁 左段 下から3行目	紹介	照会
9頁 右段 1行目	第46図	第45図
20頁 右段 17行目	使い杯	近い杯
20頁 右段 下から23行目	(56~63)	(58~63)
26頁 左段 1行目	鉢について	鉢について
26頁 右段 下から21行目	短頸壺17、	短頸壺17、台付長頸壺18、
26頁 右段 下から20行目	提瓶23	提瓶24
29頁 左段 下から1行目	右側側	右側壁側
29頁 右段 2行目	左側壁	左側壁側
29頁 右段 下から4行目	右壁側	左側壁側
30頁 右段 下から24行目	図版3・4	図版4・5
38頁 右段 下から18行目	薄送化	薄葬化
42頁 左段 下から8~7行目	須恵器・土師器を伴って	須恵器を伴って
43頁 左段 下から20行目	(第15・44~49図)	(第14・44~49図)
51頁 右段 下から1行目	11頁	18頁
52頁 左段 1行目	44頁	50頁
54頁 左段 下から5行目	南側のトレンチ	東側のトレンチ
56頁 左段 11行目	森岡1984	森岡1984b
57頁 右段 下から18行目	埋蔵文化時包蔵地	埋蔵文化財包蔵地
61・62頁 第59図 石室縦断面図 左側 土層番号	11	11'
61・62頁 第59図 石室縦断面図 土層注記を追加する		11' 11層類似層



61・62頁 第59図 北壁断面図 左側 土層番号を追加		14
---------------------------------	--	----



76頁 右段 23行目	第71図2~4	第70図2~4
84頁 左段 下から24行目	本調査地出土の	1号墳の本調査で出土した
84頁 左段 下から9行目	恵器碗	恵器塊
87頁 左段 下から1行面	2/1型	2/1型【森岡1984a】
88頁 左段 下から1行面	15・54	15・50・54
89頁 左段 下から23行面	佐藤隆、2015小田)、。	佐藤隆2015、小田2015】。
95頁 右段 24行目に挿入		第87集『兵庫県芦屋市 芦屋廃寺遺跡(第115地 点)発掘調査概要報告書』2010年刊行
図版8 右下遺物写真 遺物番	27が二つ並んでいる	右側の遺物番号を26に変更

平成 26 年度

芦屋市内遺跡発掘調査報告書

八十塚古墳群第 153 地点

城山・三条古墳群第 118 地点

2016 年 3 月

芦屋市教育委員会



第16号墳全景（南西から）



第16号墳全景（南から）



開口部付近からみた
第16号墳石室
(南から)



第17号墳全景（南東から）



第17号墳石室全景（南東から）



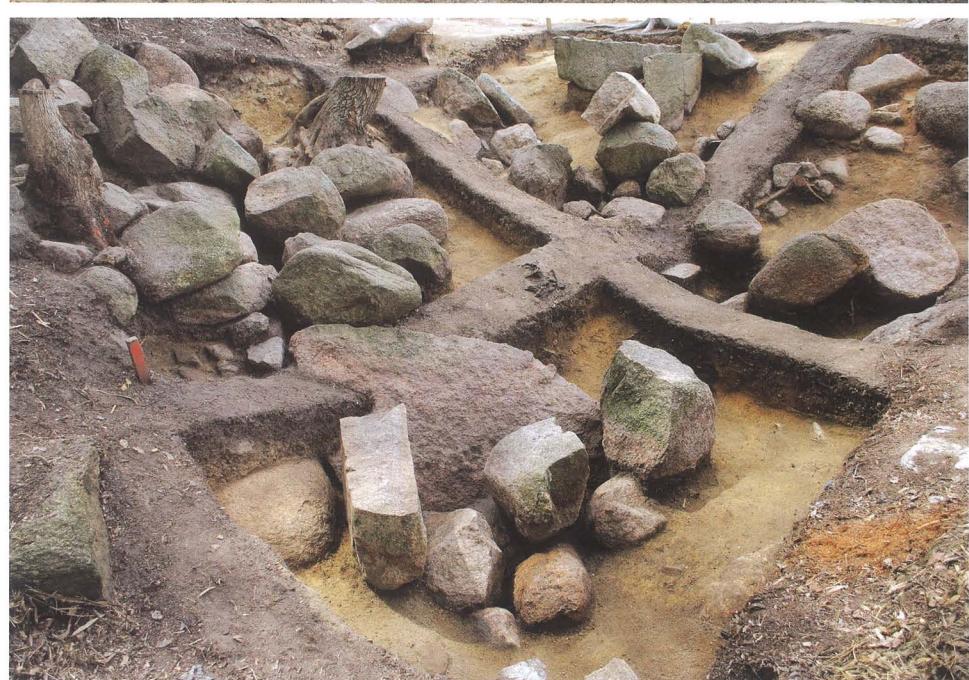
開口部付近からみた
第17号墳石室（南東から）



1・2号石材とコッパ集積群
(東から)



1・2号石材とコッパ集積群
(北から)



谷状地形における割石群
(南東から)



涼塚1号墳全景（東から）



開口部付近からみた
涼塚1号墳石室（東から）



矢穴石（北東から）



涼塚2号墳の天井石検出状況
(北西から)



涼塚2号墳石室全景
(北西から)



涼塚2号墳石室全景
(北東から)



刻印石（北から）



割加工石材1（南東から）



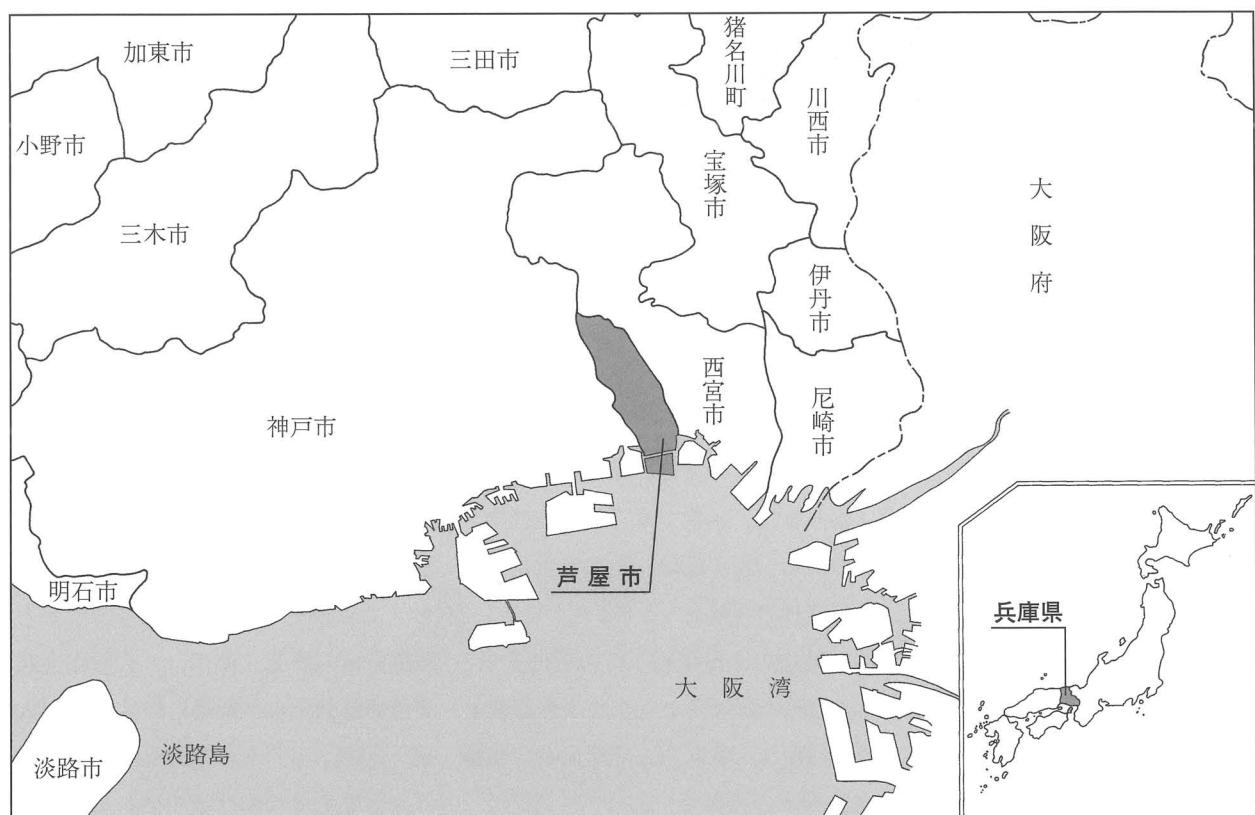
礎石（西から）

例　　言

1. 本書は、芦屋市教育委員会が平成26年度に原因者（事業者）負担事業として実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。本発掘調査の費用は事業者の協力を受けた。
2. 本報告書所収遺跡は、当該年度に本発掘調査を実施した八十塚古墳群第153地点と、城山・三条古墳群第118地点の2遺跡である。なお、八十塚古墳群第153地点は、徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群の範囲にも含まれている。また、城山・三条古墳群第118地点は、徳川大坂城東六甲採石場城山刻印群や山芦屋遺跡の範囲に近接する。
3. 平成26年度に実施した発掘調査および遺物・資料整理作業は、芦屋市教育委員会生涯学習課文化財係係長竹村忠洋（学芸員）、同課再任用職員（学芸員）森岡秀人、同課嘱託（学芸員）白谷朋世が担当し、同課嘱託西岡崇代が補助した。平成27年度に実施した遺物・資料整理作業、報告書（本書）の編集・作成作業は、森岡、白谷が担当し、竹村と西岡が補助した。上記の職員・嘱託のほかに、下記の臨時の任用職員、文化財ボランティアが従事した。
(臨時の任用職員) 須田佑子（平成26年度）・榎真菜美（平成27年度）・奥野弘美（平成27年度）
(文化財ボランティア) 梅本素子 中井みどり 仲谷由利子 星野剛一
本事業に関わる事務は、竹村が担当した。
4. 本書の執筆と編集は、森岡・白谷が担当した。執筆分担は、目次に氏名を掲げた。
5. 校正作業は、森岡・竹村・白谷・西岡の他、奥野が担当した。
6. 城山・三条古墳群第118地点の2基の石室は、芦屋市教育委員会 1967「埋蔵文化財包蔵地台帳」『芦屋市埋蔵文化財包蔵地台帳 八十塚E号墳発掘調査報告』〈芦屋市文化財調査報告第5集〉では、三条古墳群の「S-2」・「S-3」として掲載されている。しかし、武庫川女子大学考古学研究会1984『旭塚古墳-表六甲城山群集墳中の一巨石墳の測量調査とその考証-』所収の森岡秀人「旭塚古墳および城山・三条古墳群をめぐる諸問題」において、郷土史家細川道草氏の『芦屋郷土史』（芦屋史談会1963）の記述や小字名「涼塚」の存在などから「三条涼塚1号墳」・「三条涼塚2号墳」の呼称を用いるとともに、「三条涼塚1号墳」・「三条涼塚2号墳」を含まない形で三条1～5号墳の通し番号が振られている。本書では、これらを踏まえて、北側の石室を「涼塚第1号墳」、南側の石室を「涼塚第2号墳」と表記している。なお、「涼塚」の表記は、「シヅメヅカ」とも「シジミヅカ」とも読まれているが、本書では「シジミヅカ」の読み方を採用している。
7. 涼塚第1号墳は、天井石を構架した状態の石室内法が高さ約1mしかなく、測量を行うことが難しかった。また、涼塚第2号墳は、石室側壁が著しく南側に傾いていて天井石の一部が石室内に落ち込むなど、石室内での作業が危険な状態であった。このため、両石室の実測図は座標系第V系を用いて写真測量を行った。
8. 方位については真北を用いている。また、標高は、東京湾平均海水準（T.P.）で表示している。
9. 標準土色帖で判定した褐色の「褐」字は、本書では「褐」を代字として使用した。
10. 本書で記載した須恵器・土師器の器形・編年観は、主に、重見 泰 2014「後飛鳥岡本宮と飛鳥淨御原宮-宮殿構造の変遷と『大極殿』出現過程の再検討-」『ヒストリア』244号 大阪歴史学会 を使用するとともに、佐藤 隆 2000「古代難波地域の土器様相とその史的背景」『難波宮址の研究』第十一 大阪市文化財協会 編・佐藤 隆 2003「難波地域の新資料からみた須恵器編年-陶邑窯跡編年の再構築に向けて-」『大阪歴史博物館研究紀要』第2号 財団法人大阪市文化財協会・佐藤 隆 2004「8世紀の須恵器編年と難波宮・平城宮の並行関係-陶邑窯跡編年の再構築に向けて・その2-」『大阪歴史博物館研究紀要』第3号 財団法人大阪市文化財協会・佐藤 隆 2015「難波地域から出土する土器の特徴とその暦年代」『季刊 明日

香風』134号 公益財団法人古都飛鳥保存財団を援用した。

11. 本書を作成する上で引用および参照した文献は著者・編者名と発行年度をキッコウ括弧で示している。また、芦屋市教育委員会発行の〈芦屋市文化財調査報告〉については、第〇集と表記している。なお、引用・参照文献などは、巻末に集約している。
12. 発掘調査および整理作業の過程で、下記の方々からご助言・ご教示を賜った。記して感謝いたします（五十音順・敬称略）。
青地一郎、安部みき子、今井邦彦、勇 正廣、大澤研一、太田宏明、大橋利彦、奥田 尚、河内一浩、北垣聰一郎、久保 孝、斎藤大輔、ジョセフ ライアン、鈴木一有、武内良一、中川亀造、中久保辰夫、橋本 久、林 弘幸、肥田翔子、藤川祐作、松尾信裕、森下真企、山田暁、山本徹男、渡邊邦雄



兵庫県と芦屋市の位置

目 次

例 言
目 次
報告書抄録

第1章 はじめに

第1節 平成26年度の発掘調査の状況と調査体制	（白谷朋世）	1
1. 調査の状況		
2. 調査体制		
第2節 芦屋市の地勢と歴史的環境	（森岡秀人）	1
第3節 調査地の位置と環境、及び発掘調査の流れ	（森岡）	2
1. 八十塚古墳群をめぐる調査環境		
2. 徳川大坂城東六甲採石場について		
3. 山芦屋遺跡の発見とその後の調査		
4. 城山・三条古墳群について		

第2章 八十塚古墳群第153地点の調査

第1節 調査の経緯・経過と方法	（白谷）	5
1. 調査に至る経緯		
2. 調査の経過		
3. 発掘調査の方法		
第2節 発掘調査の成果	（白谷）	7
1. 発掘調査の概要		
2. 岩ヶ平支群第16号墳		
（1）墳形と外部構造		
（2）内部構造と遺物出土状態		
（3）出土遺物		
3. 岩ヶ平支群第17号墳		
（1）墳形と外部構造		
（2）内部構造と遺物出土状態		
（3）出土遺物		
（4）16号墳と17号墳の関わり		
4. 採石遺構と古墳状隆起		
（1）概観		
（2）1・2号石材と採石土坑		
（3）3～7号石材と石曳き道		
（4）コッパ集積群		
（5）古墳状隆起		
（6）出土遺物		
（7）石切丁場の形態について		

第3章 城山・三条古墳群第118地点の調査

第1節 調査の経緯・経過と方法	（白谷）	56
1. 調査に至る経緯		
2. 調査の経過		
3. 発掘調査の方法		
第2節 発掘調査の成果	（白谷）	57
1. 凉塚1号墳		

- (1) 墳形と外部構造
- (2) 内部構造と遺物出土状態
- (3) 小結
- 2. 凉塚2号墳
 - (1) 立地と外部構造
 - (2) 内部構造と遺物出土状態
 - (3) 小結
- 3. 採石関連石材
 - (1) 矢穴石
 - (2) 刻印石
 - (3) 割加工石材
 - (4) 天井石
- 4. 磁石
- 5. 出土遺物
- 6. まとめ

第4章 八十塚古墳群・三条古墳群・徳川大坂城石切場 発掘調査成果の総括と展望

- | | | |
|--------------------------------------|------|----|
| 第1節 岩ヶ平支群G小支群の発掘調査成果の若干の検討と二、三の課題 | （森岡） | 86 |
| 1. 岩ヶ平支群第16・17号墳2基の支群内における位置付け | | |
| (1) 前提となった調査環境 | | |
| (2) G小支群の選地環境及び存在意義 | | |
| (3) 岩ヶ平第16号墳石室の態様とその分析 | | |
| (4) 岩ヶ平第17号墳石室の態様とその分析 | | |
| (5) 本小支群編成原理の一端について | | |
| (6) 石室細部構造の分類上の位置と意義 | | |
| (7) 副葬品類からみた諸問題 | | |
| 第2節 岩ヶ平における石切丁場の様相をめぐって | （森岡） | 89 |
| 1. 複合遺跡としての群集墳と石切場 | | |
| (1) 古墳と石材調達地 | | |
| (2) 築城石の利用 豊臣から徳川へ | | |
| 2. 1・2号石材の残存状態から | | |
| (1) 現状確認状況と調査進行後の相違点 | | |
| (2) 刻印の存否について | | |
| (3) 矢穴技法の所用年代と矢穴型式の検討 | | |
| 3. 石曳き道の確認と丁場間の有機的関係 | | |
| (1) 丁場割の混融エリアと山出し | | |
| (2) 断続的検出の石曳き道と岩ヶ平刻印群第84地点石切丁場への連続性 | | |
| 第3節 城山・三条古墳群における後期古墳の伝聞・伝承・史料と群集墳の評価 | （森岡） | 91 |
| 1. 何がどう伝えられたのか | | |
| (1) 近代開発前後の芦屋川上流域とシヅメ塚 | | |
| 2. 凉塚の具体像と確認情報の一一致 | | |
| (1) 大平山南麓の古墳 | | |
| (2) 三条古墳群構成墳としての理解 | | |
| (3) 発掘調査の結果 | | |
| 3. 新出刻印石がもたらす諸問題 | | |
| (1) 「一に〇」の小形刻印と平四つ目結 | | |
| (2) 矢穴技法をとどめるその他の加工品 | | |

報告書抄録

ふりがな	へいせい26ねんど あしやしないいせきはつくつちょうさほうこくしょ
書名	平成26年度 芦屋市内遺跡発掘調査報告書
副書名	八十塚古墳群第153地点 城山・三条古墳群第118地点
卷次	
シリーズ名	芦屋市文化財調査報告
シリーズ番号	第104集
編著者名	(編集)白谷朋世 (執筆)白谷朋世・森岡秀人
編集機関	芦屋市教育委員会
所在地	〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号 TEL.0797-38-2115
発行年月日	2016年(平成28年)3月31日

所収遺跡名	八十塚古墳群第153地点	調査担当者	竹村忠洋・白谷朋世		
所 在 地	兵庫県芦屋市岩園町8・9・10・11				
コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	調査番号	34度75分09秒	135度31分27秒	20140527～2014085	2階建戸建住宅17戸の建築に伴う宅地造成工事
28206	YS153			800m ²	
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八十塚古墳群 第153地点	古墳 生産遺跡	古墳時代 近世	古墳(横穴式石室墳) 2基 採石遺構(関連石材・ 採石土坑・石曳き 道・コッパ集積群)	石鍛・土師器・ 須恵器・耳環・ 馬具・鉄釘	2基の横穴式石室墳(岩ヶ平支群 第16・17号墳)の石室および墳丘 の発掘調査を行った。ともに、土 師器・須恵器・鉄釘が出土したの に加えて、16号墳からは耳環や鉄 地金銅装の部品を含む馬具が出土 した。また、徳川大坂城東六甲採 石場岩ヶ平刻印群に関連する採石 遺構も確認されている。
要約	調査地は、自然地形を残しており、岩ヶ平支群G小支群を構成する第16・17号墳と、徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群に関連する採石遺構の発掘調査を実施した。第16号墳の主体部は左片袖式石室で、6世紀末に建築され、7世紀半ばに至るまで、少なくとも3棺の埋葬が行われたと推測される。墳形は東西12m、南北は12m以上の楕円形と考えられる。第17号墳の主体部は無袖式石室で単体埋葬墳である。建築は、第16号墳の羨道部埋葬よりやや遅れる7世紀中頃と考えられる。墳形は東西8m、南北12m程度の楕円形だが、墳裾の一部は近世の石曳き道でカットされている。採石遺構は、採石土坑を伴う端石(1号石材)や母岩(2号石材)など7石の関連石材と、石曳き道として使われた谷状地形、コッパ集積群などが確認された。				

所収遺跡名		城山・三条古墳群第118地点		調査担当者	竹村忠洋・白谷朋世		
所 在 地		兵庫県芦屋市山芦屋町65-4・65-14					
コ 一 ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調 査 面 積	調 査 原 因	
市町村	調査番号	34度73分85秒	135度29分52秒	20141001～20141212	800m ²	地上4階地下1階鉄筋コンクリート造共同住宅の建築工事	
28206	SY118						
所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項		
城山・三条 古墳群 第118地点	古墳	古墳時代 中 世 近 世 近 代	石室2基 採石遺構（矢穴石・ 刻印石・割加工石材） 礎石	石鎌・刃器・サヌカイ ト剥片・縄文土器・弥 生土器・土師器・須恵 器・瓦器・土師質土 器・磁器	昭和42年に埋蔵文化財包蔵地として周知された涼塚1・2号墳の発掘調査を行ったところ、1号墳は横穴式石室墳の位置に、中世以降に石室を再構築し、近現代に改変を加えたと考えるに至った。一方、2号墳は、近代において新たに築かれた石室であることが明らかになった。また、矢穴石や刻印石などの採石遺構が新たに検出されたことから、徳川大坂城東六甲採石場城山刻印群の南限が、さらに南に広がることが明らかになった。他所からの搬入と考えらえる、奈良時代の礎石や中世の矢穴列痕を持つ割加工石材も確認された。		
要 約		調査地は、近現代に宏莊な庭園を持つ邸宅として地形改変が行われていたが、2基の石室（涼塚1・2号墳）や、江戸時代初期の採石関連遺構（矢穴石・刻印石・割加工石材）の存在が確認された。1号墳の石室は後世の再構築によって姿を変えていたが、元来は直径8mほどの円墳であったと推測できる。2号墳は、軟弱な地盤上に築かれ、彎曲する平面形を持つ特異な石室で、近代になってから築かれたものであった。両石室には香炉が認められており、「塚」として信仰の対象になっていたことを示唆する。また、点在型丁場としての矢穴石の検出や、「88」刻印の上に一部重なるように「○」刻印を彫り直した刻印石も見出され、城山刻印群に関わる新たな知見が得られた。搬入された礎石は、茶室に伴う手水鉢に加工されていたが、調査地点の南方に位置する芦屋廃寺の礎石と考えられる。なお、中世の矢穴列痕をもつ割加工石材は1号墳の天井石に用いられていたが、生駒石の可能性が高いものである。					

第1章 はじめに

第1節 平成26年度の発掘調査の状況と調査体制

1. 調査の状況

芦屋市では、確認調査及び個人住宅の建設に伴う本発掘調査を国庫補助事業の対象として、調査を実施している。その一方、それ以外の共同住宅建築工事や宅地造成工事などの工事に伴う本発掘調査については、事業者の協力を得て、事業者負担の調査を実施している。

芦屋市内における埋蔵文化財の保護手続きについて、平成26年度には、文化財保護法第93条第1項並びに第94条第1項の規定に基づいて、事業者から提出された周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の施工に伴う届出や通知の件数は37件を数えた。平成26年度に確認調査を実施した10件の内の1件（城山・三条古墳群第118地点）と、平成25年度に確認調査を実施していた1件（八十塚古墳群第153地点）については、本発掘調査を実施した。なお、平成26年度における本市生涯学習課への埋蔵文化財包蔵地に関する照会は720件、開発指導等事前協議は41件であった。

本書では、2階建戸建住宅17戸の建築に伴う宅地造成工事に先立つ八十塚古墳群第153地点の調査と、地上4階地下1階鉄筋コンクリート造共同住宅の建築工事に先立つ城山・三条古墳群第118地点の調査について報告する。

2. 調査体制

本発掘調査および資料整理、報告書作成は、芦屋市教委が主体となり、平成26・27年度に以下の体制で実施した。

芦屋市教育委員会	教育長	福岡憲助
社会教育部	部長	中村尚代
生涯学習課	課長	長岡一美
文化財係	係長	竹村忠洋（学芸員）
再任用職員		森岡秀人（学芸員）
嘱託職員		白谷朋世（学芸員）
嘱託職員		西岡崇代（学芸員）
調査・整理補助員		須田佑子（26年度）
		榎 真菜美（27年度）
		奥野弘美（27年度）

第2節 芦屋市の地勢と歴史的環境

芦屋市はその兵庫県の南東部、大阪湾の北岸に面して市域を持つ。居住域は六甲山地と大阪湾に挟まれ、

北西から南東に比高差を有して変化に富む地形は、山地地形と丘陵・台地が多くを占め、段丘・扇状地が発達する。海岸部は沖積地となっており、低地帯が広がる。縄文時代晚期～弥生時代には、砂州・浜堤の発達とそれらの一部には定住集落が形成されたと考えられる。市域を南北に流走する主要な河川には、東の宮川と西の芦屋川があり、後者は典型的な天井川である。

人口が9万人を超える芦屋市は、大阪・神戸間のいわゆる阪神地域中央に位置する住宅都市として発展してきた。東は西宮市・尼崎市と連なり、その北部を宝塚・伊丹・川西の各市が摂津西部を補い、展開している。西は神戸市東灘区と境を接する。市域は南北に細長く、東西約2.5km、南北約8.3km、面積は18.57km²である。市街地の形成は、六甲山地南麓の台地や丘陵部にもみられ、東西に細長い平野部を中心形成されている。狭隘な平野部には、北から阪急電鉄神戸線、都市計画道路山手幹線、JR東海道本線、国道2号、阪神電鉄本線、国道43号、阪神高速道路神戸線・湾岸線と、複数の鉄道や幹線道路が並行して通っており、古代より東西交通の要衝となっている。

芦屋市内の先住者を示す物証は、後期旧石器時代に遡る。国府型ナイフ形石器や翼状剥片などが岩ヶ平遺跡・朝日ヶ丘遺跡・打出小槌遺跡・津知遺跡から出土しており、現海面下110mに海岸線が位置した頃の狩人たちが残した大型獣狩猟の痕跡であろう。

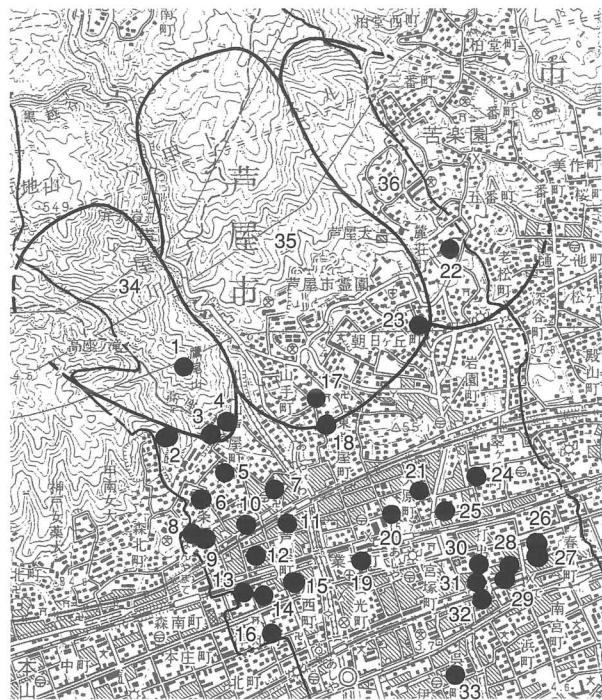
縄文人の活動を証する遺跡は、早期から晩期に至るまで点在する。六甲山地の山裾から丘陵に活動の証左をとどめる山芦屋遺跡や朝日ヶ丘遺跡は、近畿地方でも標識的な土器・石器に恵まれたことでよく知られている。扇状地や沖積低地帯で発見された芦屋廃寺遺跡・寺田遺跡・六条遺跡・前田遺跡・津知遺跡・業平遺跡などは地下深くの開発などによって、次々と見出されたものである。海浜部にある若宮遺跡などは初期農耕集落の誘引にも関わる性格を有しており、注目される。

次の弥生時代の遺跡は数多い。前期から中期前葉では、業平遺跡・寺田遺跡・清水遺跡・津知遺跡・若宮遺跡などが集落居住域や方形周溝墓を営み、金津山古墳近辺の低所にも前期の遺跡が存在する。中期中葉以降、後期前半にかけては六甲山地南斜面一帯に高地性集落が発達する。会下山遺跡や城山遺跡は著名な存在で、竪穴住居跡などが見つかっている。山麓に立地する城山南麓遺跡や山芦屋遺跡などもその範囲は広く、準高地性の立地要件を満たしている。後期後半以降は、芦屋川の右岸扇状地を中心に、月若遺跡・芦屋廃寺遺跡・寺田遺跡などからなる大規模な遺跡群が形成され、古墳時代に継続する。

市内の古墳をみると、阿保親王塚古墳（前期）、金

津山古墳（中期後半）、打出小槌古墳（中期末）、駒塚古墳（後期）などの大型古墳や独立墳が、翠ヶ丘丘陵上に分布している。山麓部では、三条岡山遺跡において検出された中期後葉の円墳を最も古いものとして、群集墳が形成される。後期から飛鳥時代（6～7世紀）にかけては、城山・三条古墳群や八十塚古墳群などの大規模な群集墳が形成される。芦屋神社境内古墳も、本来、笠ヶ塚群集墳を構成していた横穴式石室墳の一基と考えられる。また、業平遺跡において、後期前半（6世紀）のやや古式の横穴式石室墳が検出されている。

古代令制下、芦屋市域は摂津国菟原郡となる。当郡に属する芦屋郷の大半や賀美郷があつたと考えられている。8～9世紀の集落跡は、月若遺跡・芦屋廃寺遺跡・寺田遺跡をはじめ、芦屋川右岸の扇状地上に立地している。さらに、当地域には古代の寺院・郡衙・駅家の密集域を持つ。具体的には、古代寺院は飛鳥時代あるいは白鳳文化期（7世紀後半）に創建された芦屋廃寺跡がある。これと関連した藤ヶ谷遺跡においては、奈良時代の古墓が検出されている。以上、古代までの芦屋の生活文化史を綴った。



- | | |
|-----------------|----------------------|
| 1 城山遺跡 | 19 業平遺跡 |
| 2 会下山遺跡 | 20 大原遺跡 |
| 3 三条古墳群・山芦屋遺跡 | 21 打出岸造り遺跡 |
| 4 城山古墳群・芦屋川水車場跡 | 22 八十塚古墳群 |
| 5 冠遺跡 | 23 朝日ヶ丘遺跡 |
| 6 三条会下遺跡 | 24 阿保親王塚古墳 |
| 7 西山町遺跡 | 25 久保遺跡 |
| 8 三条岡山遺跡 | 26 堂ノ上遺跡 |
| 9 三条九ノ坪遺跡 | 27 元塚 |
| 10 芦屋廃寺遺跡 | 28 金津山古墳 |
| 11 月若遺跡 | 29 小松原遺跡 |
| 12 寺田遺跡 | 30 打出小槌古墳 |
| 13 六条遺跡 | 31 打出小槌遺跡 |
| 14 清水遺跡 | 32 若宮遺跡 |
| 15 前田遺跡 | 33 吳川遺跡 |
| 16 津知遺跡 | 34 徳川大坂城東六甲採石場城山刻印群 |
| 17 芦屋神社境内古墳 | 35 徳川大坂城東六甲採石場奥山刻印群 |
| 18 藤ヶ谷遺跡 | 36 徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群 |

第1図 芦屋市内主要遺跡分布図 1/50000

第3節 調査地の位置と環境、及び発掘調査の流れ

1. 八十塚古墳群をめぐる調査環境

阪神間の古墳時代の群集墳として著名な八十塚古墳群が歴史的に認識された端緒は、江戸時代に編纂された地誌類に遡る。その契機は尼崎藩主青山氏の治政下、寛文期以降、元禄・享保期までのおよそ半世紀にわたって進められた新田開発にあり〔芦屋市1971〕、農耕地の開発や岩ヶ平集落の形成と無縁ではない。その嚆矢は、享保19年（1734）に並河誠所が著した『摂津志』にみえ、「打出村西、岩平山中有数冢、呼曰八十冢」とある。「八十塚」は「百家」「千冢」同様、小古墳の密集地帯に与えられた呼称として、近世・近現代へと受け継がれている。寛政8年（1796）の『摂津名所図会』、明治44年（1911）の『西摂大観』などが主だった文献である。昭和初期までに活躍した紅野芳雄・吉岡昭などの活動でも、当古墳群は踏査され、その記録がみえる〔紅野1940、吉岡1944、武藤・森岡1976〕。

戦後の緊急発掘調査は、昭和30年代から始まり〔第1集〕、この古墳群が開発の波に呑まれていったのは、昭和40年代に入ってからである〔第4・5集〕。この間看過できないのが、古墳群の呼称問題であろう。芦屋・西宮両市にまたがる本古墳群は、従来は朝日ヶ丘・岩ヶ平・劍谷・老松・苦楽園の5つの古墳群に分別されていた。群集墳の個別分析には欠かせない群・支群・小支群の構造的理義を再考し、一つの古墳群として統轄し直し、その内部に改めて支群・小支群を設定したこと〔森岡1973〕は、大きな転向点となった。また、芦の芽グループと県立芦屋高校が数年にわたって実施した分布踏査・測量報告の集大成がまとめられ〔第11集〕、以後は宅地開発に伴う事前調査が今日まで本市教育委員会によって続けられている〔第13・14・20・22・63・67・99集〕。その間、関西大学文学部考古学研究室も1小支群の発掘調査を担当し、古墳群全体の発掘成果に基づく考証を飛躍的に前進させている〔第33集〕。

今回の調査地点は、第11集に基づく表面観察の知見を前提に進めることができたが、小支群レベルに相当する宅地開発に伴うものである。

2. 徳川大坂城東六甲採石場について

織豊期から徳川期の歴史を負う政治拠点としての位置を長期にわたって体現した大坂城は、広い繩張りに伴う高石垣の膨大な築城石の確保を必要とした。とりわけ、元和6年（1620）から開始された徳川家の大坂城改修は、百万石を超える切石・割石の調達が不可欠であり、西は佐賀県唐津市や福岡県行橋市から瀬戸内海地域、畿内へと連なる広大な石切場が稼動している。

この近辺では、六甲山地や生駒山地も対象となっており、両地域で徳川大坂城第1～3期工事のおよそ6割を賄うまでに大量の石材を供給している。その調査・研究の40年以上に及ぶ諸成果は、近年、大阪歴史学会によりわかりやすい形で総括されている〔大阪歴史学会編2009〕。報告書としての蓄積は、芦の芽グループの活動実績、教育委員会の諸報告と併せ膨大である〔第2・11・14・20・25・31・42・44・60・61・63・64・67・73・77・78・84・88・92・99・102・103集〕。

今回報告する両調査地点では、江戸時代初期の採石遺構が検出されており、八十塚古墳群においては岩ヶ平刻印群と、城山・三条古墳群では城山刻印群と重複し、いわゆる複合遺跡の態をなしている。前者については、今から15年前に表層確認が行われており、第60集にその様相に関する所見を一部示している。後者については、矢穴技法から中世に遡る矢穴石の存在も確認されているが、それが六甲山系における採石活動に由来するのかどうかの見極め、石材の検証が必要であろう。

3. 山芦屋遺跡の発見とその後の調査

本遺跡発見の契機は、昭和55年（1980）の城山山麓部における城山古墳群の発掘調査である〔森岡・藤岡1980〕（第54図）。N1地点や隣接するS1地点の発掘調査では、当時阪神間で最も古い早期の楕円押型文土器の破片が検出されており、縄文前期・後期の土器や石器も出土している。山芦屋遺跡を貫流する高座川は、中世段階で芦屋川へ注ぐ現在の位置への付け替えが推定されている〔浅岡1881〕が、その北岸では、S地区の1・2・4・12・13地点など、縄文時代各期の遺物が次々と確認されている〔森岡1983a・1983b、第14集〕。遺構では、土坑や落ち込みに加えて、S8地点で竪穴住居跡を確認している。高座川南岸のS3地点では土器などの出土はなく、集落の広がりを証するには至らなかった〔山芦屋遺跡発掘調査団1983、森岡1985〕。しかし、そのすぐ南のS8地点では、震災復興に伴う小発掘で、縄文時代中期末～後期初頭の竪穴住居跡1棟の一部を検出し、遺構一括の資料を得ることができた。磨消縄文手法搖籃期の推移を知る上で基準となり得る土器・石器である〔第27集〕。

S4地点の調査によって「山芦屋式」の設定が行われており〔関西大学1983〕、これに注目する研究者は多い。早期前半に帰属する大鼻式や大川式・神宮寺式の土器型式を欠くものの、黄島式に先行する山形押型文段階から福本式併行期、さらに高山寺式へと続く様相が確認され、当該期の標識遺跡となって久しい。

S14地点の調査でも土器や石器が出土しており、遺物分布範囲の南限をさらに延伸させることになった〔第79集〕。今回の調査地点は山芦屋遺跡の範囲外であるが、小片ながらも稀有な縄文土器片が確認されてい

るので、山芦屋遺跡の範囲に入る兆候が新たに確認できたといえる。

4. 城山・三条古墳群について

市域西部には、八十塚古墳群とは異なるタイプの群集墳が存在する。独立墳累積型の古墳群であるため、実際には群集墳か否かの検証は今後も必要であるが、これまでに16基の古墳の発掘調査が行われている〔第71・77・78集ほか〕。八十塚古墳群とは存続時期や副葬品目の構成も異なっており、性格の違いは瞭然だが、古代の菟原郡や葦屋郷と関わる郡領氏族級の階層へと連なる被葬者層の時系列的展開を示すものとして、特筆すべき存在である〔森岡2002〕。

その内部は個性豊かな古墳で構成されている。学史的にも重要な古墳や遺物出土地がいくつもあり、大正8年（1919）には清家植直による城山山麓部の竈形土器出土〔清家1919〕の紹介がある。昭和3年（1928）に発見され、長町彰が報告した小竈（ミニチュア竈形土器）〔長町1928〕は、今回発掘された涼塚1・2号墳と直線距離100m内外の至近地で出土しており、三条寺ノ内A・B墳と呼ばれている（第54図）。小竈のセットや須恵器40個体近くが確認されたB墳は丘陵の突端近くにあり、造墓初期の6世紀前半に築造されたものである。これらの資料は、ミニチュア竈形土器に注目した島田貞彦の研究〔島田1928〕でも世に知られている。

本市による当古墳群の発掘調査は、昭和52年（1977）の山芦屋古墳を端緒として、城山3・4・10・15・17・18・20号墳や三条5号墳、旭塚古墳の調査が進行した（第2～9図）。東西400mの範囲に広がることや、今回の調査地点が最南端に位置することなどが明らかになっている。その内容も、大型横穴式石室（山芦屋古墳・旭塚古墳・城山15号墳）・横口式石槨系石室（旭塚古墳・城山3号墳）・正方形玄室（山芦屋古墳）・竪穴系小型石室（城山18号墳）・終末期小型石室（城山20号墳）・多角形古墳（旭塚古墳・城山3号墳）・方墳（三条5号墳）と多彩なもので、近接墳同士で、墳形・規模・内部構造のそれぞれに違いが認められる。

市内の古墳は、低位・中位段丘上に前期・中期の古墳が展開し、後期古墳は中位・高位段丘上を占地する。中でも城山古墳群は鷹尾山の中腹、標高180mの高所まで急斜面に横穴式石室墳が立地する特異性がみられる。住宅地への変貌が大正末年前後から進んだために当時の土地開発で多くの古墳が煙滅しているが、さらに不時発見の古墳が確認される余地はあるだろう。また、扇状地上に存在する芦屋廃寺遺跡第81地点から耳環など古墳副葬品とおぼしき遺物が出土する事例もある〔第78集〕。これは、流動的な遺物とみているが、古墳群の南限が阪急沿線近くまで下る可能性もあるだろう。



第2図 山芦屋古墳発掘調査風景（1975年3月）



第3図 大規模な山芦屋古墳の石室奥壁



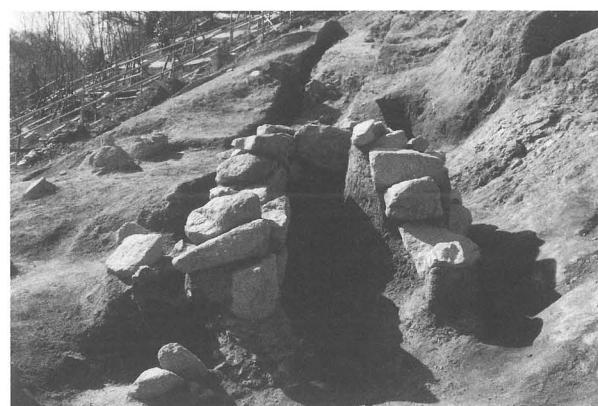
第4図 三条5号墳発掘調査状況



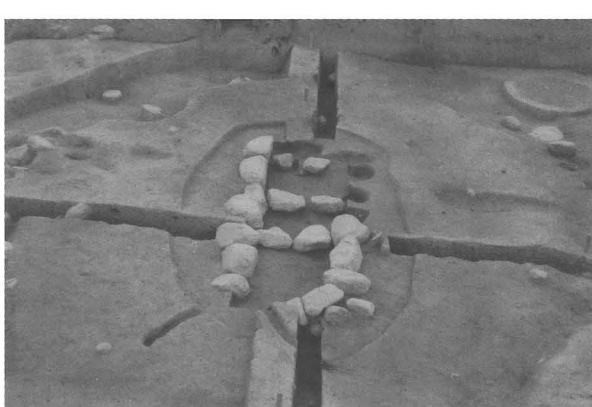
第5図 三条5号墳石室内須恵器出土状況



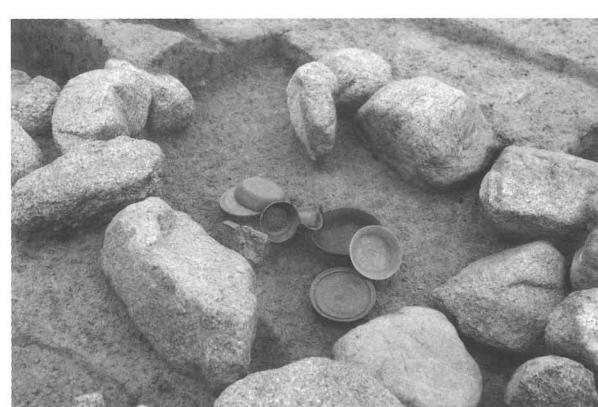
第6図 城山3号墳全景



第7図 城山3号墳の石室



第8図 城山18号墳全景



第9図 城山18号墳石室内須恵器出土状況

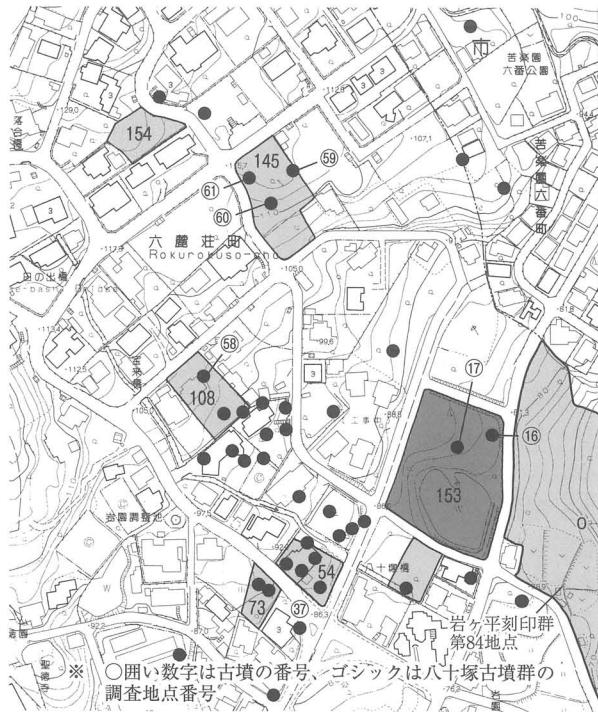
第2章 八十塚古墳群第153地点の調査

第1節 調査の経緯・経過と方法

1. 調査に至る経緯

兵庫県芦屋市岩園町8・9・10・11に所在する当該地（敷地面積約6,200m²）は、周知の埋蔵文化財である八十塚古墳群の範囲に入っており、分布調査によって岩ヶ平支群第16号墳（以下、「16号墳」と表記）と岩ヶ平支群第17号墳（以下、「17号墳」と表記）の2基の横穴式石室の存在が知られていた〔第11集〕（第11図）。加えて、徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群の範囲にも含まれており、採石土坑を伴う割石群や元和・寛永期の矢穴痕をもつ割石が点在していて、石曳き道と想定できる谷筋もみられるなど、採石場関連遺構の分布が認められる地点であった〔第60集〕。また、現況は、自然地形を残した雑木林（第12図）と近代以前に遡ると考えられる溜池（通称「灯籠池」）（第13図）で、市街地化以前の景観を留める場所であった。

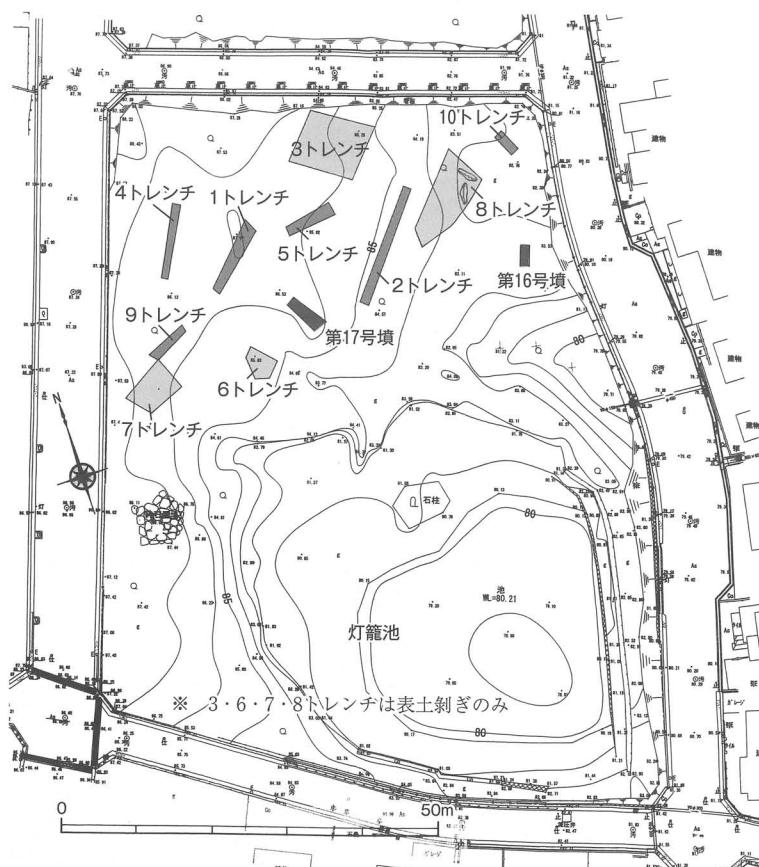
当該地において、2階建戸建住宅17戸の建築に伴う宅地造成工事の計画が進捗し、本市教育委員会に埋蔵文化財の有無やその内容についての紹介があった。そこで、平成25年（2013）12月10日に、本市教育委員会生涯学習課再任用職員森岡秀人（学芸員）ならびに同



第11図 調査地位置図 1/5000

課嘱託（学芸員）坂田典彦・白谷朋世が分布調査を目的とする踏査を行ったところ、①周知の古墳2基の現状は、第11集作成の頃と変化がなく、良好な残存状態であること、②採石土坑と割石の遺存状態も良好であること、③16号墳と灯籠池の間に形成された谷筋における割石群が現存していること、④灯籠池の護岸石垣に元和・寛永期の矢穴痕をもつ割石が転用されていること、⑤他に、古墳状隆起が二ヶ所であること、⑥自然石の並ぶ平場が存在することが確認された。

その後、平成26年（2014）2月4日に文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘届出書が提出された。これを受けて、3月3日～20日（実働10日）に、本市教育委員会生涯学習課係長竹村忠洋（学芸員）ならびに坂田・白谷を担当として、石室や採石遺構の有無を探る確認調査（トレンチ10箇所。調査面積210.25m²）を実施した（第10図）。新たな石室は検出されなかったが、当該地の基本層序が、上から、現表土、斜面地において下方に向かって成長する斜面堆積・表層堆積土、段丘礫層もしくは段丘礫層の再堆積層（地山）であることを把握した。谷状地形に新たな割石の分布を確認



第10図 確認調査トレンチ配置図 1/1000

したこともあり、矢穴痕を有する割石は6石（「1～6号石材」）となった。

この結果を受けて、本市教育委員会では、工事によって遺構が損壊を被る公算が強いことから、事業主と遺跡保存ならびに開発計画の調整を行ったが、16・17号墳や採石遺構の破壊が避けられないとして、記録保存を目的とする発掘調査を実施することになった。

2. 調査の経過

発掘調査は平成26年（2014）5月27日～8月5日（実働50日）を行い、調査面積は約800m²となった。

5月27日に調査区内の伐採を開始し、28日に機材を搬入した。伐採やフェンス設営を進めて、6月6日に16号墳・17号墳の掘削に着手した。6月19日からは、1・2石材周辺や古墳状隆起にも調査対象を広げた。あいにくの雨模様ではあったが、7月13日に現地説明会を開催した。翌14日から、3～5石材などの調査に着手したほか、順次石曳き道の断面調査や石室の解体を進め、8月5日に現地での作業を完了した。

その後、引き続いて、図面や遺物の整理、発掘調査報告書の作成に着手した。

3. 発掘調査の方法

調査地は、標高約80～87mを測る、西から東へ下る緩傾斜地である。調査地南半には灯籠池が広がっており、灯籠池の北側堤以北に、2基の古墳（16号墳・17号墳）と採石遺構の遺存が確認されている。

灯籠池の北側堤の一部には、古墳状隆起がみられる。この堤の北裾部には西から東に下る谷状地形があり、矢穴痕をもつ割石などの石材が散乱している。この谷筋は、第60集で報告した大規模な谷丁場へと続く位置に当たり、石曳き道と想定できる。この石曳き道の東側道路に近い部分は北側が比高差約2mの急斜面になっていて、その斜面上に南南西方向に開口する16号墳がある。16号墳の墳丘東半域は道路によって既に削平されているが、北部から西部の残存状況は良い。16号墳の北側墳裾付近には、採石土坑を伴う割石群（1号石材・2号石材）が展開している。谷状地形の北側



第12図 調査地近景（第16号墳付近）（南から）

で16号墳から西に約20mの位置に、南東方向に開口する17号墳があり、墳丘も一部残存している。

灯籠池の開削によって旧来の地形が大きく改変されている調査地南半と、確認調査において遺構や遺物を検出できなかった調査地北西部を本発掘調査の範囲から外して、16・17号墳と、採石土坑を伴う割石群、石曳き道の東部に調査区を設けて目的に調査を行った。また、石曳き道と古墳状隆起については、適宜トレンチを設定して土層や遺構の有無を検証した。

なお、調査区ごとに、遺構に則して任意に主軸を設定したので、それぞれの主軸方向は異なっている。

16・17号墳は、石室主軸を想定した仮基準線（旧主軸）を墳丘、墳裾周溝まで延長して、現況図を作成したのち、調査区と土層観察用の畦やトレンチを設定した。墳丘および石室内の掘削は人力で行い、表土を除去して石室の形態がある程度はっきりした時点で、石室主軸基準線（新主軸）を設定した。墳丘は、まずトレンチを掘削して、墳丘構築土や周溝埋土、石曳き道などの土層状況を観察してから、墳丘基底面まで全掘した。石室内は、新主軸基準線を用いて、右側壁側（西側）と左側壁側（東側）に分割し、適宜、土層観察用に石室を横断する畦を残しながら石室床面まで掘り下げた。最終的には16号墳は右側壁のみを、17号墳は石室すべてを、重機によって解体し、基底石の据え付け状態や墓壙の様態を観察した。

採石土坑を伴う1・2号石材と、3・4号石材を有する石曳き道東部、および5号石材については、露出石材より一回り広い調査区を設定し、十文字に畦を残して掘削した。1・2号石材周辺や17号墳墳丘上において検出したコッパ集積群についても調査を行った。また、6・7号石材については石材の略則図を作成した。

各遺構は、平板測量及び手描きによる図化と写真撮影を行った。土層の色調注記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（1994年版）を使用した。写真撮影は、デジタルカメラ、35mmフィルムカメラを用い、フィルムはリバーサル、カラーフィルムを併用した。

なお、遺構等の埋め戻しは行わなかった。



第13図 調査地現況（灯籠池）（南から）

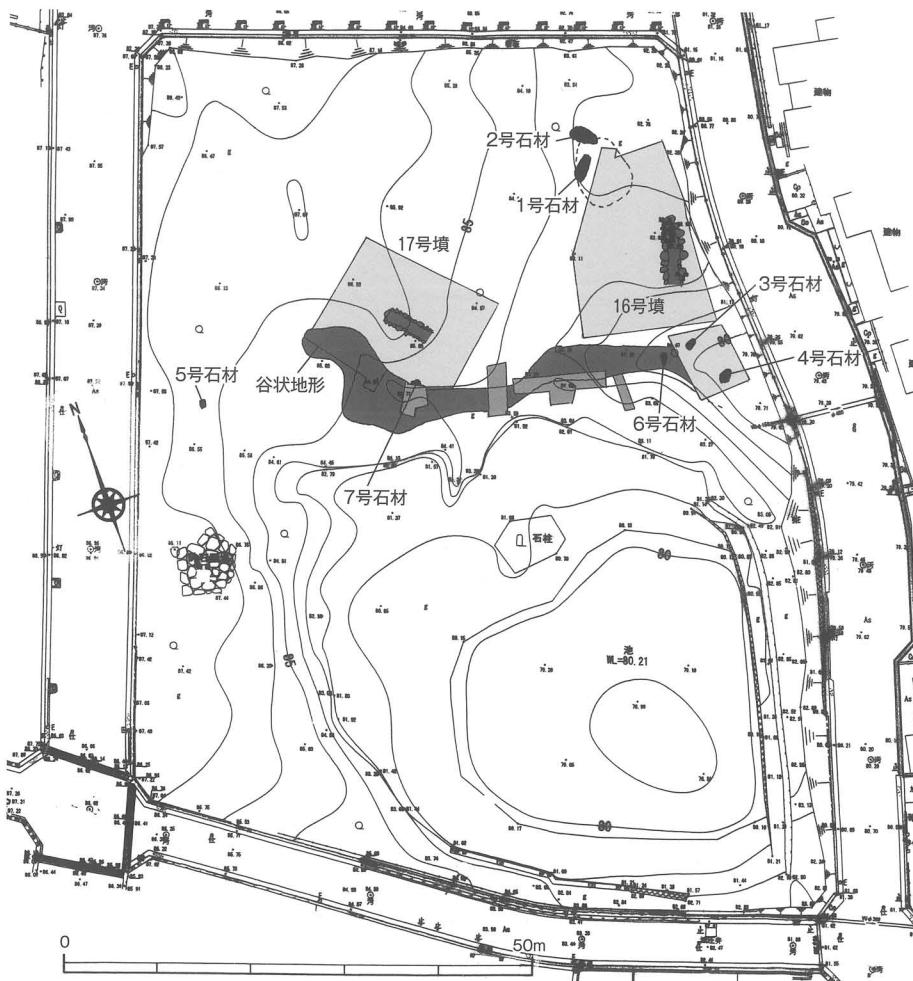
第2節 発掘調査の成果

1. 発掘調査の概要

今回の発掘調査によって検出した遺構は、2基の古墳（16号墳・17号墳）と採石遺構である。採石遺構は、採石土坑を伴う割石群（1・2号石材）と石曳き道（3・4・6・7号石材を含む）に加えて、調査地中央部西寄りで確認した5号石材と、採石土坑や17号墳墳丘上で検出したコッパ集積群がある。本節では、16号墳、17号墳、採石遺構の順に記述する。

2. 岩ヶ平支群第16号墳

本墳は、調査地北半部の南東端、東側道路沿いの小尾根筋、標高83.0m付近に立地する（第14・15図。巻頭図版1）。東方に向けて、大阪湾や生駒山地を遠望できる、傾斜変換部を占める。墳丘東半域は、南北方向に開設された道路によって既に削平され、姿を失っていて、道路面との比高が約3mある切通しの崖となっている。第11集には、墳頂や上部封土に加えて天井石も残っていない状態が記録されていたが、奥壁や側壁の一部が確認できていた。調査開始前の現況も第11集段階と大差はなく、羨道部と玄室の南半が完全に



第14図 遺構配置図 1/800

埋没し、玄室の右側壁が土圧によって大きく内側に迫り出した状態となっていた。また、第11集段階に比べると玄室内への腐植土の堆積が進んでいたため、右側壁の見かけの高さは1.5mほどであったが、側壁・奥壁の多くが良好な状態で遺存していることは明らかであった。なお、石室前面は崩落が著しく、高さ約2mの崖錐になっていたものの、この部分の伐採を行ったところ、羨道部石材が崖面まで伸びていることが明らかになった。ただし、羨門部はこの切削斜面の形成によって既に崩壊している（図版1）。

石室は、主軸をN15°Eに採り、南南西方向に開口する。石室の平面形式は左片袖式である。道路の開削によって、墳丘東半域は左側壁から1~3mほどしか残っていないが、北側から西側にかけては残存墳丘が緩傾斜をなしていて、墳丘範囲が読み取れる。

（1）墳形と外部構造

本墳は、本来は北から南に張り出した微支尾根の先端部に位置していたと想定される。安定した尾根頂部を整形し、標高82.5m付近に基底面を置いている。墳丘の規模については、石室中軸から西側墳裾まで約6.0mであることから、東西12.0mの数値が導き出せる。一方、奥壁から北側墳裾まで6.5mを測ることや、崩

壊した羨道前半を考慮して石室全長を10m程度と推測すると、東西より南北の方が長くなり、南北に18mほどの楕円形と考えられる（第14~18図）。なお、周溝の痕跡は確認できなかった。

基底面の地業 本墳は、墳丘東半域と開口部を既に失っているので、築造法や具体的な数値には推定が含まれるが、次のように復元できよう。まず、尾根上部の東西15m以上、南北15m以上の範囲を対象として、本来の地形に従って腐植土などを除去し、旧地形を整地する造成を行っている。墳丘基底面は、土壤化した褐色砂質土（第18図26・55層。以下、16号墳の土層については、第18図に拠る。）である。

石室を横断するE-E'ラインでは、右側壁背面から約6mまでは、土壤層（55層）の検出レベルが82.7~



第15図 岩ヶ平第16号墳現況図 1/100

82.8mとほぼ平坦に整形されているが、それより西側は緩やかに82.6mまで下がっている。これは、16号墳が乗る尾根の西側に本来あった幅広で浅い谷状地形を反映しているのだろう。一方、石室を縦断するD-D'ラインでは、奥壁墓壙肩部の土壌層（26層）の検出レベルが82.6mあるが、墳裾付近では標高82.3mと緩やかに下っている。これは、周溝なしでも墳域を明確にできるような尾根上の微地形を選択し、それとの接続点を生かしたことによるのであろう。

墳丘内列石・集石 墳丘内には、意図的に並べられたようにみえる直径0.1~0.5m程度の花崗岩自然礫（亜円礫・角礫）が含まれていた。D-D'ラインでは、奥壁の裏込め土（23層）に伴って石が配置されるなど、石室構築過程の中間ステージにおいて、石室周囲に半円状の墳丘内列石が設けられたようである。（巻頭図版1中段）。さらに、それよりも外周では、地山から露出している石材をそのまま残したものや、花崗岩礫を根固め的に詰め込んだものが認められ、一部は集石をなすように見受けられた。このような秩序を欠く石材集中部は、墳丘下部盛土作業の単位終了に際して、土木的に配置されたものかもしれない。

墳丘の築成 まず、切土工法を用いて、東西幅4.0m以上、深さ約1.0mの長方形墓壙を造成する。墓壙内に基底石を据えて、25・67層で一挙に墓壙肩部近くまで埋めたのちは、奥壁裏・側壁裏とともに、墓壙底から約1.3mまで、厚さ10~20cmの互層により、版築を思わせる縞状の入念な裏込めを行って石材を安定させている（図版3下段）。この作業単位は、褐色土の混じる奥壁際の23層や右側壁際の49層をもって一区切りとする。これより上は、石室構築石材を置くと、22・44・47・48層を皮切りに側壁裏まで直接墳丘盛土へと連なる土を積み上げ、さらにその外縁部に墳丘下部盛土を積み上げている。一方、表土直下では、石室構築石材際には小分けした置土がみられるので、石室上部を構築する際の盛土方法は、下位・中位の盛土方法とは異なっていたことがわかる。なお、奥壁側と右側壁側の裏込めや墳丘盛土の施工方法に認められる細部における共通性は、奥壁・側壁と墳丘構築の工程上の連動を示しているといえよう。

D-D'ラインでは29・31層を、E-E'ラインでは42・57・58層を、現存する最も外表側の墳丘盛土と判断したので、盛土の立ち上がりは急なものとなり、そこから腰高の墳丘であったことを想定したい。

現状では、墳丘基底面からの盛土の厚さや現存する石室上部の高さを勘案すると、本来の墳丘高は、優に3.0mを超える復元値が導き出せよう。

転落石材 石室前面は既述したように崖状の急落面があり、この崖下には近世以降の石曳き道が想定される。この石曳き道部分には、3・4号石材だけでなく、表土に半ば埋もれた状態で、一辺50cmを超える六甲花

崗岩の自然礫や割石が多くみられた（第46図。巻頭図版3）。これらについては、石室の天井石や羨道前半の側壁構築材を含む可能性があり、それらを対象として江戸時代の採石活動が行われた可能性も指摘したい。

（2）内部構造と遺物出土状態

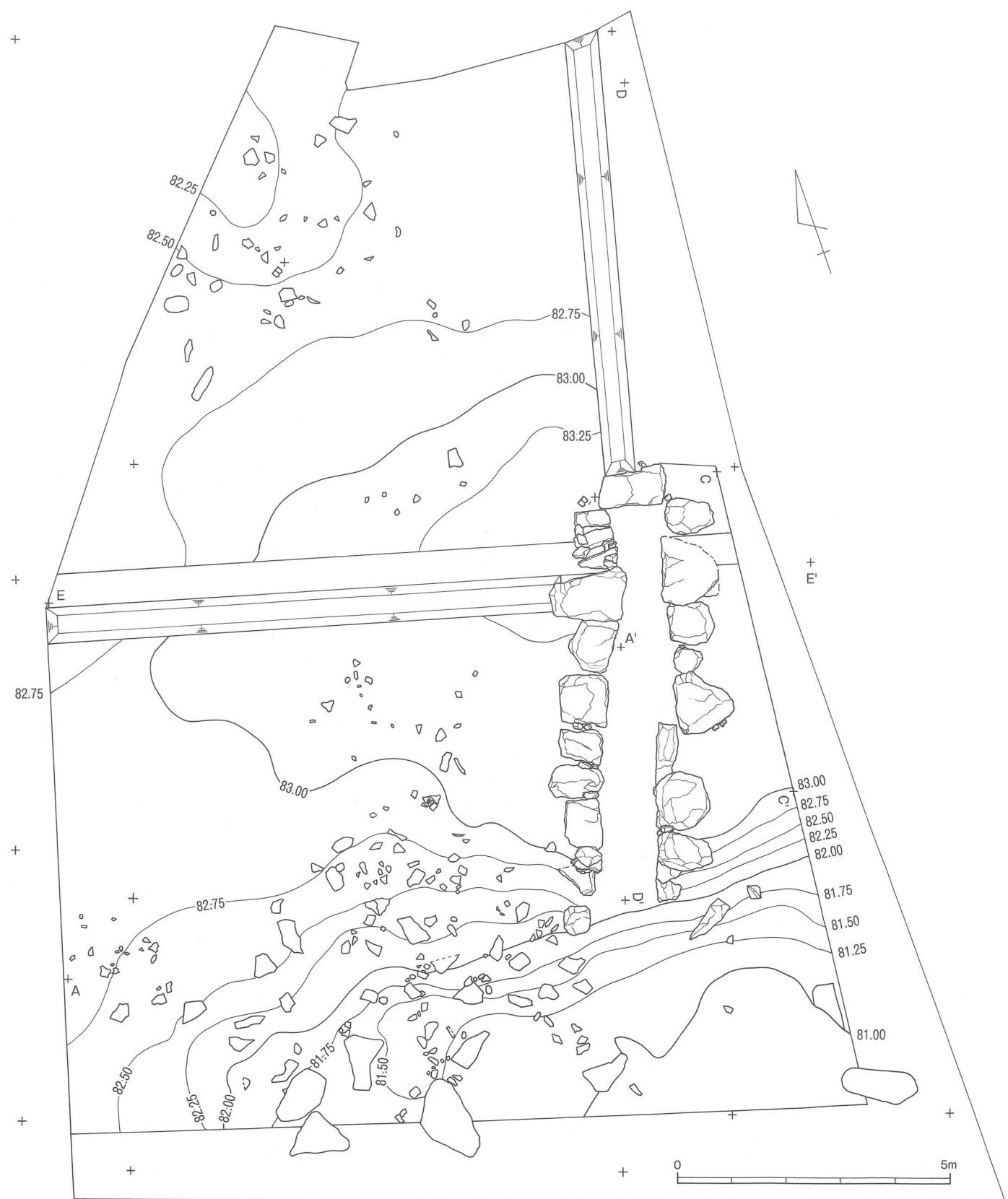
墓壙 墓壙は土壌層から掘開されており、地山に達する。D-D'ライン・E-E'ラインにおいて、深さは約1.0mを測る。規模は検出長8.8mで、西肩部から玄室左側壁の壁面までの幅は2.94mを測る（第23図、図版3）。左側壁は安全上の理由から解体しなかったため、墓壙東部の様子は不明であるが、墓壙西肩部から石室中軸とみたP1-P2-P3ラインまで2.0mあるので、本来は幅約4.0mに達するだろう。奥壁から右側壁を囲む北辺から西辺の様態から、隅丸長方形の平面形が想定できよう。ただし、有袖部で「L」字状になって、羨道相当部では幅を減じることも考えられる。なお、墓壙の左側壁側の造作については、左側壁に袖を設ける石室構造を採用している背景として、墳丘基底面の旧地形レベルそのものが下降し、墓壙肩が低い位置にあったことが推測される。

墓壙底には地山の段丘礫層に含まれる花崗岩礫が露頭している部分もみられるが、概ね平坦に仕上げられていて、奥壁側のレベルが81.7m、開口部のレベルが81.6mの小差にとどまる。なお、石室の基底石を据えるための溝状の掘り込みや石材ごとの掘形はみられなかった。また、墓壙内において、明確な排水用施設としての基盤加工や配石などの設置は認められなかった。

石室の構造 天井石のすべてと、石室上部の石材は既に失われており、石室内には厚さ1.5m以上の土砂が堆積するとともに、石室構築材の一部が石室内に転落していた。また、羨門部も既に崩壊しており、羨道の全長や墓道を確認することはできなかったが、伐採時に予測した通り、奥壁から崩落部分までの約8mについては、両側壁壁石が良好に遺存していた。主体部の横穴式石室は、主軸をN15°Eに採り、南南西方向に開口する。平面形は左片袖式で、高さ1.6mの玄門石を有することが明らかになった（第16・19~23図、巻頭図版1、図版2・3）。なお、石室構築に供した石材は、すべて近在で調達可能な六甲花崗岩や花崗斑岩などの自然礫である。

石室上面を検出した段階で、玄室右側壁の上部が大きく石室内に傾いていたが、基底石は元位置を保っており、左側壁残存長7.36m、右側壁残存長7.80mを計測し、玄室は全長4.00m、奥壁幅1.46m、最大幅1.78m、玄門幅1.20m、羨道は残存長3.80m、最大幅1.3mを測る。石室残存高は奥壁部分で1.80m、玄室右側壁で2.10m、同左側壁で1.96m、羨道右側壁で1.60m、同左側壁で1.56mである。

玄室は、奥壁から玄門部に向かって左側壁がやや開



第16図 岩ヶ平第16号墳平面図 1 / 100

くが、胴張りは認められない。羨道も玄門部から開口部に向かってやや開く。玄室・羨道ともに弱いながらも持ち送りが認められるが、右側壁は基底石が一部割れて側壁上部が石室内に傾いているため、極端に持ち送りが強くみえている。左側壁は奥壁から5石目が玄門部の袖石となり、幅1.50m、高さ1.6m、厚さ0.5m以上の「L」字形の据わりの良い杏形の石材を構えて、奥壁構築に次いで設置されている。これに対向する右側壁は、奥壁から5石目の基底石が、幅0.9m、高さ1.0m、厚さ0.7mを測る四角柱状で、その上に幅0.75m、高さ0.58mの直方体の石材を載せて玄門部を意識した構成になっている。

玄室床面には敷石が施されていたが、羨道は土床である。

奥壁 奥壁の残存高は、1.80mである。奥壁幅をほぼ満たす巨礫を鏡石として用い、その上に補完石材を加えている。基底石は幅1.42m、高さ1.18m、厚さ0.90mの板石で、直角三角形に近い形の奥壁面は、右壁寄り上部に隙間がある。上段石材は幅1.2m、高さ0.62m、厚さ0.56mを測る直方体の石材を横位置に置いている。右側壁際は基底石と上段石材の隙間を埋めるように小型の石材数石を間詰石としている。

側壁 側壁は、右側壁で最高5段、左側壁で4段が遺存しており、玄室の残存高は2.10m、羨道の残存高は1.60mである。使用石材の法量・形態は多様で、右側壁と左側壁、羨道と玄室、玄室の南半（前半）と北半（後半）で用石法が異なる。

右側壁は、玄室北半に直方体の大きな基底石を設置して、その上に幅0.3~0.8mの礫を積み上げている。長軸を横位置に置いている石もあるが、多くは小口面を内側に向けて控えを長くとっている。長・短を繰り返す方法は壁体構造の常道であり、その組み合わせ部分もみられる。唯一残っていた5段目の石材は、幅1.0m、高さ0.6mの長方形の面を壁面とする巨礫であるが、厚さは1.4mを超えており、やはり小口面を壁面に用いている。玄室南半は基底石から3段分、厚さ0.3~0.4cmの板石状の石材を集中的に用いている。3段目の石材の上面が玄門の基底石の上面や奥壁の上面にほぼ揃うように目地を通しており、ここまでが一つの作業単位といえる。玄室両側壁において、看過できない共通点は、奥壁側から順次階段状に上面を落とす基底石の使用を探る点で、畿内型石室の中では、やや変則的と言えよう。

対して、羨道は上面を揃えるように基底石を据えてから、一段ごとに積み上げている。羨道部の4段目上面が、玄門部2段目上面、玄室4段目上面（基底石が群を抜いて大きい奥壁際のみ3段目上段）と目地合わせが行われている。

左側壁も、玄室北半には大型の基底石を用いているが、右側壁と比べると不整形の石材で、見劣りがする。

南半の基底石は右側壁と同様の板状の石材であるが、2段目以上の石材の法量や形態は、右側壁とはかなり異なる。玄門部際には選択的に立方体に近い礫を一気に2石積み上げている点が特異である。しかし、北半の基底石上面と南半北寄りの2段目上面は目地を通し、その上は段ごとに揃えて積み上げていて、南半玄門際との間に間詰石を多用している。なお、左側壁北半上部の石材は、右側壁と比べると大型の石材を用いているため、使用数は少ない。一方、羨道部の積み方は、右側壁に似ていて、一段ごとに目地を揃える意識がみられる。

八十塚古墳群における有袖式の石室は、老松1号墳や岩ヶ平3・7・10・19・22・59号墳が右片袖式で、左片袖式は本墳と岩ヶ平5号墳のみである。右袖優勢の傾向は、全国的傾向にかなう。そのような中にあって、本墳が左片袖式であるのは、傾斜変換部により近い左側壁（東側壁）に袖部を設けて壁体を強固にするためであったと考えられる。奥壁から4石目の玄門部際には立方体に近い巨礫を選択的に積み上げているのも、同じ理由による工夫であろう。

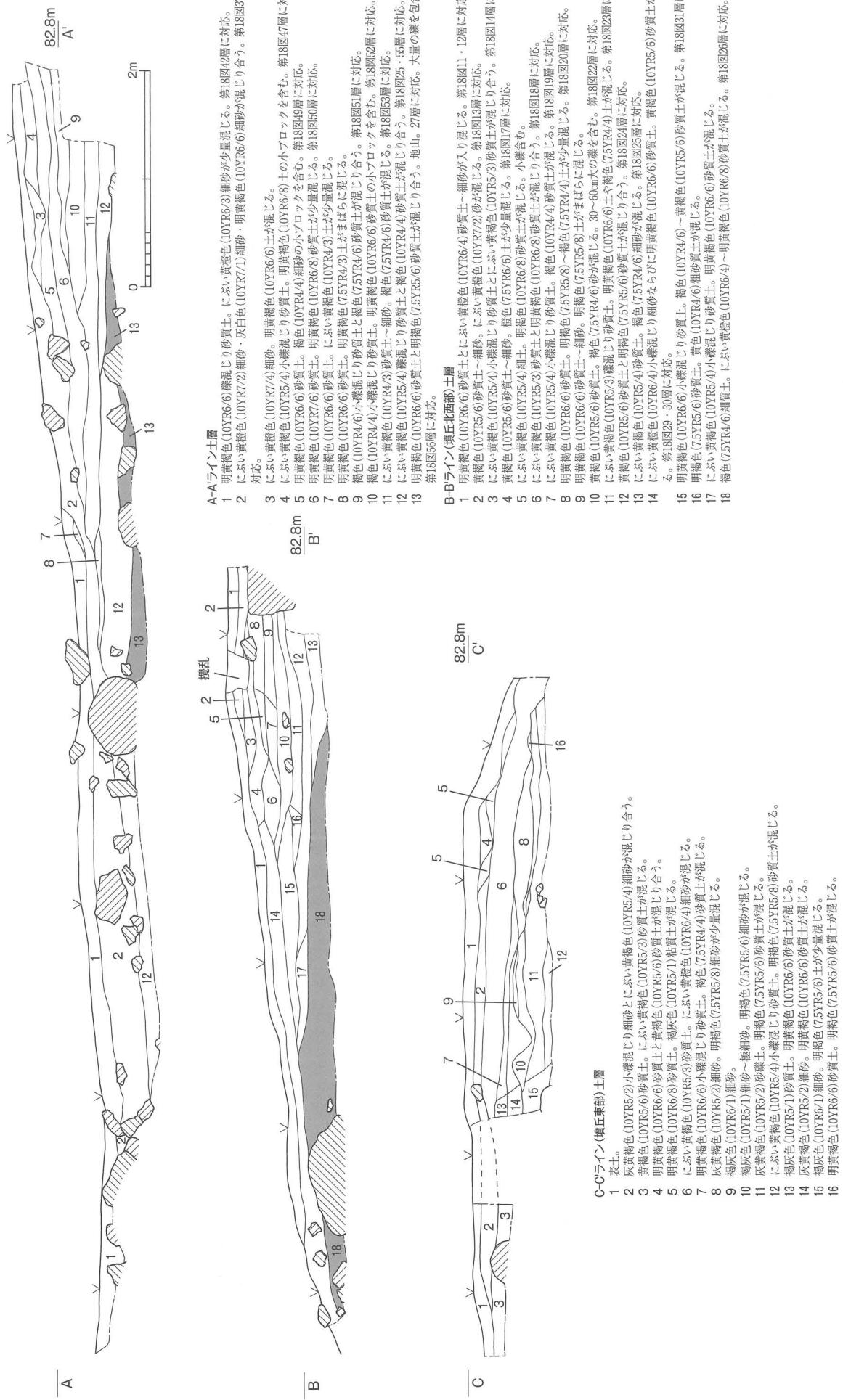
なお、羨道右側壁の石材間から須恵器片が1点出土したが、玄室の奥壁寄り出土の破片と接合関係があり、ほぼ完形の広口壺（第24図17）に復元できたので、攪乱に伴う移動とみている。

石室埋土 石室内には、明黄褐色砂質土が混じる黒褐色土（腐植土：1層）が1m以上堆積していた。その下には、明黄褐色砂混じり粘質土（2層）、明黄褐色砂質土（3層）、明黄褐色砂（4層）といった地山起源の真砂土が流入している。4層上部には、第21図に示したように、多くの花崗岩コッパが含まれていて。調査当初は、追葬用の床面敷石の可能性を考えたが、古墳時代に遡る遺物の出土は全くなく、4層の分布範囲が玄室から羨道の玄室寄りに限られる様子などから、天井石が失われた後に流入ないし投入されたものと考えて大過ない。一部には、乱掘によって浮き上がった石室床面の敷石が含まれているようにみえたが、石材割加工で発生する数多くのコッパが集中的にみられる様相から、近世ないし近代の採石活動時に生じた不要碎石を石室内に投棄したのであろう（図版2上段左）。

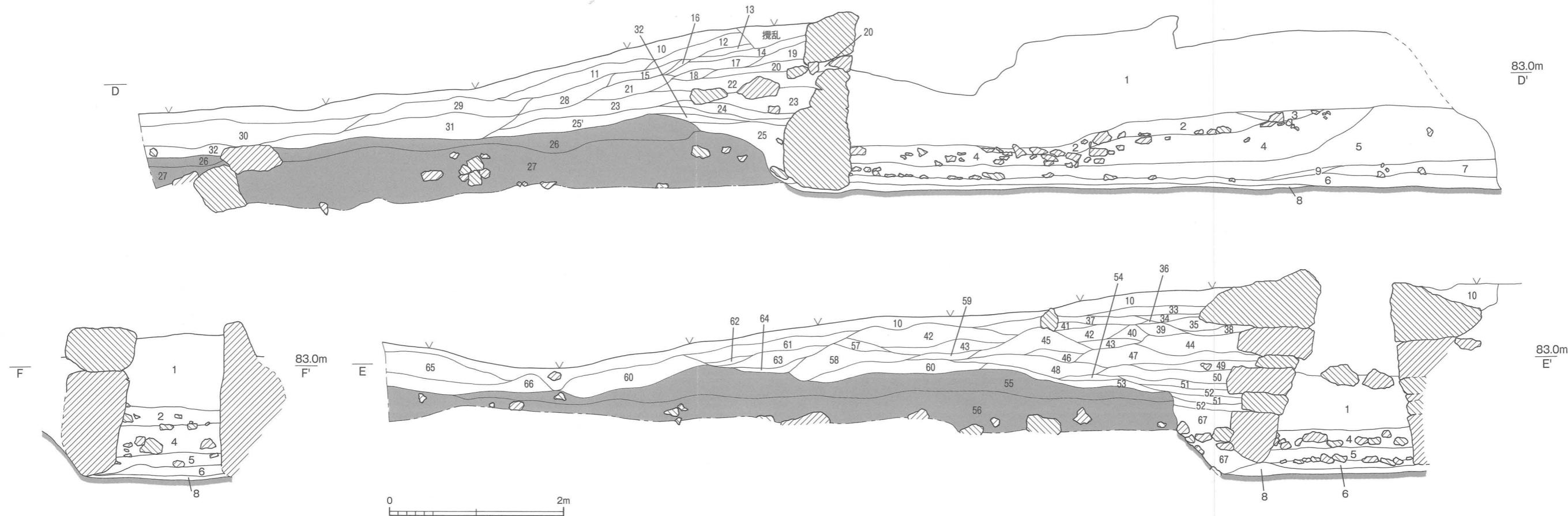
4層の下には、褐灰色粘質土が混じる明黄褐色砂質土（5層）が広がっている。5層の厚さは、玄室では15cmであるが、羨道南半では60cmに達している。石室における埋葬が終了してから徐々に堆積したものとみている。5層最下部から直下にかけては、石室床面に敷設されている敷石と副葬品が検出されている。

石室床面 石室の床面は、敷石を施工した礫床と整地した土床に分けられる（第18・19図、巻頭図版1、図版2・3）。前者は玄室内に限定されており、羨道には敷石は施されていない。

墓壙床面には、基底石を据える前に、薄く褐灰色粘



第17図 岩ヶ平第16号墳土層断面図（1）



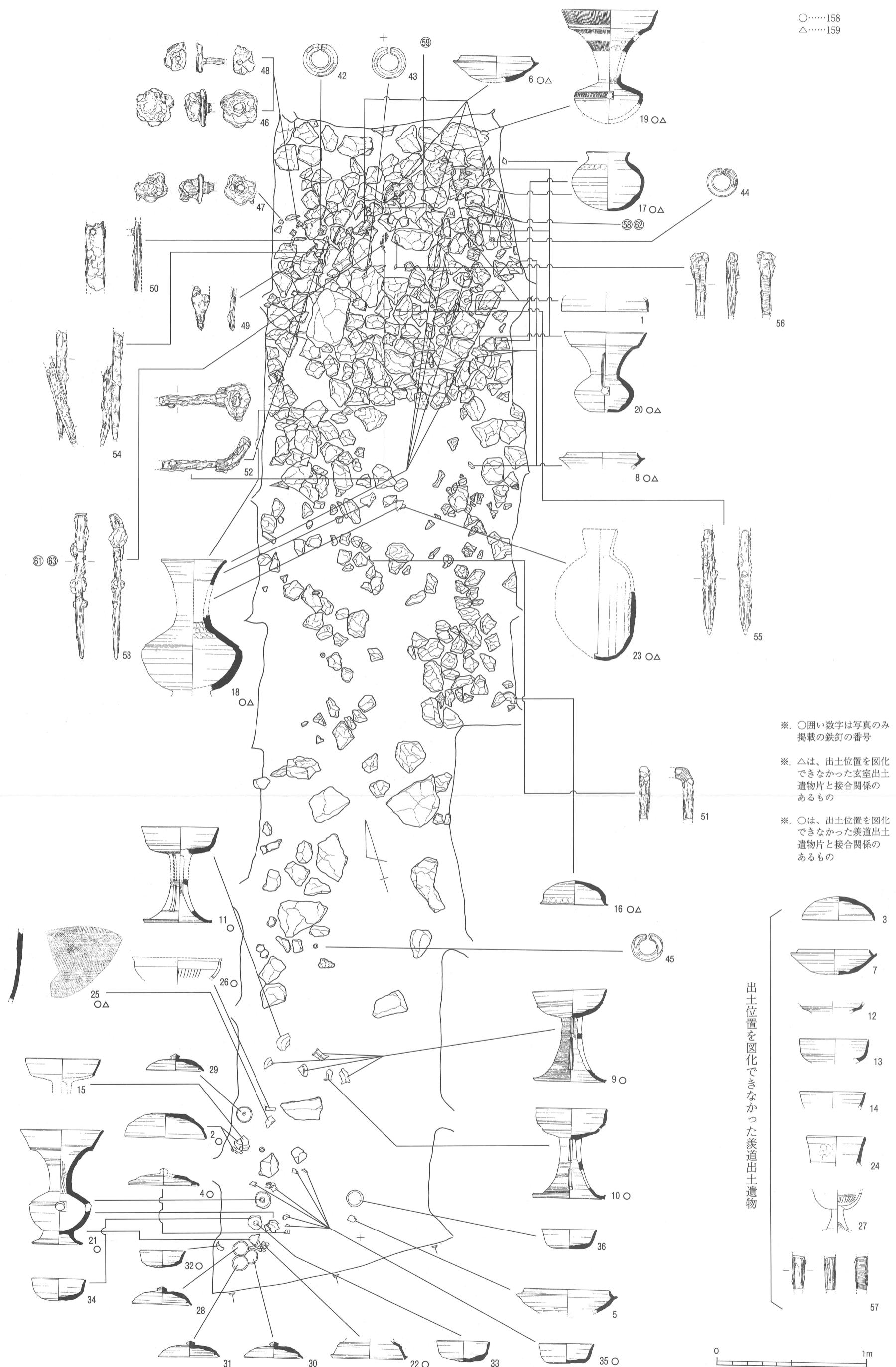
第16号墳土層

- 1 黒褐色(10YR3/2)砂質土(腐植土)。明黄褐色(10YR6/8)砂質土が混じる。
- 2 明黄褐色(10YR6/6)砂混じり粘質土。褐色(10YR4/1)砂質土が混じる。
- 3 明黄褐色(10YR6/6)砂質土。褐色(10YR6/1)粘質土が混じる。
- 4 明黄褐色(10YR6/8)砂。
- 5 明黄褐色(10YR6/8)砂質土。褐色(10YR5/1)粘質土が混じる。
- 6 明黄褐色(10YR6/8)砂質土。黄橙色(10YR7/8)砂が混じる。
- 7 明黄褐色(10YR6/6)砂質土。
- 8 明黄褐色(10YR6/6)砂質土。褐色(10YR5/1)粘質土が混じる。小礫含む。
- 9 明黄褐色(10YR6/8)砂質土。黄橙色(10YR7/8)砂が混じる。6層に似る。
- 10 表土。
- 11 明黄褐色(10YR6/6)砂質土。にぶい黄橙色(10YR6/4)細砂が混じる。
- 12 にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土～細砂。明黄褐色(10YR5/8)小ブロックを含む。
- 13 黄褐色(10YR5/6)砂質土～細砂。にぶい黄橙色(10YR7/2)砂が混じる。
- 14 にぶい黄褐色(10YR5/4)小礫混じり砂質土とにぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土が混じり合う。
- 15 黄褐色(10YR5/6)砂質土と明黄褐色(10YR6/8)砂質土が混じり合う。
- 16 にぶい黄褐色(10YR6/4)細砂。明黄褐色(7.5YR5/8)土が少量混じる。
- 17 黄褐色(10YR5/6)砂質土～細砂。橙色(7.5YR6/6)土が少量混じる。
- 18 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土と明黄褐色(10YR6/8)砂質土が混じり合う。
- 19 にぶい黄褐色(10YR5/4)小礫混じり砂質土。褐色(10YR4/4)砂質土が混じる。
- 20 明黄褐色(10YR6/6)砂質土。明褐色(7.5YR5/8)～褐色(7.5YR4/4)土が少量混じる。
- 21 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土に明黄褐色(10YR6/8)土が少量混じる。小礫含む。
- 22 黄褐色(10YR5/6)砂質土。褐色(7.5YR4/6)砂が混じる。30～60cm大的の礫を含む。
- 23 にぶい黄褐色(10YR5/3)礫混じり砂質土。明黄褐色(10YR6/6)土や褐色(7.5YR4/4)土が混じる。

- 24 黄褐色(10YR5/6)砂質土と明褐色(7.5YR5/6)砂質土が混じり合う。
- 25 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土。褐色(7.5YR4/6)細砂が混じる。
- 25' にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土。褐色(7.5YR4/6)細砂が混じる。土色・土質は25層に酷似している。
- 26 褐色(7.5YR4/6)細質土。にぶい黄橙色(10YR6/4)～明黄褐色(10YR6/8)砂質土が混じる。
- 27 褐色(7.5YR4/6)砂礫土。明黄褐色(10YR6/8)砂質土が混じる。巨礫を含む。地山。
- 28 黄褐色(10YR5/8)砂質土～細砂。明黄褐色(10YR6/6)砂質土～細砂が混じる。
- 29 にぶい黄橙色(10YR6/4)小礫混じり細砂。
- 30 明黄褐色(10YR6/6)砂質土。黄褐色(10YR5/6)砂質土が混じる。
- 31 明黄褐色(10YR6/6)小礫混じり砂質土。褐色(10YR4/6)～黄褐色(10YR5/6)砂質土が混じる。
- 32 明黄褐色(10YR6/6)小礫混じり砂質土。灰白色(10YR7/1)粘質土が混じる。
- 33 明黄褐色(10YR6/6)砂質土。にぶい黄橙色(10YR7/4)砂質土が混じる。礫や粘土ブロック含む。
- 34 にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土～細砂。
- 35 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土～細砂。にぶい黄橙色(10YR7/2)細砂が混じる。
- 36 にぶい黄橙色(10YR7/4)細砂。小礫含む。
- 37 にぶい黄橙色(10YR7/2)細砂・灰白色(10YR7/1)細砂・明黄褐色(10YR6/6)細砂が混じり合う。
- 38 明黄褐色(10YR6/6)小礫混じり砂質土。にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土が混じる。
- 39 にぶい黄褐色(10YR5/4)礫混じり砂質土。明褐色(7.5YR5/6)砂質土の小ブロックを含む。
- 40 黄褐色(10YR5/6)礫混じり砂質土。明褐色(7.5YR5/8)砂質土の小ブロックを含む。
- 41 にぶい黄橙色(10YR6/4)小礫混じり砂質土。明黄褐色(10YR6/6)砂質土が混じる。
- 42 明黄褐色(10YR6/6)礫混じり砂質土。にぶい黄橙色(10YR6/3)細砂が少量混じる。
- 43 明黄褐色(10YR7/6)礫混じり砂質土。黄褐色(10YR5/6)細砂が混じる。
- 44 にぶい黄褐色(10YR5/4)礫混じり砂質土。褐色(10YR4/4)砂質土や黄褐色(10YR5/6)砂質土が混じる。
- 45 にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土。褐色(10YR4/6)細砂が少量混じる。

- 46 明黄褐色(10YR6/6)礫混じり砂質土。にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土が混じる。
- 47 にぶい黄褐色(10YR5/4)小礫混じり砂質土。明黄褐色(10YR6/8)土の小ブロックを含む。
- 48 にぶい黄褐色(10YR5/3)小礫混じり砂質土。褐色(10YR4/4)砂質土や明黄褐色(10YR6/8)土が混じり合う。
- 49 明黄褐色(10YR6/6)砂質土。褐色(10YR4/4)細砂の小ブロックを含む。
- 50 明黄褐色(10YR7/6)砂質土。明黄褐色(10YR6/8)砂質土が少量混じる。
- 51 褐色(10YR4/6)小礫混じり砂質土と褐色(7.5YR4/6)砂質土が混じり合う。
- 52 褐色(10YR4/4)小礫混じり砂質土。明黄褐色(10YR6/6)砂質土の小ブロックを含む。
- 53 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土～細砂。褐色(7.5YR4/6)砂質土が混じる。
- 54 にぶい黄橙色(10YR6/3)細砂。褐色(10YR4/4)砂質土が少量混じる。
- 55 にぶい黄褐色(10YR5/4)礫混じり砂質土と褐色(10YR4/4)砂質土が混じり合う。26層に対応。
- 56 明黄褐色(10YR6/6)砂質土と明褐色(7.5YR5/6)砂質土が混じり合う。地山。27層に対応。大量の礫を含む。
- 57 明黄褐色(10YR7/6)砂質土。
- 58 にぶい黄橙色(10YR6/4)～明黄褐色(10YR6/6)細砂質土。
- 59 明黄褐色(10YR6/6)砂質土～細砂。
- 60 明黄褐色(10YR7/6)細砂とにぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土が混じり合う。
- 61 明黄褐色(10YR7/6)細砂。小礫を含む。木の根の侵入あり。
- 62 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土。明黄褐色(10YR6/6)細砂が混じる。
- 63 明黄褐色(10YR6/6)小礫混じり細砂。にぶい黄橙色(10YR6/4)細砂が混じる。
- 64 にぶい黄橙色(10YR7/3)細砂。明黄褐色(10YR6/8)細砂が混じる。
- 65 にぶい褐色(7.5YR5/4)礫混じり細砂。褐色(10YR4/4)土が少量混じる。
- 66 にぶい黄橙色(10YR6/4)礫混じり砂質土～細砂。明黄褐色(10YR7/6)細砂が混じる。
- 67 黄橙色(10YR7/8)礫混じり砂質土。褐色(10YR5/1)砂質土が混じる。

第18図 岩ヶ平第16号墳土層断面図（2） 1/50



第19図 岩ヶ平第16号墳石室床面平面図 1 / 25

質土の混じる明黄褐色砂質土（8層）を敷き詰めている。その上に、基底石の下端を埋めるように明黄褐色～黄橙色砂質土（6層）を敷き、その上に0.1～0.3m大の花崗岩礫や花崗斑岩の凸面を専ら下にして並べ、礫床を形成している。ただし、礫床の遺存状況は、奥壁から1.8～1.9mまではほとんど隙間がないのに対して、それより南側はまばらになる。遺物の出土は礫床の遺存状況の良い部分に多く、南半部には極めて乏しいので、玄室南半域は、攪乱を被っていることがわかる。床面の上面レベルは81.9～82.0mで、奥壁側が僅かに高い。

羨道の6層上面レベルは81.8～81.9mと、礫床の傾斜をそのまま引き継いで南側に下っている。なお、羨道部には、6層に似た明黄褐色砂質土（7・9層）が6層上面に堆積しており、調査時には、7・9層上面を礫床に続く床面をとみて掘削や写真撮影を行ったが、この面での遺物の出土は極めて乏しいため、埋葬面をなした形跡は認め難い。右側壁解体時に、より下位から完形の須恵器杯類がまとまって出土したことから、堆積土層の再検討を行った結果、6層が羨道前面にも広がっていて、土床を形成していたことと、7・9層が石室床面上に堆積した流入土であることが明らかになった。

遺物の出土状態 本墳からは、土器（須恵器・土師器）と金属製品（耳環・馬具・鉄釘）が出土した（第19・24～28図、図版2・3・8・9）。羨道埋土を掘削中に少量の須恵器片が出土しているが、大多数は石室内の床面上において検出したものである。それらは、現状において、①玄室後半部の礫床上、②玄室前半部の攪乱部分、③羨道前半部分にグルーピングでき、時間差を有する埋葬の諸段階を消極的ながら類推せる。

①は、石室中軸付近から右側壁寄りと左側壁寄りでは、出土した遺物の種類と出土状況が異なる。右側壁寄りでは、奥壁から0.65m～0.95mの範囲に金属製品が集中していた。対になる金環2点（42・43）よりも右側壁に近接する位置で、花形飾り金具（46～48）や鉄製の馬具片（49・50・52）が検出された。52の一部は、①の石室の中軸近くで取り上げた鉄製品の一群に含まれていたが、①の右側壁寄りに馬具片が集中する傾向は肯首できよう。一方、①の左側壁寄りでは、奥壁付近から0.1m～1.6mの範囲に須恵器の破片が点在しており、金環1点（44）もみられた。須恵器は、同一個体の破片が何ヶ所にも分かれている、散乱した状態であった。

これらの土器や金属製品は、礫床からやや浮いた状態で出土したものもあるが、礫床直上で出土するものが多く、一部は礫間に陥入していた。接合の結果、須恵器杯蓋（1）、杯身（6）、短頸壺（17）、有脚長頸壺（18）、壺（19・20）が復元できた。18は②や羨道から出土した破片とも接合関係があり、壺（19・20）は①よりも羨道から出土した破片の方が多い状況で、

搔き出しによって破片が原位置を移動している様子がうかがえた。

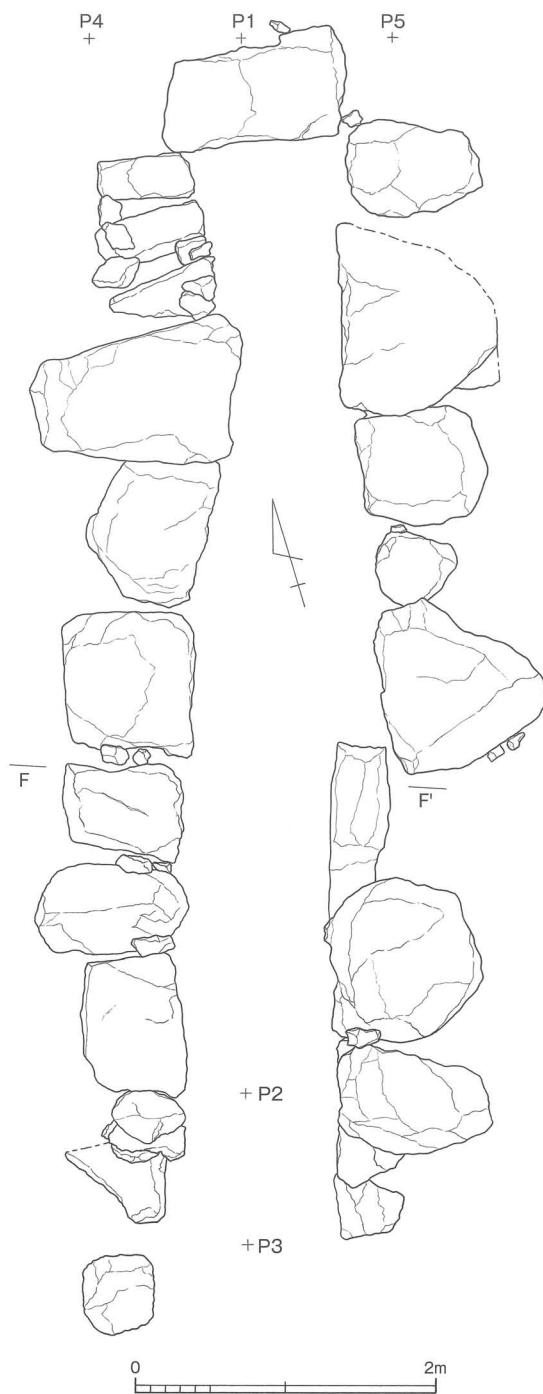
鉄釘は、①の中軸付近から右側壁寄りにまとまっていて、中軸ライン上から53・55・56・59・61・63が、それより右側壁寄りから54が出土している。図化し得なかった釘の小片がほかにもこの範囲から出土しているので、玄室右側壁寄りに棺1基が安置されていたことが推定できる。中軸付近に鉄釘が南北に並ぶ傾向があるので、この位置に棺の東端を想定すると、幅0.75mほどの規模の棺を側壁に並行して置いた様子が復元できよう。ただし、少量ながら、左側壁寄りから58・62が出土している。

②からは、須恵器片と鉄製馬具片が少量出土している。杯身（8）は、①から出土した破片と接合関係がある。提瓶（23）は、破片の多くが羨道から出土しているが、②にも破片が確認でき、本来は玄室内に副葬されていたことがわかる。短頸壺蓋（16）は、焼成や胎土、技法などから①に破片が集中していた短頸壺（17）とセットになることが明らかである。鉄製品の（51）は、鎧や轡の部材と考えられる。これらは①から二次移動したものと考えられる。

釘の位置を考慮しつつ、金環の位置を参考にして被葬者の頭位を推定した場合、奥壁から数十cmの空間を置いて右側壁寄りに棺が置かれており、この空間に馬具が副葬されていたことは想像に難くない。一方、左側壁寄りには須恵器片が集中しているので、棺の東側の左側壁寄りの空間に土器が供献されていたとみることはできる。しかし、左側壁寄りにも少ないながらも鉄釘58・62がある。加えて、42・43とは明らかに別セットで新しい要素をもつ金環（44）が存在していて、これと対になる金環（45）が羨道にみられることを考え合わせると、左側壁寄りには金環（44・45）を着装した人物が埋葬されていて、その北側に土器が供献されていたが、片付けや攪乱によって破片の多くが移動してしまった可能性も考えてよい。また、中軸ライン上の釘の多さは右側壁寄りの棺と左側壁寄りの棺の2棺分とみることもできよう。①・②から出土した土器には、馬具とともに右側壁寄りの木棺の人物に供献されたものが含まれている可能性も考えられる。実際、これらの須恵器には、提瓶（23）や壺（19）のようにTK209併行段階とみられるものと、より新しいTK217段階のものがあることからも、玄室において時間を少し置いた二棺の埋葬は十分あり得ることである。

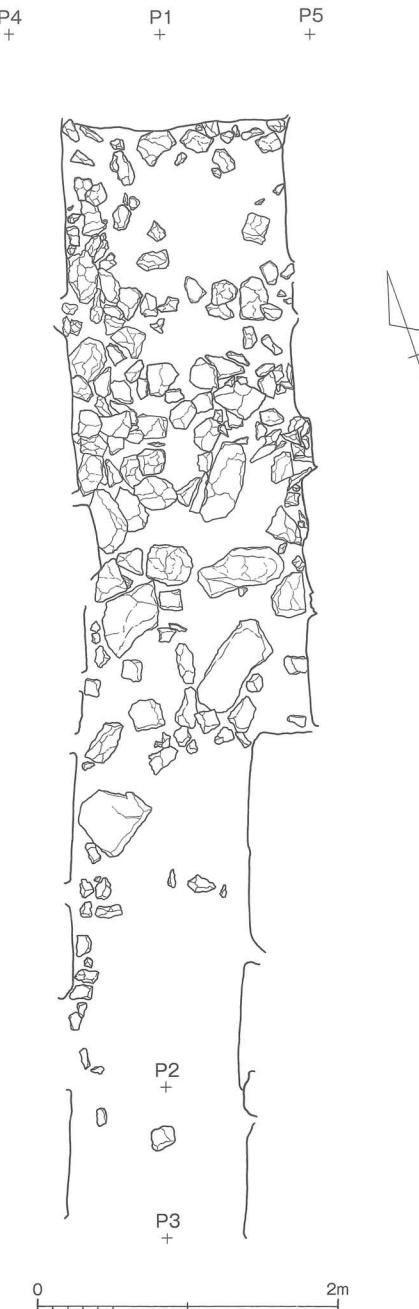
なお、床面の石材で、棺台と確定できる状態のものはなかった。また、羨道には0.2mを超える角礫が所々にみられたので、この中に床に設置された棺台機能をもつ小石材が含まれる可能性はあるが、現状の位置関係からは判断し難い。

③は右側壁寄りに遺物が集中しているようにみえるが、図化せずに取り上げたものの中には左側壁寄りか

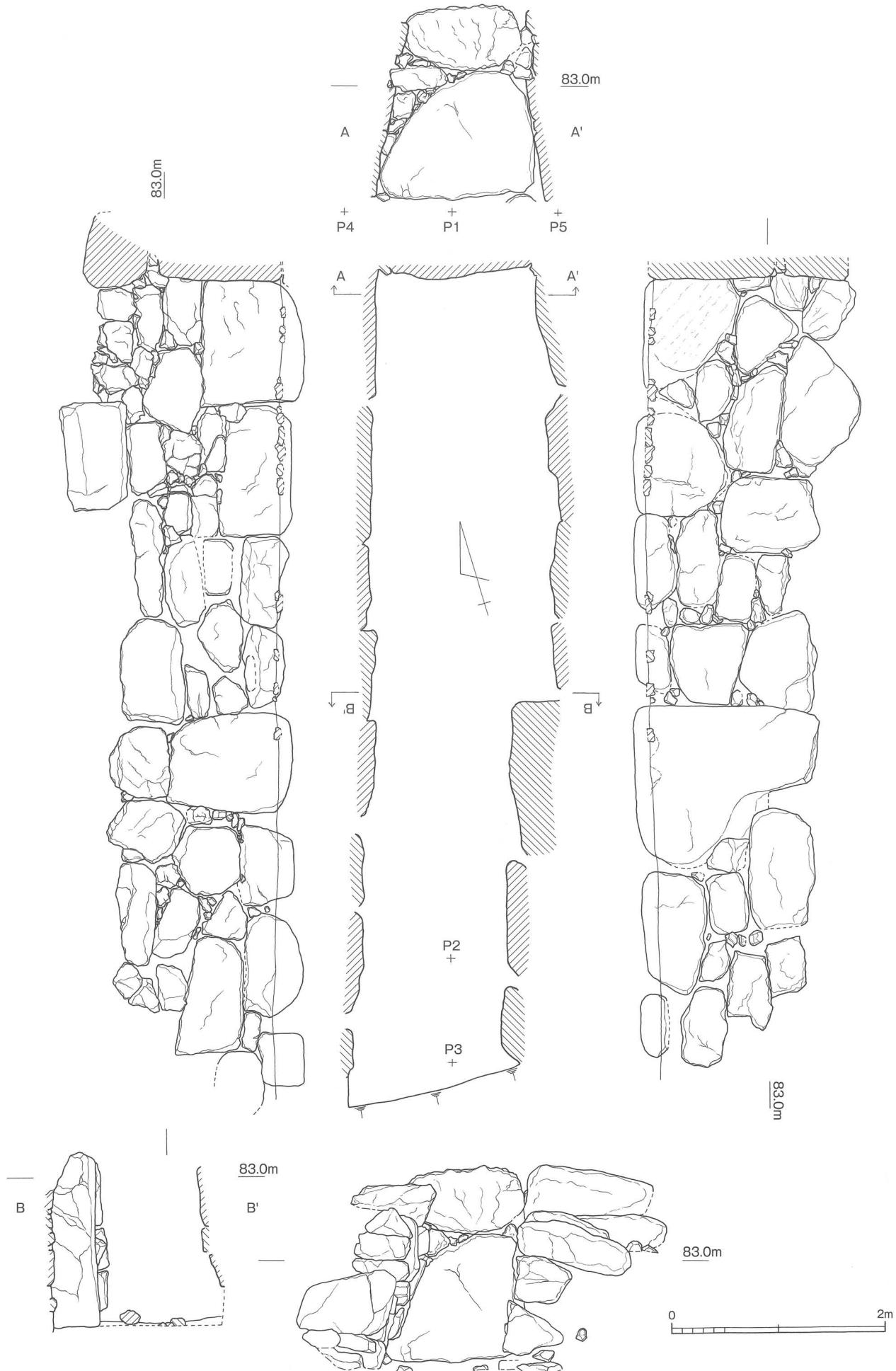


第20図 岩ヶ平第16号墳石室上面図 1/50

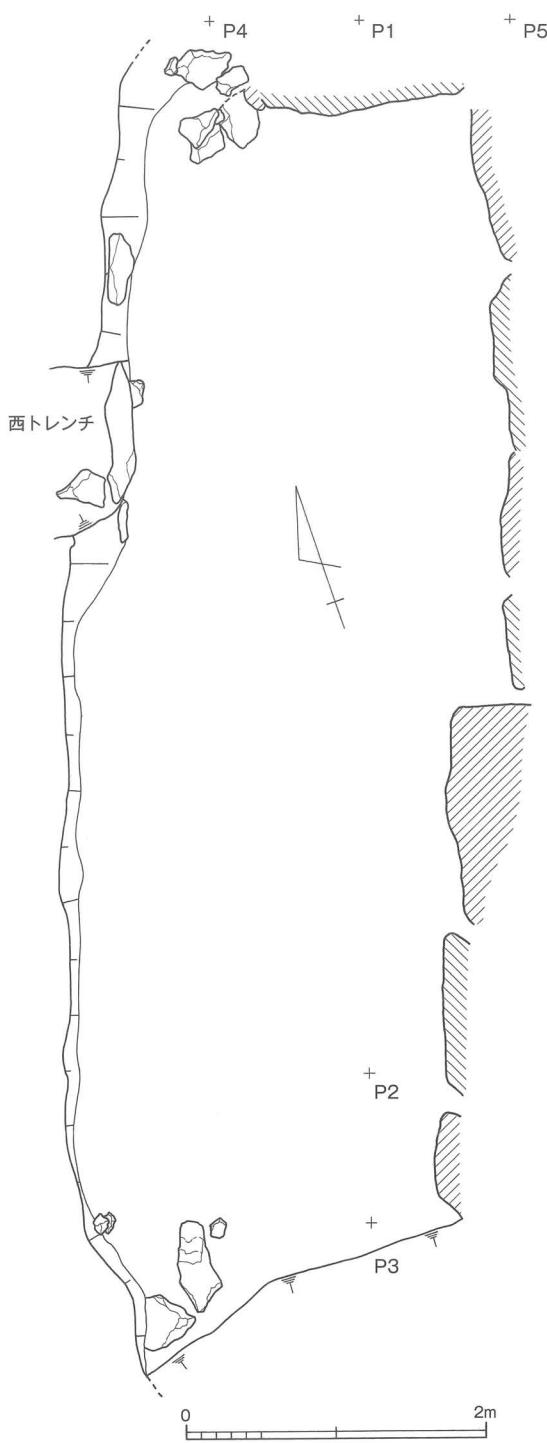
ら出土した土器片もある。羨道南端に土器類のまとまった副葬がある。器種は、須恵器の杯G蓋3点(28・30・31)と杯G身5点(32~36)で、完形やほぼ完形の状態で出土している。これらに近接して、前述した杯G蓋や杯G身より型式的に古手の杯G蓋(4)・杯H身(5)や台付頸(21)、脚台部(22)の破片が分布している。その北側には、やはり完形の杯G蓋(29)と杯H蓋(2)や無蓋高杯(15)、甕体部(25)の破片に加えて、土師器杯(26)がみられる。さらにその北側に、長脚高杯3点(9~11)の破片が散布する。

第21図 岩ヶ平第16号墳石室内コッパ集積群平面図
1/50

これら一群の土器片の約0.5m北側から、前記した44と対になる金環(45)が出土している。このほか、出土位置を図化できなかったが、羨道からは杯H蓋(3)・杯H身(7)・無蓋高杯(12~14・37・38)・提瓶(24)と土師器高杯(27)、釘(57)も出土している。羨道の土器類は、玄室出土の土器類より明らかに新しい杯G蓋(28~31)・杯G身(32~36)と、玄室出土の土器と年代がかぶる土器群に分かれる。前者は、本墳出土土器の中でも極めて残存率が高く、一括性がある。一方、後者は破片で出土しており、接合後の残存率も低い。この所見から、前者が羨道に埋葬された人物に



第22図 岩ヶ平第16号墳石室展開図 1/50



第23図 岩ヶ平第16号墳墓壇平面図 1/50

供献された土器群であり、後者は玄室に副葬されていた土器が二次的に移動したものと判断する。羨道には、杯G蓋・身の一群よりも奥に長さ2.5mの空間があるので、この部分に一体を埋葬し、開口部側小口前面に副葬品を並べた状態を復元できる。ただし、玄室の被葬者と時期的に重複する羨道被葬者の存在は否定しきれない。羨道に2時期の埋葬を想定すると、後者の一群には、羨道における第1次埋葬に伴う土器が含まれている可能性を残している。

羨道出土の土器は、置土である6層上面から出土しており、この面は玄室の礫床から続く一連の床面と考えられる。なお、羨道部埋葬や追葬に伴って新たに床面が造り変えられた様子は観察できなかった。

ところで、本墳の南に広がる谷状地形（3・4号石材周辺）からは須恵器片が出土している。無蓋高杯や甕など、本墳から出土した須恵器と同時期の破片が認められるので、これらは、開口部が崩れ去った本墳から流出したものかもしれない（第53図3～8）。

（3）出土遺物

本墳からは、土器（須恵器・土師器）と金属製品（耳環・馬具・鉄釘）が出土している（24～28図、図版8・9）。以下、出土グループを把握しつつ、個々の遺物に説明を加える。第24図は、石室内から出土した須恵器・土師器の内、羨道から出土した完形ないし完形に使い杯G蓋・杯G身を除く土器を図示したものである（1～27）。1～25は須恵器、26・27は土師器である。第25図には、その他の須恵器と金属製品を図示している。28～36・39～41は須恵器で、42～57は金属製品である。28～36は羨道から出土した杯G蓋・杯G身の一群で、39は墳丘西裾付近で採取された甕口縁部、40・41は墳丘付近出土の須恵器甕体部片である。金属製品については、42～45は装身具（金環）、46～52は馬具、53～57は鉄釘である。

このほか、残存率が低く図化しなかったが、石室から出土した須恵器高杯片の写真を第26図（37・38）に、鉄釘の写真を第27図（56～63）に掲載している。

土器（須恵器・土師器） 図示した資料では、須恵器は、1～4・28～31が杯蓋、5～8・32～36が杯身、9～15が無蓋高杯、16が短頸壺蓋、17が短頸壺、18が長頸壺、19～21が甕、22が脚台部、23・24が提瓶、25・39～41が甕である。土師器は、26が杯、27が高杯である。

1は、①の左側壁寄りから出土した杯H蓋で、残存率は6分の1しかないが、丁寧なナデを施した口縁部は復元口径13.8cmを示し、本墳出土の杯H蓋では最も古手である。焼き上がりは暗灰色を呈するが、照りはない。2は、③から出土した杯H蓋で、破片が一ヶ所にまとまっていて、ほぼ完形に復元できた。口径は13.0cmしかなく、1より小型化し、器高は4.1cmを測る。天井部のヘラケズリは螺旋状で、範囲が広い。肌理細かな良質の胎土に黒色粒を含んでおり、千里窯の製品の可能性が高い。3は、出土位置を図化できなかったが、羨道から出土した破片によって、残存率3分の2まで復元できた。口径は11.6cm、器高は3.9cmである。天井部は丸く、ヘラケズリの範囲は頂部周辺に限られる。焼成は良好で灰色を呈し、少量の砂粒を含む胎土は精良であるが、産地は不明。4は、③など羨道から出土した破片を接合したもので、残存率が4分の1の

杯G蓋である。復元口径は11.2cmあって、他の杯G蓋より大きく、返りは口縁端部よりわずかに上がるるもので、本墳出土の杯G蓋では最も古相を呈する。焼成は良好で、器面は黒光りしている。口縁部径11.0cm前後にセリエーション頻度のピークを有する難波Ⅲ-中段階〔佐藤2000・2003・2004・2015〕に比定できよう。

5は、③から出土した杯H身片で、残存率は8分の1と低いが、弱屈折風に二段にナデを施した立ち上りはシャープで、本墳出土の杯H身では最も古い。復元口径は13.7cmで、灰色を呈し、胎土は精良である。生産地編年では、TK43・209古型式、中村Ⅱ-4～5に遡ると考えられる。6は、①の左側壁寄りから出土した杯H身で、ほぼ完形に復元できた。口径11.2cm、復元器高は4.3cmである。白色砂粒の目立つ胎土は暗灰色に発色している。6の杯H身は2の杯蓋よりやや新しい様相を呈する。杯H身の7は、出土位置を図化できなかつたが羨道出土の破片を接合したもので、残存率は3分の1である。復元口径は11.4cm、器高は4.1cmである。淡い灰色を呈する胎土は肌理細かく、黒色粒がみられるもので、千里窯産の杯蓋2とセットになるものかもしれない。8は、①の左側壁寄りから出土した杯H身で、同一個体と認識できる破片は多いが、直接接合できたものの残存率は6分の1を下回る。復元口径は11.3cmで、暗灰色に発色している。

高杯はすべて無蓋で、③を中心に羨道から破片が出土した。残存率の高い長脚二段透しの3点(9～11)と、無蓋高杯杯部片4点(12～15)である。なお、第26図に写真を掲げた37・38も9～15とは別個体の無蓋高杯片なので、少なくとも9個体の高杯が副葬されていたことがわかり、比重の高さを示唆する。ほぼ完形に復元できた9は、二方向に長方形透しを穿ち、カキメや凹線など、丁寧な作りである。口径11.8cm、底径11.2cm、器高15.0cmを測る。器面はやや青みを帯びた灰色で、断面は紫がかつており、良好な焼成状態である。10は、杯部や脚裾部に破片が一部不足していたが、図上復元することができた。二方向に長方形透しをもち、杯部外底面に段差があるが、9と比べると、杯部は厚く調整が難になり、年代が下る。復元口径は11.2cm、底径11.3cm、復元器高14.6cm。胎土は良質で、灰色～暗灰色を呈する。11は脚部上半部を欠くが、推定復元により、復元口径12.2cm、底径10.8cm、復元器高15.2cmの計測値を出すことができた。口縁部の残存率は3分の1で、脚部下半は完存する。2段三方向に方形透しをもつもので、胎土は9に似て、焼成は極めて良好である。

12は、長脚2段三方向透しで杯部に明確な段差をもつ、高杯の杯部である。残存率は4分の1で焼成は堅緻。器面は黒光りしていて、断面は紫がかる。13も長脚2段透しの高杯の杯部であろう。残存率は6分の1で、復元口径は11.0cmである。外面に部位境界の明瞭な凹線が巡る。器面は黒光りしていて、内面に降灰が

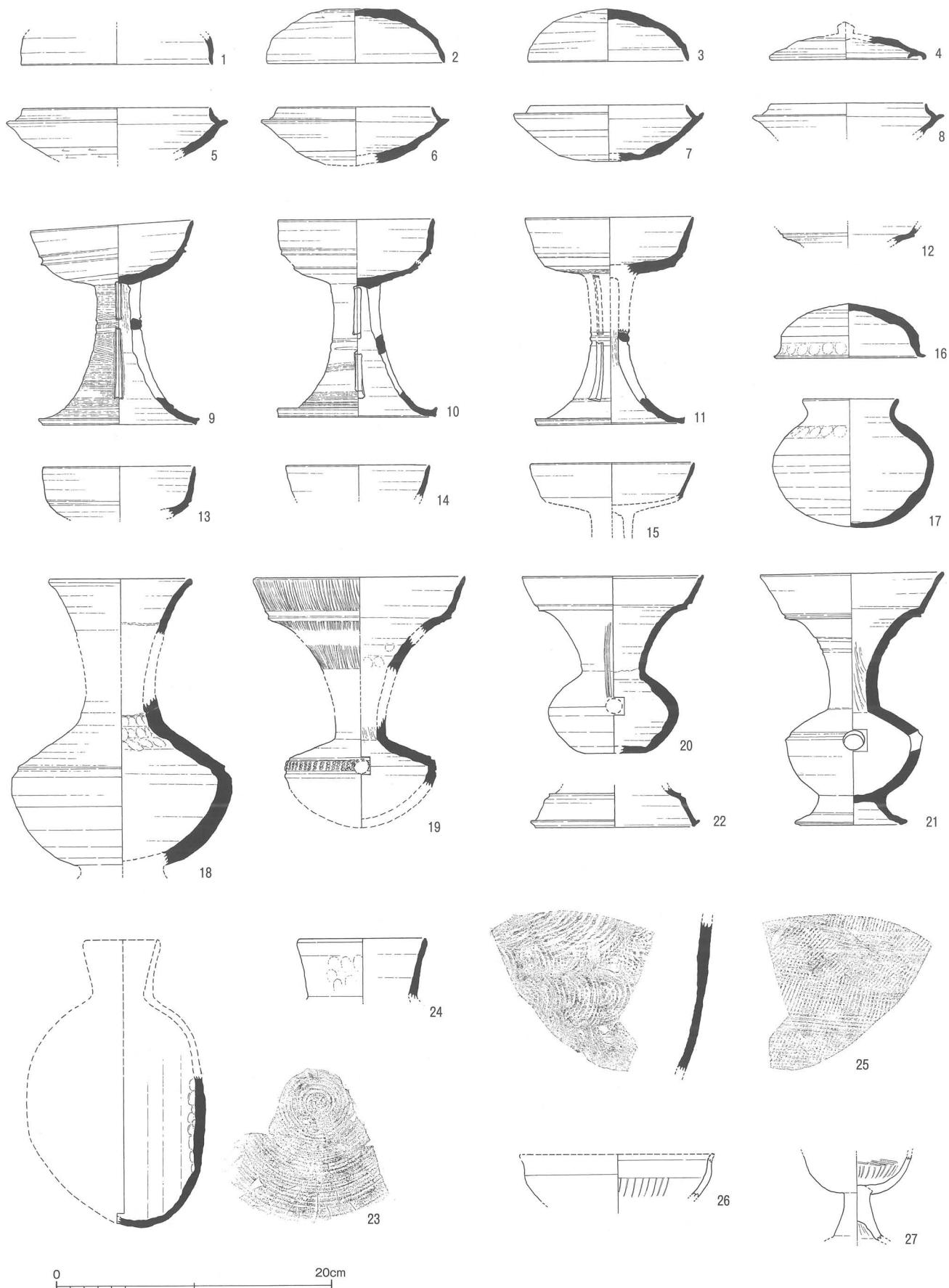
みられる。14の残存率は8分の1で、復元口径は10.4cmである。口縁部は硬直化がみられるので低脚であろう。胎土は精良で灰色に発色している。15は残存率8分の1で、復元口径は12.0cmである。杯部は直線的に外上方に立ち上がり、凹線をもたない。低脚化の進んだ器形に復元できよう。本墳出土の高杯では、型式学的に最も新しいものである。なお、焼成は堅緻で、器面は黒光りしており、断面は紫がかつており、

16は、②の左袖部から出土した壺蓋である。焼成はやや軟質で、きわめて特徴的は淡灰白色の胎土であることから、播磨産とわかる。天井部は丸みを帯びるが広範囲にヘラケズリが施されている。直立気味の口縁部には、微弱ながら指オサエ痕が残り、端部がシャープに外反する。残存率は3分の2で、口径10.6cm、器高3.9cmである。17は、①の左側壁寄りから出土した短頸壺で、丸みを帯びた体部に短く外反する口縁部が付く。ほぼ完存しており、口径6.8cm、器高9.45cmを測る。体部のケズリは最大径位置から体部下半に及んでおり、頸部に弱い指オサエ技法がみられるなど、16と共に調整技法が用いられている。焼成や胎土に加えて技法の共通性からも、16とセットになるだろう。

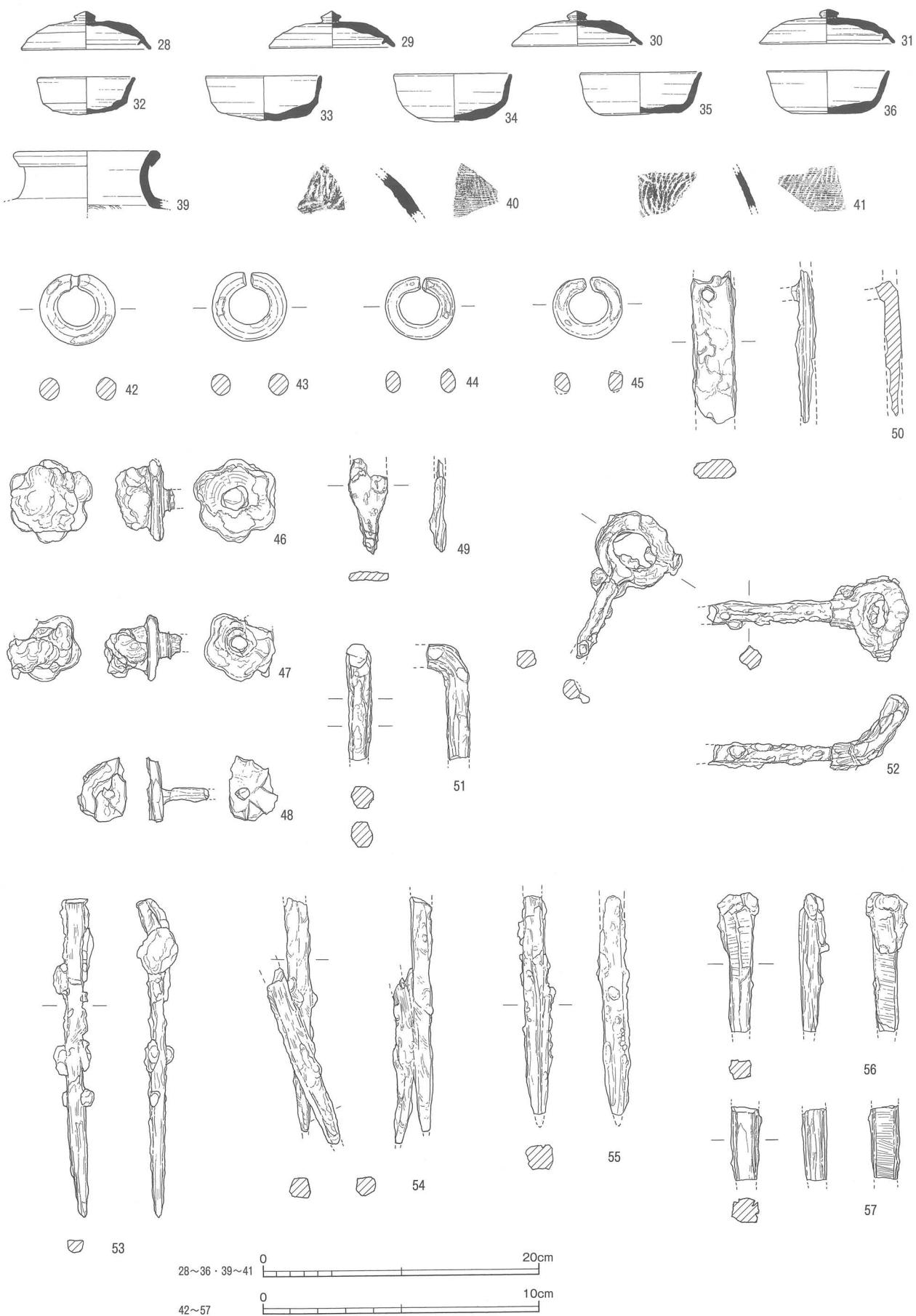
18は、①の左側壁寄りや②に加えて、羨道からも破片が出土している。頸部の一部と脚台部は欠損しているが、台付長頸壺であることがわかる。体部はほぼ完存しており、口縁部の残存率は3分の1である。復元口径は10.2cmで、脚台部を除く高さを21.0cmに復元した。白色砂粒を含むやや粗い胎土で、灰色を呈している。吹田窯の製品かもしれない。

19は、3点出土しており、21は、台付壺である。

19は、羨道からの出土片の方が多くのもの、①の左側壁寄りにも破片がみられることから、開口方向に向けて、乱掘による掻き出しが想定されるもので、口縁部や体部の残存率は3分の1である。復元口径15.2cm、復元器高18.4cmを測る。口頸部の基部は細く、外反して大きく開いた口頸部が端部近くで屈曲して外上方にシャープに立ち上がる。体部は肩張りを有する玉葱形で、肩部に文様帶を限る沈線を2条巡らせる。頸部や口縁部には、3条を1単位とする櫛状工具の施文があり、同一工具によって体部の肩に列点文を施す。奈良県牧野古墳出土の壺とほぼ同一型式といえる。焼成は良好で、胎土は肌理細かく、器面は光沢のみられる灰色で、断面は紫味を帯びており、陶邑産とみている。20は19と同様、羨道からの出土片の方が多くのもの、①の左側壁寄りにも破片がみられるもので、体部は2分の1ほど残っているが、口縁部の残存率は8分の1である。19より口縁部の基部は太く、口頸部は短いが、端部は屈曲して立ち上がる。丸みを帯びた体部の下半部はヘラケズリが施され、底面は平底に仕上げている。外面に頸部を越えた縦方向の櫛目調整がみられる。器面は黒光りする。21は③からまとめて出土してお



第24図 出土遺物実測図 (1) 1/4



第25図 出土遺物実測図 (2) 1/4・1/2

り、口縁部と脚台部に一部欠損がみられるものの、ほぼ完形に復元でき、口径13.2cm、底径7.2cm、器高18.5cmを測る。焼成は良好で、暗灰色を呈している。21は他の墳より新しい要素を持つ。

③から出土した22は、台付長頸壺に伴う脚台部であるが、18とは別個体である。端部が屈曲して踏ん張る形態で、屈曲部分の凹線や底端部の跳ね上げ状の端末処理など、全体にシャープな作りで、TK43型式に比定したい。焼成は極めて堅緻で、器面は青みを帯びた灰色で、断面は紫色芯のみられるサンドイッチ状である。残存率は2分の1で、底径は11.4cmである。

23と24は提瓶とみている。23は多くの破片が羨道から出土したが、②にも少量の破片がみられた。体部片面の3分の1ほどが残っており、カキメが顕著である。胎土はやや砂粒が多いが、青みを帯びた灰色で、断面は紫がかる。24は、出土位置を図示していないが羨道からの出土で、かなり大形の提瓶の口縁部である。残存率は4分の1で、復元口径は9.2cmである。ナデ調整は幾分難で、歪むが、焼成は良好で、器面は黒光りしている。

25は、③を中心出土した須恵器甕体部片である。直接接合できなかったが、ほかにも同一個体の破片が出土している。外面には平行タタキの後にカキメを加えており、内面には同心円當て具痕が残る。器面は光沢のある灰色で、断面は紫がかったサンドイッチ状芯を示す良好な焼成を示す。

以上のように、玄室由来とみなした須恵器については、焼成や胎土の観察から、大まかに8つにグルーピングでき、須恵器の供給源や焼成位置の差異が確認できた。それぞれの特徴は、A.暗灰色～灰色で照りのない、杯蓋1、杯身6・8、高杯10・14、墳21。B.灰色～淡い灰色で黒色粒を含むもの。北摂の千里窯の製品の可能性が高い杯蓋2、杯蓋7。C.白色砂粒を含むやや粗い胎土で、灰色を呈するもの。千里窯の製品とも考えられる台付長頸壺18。D.焼成は良好で黒光りするもの。これに似た焼成状態・色調の須恵器は、TK43段階の西宮市具足塚古墳から出土しており、窯式としてモデル化する〔藤原2002〕。具足塚とは異なる年代のものもみられるが、「具足塚タイプ」といえるもの。杯蓋4高杯12・13、墳20、提瓶24。E.焼成は良好で、器壁はやや青みを帯びた灰色、断面は紫がかるもの。陶邑窯の製品かもしれない。高杯9・11・15、墳19、脚台部22、提瓶23。F.軟質焼成で、特徴的な淡灰色の胎土から播磨産とわかるもの。壺蓋16、短頸壺17。G.精良な胎土で灰色を呈するが、産地は不明。杯蓋3、杯蓋5。H.光沢のある灰色で、断面は紫がかったサンドイッチ状のもの。甕25である。

土師器26・27は、ともに羨道から出土している。26は、橙色を呈する良質の胎土であるが、外面は磨滅によって調整は観察できない。内面には細く疎らな放射

状暗文が残る杯身である。27は、26より黄色がかった胎土で小型の高杯である。26と同様に外面調整は観察できないが、杯部内面には横方向のミガキ調整と放射状暗文が、脚柱部内面には絞り目が観察できる。

杯G蓋28～31は、胎土、焼成、技法、法量などに極めて共通点が多く、齊一性の高い同一産地の製品を一括入手している一群である。丸みを帯びた天井部は回転ヘラケズリを加え、小さなつまみが付く。返りは4よりもさらに短く、口縁部より上部に位置する。内面には回転ナデ調整を施すが、29～31の天井部内面には、最終仕上げにヨコナデを加えている。また、28・29・31は、天井部外面にヘラ描きの沈線が1条走っている。焼成は良好で器壁は灰色を呈し、外面に降灰がみられる。28は、口径9.5cm、器高2.8cm、29は、口径9.6cm、器高2.9cm、30は、口径10.0cm、器高2.8cm、31は、口径10.2cm、器高2.7cmである。

一方、杯G身5点は、法量は似るもの、胎土や焼成、底部の外面調整技法などに個々の違いが認められ、複数の生産地のものを一まとめにして副葬している様子がみえる。したがって、石室搬入時に厳密なセット関係はない。32は丸みを帯びた底部にやや外反する口縁部をもつ。底部はヘラ切り未調整。器面は照りのある灰色である。33は、他の杯身より口縁部立ち上がりの直線化傾向がみられる。外面底部は未調整で、ヘラ描きの沈線が1条加えられている。焼成時の融着もみられるが、器面は黒光りしている。「具足塚タイプ」の焼き上がりというにはかなり新しいが、よく似た風合いでいる。34の器面は光沢のある灰色で、焼成は極めて良好である。調整も丁寧で、外面底部は回転ヘラ切りのあと回転ヘラケズリを加えて形を整えている。35は平底傾向が顕著である。外面底部はヘラ切り未調整だが、杯部は底端部まで丁寧にナデを施している。灰色の良質の胎土を用いるが、やや焼成はあまく、吹田窯の製品かもしれない。36も底部は平底傾向がみられる。胎土は34に似ていて、外面底部を回転ヘラケズリで仕上げるなど、同一産地のものであろう。32は、口径7.6cm、器高2.9cm、33は、口径8.8cm、器高3.5cm、34は、口径9.0cm、器高3.7cm、35は、口径9.2cm、器高3.3cm、36は、口径9.3cm、器高3.4cmで、5点の平均径高指数は38である。

墳丘近辺出土の39～41は、いずれも磨滅した小片である。39は体部内面に同心円當て具痕がみられるので、甕と判断した。40・41は、ともに外面に平行タタキとカキメ、内面に同心円當て具痕がみられる。墳丘上出土の須恵器甕体部である。

金属製品（装身具・馬具・鉄釘） 42～45は金環である。42・43は、①の右側壁寄りから出土していて、ともに接面に3mmほどの隙間があり、断面形は略円形である。42は長径2.8cm、短径2.7cm、重さ17.7g、43は長径2.8cm、短径2.5cm、重さ17.1gである。表装はかなり剥がれ落ちているが、銀色を帯びていることが

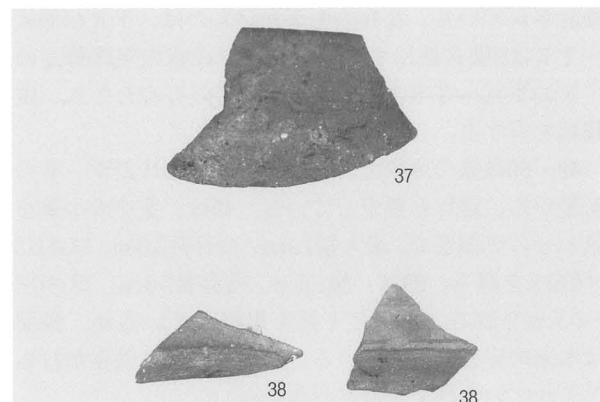
わかる。芯の銅環が剥き出しになっている部分は暗灰色～暗褐色で、鋸が進行している部分は青緑色を呈す。肉眼観察の範囲であるが、42・43は、中実で銅芯製と考えられる。44は、①の左側壁寄りから出土していて、形態上共通する45は、③から出土した。44・45の接面の隙間は狭く、断面形は円形である。44は長径2.5cm、短径2.4cm、重さ15.8g、45は長径2.5cm、短径2.25cm、重さ13.0gである。表装は良好に残っており、鮮やかな金色である。部分的に装飾が剥がれ落ちた部分は緑青を吹いているが、肉眼観察によって、中実で銅芯製とみられる。形態や大きさ・色調などから、42と43、44と45は対になると考えられる。

馬具は、46～48が鉢状の花形飾り金具、49・50が鎧片、51・52が轡片と考えられる。このうち、46～50・52が①の右側壁寄りから、51が②から出土している。

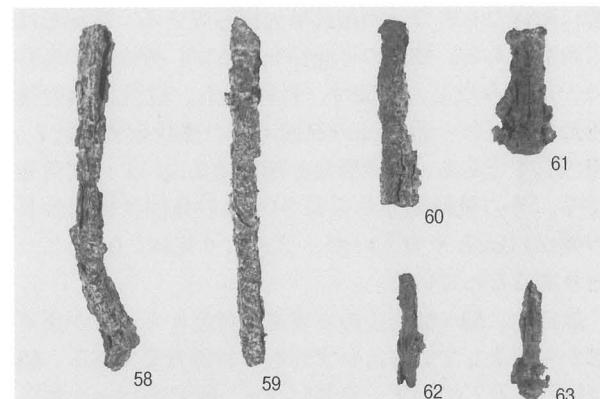
46～48は、雲珠や辻金具の鉢の中央に打ち込まれる花形飾り金具で、48の欠損が著しいが、46・47は鉄地銅板貼りで、鍍金が観察できる。46は、先が丸い六弁の花弁をもつ花形座に宝珠飾りのついた鉢を通したものである。鉢は鋸により瘤状化し、平面形は1辺2.5cmの隅丸方形となる。高さは1.25cmである。花形座の径は約3.0cmで、厚さは0.5cmを測るが、鉄地は薄くて0.1～0.15cmの厚さしかなく、所々に緑青をふいている銅板の方が厚いように見える。鉄板の裏面には同心円状の痕跡があり、雲珠や辻金具の鉢の痕跡であろう。鉢の心棒は直径0.7cmほどで、花形座を貫通して、さらに0.5cm残存している。心棒は、花形座際は表面が平滑で、座から0.2cm離れた位置に鍔状の膨らみがあり、残りの部分は表面に凹凸が見られる。本来は、花形座に接するように厚さ0.2cmの有機質の鉢の部材があり、それより先端には、別素材の部材があったと推測できる。47は、花形座の一部が欠損していて、最大径は2.6cmで、やはり先が丸い花弁をもつ。花弁数は5ないし6であろう。鉢の先端には別の鉄製品が付着していて、基部の径が1.6cm、高さが1.55cmであるが、微かに金色の装飾が観察できる。花形座の厚さは0.5cmで、端部に僅かながら金色の装飾と緑青がみえるので、銅板の上に鍍金が施される金銅装。また、鉢の心棒は長さ0.9cm分残っていて、46と同様に、花形座際の表面が平滑で、座から0.3cm離れた位置に鍔状の膨らみを持つ。残りの部分は表面に何条もの縦線がみられる。遺物実測を終えた後に、花形座と鉢の宝珠飾りが剥離したため、花形座の上面と宝珠飾りの下面が観察できた（第28図）。心棒の断面形は略円形で、直径は0.7cmである。また、花形座の上面と宝珠飾りの下面には、広範囲に緑青が認められた。48は、花形座の鉄地と心棒しか残っていないが、心棒の長さが1.7cmあり、先端が欠損しているので、本来はさらに長かったことがわかる。心棒の花形座際0.2cmの範囲とそれより先端側とでは、太さがやや表面の様子が異なるので、46・47ほど明確で

はないが、やはり、花形座に接していた部材と他の部材には差があったのであろう。

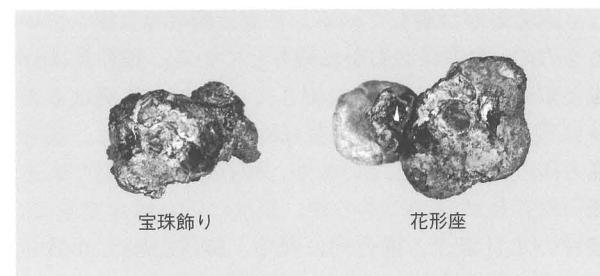
これら、花形飾り金具については、第29図に形態・構造の復元を示した。鉢は宝珠飾りも心棒も鉄製で、その表面に金箔貼りなどの方法で装飾を行っている。一方、花形座は、銅板を貼っていることが明らかなの



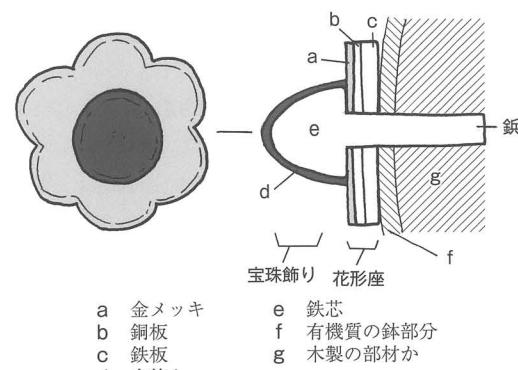
第26図 羨道出土土器



第27図 石室内出土鉄釘



第28図 花形飾り金具の剥離面 (47)



第29図 花形飾り金具模式図

で、銅板に鍍金を施している。また、鉢については、46~48のいずれについても、花形座際と0.2~0.3cm離れた位置から先の部分の表面が明らかに異なることから、異なる素材の部材と接していたことがわかる。

なお、花形座や宝珠飾りについては、宮代栄一氏の専論があり〔宮代1993〕、形態に基づく時期差などが検討されている。花弁の先が丸いものは、TK43型式~TK209型式期にかけて、大型で鉢状の宝珠飾りはTK43型式~TK217型式期にかけてのものとされ、重複期を有する。

49・50は鉄の薄板で、欠損が著しい細片だが、その形態から、鎧片と想定している。49は、茎をもつ鎧を思わせる平面形で、最大幅1.4cm、残存長3.5cm、厚さ0.3~0.5cmを測る。50は、幅1.6cm、残存長5.6cm、厚さ0.3~0.7cmを測る。上部と下部を欠損しているが、側面は本来の形態を保っている。残存部上部に鉄鉢が打ちこまれている様子が看取できる。

51は、幅0.9~1.0cm、残存長5.0cmの鉄棒を「L」字形に曲げたもので、両端部は欠損している。断面形は六角形である。鉄釘の可能性もあるが、轡などの馬具の一部とみなした。52は、長径3.0cm、短径2.5cmの楕円形の円環に一辺0.7cmの断面方形の棒状金具が付く、轡の引手である。円環部分と棒状金具は135°の交角を持ち、その接触部分から長さ0.7cmの範囲は棒状金具の幅が1.0cmとやや太いが、それより先は、0.7cmと一回り細くなっている。

鉄釘は、53~56が①の石室主軸付近から、57が羨道部から出土している。いずれも、断面方形である。53はほぼ完存していて、全長11.6cm、最大幅0.8cmを測る。頭部は水平だが、打撃によって少し曲がっている。54は2本の釘が付着している。ともに頭部は欠損しているものの、先端はおおむね残存している。残存長は8.6cmと6.5cm。55も頭部は欠損しているが、先端はおおむね残存していて、残存長は8.0cm。これらは、幾分縦方向の剥離が進んでいるが、残存状態は良好である。56の残存長は5.1cmであるが、頭部に近い破片である。棺材の木目痕が、横方向に残る。57は2.8cmしか残っていないが、横方向の木目痕がみられる。

第27図に写真を掲載した鉄釘58~63は、剥離がかなり進行している。58・62は①の左側壁寄りから、59・61・63は①の石室中軸付近から出土している。60は出土位置を図示できないが、玄室内から出土したものである。比較的長く残っている58は、彎曲しているが残存長8.5cmで、剥離で薄くなっている59は、残存長8.6cmと、本来は10cm以上の長さであったと推測できる。60は、残存長4.7cmである。61は、残存長3.1cmである。62は、残存長2.8cmである。63は、残存長3.0cmである。

埋葬の展開 以下では、須恵器の型式差に留意しつつ、埋葬の手順を推測する。石室から出土した須恵器は、3つのステージに便宜的に区分する。I玄室の初

葬に伴うことが推定されるもの、すなわち、石室構築の契機となった埋葬に伴うもの。II玄室における二次埋葬に伴うもの。III羨道における埋葬に伴うものに整理できる。

前記したように、玄室に副葬されていた遺物の多くは、乱掘による搔き出しによって羨道に移動していたので、IとIIについては、羨道出土の遺物片と接合関係を有する玄室内出土遺物片も含む。また、IIIは、完形や完形に近い杯G蓋と杯G身とで比較的シンプルに構成されているので判別し易く、型式的にも分離については問題ない。ただし、羨道において、IIIに先行する埋葬があった可能性を排除することはできない。したがって、IIとして扱っている遺物の中には、玄室の所産以外にIIIに先行する羨道利用の埋葬に伴う遺物が含まれている可能性は残るだろう。

Iの玄室における初葬に伴う遺物としては、杯蓋1、杯身5、高杯9、壺19、脚台部22、提瓶23を挙げることができる。これらは杯Gを伴っておらず、副葬が6世紀末のものと考えられる。なお、壺19や脚台部22、提瓶23のような特殊な器形のものは、Iでもより古相を示すことから、これらが、生前からの被葬者への帰属物であり、副葬時に通常の供膳具である杯類が加わったとみておきたい。耳環42・43や馬具46~52も、Iの埋葬に関わる遺物と考えられる。

なお、壺25については、初葬に伴うものなのか、玄室における二次埋葬に伴うものなのか、決しがたい。限られた部位のみの出土で、断面のシャープさからも、破碎後に散布されたものかもしれない。

IIの玄室における二次埋葬に伴うものとして、杯蓋2~4、杯身6~8、高杯10~15、壺蓋16、短頸壺17、壺20・21、提瓶23を挙げておきたい。これらには、Iからさほど時期を置かず、7世紀初頭と考えられる。耳環44・45は、IIの埋葬に関わるものであろう。

ただし、羨道から出土したものの中には、杯蓋4や高杯10・14・15、壺21のように、若干新しい要素をもつものも含まれている。これらは、先にも触れたIIIに先行する羨道利用の埋葬に伴う遺物かもしれない。

IIIの羨道における埋葬に伴うものは、杯G蓋28~31と杯G身32~36である。これらは、650年直前頃と目されている飛鳥II中段階の飛鳥池遺跡S D809に近い年代観〔重見2014〕が与えられよう。この資料は、650年代前半で理解されている〔重見2014〕。また、杯Gがすべて口径9.5cm以下に収斂する様相は、難波III中段階〔佐藤2000・2003・2004・2015〕とも触れ合う。実際には、杯Hが辛うじて微量残存する段階のものであろう。いわゆる大化の薄葬令を受けて、副葬土器類も省力化、最小化した段階の一消費地としての一括資料といえようか。なお、土師器杯26と高杯27は飛鳥IV新段階まで下ると考えられるが、積極的に追葬を認めることはしない。

3. 岩ヶ平支群第17号墳

本墳は、調査地北半部の中央やや南寄りに位置する円墳で、標高85.0～86.0m付近に立地する（第14・30図、巻頭図版2）。16号墳の立地する小尾根筋より一本西側の北から南に伸びた小低尾根の先端付近にあって、16号墳からは、西に約20m離れている。近世石切丁場の石曳き道とみなした谷状地形が、墳丘を迂回しながらも西裾部を切っている。また、南端隅から墳丘東側を経て北東端にかけては、浅い窪地状の地形がみられ、周溝状の掘り込みが想定できる。ただし、周溝は完周して墳丘の背後に回るものではなく、山寄せのカット面もない。墳丘は、現状において、1.0mほどの高まりがみられるにすぎない、その中心付近に石室の露呈が認められた（図版1）。先行して築造された16号墳のため、視界はかなり制限されるものの、立地面の比高分、大阪湾への眺望は十分確保されている。

第11集では、上部封土や天井石が失われていることと、石室内がほとんど埋没していて、僅かに側壁列がみえる状態であったことが記録されている。加えて、径約10mの円墳と目されることや、無袖式小石室の内蔵が推測されることが記されている。調査開始前の現

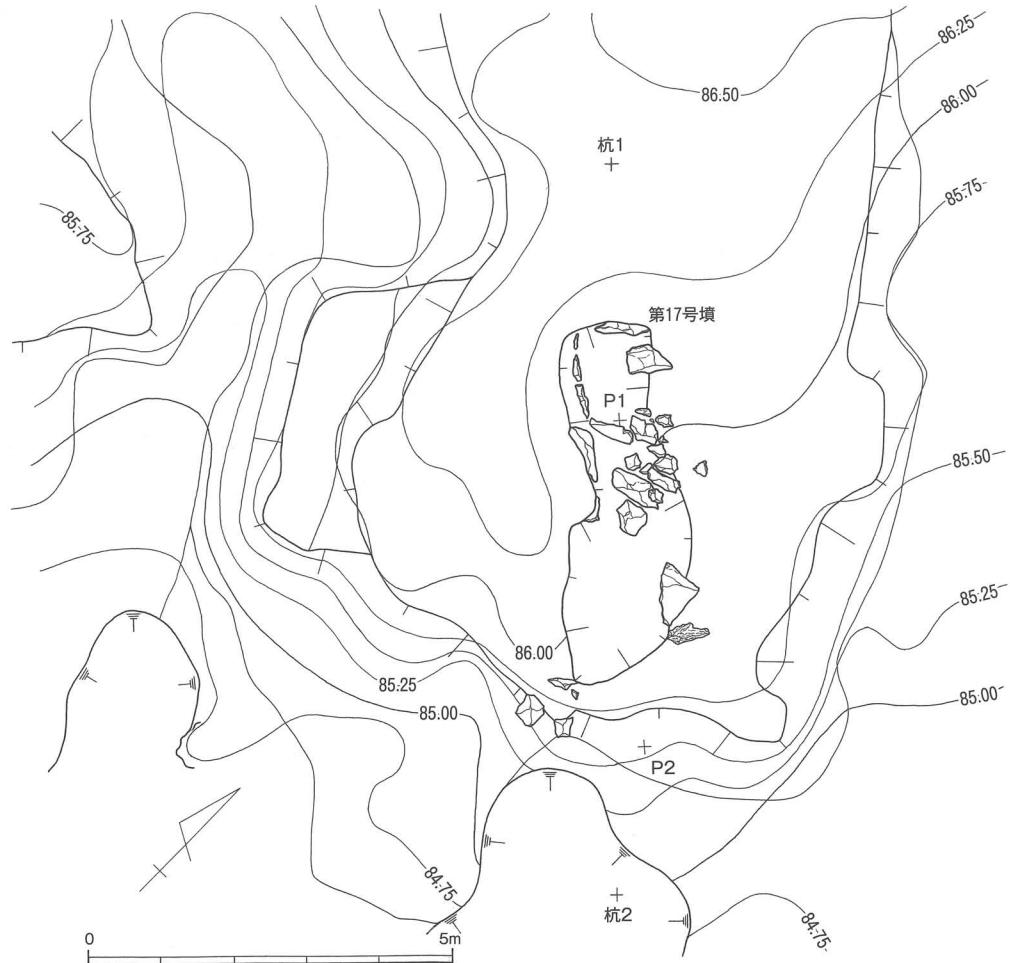
況も、第11集段階の状況と変わりはなかった。

石室は、開口部まで完存しており、石室の平面形式は無袖式である。主軸をN45°Wに採り、南東方向に開口する。土層観察用のトレンチや畦は石室主軸に平行ないし直交するように設定したので、トレンチの配置は石室より北西・北東・南西に位置するが、便宜上、奥壁方向のトレンチを「北トレンチ」、右側壁方向のトレンチを「西トレンチ」、左側壁方向のトレンチを「東トレンチ」と呼称している。なお、墳丘西裾付近の表土直下において、コッパ集積群と浅い落ち込みを検出したが、これについては次節で述べる。

石室内部から土師器・須恵器の土器類と鉄釘が出土したほか、左側壁側の開口部テラス面から土師器甕ないし壙が、前庭部から須恵器の横瓶や杯身・高杯の破片と土師器片が出土した。

（1）墳形と外部構造

第11図に使用した都市基本図のコンタにも現れている通り、本墳は小低尾根先端部を占める。表土である腐植土などを除去して、旧地形を整地してから、石室を構築するための墓壙を掘削している。現存する墳丘盛土の厚さは最大で1.0mで、墳丘は、南北12.0m、東



第30図 岩ヶ平第17号墳現況図 1/100

西8.0mを測る楕円形を呈している（第31・33図）。

基底面の地業 本墳の構築は、微支尾根上部の東西8.0m以上、南北12.0mほどの範囲について、腐植土などを除去する整地を行っている。ただし、平坦な基底面を形成する意識は乏しく、基底面のレベルは、北トレーニングでは86.2m、西トレーニングでは85.4m、東トレーニングでは85.2mで、本来の地形勾配などをそのまま踏襲していることがわかる。墳丘基底面は、旧表土を除去した地山で、北トレーニングでは、巨礫を包含する褐色砂質土（第33図16層。以下、17号墳の土層については、第33図に拠る。）、西トレーニング・東トレーニングでは、にぶい黄褐色砂質土（56・59層）である。西トレーニングでは基底面が西へ下降している一方で、東トレーニングの基底面レベルはほぼ水平なので、北から伸びてきた尾根の先端やや西寄りの地形を利用して、墳丘西側から南側は本来の自然傾斜を生かして墳裾としていることがわかる。一方、東側には周溝を設けて墳域を明確化した様子がうかがえる。

墳丘内列石 墳丘内には、右側壁側（西半部）に重点を置いた墳丘内列石を検出した（第31図、図版5上段左）。西トレーニング以北では、0.3～0.5mの自然礫が半径約2.5mの弧を描いており、奥壁裏には長軸1.2mの石材を横位置に据えている。この列石は、多少乱れながらも東半域にも伸びて、東トレーニング北壁付近まで続いている。また、西トレーニング以南は、石材がやや小振りでまばらになるが、右側壁に並行して直線的に伸びる傾向がうかがわれる。これらの石材は、基底面より明らかに浮いているので、墳丘構築過程で適宜持ち込まれたことが明らかである。土層断面図に示されているように、石室構築が進行して、奥壁2段目や側壁4段目を安定させる下部盛土が行われた段階で、石室壁体構築工程と連動させて作業を行っている。これらは、構築中途面の保護を目的として、石材を埋め殺すことを前提としてランダムに配置したものといえる。

このような墳丘西半域における重点的な補強は、この部位が、元々西偏した旧地形占地によって、築造に不向きな傾斜部に当たっているという、不利な立地条件に配慮したものであろう。

墳丘の築成 まず、東西幅2.5m、南北長約8.0m、深さ0.5m以上の墓壙を掘削する。墓壙は南東方向に開口する。墓壙内に奥壁から基底石を据えて、裏込めを行いながら墳丘を構築していくが、墳丘東側、西側、北側で埋土や盛土の手順、手法に違いがみられる。

墳丘北側は、奥壁に沿う墓壁が16層をベースとして0.9mと深く、基底石を裏込め土（6～8層）で安定させた後には、奥壁裏から墓壙上部を埋めるように、裏込めが行われている（9・10層）。11層は、上部を削平されているが、本来は10層以下と同様に、奥壁裏まで続いているのであろう。12・13層は、下部封土へと連なる墳丘盛土が、辛うじて残存しているものと考

えられる。

墳丘西側は、左側壁2段分の裏込め（38・39層）を行った上に、裏込め押さえの37層を置き、続いて、34～36層を細切れに積み上げて構築墓壙風に築営してから、裏込め優先の埋土へと手順が進む（31～33層）。28・30層は墳丘盛土であることが明らかだが、23～29層は墳裾への勾配が乏しく、多分に再堆積土の様相を示す。位置や墳丘規模からみて、墳丘上位の盛土と判断することはできない。

墳丘東側は、56層をベースとして、石室の裏込めと墳丘盛土を連動させて、盛土も裏込めも厚さ0.1mほどに薄く細切れに積み上げている。

これらの手法の違いは、傾斜変換部に近い西側には墳丘内列石を設けたのと同様、意識的に強度を高める工夫がなされているのに対して、基底面の高い北側や基底面が平坦な東側は、さほど墳丘の補強を必要としなかったことから、省力的な工程を選択したためであろう。

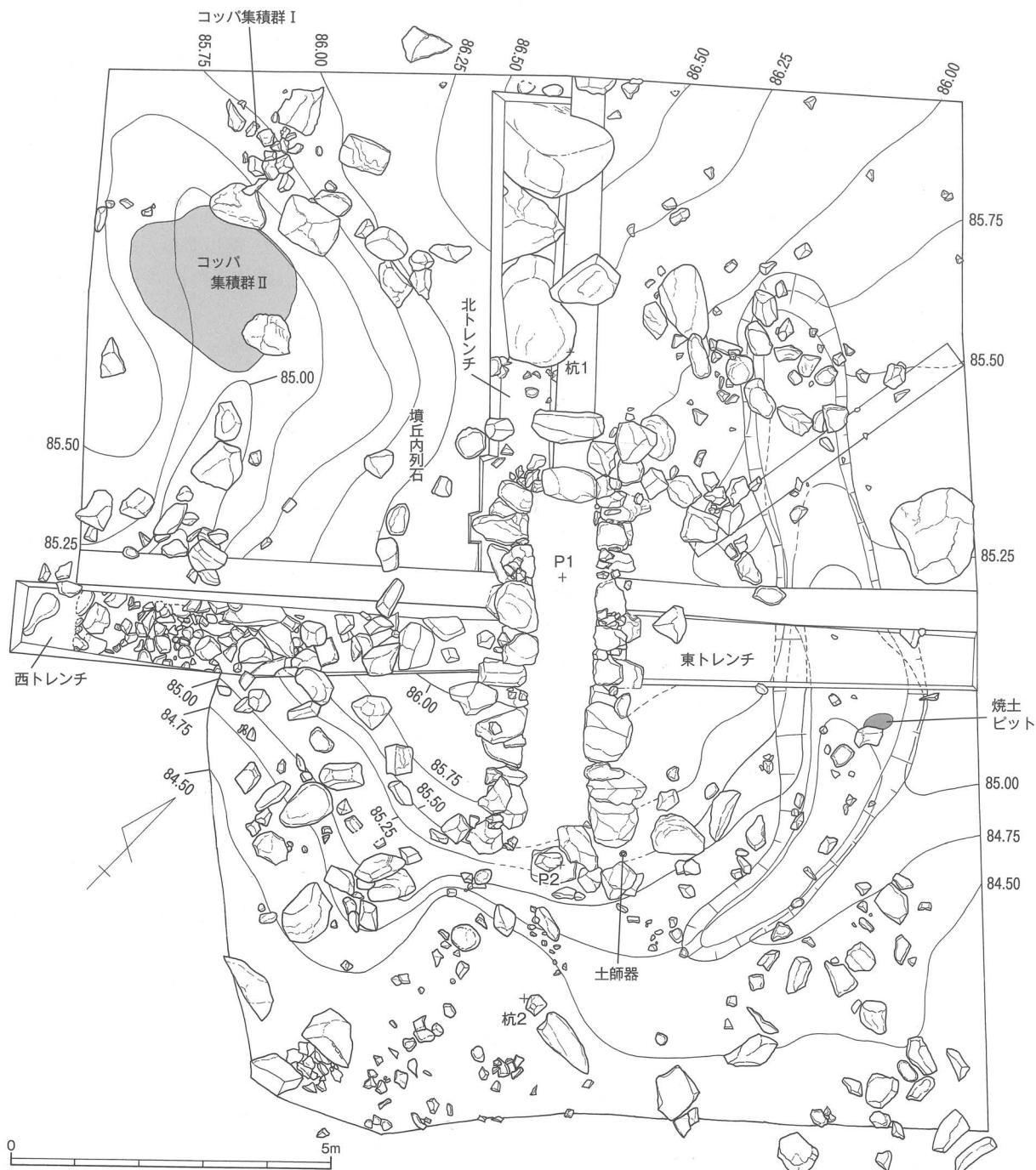
墳丘の立面形態は、墳丘頂部が後世の攪乱によって失われているが、天井部を想定して構築時の墳丘高を復元すると、2.5mを超えていたことが推測される。

周溝 本墳の西側から南側にかけては、近世の石曳き道が造成されるよりも前、古墳構築時にすでに傾斜変換部に近かったので、本来の地形を生かして墳裾としている。ただし、第33図にみられるように、西トレーニングでは本来の墳裾部は、石曳き道の開削によってカットされており、採石活動後に18～22層が堆積している。一方、東側については、幅1.8m、深さ0.5mの溝が検出されており、溝によって墳域を明らかにしようとした意識が認められる。東トレーニングでは、黄褐色砂礫土（43層）、明褐色細砂（44層）、明褐色砂礫土+明黄褐色細砂（45層）がその周溝埋土として観察される。しかし、土層観察では、この溝が墳丘盛土下部を切るように掘られているようにもみえることから、元来、墳裾を示す溝があつて窪地状になっていた所に、流水などがあつたり、採石活動時に再掘削されたりした、複次的な経年変化を考慮する必要がある。なお、この溝の床面では、焼土ピットが確認された。

焼土ピット この遺構は、周溝の東側法面に近い床面に位置する。地山面で検出され、浅く掘り窪めた土坑状を呈する。規模は、南北0.6m、東西0.5m、深さ0.15mを測る楕円形で、断面の形状は浅い塊形である。検出面は多少の削平を受けていることから、本来の径はもう一回り大きなものであったと推測される。

被熱範囲は土坑の全面にみられ、埋土内にも多くの焼土が含まれていた。顯著な加熱の強弱差は見当たらないものの、土坑の基盤面より5cm下位までは被熱しており、その上面は硬化していた。

顯著な特徴や年代を特定し得る遺物が全く出土しなかつたため、その性格は確定できなかったが、古墳の



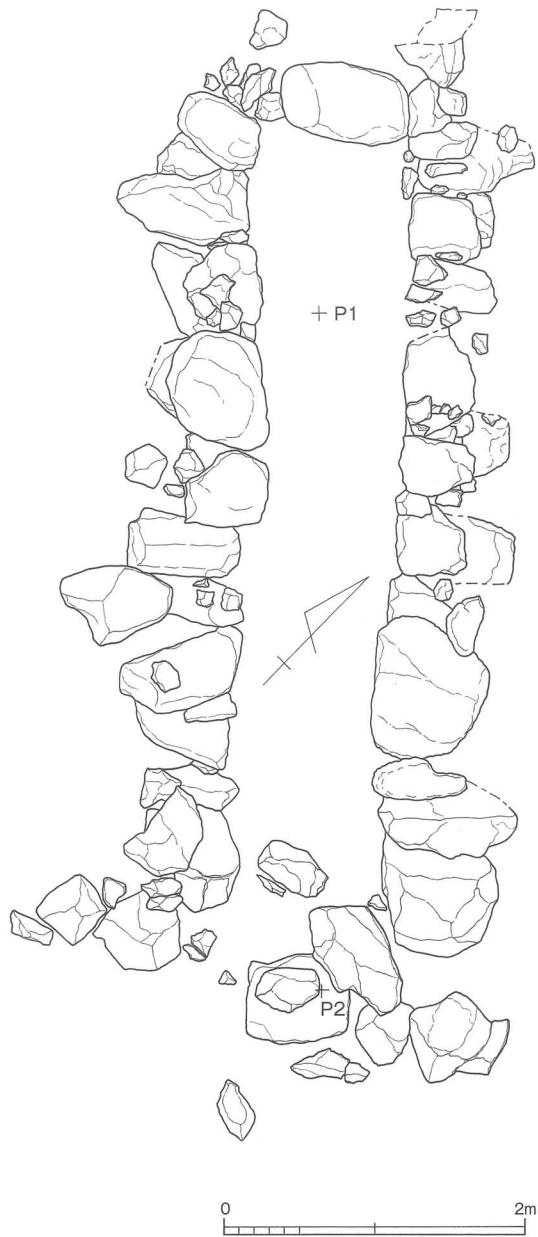
第31図 岩ヶ平第17号墳平面図 1/100

周溝に位置することから、古墳築造時に浅く掘り窪めた土坑において、焼成を伴う祭祀を行った可能性がある。ただし、本墳周辺一帯では近世の採石活動が盛んに行われていることや、周溝部分の再掘削が行われた可能性があることから、その用途としては、採石に関連する石工の小修理などの小鍛冶場が想定されるとともに、暖をとるためや、炊飯等の火化遺構の可能性も考えてよい。

墳丘テラス 本墳は石室前面まで遺存しており、開口部と墳丘テラスの状態が観察できた（第31・37図、巻頭図版2）。右側側は0.5~0.7m大の自然礫を開口部

から西に2段積み上げた貼石がみられた。高さは0.6mである。左側壁は、開口部の東側に0.8m大の自然石を横位置に置くとともに、さらにその前面に、地山から露頭した巨礫を残してその上に石材を積んで、テラスを造り出している。これらの貼石や置石は石室に直交するように設置することによって正面感をより強調しており、「開口部列石」の一部と判断してよいだろう。右壁側のテラス面には土師器甕ないし壙（39図15）が供獻されており、その出土位置から、墓前祭祀に関わるものと推測している。

墓道 開口部において、左側壁側（東部）にのみテ



第32図 岩ヶ平第17号墳石室上面図 1/50

ラスが設けられていたことや、旧地形と石室との関係、さらに前庭部で認められた須恵器片が、石室主軸から南側にずれた位置にみられる様から、本墳には南に向かう墓道が伴うようである。ただし、開口部から南に約5.0mの位置で石曳き道と重複し、その続きは不詳である。

(2) 内部構造と遺物出土状態

17号墳は、16号墳と同様に、天井石のすべてと石室上部の石材が既に失われていた。石室内には厚さ0.4～0.6mの褐色～黄褐色砂質土（2～5層）が逆順に流入した上に、腐植土を含む黒褐色～黄灰色砂質土（1層）が堆積していた。奥壁際には、石室内流入土のみならず、石室床面をも掘り抜く、径0.8mの半円形の乱掘坑があった。調査開始時には奥壁や右側壁5石が

ほぼ原位置を保つ状態で確認されるとともに、左側壁構築石材の一部が石室内にずれ込む状況が確認された。ただし、羨門付近の状況は、現状において不分明であった（図版1下段）。

墓壙 墓壙は地山を掘開しており、奥壁側の深さは0.94mを測る。西トレンチ・東トレンチラインでの深さは0.5mで、本来の地形を受けて、奥壁側が深く、開口部側は浅くなって、開口する。平面形は、東西幅2.5m、南北長約6.8mの長楕円形に、幅約1.0mの直線部分（前道）が羽子板状に取り付き、全長は8.0mに達する（第33・38図、図版5上から3段目）。

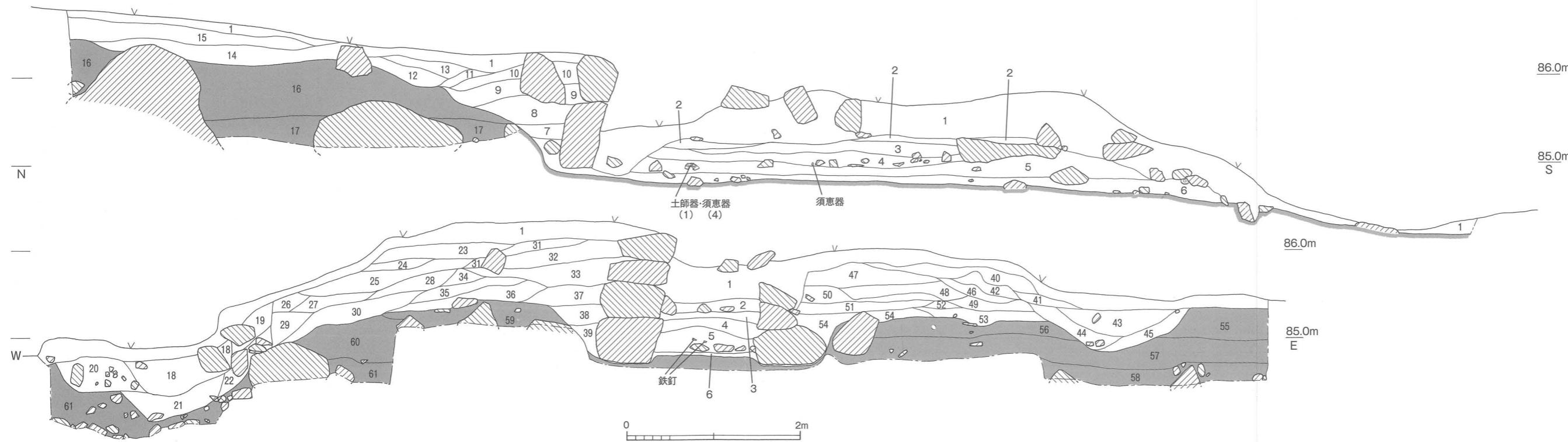
墓壙底は、礫敷きに見えるほど、段丘礫層上部の地山に含まれる花崗岩礫が露頭している。奥壁側のレベルは84.9m、開口部のレベルは84.5mで、さらに前庭部に向けて緩やかに下降している。石室の基底石を据えるために、右壁側は幅0.7m、深さ0.1mの布掘り状の掘り込みがあり、この掘り込みは奥壁側から左側壁側にも伸びている。しかし、左側壁側の掘り込みの肩部に乱れがある。さらに、開口部寄りには、石材ごとにクレーター状になっていて、基底石設置のための置土や、墓壙構築時に地山中にあった礫の抜き取り痕、充填土の残土などが想定できる。

なお、排水のための施工は認められなかった。

石室の構造 発掘調査の結果、主体部の横穴式石室は開口部まで遺存していることが明らかになった。平面形は無袖式で、主軸をN45°Wに採り、南東方向に開口する（第30～37図、巻頭図版2、図版3・4）。なお、石室構築に供した石材は、すべて近在で調達可能な六甲花崗岩や花崗斑岩などで、多くは亜角礫を主体とする自然礫であるが、一部には割石もみられた。石室上面を検出した段階で、右側壁中央部の上部石材が幾分石室内に迫り出していたが、基底石は原位置を保っており、石室の規模は、右側壁長5.38m、左側壁長5.50m、奥壁幅1.14m、石室最大幅1.20m、開口部幅1.04mを測る。石室残存高は、奥壁で1.12m、右側壁で1.20m、左側壁で1.28mである。

石室の平面プランは胴張りのない長方形で、側壁には弱いながら持ち送りが認められ、東トレンチ-西トレンチラインでの石室上部の幅は1.0mを下回る。両側壁ともに、奥壁から5石までは基底石の上面を揃える意識がみられ、それより開口部側とは石使いが異なる。また、開口部に対する意識はとくに明確で、両側壁ともに、側壁構築石材の上面を開口部に向かって上昇させる特異な積み始めを行っている。基底石にもこの傾向はみられるが、2段目以上の弧状配列が、とくに顕著である。なお、床面には敷石は施されていない。

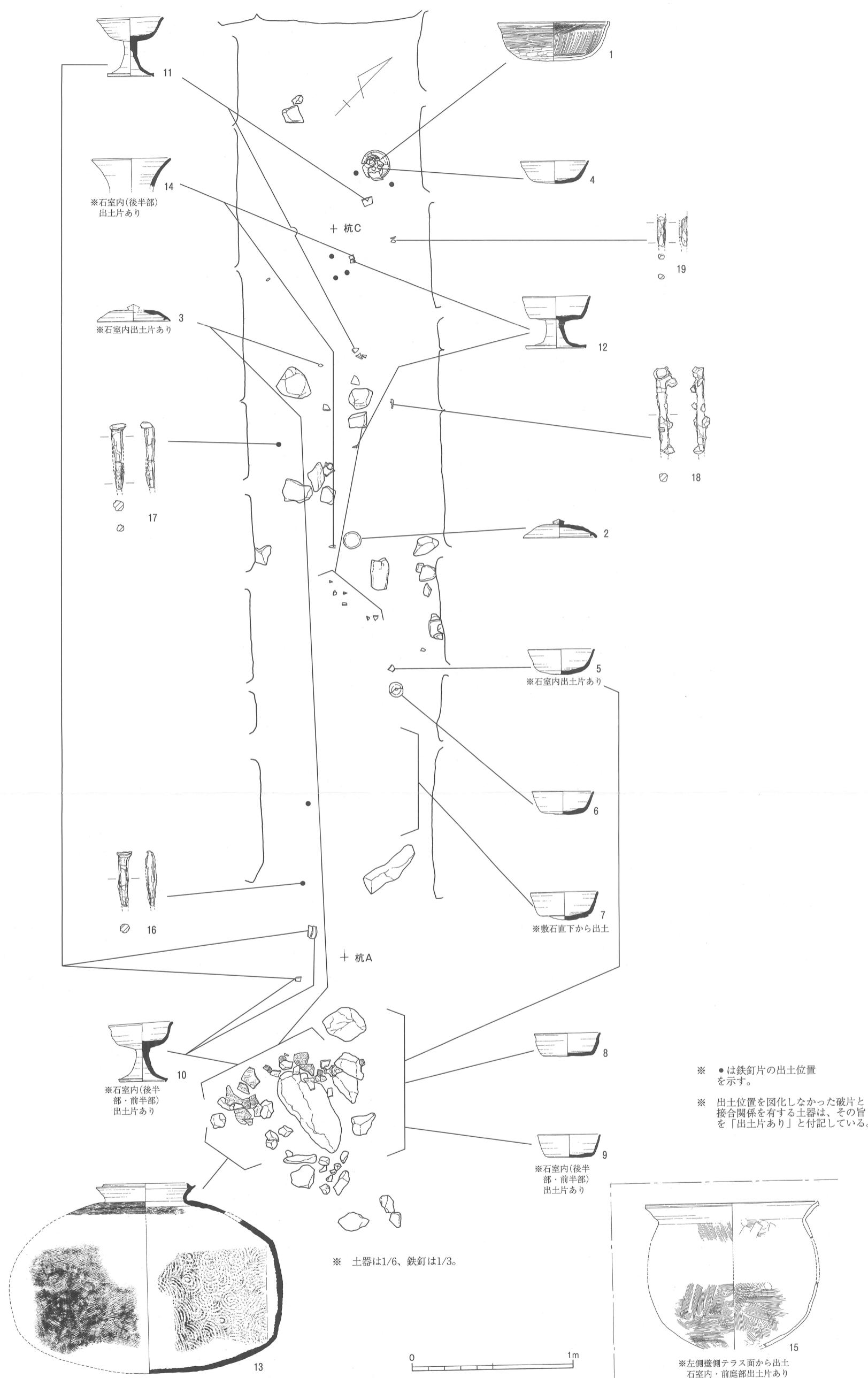
奥壁 奥壁の残存高は1.12mを測る。主要石材は、幅0.96m、高さ0.80m、厚さ0.44mの板状の自然石の上に、幅0.80m、高さ0.45m、厚さ0.44mの直方体に近い自然石を横位置に積んだ二段構成であるが、この



第17号墳土層石曳き道

- 1 黒褐色(10YR3/1)～黄灰色(25Y5/1)砂質土。腐植土を含む現表土や石室内攪乱埋土を含む。
 2 褐色(10YR4/4)砂質土とにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土が混じり合う。
 3 明黄褐色(10YR6/6)礫混じり砂質土。にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土が混じる。20cm大の礫を含む。
 4 明黄褐色(10YR6/6)砂質土～細砂に黄褐色(10YR5/8)砂質土がまばらに混じる。
 5 黄褐色(10YR5/6)小礫混じり砂質土。にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土が混じる。5～30cm大の礫を含む。
 6 褐色(10YR4/4)礫混じり砂質土。明黄褐色(10YR6/8)砂質土が混じる。
 7 黄褐色(10YR5/6)小礫混じり砂質土と褐色(10YR4/6)砂質土が混じり合う。
 8 明黄褐色(10YR6/6)砂質土～細砂。黄褐色(10YR5/6)砂質土が混じる。
 9 黄褐色(10YR5/6)小礫混じり砂質土と褐色(10YR6/6)砂質土が混じり合う。7層に似た土質・土色。
 10 明黄褐色(10YR6/6)砂質土～細砂。黄褐色(10YR5/6)砂質土が混じる。8層に似た土質・土色。
 11 黄褐色(10YR5/6)小礫混じり砂質土。褐色(10YR4/4)砂質土が微量混じる。
 12 明黄褐色(10YR6/6)小礫混じり砂質土。褐色(10YR4/4)砂質土が混じる。
 13 明黄褐色(10YR6/6)小礫混じり砂質土。にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土が微量混じる。
 14 にぶい黄褐色(10YR6/3)砂質土。黄褐色(10YR5/6)細砂が混じる。2～3cm大の小礫を含む。
 15 にぶい黄褐色(10YR6/4)小礫混じり砂質土。にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土が混じる。
 16 褐色(10YR4/6)砂質土。黄褐色(10YR5/6)砂質土が混じる。巨礫を包含する。地山
 17 黄褐色(10YR5/6)礫混じり砂質土～細砂。褐色(7.5YR4/6)砂質土が微量混じる。
 18 明黄褐色(10YR6/6)砂質土と灰黄褐色(10YR4/2)砂質土が混じり合う。
 19 にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土と明黄褐色(10YR6/8)砂質土が混じり合う。40～50cm大の礫を含む。
 20 にぶい黄褐色(10YR7/4)砂質土～細砂。橙色(7.5YR6/8)土が混じる。
 21 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土～細砂。橙色(7.5YR6/6)土が混じる。
 22 にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土と明黄褐色(7.5YR5/6)砂質土が混じり合う。
 23 明黄褐色(10YR7/6)礫混じり細砂。
 24 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土。3mm～1cm大の小礫を全体に包含する。
 25 明黄褐色(10YR6/6)細砂とにぶい黄褐色(10YR5/4)細砂が混じり合う。
 26 にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土。明黄褐色(10YR6/6)砂質土が混じる。
 27 にぶい黄褐色(10YR5/6)小礫混じり砂質土。褐色(10YR4/6)砂質土が微量混じる。
 28 にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土とにぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土が混じり合う。1cm大までの小礫を含む。
 29 明黄褐色(10YR6/6)礫混じり砂質土と黄褐色(10YR5/8)砂質土が混じり合う。
 30 にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土。明黄褐色(10YR6/8)砂質土が混じる。
 31 にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土と灰黄褐色(10YR5/2)砂質土が混じり合う。
 32 明黄褐色(10YR6/6)砂質土と灰黄褐色(10YR5/2)砂質土が混じり合う。
 33 明黄褐色(10YR6/6)砂質土とにぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土が混じり合う。
 34 にぶい黄褐色(10YR5/4)小礫混じり砂質土と明黄褐色(10YR6/6)砂質土が混じり合う。
 35 黄褐色(10YR5/6)砂質土。橙色(7.5YR6/6)砂質土が混じる。
 36 にぶい黄褐色(10YR6/3)砂質土。褐色(10YR6/4)砂質土が混じる。
 37 にぶい黄褐色(10YR6/4)礫混じり砂質土。にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土が混じる。
 38 褐色(10YR4/6)小礫混じり砂質土。にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土が微量混じる。
 39 明黄褐色(10YR6/6)砂質土。明褐色(7.5YR5/6)砂質土が混じる。
 40 明黄褐色(10YR6/6)礫混じり砂質土とにぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土が混じり合う。
 41 明黄褐色(10YR6/6)細砂。
 42 褐色(10YR4/4)小礫混じり細砂質土。
 43 黄褐色(10YR5/6)砂質土。明黄褐色(10YR6/6)砂質土が混じる。
 44 明褐色(7.5YR5/6)砂礫土。明黄褐色(10YR6/6)細砂が混じる。
 45 明褐色(7.5YR5/8)砂礫土と明黄褐色(10YR6/6)細砂が混じり合う。
 46 黄褐色(10YR5/6)小礫混じり砂質土と明黄褐色(10YR6/6)礫混じり砂質土とが混じり合う。
 47 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土。褐色(10YR4/4)砂質土が混じる。
 48 褐色(10YR4/4)小礫混じり砂質土とにぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土が混じり合う。
 49 黄褐色(10YR5/6)砂質土。褐色(10YR4/6)砂質土が混じる。
 50 黄褐色(10YR5/8)小礫混じり砂質土。にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土が微量混じる。
 51 褐色(10YR4/6)小礫混じり砂質土。にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土が微量混じる。
 52 明黄褐色(10YR6/6)砂質土。明黄褐色(10YR7/8)細砂が混じる。
 53 黄褐色(10YR5/8)砂質土と明褐色(7.5YR5/6)砂質土が混じり合う。5～10cm大の礫を含む。
 54 明黄褐色(10YR6/6)砂質土。明褐色(7.5YR5/6)砂質土が混じる。
 55 明黄褐色(10YR6/6)小礫混じり砂質土。橙色(7.5YR5/8)砂質土が混じる。地山。
 56 にぶい黄褐色(10YR5/4)礫混じり砂質土と明褐色(7.5YR5/6)砂質土が混じり合う。地山。
 57 明褐色(7.5YR5/6)砂質土～砂礫土。明黄褐色(10YR6/6)砂質土が混じる。地山。
 58 黄褐色(10YR5/8)砂質土～砂礫土。明褐色(7.5YR5/8)砂質土が混じる。地山。
 59 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土。橙色(7.5YR6/6)砂質土が混じる。地山。
 60 にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土と明黄褐色(7.5YR5/6)砂質土が混じり合う。地山。
 61 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土と明黄褐色(7.5YR5/6)砂質土が混じり合う。地山。

第33図 岩ヶ平第17号墳土層断面図 1/50



第34図 岩ヶ平第17号墳石室床面および前庭部平面図 1/25

二石では石室幅を満たすことができなかつたため、右側壁側に補完石材を詰めている。奥壁設置に先立つて墓壙床面に明黄褐色砂質土が混じる褐色礫混じり砂質土（6層）を敷布し、奥壁裏側の墓壙最下部は、これと同じ土で裏込めするなど、並行工法を探っている。

側壁 両側壁ともに最高で4段遺存している。右側壁の残存高は1.20m、左側壁の残存高は1.28mで、長軸を横位置に置いている石材が多い。両側壁の石材の大きさに顕著な違いはないものの、僅かに左側壁石の方が大きい傾向が見て取れる。ほとんどの石材は平らな自然面を内側に用いているが、粗割面を内壁面とした石材も5分の1ほどみられた。

左側壁は、奥壁寄りよりも開口部寄りの石材が大きい。奥壁から5石分の基底石の高さは0.3m強で、上面レベルが85.3mから85.1mに緩やかに下っている。さらに、奥壁に接する3段目の石材の上面レベルは85.85mであるが、奥から4石目から6石目の2段目石材の上面を経て、奥から6石目の基底石の上面に続く傾斜ラインがみえる。この基底石は、奥の5石よりも高さのある大振りの石材で、上面レベルは85.2mである。一方、開口部側は、奥壁から6石目の基底石の上面から続くように、基底石の上面レベルが上昇していく、この基底石が、奥壁側と開口部側の両作業単位の境界であることがわかる。さらに上部の石材についても、これより奥壁側は、奥壁から順次上面レベルが下がるのに対して、開口部側は弧状ラインをもって上昇している。

右側壁は、左側壁と比べると、奥壁側の石材が大きい。奥壁から5石分の基底石について、高さ0.4m程度のものを選んで上面レベルを揃える。しかし、奥壁から5石目の基底石は、落とし積みの底石になっていて、それより奥壁側の側壁が比較的整齊であるのとは様相が異なる。裏込めの観察からは、側壁2段分を一つの作業単位とした様子がみてとれるものの、2段目については、必ずしも目地を通していなない。むしろ、奥壁から5石目の基底石の上に積まれた二段目の2石の石材上面に向かって奥壁側から下ってくる傾斜ラインがみえる。また、奥壁から6石目の基底石は、高さが0.15mしかない平たい石材で、2段目の石材と併せて、漸く奥壁側5石分の基底石上面のレベルに達する。ここから開口部に向けて、2段目石材の上面レベルが斜めにせり上がっており、3段目の石材も2段目石材の上昇に則して上面レベルが開口部に向かって上昇している。このように、奥壁側と開口部側では明らかに用石方法が異なる構築法を用いていて、不完全ながらも右側壁と同様に弧状ラインを持った構成になっているといえる。この点を用石法の大きな特徴とみる。

石室埋土 石室内には、腐植土を含む現表土（1層）の下に、部分的に褐色砂質土とにぶい黄褐色砂質土が混じり合う2層があり、その下に、明黄褐色～黄褐色

の地山起源の真砂土（3～5層）が堆積している（第33図）。4層からは少量の土師器片・須恵器片が出土したのみであったが、厚みのある5層からはまとまって遺物が出土しており、5層が石室床面直上に堆積した土層であることがわかる。

ところで、奥壁から4.1mの位置を北端にして、開口部付近に、5層に貼りつくように、長さ1.2m、幅0.6m、厚さ0.28mの板石が検出された（第35・36図）。上端がほぼ水平であることや、その出土位置から、屍床の可能性を考えて掘削したが、この石材よりも上位レベルからの遺物の出土は皆無であったため、積極的に追葬の痕跡とはせず、石室構築材の転落か、閉塞石の移動と判断しておく方が理にかなう。また、3層と4層の層理面や、4層と5層の層理面に床面を想定しながら掘削したが、整地を伴う追葬面と理解することはできなかった。

石室床面 本墳の床面は、5層と6層の層界部分で、土床と思われる（第33・34図、巻頭図版2、図版4）。墓壙床面に基底石を据えてから、明黄褐色砂質土が混じる褐色礫混じり砂質土（6層）を敷いて、床面を造っている。6層の上面レベルは、攪乱のすぐ南側で84.92m、開口部で84.80mと、緩傾斜している。6層は側壁石材の下にも及んでいるので、薄く6層を置いて、この6層が支持する形で置土上に基底石を並べ、さらに基底石の下端空隙を充填するように床面を造っている。また、同じ土で奥壁裏の墓壙を埋めて奥壁の安定を図っている。

床面出土の遺物は、6層に直接貼り付くものより、少し浮いた状態で出土しているもの多かった。完形品もあるが、細片になった須恵器が、石室内や低位置の前庭部に散乱していた。なお、床面には、0.1～0.4mの花崗岩礫が点在しており、この中には植台として用いた石材が含まれている可能性はあるものの、積極的に特定することはできなかった。

遺物の出土状態 本墳からは、土器（須恵器・土師器）と金属製品（鉄釘）が出土した（第34・39～43図、図版4・9）。

遺物の出土は、石室内と前庭部、左側壁側の墳丘テラス面に分かれ、石室内からは完形の土師器杯と須恵器杯蓋・杯身とともに、須恵器片や土師器片、鉄釘片が出土している。前庭部からは須恵器片と土師器片が、墳丘テラスからは土師器片が出土している。石室内出土の須恵器片は、前庭部出土の須恵器片と接合関係を有するものが多く（3・5・9・10・11）、これは、乱掘に伴う搔き出しを想定させる留意すべき点である。

完形の土器は、①奥壁から0.8m離れた左側壁寄り、②奥壁から3.1m離れた石室中軸付近、③奥壁から4.05m離れた左側壁寄りの各エリアから出土した。

①は、須恵器杯身（4）の上に、土師器杯（1）が底を上にして置かれていた。4は正立しており、口縁

部に人為的な欠損が加えられていた。一方、①は、土圧による破損はあったものの完形で、天地逆に④に被せられていた。②は、①から2.1m離れている。完形の須恵器杯蓋（2）で、天地逆の状態であった。③は、②から0.84m離れている。土圧によって半分に割れた須恵器杯身（6）が天地逆の状態で出土している。このほかに、出土位置を図化できていないが、敷石直下から須恵器杯身（7）の破片がまとめて出土しており、完形に復元できた。これらのうち、正立する須恵器杯身（4）に壊れやすい土師器杯（1）を底部を上にして被せていた①は、本来の副葬状態を保っているとみることができよう。また、その位置から、被葬者の頭部脇に置かれた棺内副葬品と考え得るものであり、最も旧態を保つと判断した（第40図）。

石室内から出土した須恵器片は、①の土師器杯（1）・須恵器杯身（4）から③の須恵器杯（6）の間の約3.0mの範囲に、細片が点在していた。同一個体の破片が原位置を保って一ヶ所にまとまるという状態ではなく、まさにバラバラの状態であった。破片の出土位置を図化できたものは、杯蓋（3）・杯身（5）・高杯（11・12）・長頸壺（14）だが、この他に、杯身（9）と高杯（10）も、石室内から破片が出土している。これらのうち、杯蓋（3）・杯身（5・9）・高杯（10・11）は、前庭部から出土した破片と接合関係をもっており、遠隔ながら有機的関係にある。

鉄釘は、①の土師器杯（1）・須恵器杯身（4）に近接する位置（奥壁から約1.0m）から、開口部方向へ約1.6mの範囲（17～19など）と、開口部付近（16など）の2ヶ所に集中する傾向があり、2つのグループの間には、約2.1mの空間がある。しかし、鉄釘の総量が少なく、明確な法量分化も認められないで、鉄釘の分布域から複数埋葬を読み取ることは難しい。大半は、乱掘に伴う移動と考える。

土師器片は、石室前半において、床面から浮いた状態で極少量が出土している。左側壁側の墳丘テラス面出土の土師器甕ないし壙と同一個体の可能性のある破片である。

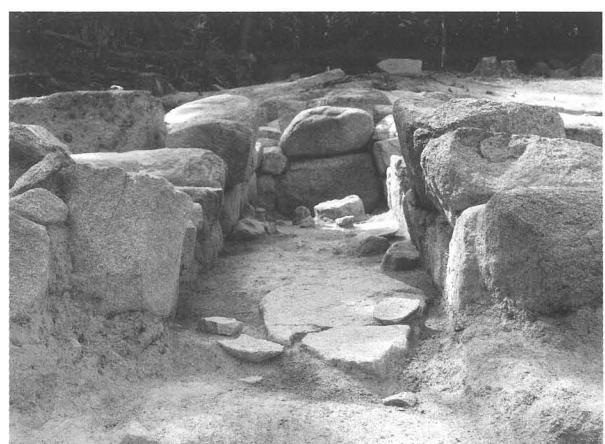


第35図 岩ヶ平第17号墳石室内第1検出面（南東から）

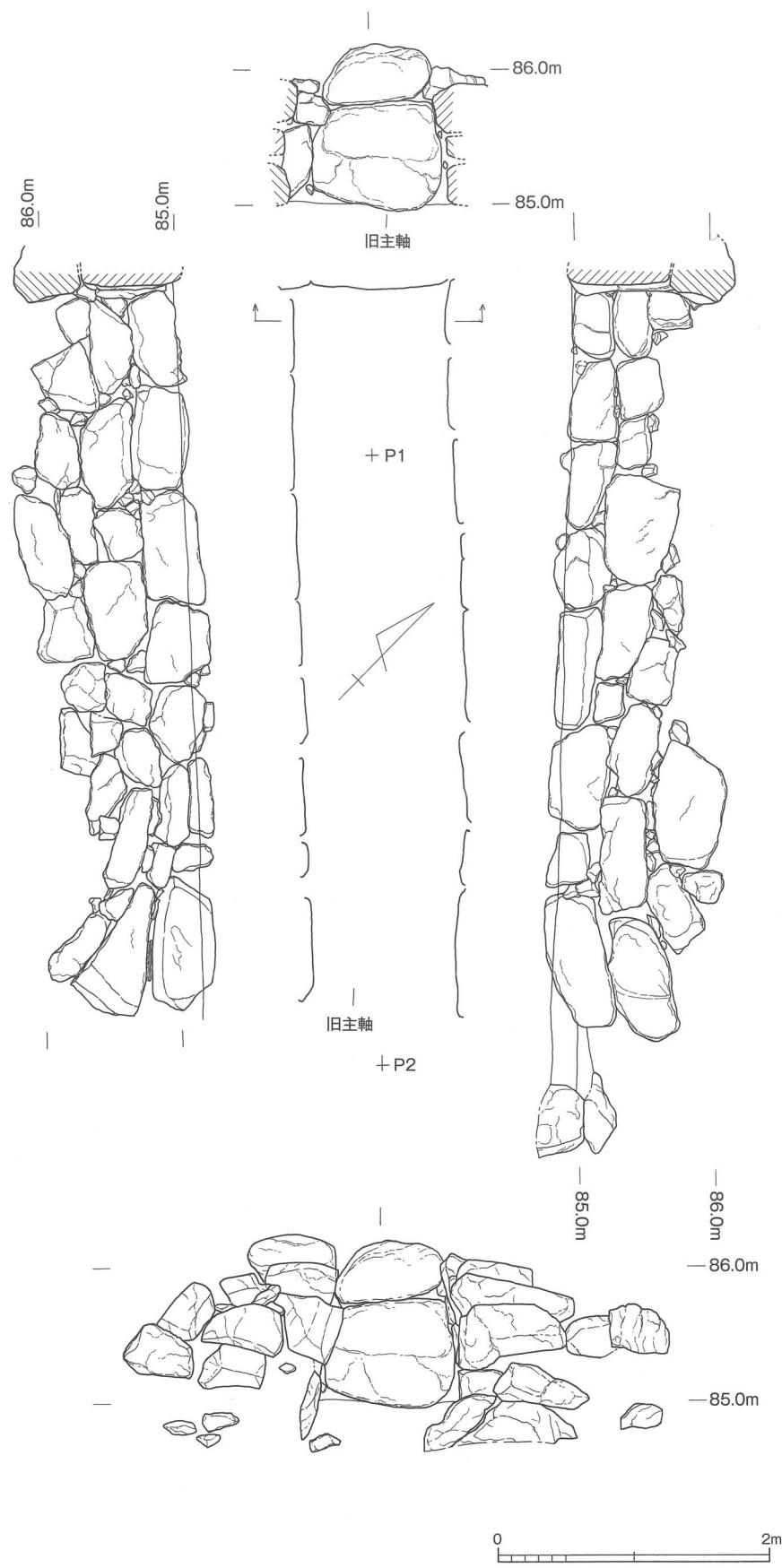
前庭部では、長さ0.6m、幅0.25mの細長い礫に接するように須恵器片がまとめて出土している。その主要な破片は横瓶（13）で、口頸部や、残存率約2分の1の胴部が、0.5m四方に集中していた。このほか、杯蓋（3）・杯身（5・8・9）・高杯（10・11）の破片も、横瓶（13）の破片に重なるように出土している。なお、高杯（10・11）の破片の一部は、より開口部に近い位置にも広がっていた。一方、土師器については、須恵器群よりも東側、すなわち左側壁側の墳丘テラス面の直下から、テラス面出土の土師器甕ないし壙（15）と同一個体の破片が出土している。ただし、墳丘テラス面出土の破片と比べると、磨滅が著しい。

前庭部で須恵器片が集中した位置から、南東～南方に0.7mほどの範囲には、0.05～0.3m大の礫が集中していた。これについては、閉塞石の一部が移動したものと考えている。須恵器片は、これらの石材に混じり込むように出土している。閉塞石の流出や、石室内出土須恵器片と前庭部出土須恵器片の接合関係を考慮すると、杯蓋（3）・杯身（5・8・9）・高杯（10・11）は、本来石室内に納められていたものが前庭部まで掻き出されたとみて大過あるまい。その一方で、横瓶（13）は石室内から出土した破片がないことと、破片の集中性からみて、もともと前庭部に供献的に置かれたものであろう。破片の遺存する部位に偏りがあることや、割面のシャープさなどを考慮すると、葬祭に際し、意図的に叩き割られたことは考えられてよい。左側壁側の墳丘テラス面からは、土師器甕ないし壙の体部片がまとめて出土していて（15）、接合関係は濃厚で、20cm大の体部片にまとまった。加えて、口頸部片も伴っており、共飲共食儀礼に用いた土器などを供献したものとみている。同一個体とみられる破片が前庭部や石室内から出土しているが、これらは磨滅が顕著で、人為的な散布によるものではなく、前庭部や石室内への二次的な移動と理解している。

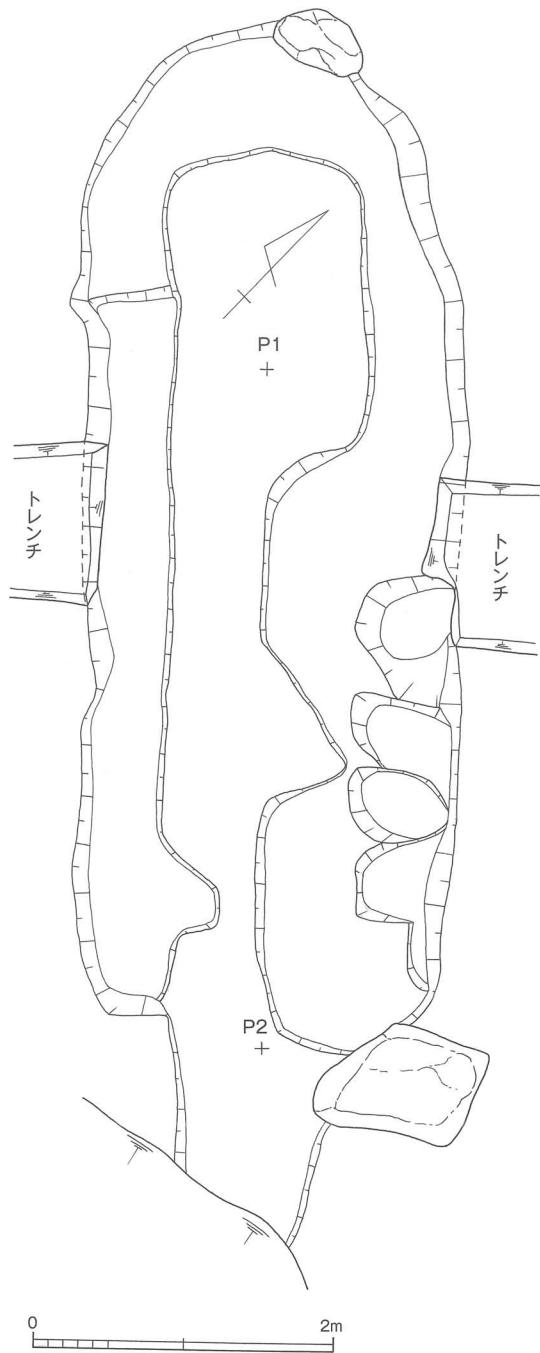
このように、本墳から出土した土器は、完形の土師器杯と須恵器杯蓋・杯身、破片であったが接合によって器形が明らかになった須恵器杯蓋・杯身・高杯・長



第36図 第1検出面の開口部（南東から）



第37図 岩ヶ平第17号墳石室展開図 1/50



第38図 岩ヶ平第17号墳墓壙平面図 1/50

頸壺・横瓶と土師器甕ないし壙である。須恵器横瓶(13)と土師器甕ないし壙(15)は、もともと石室内に収められたものとは考え難く、墓前祭祀に関わるものと推察できる。一方、土師器杯と他の須恵器杯蓋・杯身・高杯・長頸壺は、石室内に副葬されたものといえる。この中で、土師器杯だけを6世紀末まで製作年代が遡り得る極端に古い資料とみているが、他の須恵器はむしろ限られた年代の資料である。①において土師器杯が須恵器身に被せられていたことからも、土師器杯が須恵器杯身とともに副葬されたことは明らかであり、時間差のみられるこれらの石室内出土土器は、一

時の埋葬に伴うものとみてよいだろう。

①の土師器杯(1)・須恵器杯身(4)と③の須恵器杯身(6)の間は、3.0mほど離れていて、この間に須恵器片と鉄釘片が散乱していた。前述したように、1と4を、被葬者の頭部脇に置かれた棺内副葬品とみると、③までの間に、1棺安置したとみることができる。②の須恵器杯蓋(2)の存在を考慮すると、棺の開口部側小口部はもう少し奥壁寄りになるのかもしれないが、開口部側小口前面に副葬品として須恵器杯蓋(2)・杯身(6・7)を並べていたと推定できる。他の前庭部から出土した破片が主体である杯蓋(3)、杯身(5・8・9)も、本来は開口部側小口前面に置かれていた可能性は高いだろう。一方、①に近い位置からも破片が出土している高杯(11・12)と長頸壺は、別の位置に置かれていたと推測することもできよう。

本墳は、石室規模が全長5.50m、石室最大幅1.20mで土床とみられるので、八十塚古墳群では単体埋葬用の石室と認識されている「無袖乙型」の提唱型式〔森岡1979〕の範疇に入る。このことからも、②や③の位置が開口部側小口前面に相当する、単体埋葬墳とみておきたい。

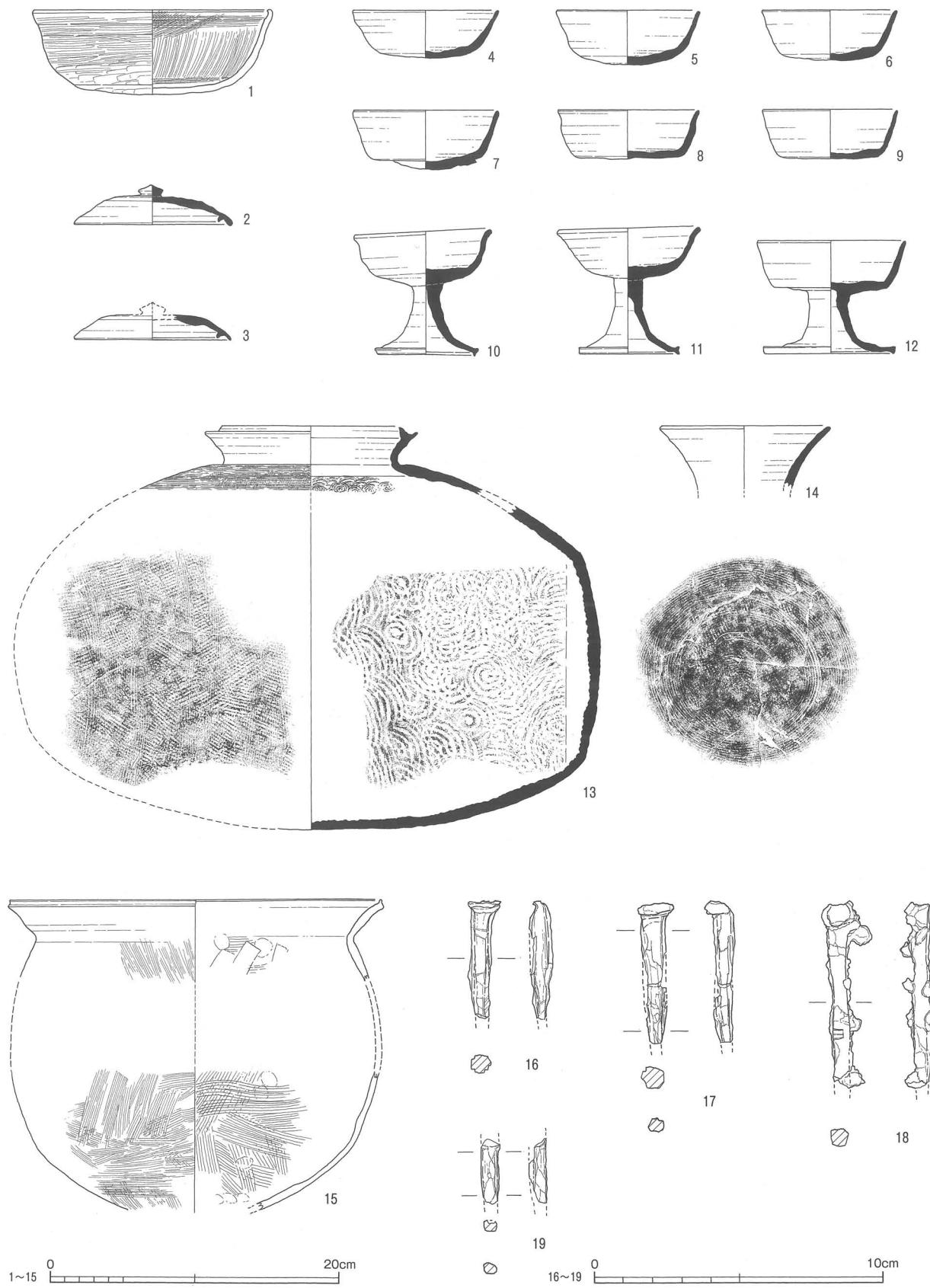
(3) 出土遺物

本墳からは、土器(土師器・須恵器)と金属製品(鉄釘)が出土している(第39~43図、図版9)。以下、出土位置にも留意しながら、個々の遺物について述べる。

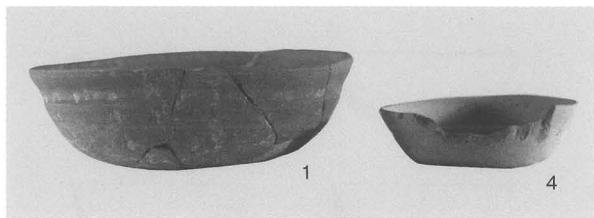
第39図に図示した遺物の出土位置は、石室内・開口部・左側壁側墳丘テラス面に分かれる。1・15は土師器、2~14は須恵器、16~19は鉄釘である。土師器は、1が杯、15が甕もしくは壙である。須恵器の器種は、2・3が杯G蓋、4~9が杯G身、10~12が高杯、13が横瓶、14が長頸壺で、全体としては小型土器類が目立ち、薄送化の傾向が窺われる。

土器(須恵器・土師器) 1は、石室内グループ①から出土した土師器杯で、土圧による破損はあるものの、ほぼ完形に復元できた(第40・41図)。口縁端部を内側に巻き込むように内彎させた杯Cの優品であろうか。外面下半はヘラケズリ調整で整形し、上半はヨコナデ調整の後に横方向の緻密なヘラミガキを加えている。ヘラミガキの一部は下半のケズリ部分にも及んでいる。内面はヨコナデを行った後に、横方法のヘラミガキ、放射状暗文、再度の横方向のヘラミガキを施し、口縁部にはイレギュラーな斜め方向のヘラミガキを加えた部分もある。口縁部の摘み上げ端部をヨコナデ調整して完成する。内底面には螺旋状暗文も残る。胎土は精良で、明赤橙色に発色している。口径は16.6cm、器高6.0cmを測り、径高指数は36である。飛鳥Iの後半段階である6世紀最末の製作年代を考えたい。

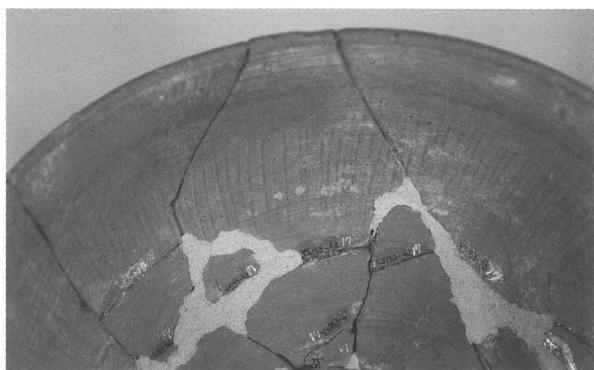
2は、石室内②から出土した完形の須恵器杯G蓋で、



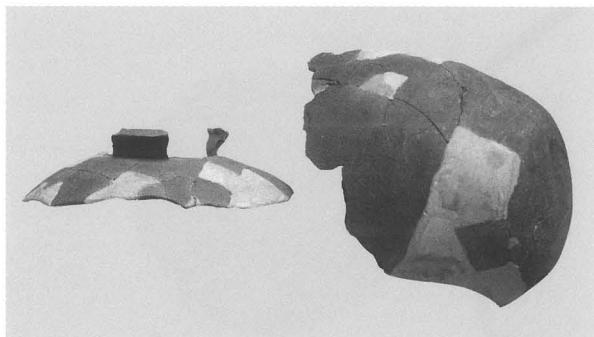
第39図 出土遺物実測図 1/4・1/2



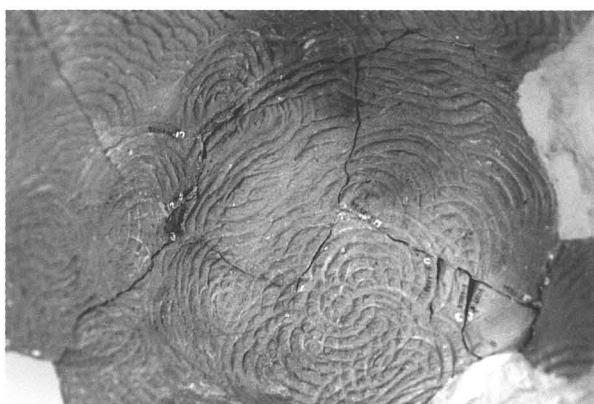
第40図 棺内副葬土器



第41図 土師器杯暗文



第42図 前庭部出土横瓶 (13)



第43図 横瓶内面當て具痕

口径10.8cm、器高2.8cmを測る。丸みを帯びた天井部に回転ヘラケズリを加え、シャープで定形化した宝珠つまみを持つ。内面返りは口縁部より上部に位置する。胎土は精良で、焼成は良好。器面は淡灰色を呈し、天井部に黄色がかった自然釉が付着する。寒風窯や高丘窯といった山陽地域の窯で焼かれたものかもしれない。3は、石室内から出土した破片と前庭部から出土した破片が接合できたものである。残存率3分の2の須恵

器杯G蓋であるが、天井部は欠損していて、つまみは遺存していない。口径は10.8cm。胎土や焼成状態、色調は、2によく似る。

須恵器杯G身は6点出土していて、この内、4～6・9が杯蓋2・3によく似た胎土、焼成状態であるので、4～6・9のいずれかと、2・3とがセット関係を有するのであろう。

4は、石室内①の土師器1の下から正立の状態で出土した。口端部の一部に人為的に加えられた打撃による明瞭な欠損があるが、ほぼ完形である。体部の外傾がやや強く、口径10.0cm、器高3.4cmである。底部外面はヘラ切り未調整である。5は、石室内から出土した破片と前庭部で出土した破片の接合によって、底部はほぼ完存し、口縁部の残存率は2分の1である。ヘラ切り未調整の底部は丸みがあり、口径9.8cm、器高3.8cmを測る。6は、石室内③から出土した完形の須恵器杯G身であるが、口端部に僅かながら欠損がみられる。口径9.2cm、器高3.6cmで、5・6と同様に、底部はヘラ切り未調整で終わる。7は、石室内の敷石直下、すなわち開口部付近から出土し、完形に復元できた。口径10.0cm、器高4.1cmを測る。胎土・焼成は良好で、器面は灰色を呈する。胎土の特徴に加えて、内底面に最終仕上げにヨコナデを加えていることや、底部外面の極めて粗雑なヘラ切りが、特徴的である。8は、前庭部から出土した破片を接合したところ、底部の残存率5分の4、口縁部の残存率3分の1まで復元できた。口縁部直下のヨコナデが強く、口縁部が僅かに外反傾向をみせる。復元口径10.2cm、器高3.5cmである。黒色粒が混じる胎土は灰色を呈しており、吹田窯の製品であろうか。底部外面はヘラ切り未調整である。9は、石室内から出土した破片と前庭部で出土した破片を接合したもので、残存率は3分の1。復元口径9.2cm、器高3.4cm。胎土の類似する4～6と同様に、底部外面はヘラ切り未調整である。

これらの平均径高指数は37である。この中で、細身の9は、直線的な器形で他より新しい様相を帯びるが、杯G身6点について、極端な時期差は認められない。

須恵器高杯は3点出土していて、いずれも低脚化の進んだ無蓋高杯である。10は、石室内から出土した破片と前庭部で出土した破片が接合できたもので、ほぼ完形に復元できた。口径9.3cm、脚端径6.7cm、器高は8.8cm。杯部と底部の境は丸みを帯びていて、内彎気味に立ち上がる杯部の口端部が短く外反する。淡灰色の胎土には、黒色粒がみられることから、吹田窯の製品と考えている。11も、石室内から出土した破片と前庭部で出土した破片が接合できたもので、ほぼ完形に復元できた。胎土や器形、調整など、10に類似するが、焼成は10よりも堅く、断面には褐色芯がみられる。口径9.8cm、脚端径6.8cm、器高は8.9cmを測る。12は、石室内から出土した破片を接合した高杯で、口縁部や脚部

の一部を欠損するが、ほぼ完形に復元できた。底部は平らで直線的に外上方に伸びる口縁部を持ち、脚裾は大きく踏ん張るように開く。口径10.2cm、脚端径8.9cm、器高は7.9cmである。灰色を呈する器面は光沢があり、脚部内面を含むほぼ全面に自然釉が掛かっている。本墳出土の須恵器の中では、違和感を持つ。

13は、前庭部から出土した横瓶である。受部を有する口縁部は4分の1程が、頸部は2分の1が残る。体部は、側面の一方が完全に残っていたが、口頸部とは直接接合できなかった(第42図)。受部と立ち上がりを有する特徴的な口縁部の口径は12.0cm前後に復元でき、受部径は14.8cmである。やや歪みのみられる俵形の体部は、短軸20cm、長軸40cmほどに復することができた。俵を縦位置にして粘土紐巻き上げ成形によって器形を形づくる。底部を作つて閉塞状態に粘土紐を積み上げ、器壁は厚いところがあつて歪む。

体部外面は、格子目タタキの後に、肩部と胴部に同一原体を用いたカキメ調整を加えている。内面の当て具痕は、直径約4cmの同心円状のものと、直径6cmほどの半円形のものがみえるので、二種の当て具を使用していたようである(第43図)。一つは、硬化に向かう素地粘土に原体の縁端を押し当てて、拡げるものである。二つ目は、同心円当て具を反時計回りに動かして成形するもので、工程による使い分けが認められる。白色砂粒を含む良質の胎土で、焼成は良好。器面は灰色で、断面は紫がかっている。

残存部位の偏りとその集中度、剥離を伴う破断面の様相は、人為的な打ち欠きと、選択された破片の持ち去りといった葬送儀礼を想定させる。

14は、石室内から出土した破片を接合したもので、残存率2分の1の長頸壺口縁部である。復元口径は11.6cmである。灰色を呈する胎土には黒色砂粒がみられ、吹田窯の製品と考える。本来は、肩部が丸みを持って張り、脚台部が付く器形であろう。

15は、主たる破片が左側壁側の墳丘テラス面から出土した土師器甕ないし壙である。口頸部の残存率は8分の1を下回るが、復元口径は25.6cmである。胴部の破片が限られていたため、器高は定かではないが、22.0cmほどであろうか。内面のハケ原体は7本/cmであるが、外面のハケ原体は9~10本/cmで、二種類の原体を使つていている。破片が限られるため、甕なのか壙なのか判断できなかったが、把手を持つ壙の可能性もある。なお、テラス面出土の最も器面状態の良い体部片には明瞭な煤化は観察できなかったことから、通常使用していた煮炊具を古墳に持ち込んだのではないことは明らかである。

以上のように、本墳出土の須恵器は、焼成や胎土の観察から、大まかに5つにグルーピングできた。それぞれの特徴は、A. 胎土は精良で、焼成は良好だが、器面は光沢がなく淡灰色を呈する。寒風窯や高丘窯と

いった山陽地域の窯を供給源とするもの。杯G蓋2・3、杯身4~6・9。B. 胎土・焼成は良好で、灰色を呈するもの。杯身7。C. 淡灰色~灰色を呈し、胎土に黒色粒が混じることから、吹田窯の製品と考えられるもの。杯身8、高杯10・11、長頸壺14。D. 灰色を呈する器面は光沢があり、自然釉が掛かっているもの。高杯12。E. 白色砂粒を含む良質の胎土で、焼成は良好。器面は灰色で、断面は紫がかっているもの。横瓶13。AとCの特徴を持つものが多く、単一ではないものの、限られた地域からもたらされた須恵器によって構成された一群といえよう。

金属製品 鉄釘4本がみられた(16~19)。いずれも断面方形であることがわかるが、破片である。16は開口部から、17~19は石室後半部から出土した。16は、僅かに頭部は残っているものの、先端は欠損しており、残存長は4.0cm。17の頭部は折れ曲がりながらも残っているが、やはり先端は欠損。残存長は4.9cmである。18は、砂粒の付着や鋸による膨らみがあるが、微かに横方向の木目痕がみられる。残存長は最も長く、6.5cm。19の残存長は僅かに2.2cmである。総じて、剥離の進行は顕著で、鉄釘の残存状態は悪い。

埋葬時期の推定 本墳では、開口部における板石の出土や、石室内に堆積した2~5層の様相から、複数次の埋葬の可能性を考慮しながら分層発掘を進めたが、埋葬は6層上面における1面のみと判断するに至った。加えて、石室出土の須恵器片と前庭部出土の須恵器片の接合関係が密で、乱掘による搔き出し、二次移動が想定されることや、器種構成、石室構造などから单体埋葬墳と結論付けた。

須恵器杯G身は、5を除いて平底傾向が認められるとともに、外底面はヘラ切り未調整に限定されるなど、粗略化が進んでいる。径高指数は平均値37がまさに6点の中間値と一致しており、年代的なまとまりが認められる。また、高台付の杯身は一切認められない。これらは、飛鳥II新段階の水落遺跡漏刻遺構に近い傾向が認められる。水落遺跡の資料については、重見泰氏の論考によれば、『日本書紀』にみられる齊明6年(660)の漏刻に關わるものであり、天智6年(667)の近江遷都によって廃絶したとして、660~667年の実年代が与えられている[重見2014]。この編年に従えば、本墳出土の須恵器類は、660~667年に近い年代の資料といえよう。高杯3点についても、同一時期とみて良いだろう。よつて、この年代をもつて、埋葬時期とみたい。

ところで、口縁部を打ち欠いた4に重ねて副葬された土師器杯1の性格をどう捉えるべきだろうか。1はかなりの優品であり、1と4の製作年代には数十年の開きがある。土師器1を被葬者の生前からの所有物とみ、出自や由来を伝えるためにあえて持ち込まれた副葬品とみれば、他の須恵器類よりも遡る年代のものであつても石室内に納められている理由は説明できよう。

また、他の須恵器類を葬送時の供献品と解釈すれば、矛盾は生じない。

(4) 16号墳と17号墳の関わり

16号墳と17号墳は、かつて八十塚古墳群の岩ヶ平支群中に設定されたG小支群を構成する〔第11集、森岡1979〕。ただし、灯籠池の開掘や六麓荘・岩園地区の都市整備に伴う道路敷設などによる古墳の損亡は想像に難くない。また、16号墳と17号墳では、墳丘の規模や構築方法、石室の構造や埋葬原理、被葬者の階層差や時期差など、時期の推移を伴う相違がみられる。しかし、同一小支群としてまとまる岩ヶ平支群第59・60・61号墳を例にとれば、それぞれに異なりを生じながらも、群内で最初期段階に築かれた59号墳を意識しながら、小型化した60・61号墳が築かれたと考えられたように〔第99・102集〕、16・17号墳についても、支群内での関係性を前提とした概要の整理を行っておく。

16号墳の特徴 本墳は、調査地北半部の南東端の標高83.0m付近の小尾根筋に立地する。墳丘の平面形は、東西12m、18mほどの楕円形と想定したが、周溝は伴わない。

主体部は、主軸をN15°Eに採り、南南西方向に開口する左片袖式の横穴式石室である。ただし、石室前面は崖錐となる急落面で、開口部は既に失われていた。左側壁残存長7.36m、右側壁残存長7.80mで、玄室は全長4.00m、奥壁幅1.46m、最大幅1.78m、玄門幅1.20m、羨道は残存長3.80m、最大幅1.3mを測る。石室残存高は奥壁部分で1.80m、玄室右側壁で2.10m、同左側壁で1.96m、羨道右側壁で1.60m、同左側壁で1.56mである。

玄室床面には敷石があるが、羨道には敷石は認められなかった。玄室内は乱掘によって敷石がかなり損なわれ、石室空間の埋没が進行する以前の遺物の破壊や搔き出しも認められた。しかし、石室内からは、土器(須恵器・土師器)と金属製品(耳環・馬具・鉄釘)が出土した。遺物の出土位置や状態、接合関係、帰属年代から、玄室内に2体、羨道部に1体以上の埋葬を考えた。初葬は右側壁寄り、入口側からは左棺となり、副葬品として馬具・耳環と須恵器を有していた。その時期は6世紀末頃で、馬具のセット関係は不分明ながらも、金銅装を含む。初葬からやや遅れて、二次埋葬がみられ、玄室左側壁寄りに、右棺が納められた。この被葬者は、耳環を有しており、副葬品には須恵器・土師器を伴っていた。その時期については、7世紀初頭と想定される。さらに、羨道部において、須恵器杯G蓋・杯G身のみを副葬する追葬が行われており、その年代は、650年前後と推定される。ただし、羨道部において、先行する埋葬が行われた可能性は十分に考えられ、最高4棺が納められたことも考え得る。

本墳は、石室の構造や規模、さらに初葬時と推定し

た土器類の年代観から、6世紀末に築造されたものといえる。また、初葬時の被葬者は、八十塚古墳群では珍しい金銅装の馬具のパーツを有しており、小支群經營の端緒を開くにふさわしい人物であったといえよう。

17号墳の特徴 本墳は、標高85.0~86.0m付近に立地する円墳で、16号墳の西隣の小低尾根の先端を占地しており、16号墳から約20m離れている。墳丘の平面形は、南北12.0m、東西8.0mを測る楕円形で、西から南にかけては谷状地形を生かして墳裾とし、東側には周溝を設けていた。なお、墳丘西側を中心に墳丘内列石がみられたほか、開口部列石も認められた。南方向に伸びる墓道も確認された。

主体部は、主軸をN45°Wに採り、南東方向に開口する無袖式石室で、開口部まで遺存していた。石室の規模は、右側壁長5.38m、左側壁長5.50m、奥壁幅1.14m、石室最大幅1.20m、開口部幅1.04mを測る。石室残存高は、奥壁で1.12m、右側壁で1.20m、左側壁で1.28mである。両側壁とともに、奥壁側と開口部側とでは積石方法に違いがあり、奥壁から下がってきたラインが開口部に向かって再び上昇する弧状ラインを描いている。

石室床面は土床で、土師器・須恵器の土器類と鉄釘が出土したほか、左側壁側の開口部テラス面から土師器が、前庭部から須恵器・土師器片が出土した。石室内は乱掘による遺物の搔き出しが認められたが、石室構造と遺物の帰属年代を勘案すると、単体埋葬墳と理解できる。前庭部にはその場で打割された須恵器横瓶が置かれていたほか、石室に副葬された須恵器は、660年前後の年代観で理解できるものである。被葬者の頭部付近からは、当該期の須恵器杯身に被せて、年代が遡るとみられる土師器杯が出土しており、注目した。土師器杯は、旧態を保った状態で出土しており、その下に置かれた須恵器杯身は口縁部が人為的に破碎されていたことからも、埋葬時に、この須恵器杯身と土師器杯がこのほか重視されて、棺内に配置されたものと捉える。

16号墳と17号墳の系譜の想定 17号墳の築造は、出土した須恵器をみる限り、660年前後である。石室構造もその年代と矛盾しない。

埋葬の時期をみると、17号墳の被葬者は、16号墳の羨道被葬者からさほど間をおかずには、新しい古墳を築いて葬られている。そのことは、須恵器杯G型式間の年代距離を表徵する微差といえる。ところで、17号墳の被葬者は、須恵器よりも製作年代の遅り得る土師器杯を伴っていた。丁寧なヘラミガキを施した光沢のある土師器は、あるいは16号墳の初葬者の埋葬時期に近いものかもしれない。この土師器は、17号墳の被葬者が16号墳の初葬者と、系譜的に繋がることの顯れとして、被葬者に近接して納められたものとみれば、16号墳・17号墳は、被葬者間の有機的なつながりの一端を象徴するものであろう。

4. 採石遺構と古墳状隆起

(1) 概観

本調査地の東側には、平成16年度に発掘調査を実施した徳川大坂城関連の採石場があり、岩ヶ平刻印群第84地点として登載されている(第11図)。当該地点では、急斜面を断割る谷や、各段・斜面における造成地において、大規模な石切丁場が検出されている〔第60集〕。この調査の過程で、周辺環境の確認のために踏査を行ったところ、山林状態であった本調査地には、採石土坑を伴う割石群(1・2号石材)の存在を確認した。加えて、16号墳の南に位置する小規模な谷状地形には、矢穴痕を持つ割石などの加工石材が分布していて、この谷筋は、第84地点で検出された大規模な谷丁場へと続くことが見込まれたことから、全体として長大な石曳き道と想定された。

本調査地内は、表面査察と確認調査によって、高位段丘面の段丘礫層中に含まれる転石化した花崗岩が多く露頭していることが明らかになり、まさに、巨礫を対象とした採石を行うのに適した場所であることが理解できる。また、確認調査によって、谷状地形に新たな割石の分布を確認したことから、矢穴痕を有する割石は6石(1~6号石材)を数えるに至った。この他にも、調査地内には、矢穴痕を持たない粗割石やCタイプの矢穴痕を持つ割石が点在している。このように、本調査地は、近世初頭における徳川大坂城築城時の採石丁場の展開に加えて、近世後半以降の採石活動の証左も残す地点であった(第14図)。

本節では、近世初頭の採石遺構として、端石や母岩などの関連石材・採石土坑・石曳き道・コッパ集積群などを取り上げる(第15・44~49図、巻頭図版3、図版6・7)。

調査地の北東部、16号墳の北側墳裾付近に位置する1・2号石材は、採石土坑を伴う。現況では、矢穴痕を有する1号石材の南東側に、直径3mほどのクレーター状の窪みがみられ、その窪みの北縁部に2号石材の上部が露出していた。3・4号石材は、調査地北半部の南東端に位置する谷状地形において確認されている。下部が表土下に埋没する状態であったが、確認調査時に、3号石材に接して6号石材も認められた。5号石材は、確認調査時に調査地中央部西寄りで見出したもので、下部が表土に埋まっていた。7号石材は、17号墳の南側墳裾付近に位置する。この石材に接するように谷状地形の土層を確認するためのトレンチ(「トレンチ4」)を探入したところ、Aタイプの矢穴痕を有することが判明したのである。したがって、本節で報告する矢穴技法を用いた割石は、合計7石である。

また、このような関連石材に加えて、17号墳の墳丘西側から南側の墳裾をかすめて調査地北半部南東端の低所へと続く、浅い谷状地形を、採石後の石材運搬に

伴う石曳き道と捉えてトレンチ調査を行った結果も記述する。

さらに、本調査地内で検出したコッパ集積群についても述べる。既往調査において、石を割る過程で頻繁に生じるコッパは、採石場の各所に散乱するのではなく、限られた範囲に集積する傾向が看取されており〔第31・60・61・63集など〕、採石活動に関わる遺構と認識できる。本調査地内でも、3ヶ所のコッパ集積群が検出されており、一つ目は、先述した16号墳の石室内へのコッパの投棄である。二つ目は、1・2号石材に伴う採石土坑北東部において、2号石材に接するように検出されたものである。三つ目は、17号墳の墳丘西部の緩傾斜面において確認されたものである。

なお、谷状地形東部の南側には、調査地南半に広がる灯籠池の北堤があり、堤に接するように古墳状隆起が2ヶ所認められた。これらについては、古墳の造営、採石に伴う地形変化、溜池に伴う築堤など、複数の土木工事に拠る遺構とみる余地があることから、2本の確認トレンチ(トレンチ1・2)を設定して、遺構の存否を確認した。(第45・50・51図)

以下に、各採石遺構や古墳状隆起、出土遺物などについて記す。

(2) 1・2号石材と採石土坑

調査地の北東部、16号墳の北側墳裾付近に位置し、活動面の標高は約83.0mである(第15図、図版6)。1・2号石材は、どちらも上面にAタイプの矢穴列痕が残る広い割面を持つ。調査前の現況では、1号石材は、直径3m、深さ0.5mほどのクレーター状を呈する窪みの西縁部にあって、窪みに割面を向けて東面する状態で立っていた。一方、2号石材は、窪みの北縁部、1号石材から北東に1mほどの至近地にあった。1号石材に背を向けるように割面を北側に向けていて、下部は表土下に埋まっていた。1号石材の割面は、ほぼ地表面に現れていて、縦2.3m、横3.8mを測る逆三角形であり、その大きさや形状から端石とわかる。クレーター状の窪みは、採石活動時の採石土坑の最終埋没状態であり、2号石材は、1号石材と同一母岩から割り取られた端石の一つと推測した。

それぞれの石材の大割面に並行する畦を設けて、1・2号石材の周辺を掘り下げたところ、1号石材に接する採石土坑よりも、2号石材の周囲はさらに深く掘り下げてあることがわかった。2号石材は単なる端石ではなく、高さ1.6mに達し、複数の矢穴列を有する加工中途材であることが明らかになった。さらに、2号石材の南東端下部に接するようにコッパ集積群が現れた(第44・46図、巻頭図版3、図版6)。

なお、採石土坑の底面において、サヌカイト製の石鏸(第52図)が出土したが、採石活動期の遺物や古墳時代の遺物はみられなかった。

1号石材 巨礫を母岩とする端石の残石である。割面は1つで、他の面は自然面で、円磨度はかなり高い。採石土坑に面する割面は、直立より約25°仰いだ状態で、その上端にはAタイプの矢穴痕17個が並んでいる。比較的平らな上面を打面として、矢穴列によって母岩から割り取られたことがわかる。

1号石材の厚さは1.3mほどあるようで、その最下端は腐植土（第46図2層）直下の明黄褐色小礫混じり砂質土（第46図7層）に貼り付いている。採石土坑は、直径5m弱、深さ約1.3mの略円形で、ベースは段丘礫層もしくは段丘礫層起源の再堆積土である7層である。その上に、層厚0.2mほどの2層が溜まっていたが、採掘当時の旧態をよく保っていた。1号石材直下よりも南東側の方が0.5mほど深くなることから、採石対象になった母岩の本体は、1号石材の南東側に位置していたと推測される。また、採石土坑の規模から、母岩は直径5mに近い巨礫であったと推測される。想定される母岩の規模と1号石材の形態から、母岩上面に平行する矢穴列を設けて調整石を複数割り出す平行割技法（第60集の分類によるI-2型）が用いられ、さらに回転技法によって調整石を得たことが推測できる。しかし、土坑の底に母岩の残材は残っておらず、割り取った築石や端石もすべて運び出されていて、利用価値の低い1号石材だけが残されたようである。

2号石材 2号石材は、1号石材から約1m離れた位置にあった。現況は、上端に12個のAタイプの矢穴痕が並ぶ割面が、直立するように表土上に露出していて、幅2.25m、高さ0.3m、厚さ0.8mであった。しかし、発掘を進めたところ、この割面は、横3.0mを超え、高さは0.9mになって、この割面と直交する、4列の矢穴列を有する水平位の新たな割面が現れた。結果として、2号石材は、幅3.3m、厚さ2.0m、高さ1.45m以上の母岩であることが明らかになった。また、2号石材の周囲には、石見や採石加工のために、石際を0.5m近く掘り込んだ様子が確認された。この部分には、段丘礫層起源の明黄褐色砂質土や黄褐色土（第46図3～5層）が流入堆積していた。

2号石材の下部は、段丘礫層とみられる明黄褐色小礫混じり砂質土（第46図7層）に埋没しており、原位置を保つ母岩とみて大過ない。自然面である石材上端から彫り込んだ矢穴列Aによる垂直面は下位に向かって貫徹せず、これに直交する水平面を作出するために側面に開けられた矢穴列B・Cによって、長さ約2.8m、幅0.5～1.0mの戴頭四角錐に近い築石用材が割り取られている。この石材の割り取りによって、2号石材の断面形は「L」字形を呈している。新たに生じた水平面に、長さ2.6mの石材を割り取るために、直交する2列の矢穴列（矢穴列D・E）を彫成している。しかし、そこで作業は中断して、2号石材は放置されたようである。

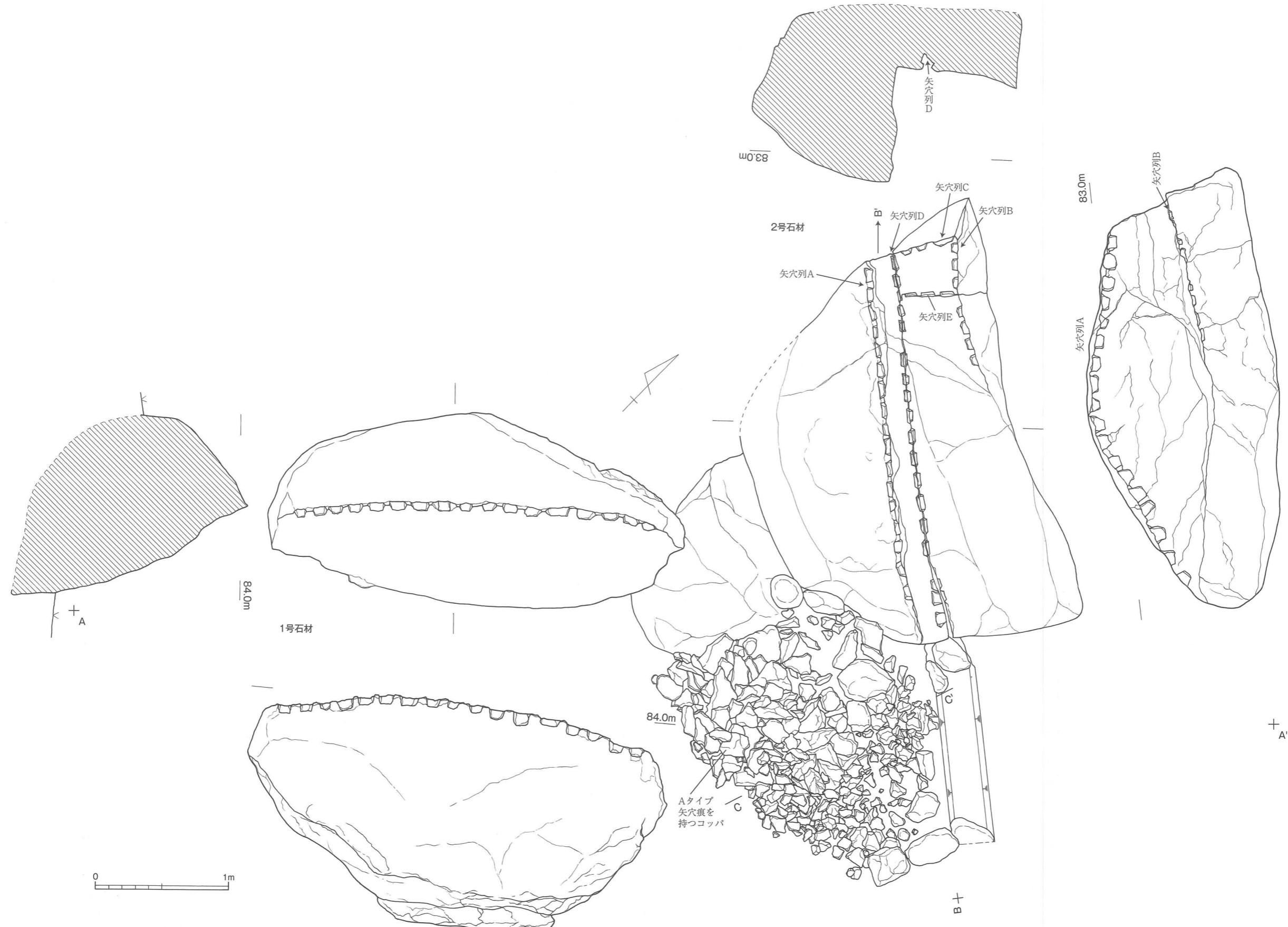
これら5つの矢穴列の矢穴はすべてAタイプで、断面形は台形であるが、矢穴底の角が丸みを持つ隅丸台形のものもみられる。矢穴列Aは、自然面である石の頂部から垂直に割面を形成するための18個の矢穴痕が残っている。水平に近い最上部のものはやや幅広で浅く、傾斜部に位置するものは深めで、打面に対して可能な限り垂直に彫り込もうとした意識が読み取れる。矢穴列B・Cは水平の割面によって石材を割り取るために設けたもので、矢穴列Bは石材の長軸（控え）に、矢穴列Cは短軸（尻）に穿たれたものである。ただし、矢穴列Bは、本来はもっと多くの矢穴が彫られたはずであるが、不慮の事態が発生して、水平面を意図しながらも、下方に大きく広がる歪な面となり、矢穴列Bには尻側から7個分の矢穴痕しか残っていなかつた。また、矢穴列Cには3個の矢穴痕がみられた。

矢穴列B・Cによって作られた割面に彫られた矢穴列D・Eは、矢穴列Aと並行して調整石を目指した石材の控えを割り出すための矢穴列Dと、それに直交して石尻を整えるための矢穴列Eである。矢穴列Dには19個の矢穴がみられ、矢穴列Eには、3個の矢穴があつて、ともに矢穴列底の部分に、割面となる亀裂が走っているが、割り取りに至らず、製材は失敗に終わった様子がうかがえる。

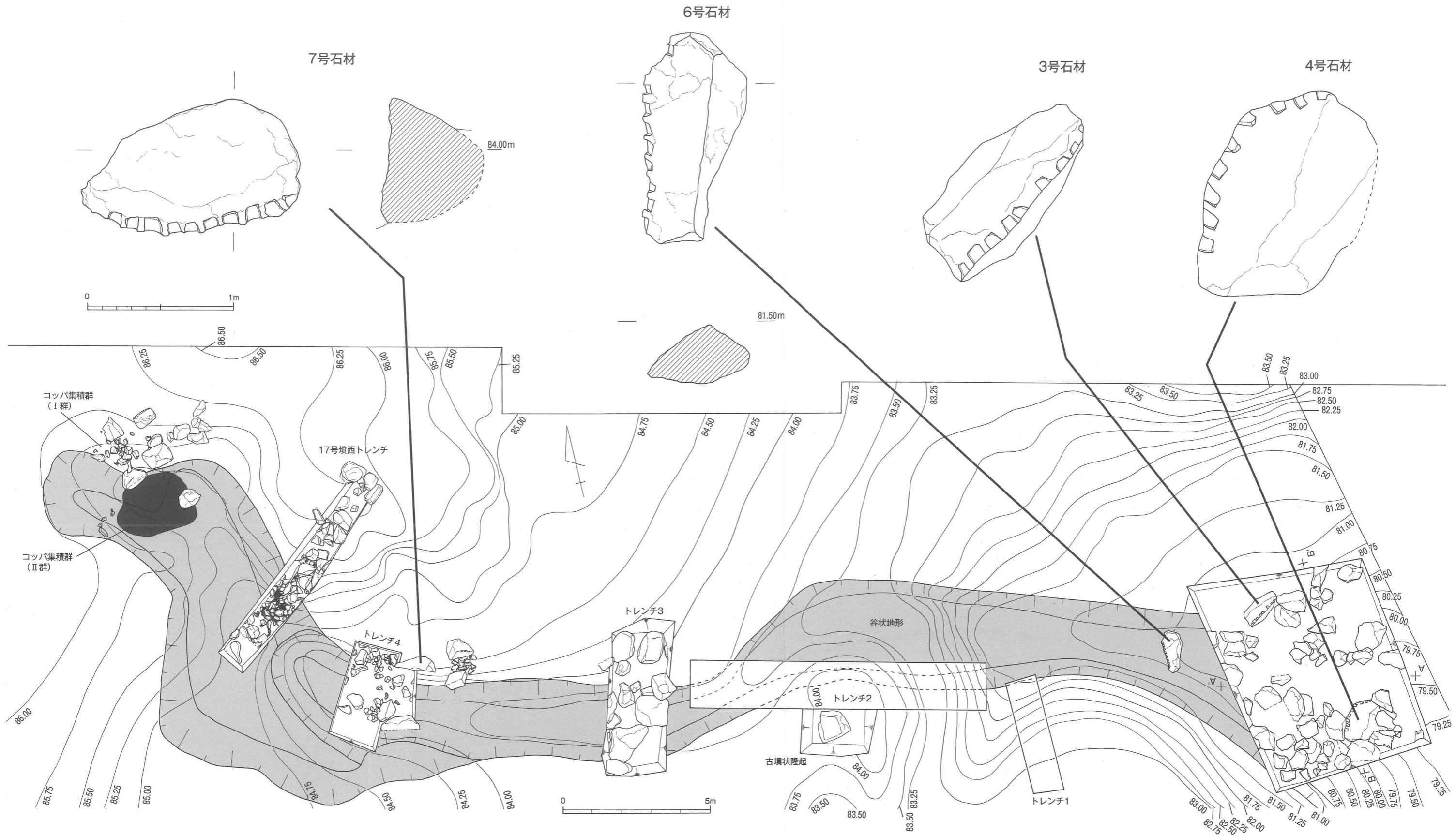
コッパ集積群 1号石材と2号石材の間には1.5m大の自然石があった。コッパの集積は、この石材と2号石材を西辺として、2号石材の南東端下部に接するように、南北約1.8m、東西約2.2mの範囲に、厚さ0.45mにわたって数層以上集積していた。コッパは、現表土直下で検出されており、0.1～0.4m大のものが密集していた中に、Aタイプの矢穴痕を持つものも含まれていた。コッパ集積群を断割って下位層の確認をしたところ、コッパの下には、2号石材に伴う掘り込みが広がっており、段丘礫層起源の明黄褐色砂質土や黄褐色土（第46図3～5層）が堆積した上に、コッパ集積群が乗っていることが明らかになった。したがって、このコッパの集積は、1号石材に関わる可能性が考えられる。

小結 以上のように、16号墳北裾部において、調整石を得るために石切丁場が存在していたことが明らかになった。1・2号石材はともに段丘礫層由来の自然礫を採石対象としたようで、割石加工の技法もおよその手順が推測できる。1号石材は、平行割り技法が用いられている。2号石材は、均等二分割技法を試みたのであろうが、割面が中位で止まってしまったために、側面からの矢穴列を設けて、豆腐を切り取るような方法が用いられたのであろう。

ところで、1・2号石材の西側には、地山から遊離した状態の花崗岩巨礫がまとめてみられた。その一方で、両割石よりも16号墳の墳丘寄りには花崗岩巨礫はみられなかった。また、1号石材と同一母岩から割



第44図 1・2号石材平面図および立面図・断面図 1/30



第45図 石曳き道・採石遺構平面図 1/125 割石平面図および立面図・断面図 1/25

り取られた調整石や他の端石、2号石材から割り取つた調整石などは現地に残されていないので、既に運び去られたことがわかる。自然礫が西側にまとまっているのは、石割や調整石の移動に邪魔になる石材を移動して作業スペースや石曳き道を確保したためであろう。また、石の曳き出しは、16号墳の西側墳裾を経て、16・17号墳の南側に位置する石曳き道を目指したと推測される。

(3) 3~7号石材と石曳き道

調査地北半部には、17号墳の墳丘西部から南部を迂回するように周り、調査地北半部南東端に向かって西から東へ伸びてから、16号墳のすぐ南側でやや南向きに方向を変える小規模な谷状地形がある。3・4・6・7号石材は、この谷状地形に沿って確認されたものである（第14・45・48図、巻頭図版3、図版7）。一方、5号石材は、確認調査時に、調査地中央部西寄りの緩斜面で確認した石材である（第47図、図版7）。

谷状地形については、前節で述べたように、17号墳の西側墳裾を明らかに切り込んでいる様子や、割石の点在など、本来は自然地形によるものであろうが、採石時には石曳き道として活用されたと推測して、調査を行った。17号墳の西トレントに加えて、2ヶ所にトレント（「トレント3」「トレント4」）を探入し、さらに3・4号石材周辺の調査区でも土層観察を行って、石曳き道の可能性やその構造を観察した。個々の割石については、周辺を掘り下げて、法量の確認や現存状況、性格などを追究した。谷状地形に関わる割石の位置関係や調査区の設定は、以下の通りである。

3号石材は、16号墳の石室南端から開口部方向（方角では南南西）に6.5m離れていて、標高80.5m付近にみられた。4号石材も16号墳の南側で確認された石材である。3号石材から南南東方向に5.0m離れていて、谷状地形をさらに南に下った標高79.5m付近にあった。この2石の周辺では、花崗岩巨礫が多くみられることから、他にも矢穴痕を有する割石や矢穴石の遺存も充分推測できた。また、コンタの動きからも谷状地形が南に向きを変える様子が推測されたので、この2石の周辺に、南北7.5m、東西5.5mの略方形の調査区を設定し、十文字に畦を設けて掘削した。南北方向の畦は、4号石材に架かっている。6号石材は、3・4号石材周辺の調査区から西へ1.0mの標高81.0m付近で確認したものである。7号石材は、3・4・6号石材から西に25m以上離れていて、17号墳の墳丘南裾付近の標高84.5m付近に位置する。

3号石材 3号石材は、確認調査時に、16号墳前面の崖状の急落面下の緩斜面において確認したもので、谷状地形の北肩部に位置している。略長方形の割面が上を向いていて、長軸約1.4m、短軸約0.6m、厚さ約0.6~1.0mである。矢穴列痕は一方向からの一列で、9

個の矢穴痕が残る。矢穴型式は、再定義されたAタイプ〔森岡・藤川2008〕である。石材下端が表土内に収まっているので、3号石材の下に入り込んでいる割石にCタイプの矢穴痕が認められるので、江戸時代初期の採石活動後に二次的移動が加わったことがわかる。なお、本来の母岩は、16号墳の天井石など、石室構築材であった可能性は多分にあるだろう。

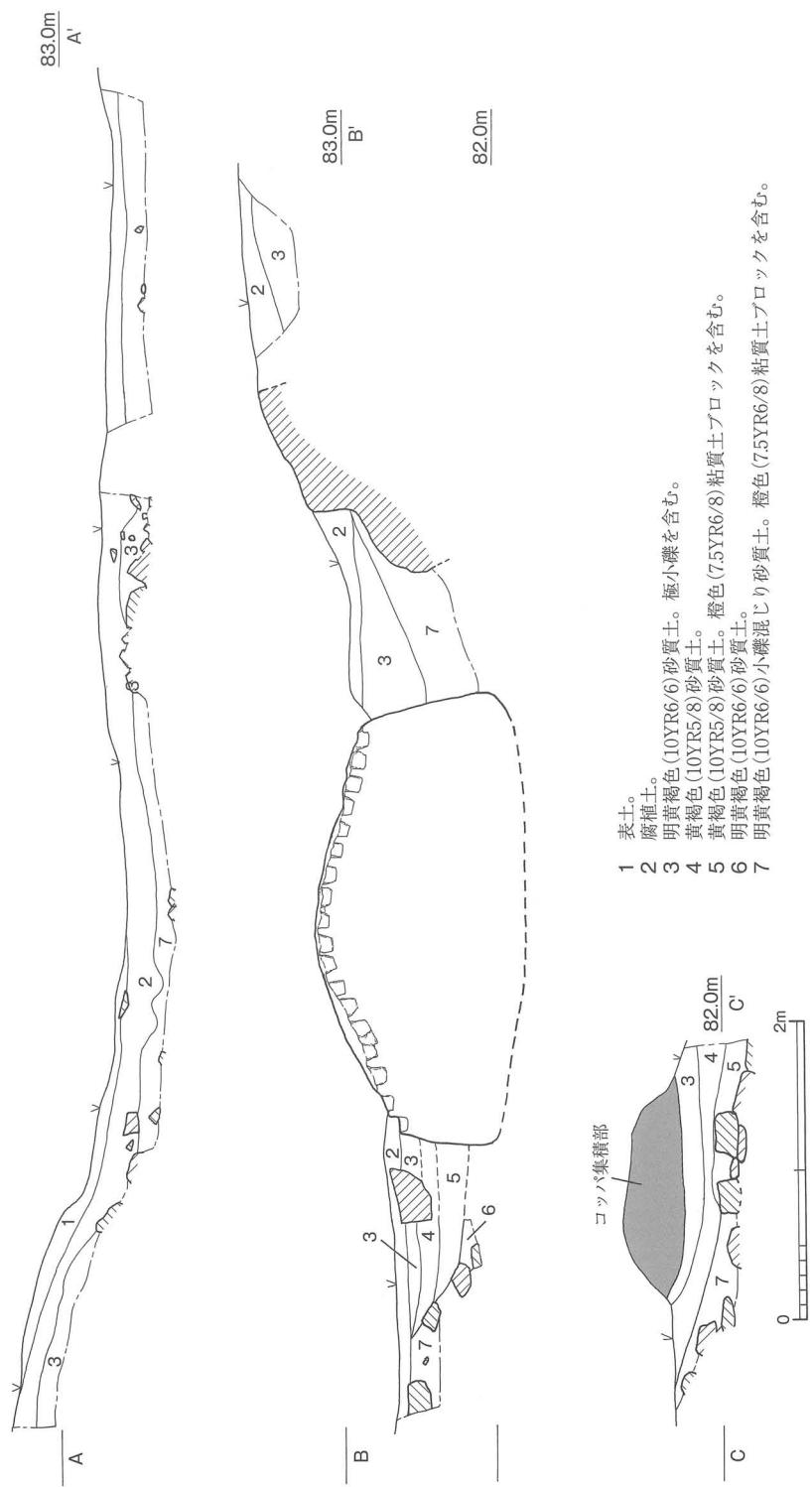
4号石材 16号墳前面の崖状の急落面下の緩斜面が南に回り込む位置で確認したもので、Aタイプの矢穴痕を持つ割面の一部が地表面に見えていた。谷状地形内に落ち込んだ転石のようにみえたが、下部がにぶい黄褐色礫混じり細砂（第48図谷状地形3層）より下の地山に埋没しているので、地山から露頭している花崗岩巨礫から調整石を割り取った残りの端石であることが明らかになった。割面は長軸1.6m、短軸1.2mで、厚さは約0.8mを超える。矢穴列は1列で、Aタイプの矢穴痕9個が並んでいた。

5号石材 確認調査時に、調査地中央部西寄りの緩斜面で確認した石材である。矢穴痕を有する割面が地表面に現れていて、下部は表土に埋まっていた。Aタイプの矢穴痕5個を有する割面の平面形は略方形で、長軸約1.0m、短軸約0.9m、厚さ約0.3mの端石である。十文字に畦を残して掘削したところ、石材下部にも腐植土の混じるにぶい黄褐色砂質土（第47図1層）が入り込んでいることから、原位置を保っていないことが明らかになった。周辺には、割石や母岩となり得る巨礫を伴わないことから、二次的移動が考えられる。

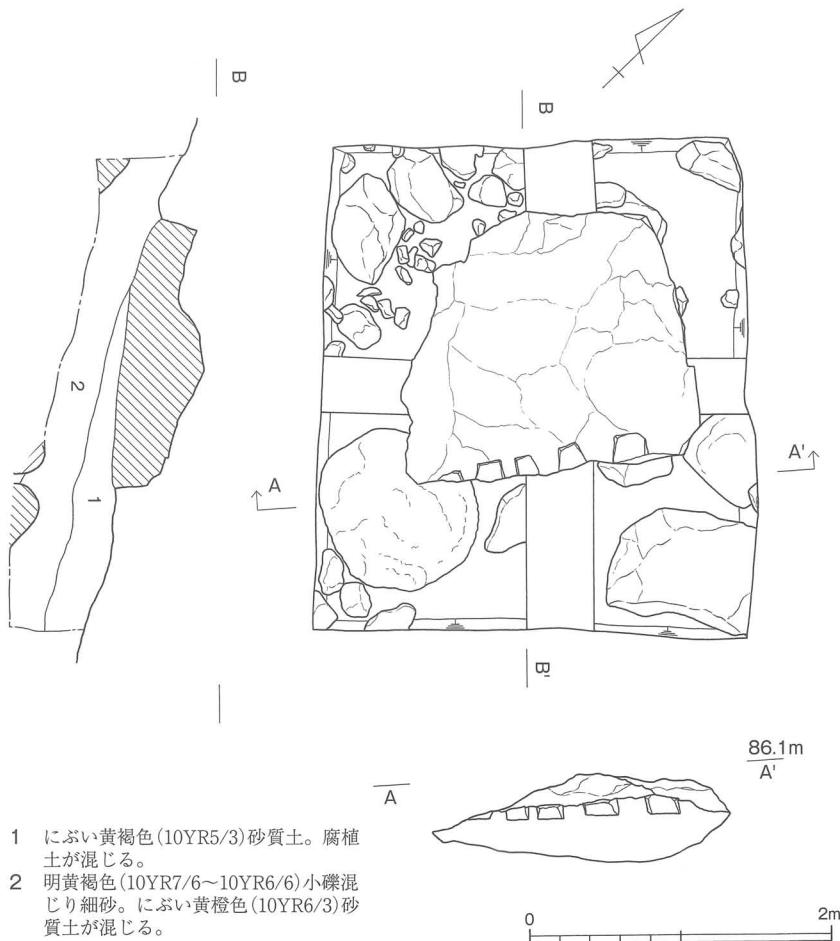
6号石材 6号石材は、3号石材に近接する位置に、僅かに下部が表土に埋もれる状態で確認されたもので、谷状地形内にみられた転石である。上面にAタイプの矢穴痕を9個持つ。最も北寄りの矢穴痕と2番目の矢穴痕が25cmほど離れているが、この位置にも本来は矢穴が穿たれていたのだろう。割面は長軸1.5m、短軸0.7mの略長方形で、断面形は三角形の端石である。

7号石材 7号石材は、17号墳の南墳裾で、谷状地形の北側肩部に位置している。周辺にはCタイプの矢穴痕を持つ割石や、少量ながらコッパの分布がみられた。7号石材を北端にしてトレント4を掘削したところ、ほぼ直立する長軸1.5m、短軸0.85mの割面の下端にAタイプの矢穴痕が10個密に並んでいた。石材の厚みは0.6m程度であろうか。明らかに矢穴の天地が逆転しており、石曳き道とみられる溝状の掘り込みの埋土である褐色礫混じり砂質土～細砂（第48図トレント4-3層）に下部が埋没していることから、採石時に放置された端石である。周辺には近世後期以降の採石活動が推測されることを考えると、採石時だけでなく近世後期以降の移動も考えられよう。

石曳き道 古墳の調査と並行して調査を進めた結果、採石活動の構成要素となる石曳き道を検出した。その可能性を考えた谷状地形の肩部レベルは、17号墳の墳



第46図 1・2号石材土層断面図 1/50



第47図 5号石材平面図および立面図・断面図 1/25

丘北西部側で標高約86.0m、17号墳の墳丘南側で84.0~84.5m、調査区の東端で80.0~81.0mに下る。その幅は2.5~4.2m、深さは1.5m程度である。谷状地形に設定したトレンチは、17号墳西トレンチを延長したものと、トレンチ3・4である。また、3・4号石材周辺の調査区でも、谷状地形の傾斜や堆積土を観察した。

17号墳西トレンチでは、墳裾を切る幅2.5m、深さ1.0mほどの溝状の掘り込みがみられ、にぶい黄橙色や黄褐色砂質土~細砂を基調とする埋土(第33図18~22層)が堆積していた。底面には地山起源の自然礫が露出していたが、貼石や置石といった石材運搬用の施設は認められなかった。また、明瞭な旧地表面や腐植土の形成も見出せなかったことから、限定的な期間の使用とみられ、掘削からさほど間を置かずに、自然堆積が進んだものと思われる。

トレンチ4では、幅約2.8m、深さ約0.6mの逆台形の溝状の掘り込みがあり、最下部には水成層ともみえる灰黄褐色砂質土(第48図トレンチ4-4層)が水平堆積した上に、褐色礫混じり細砂や砂質土が17号墳側から流入堆積していた(第48図トレンチ4-2・3層)。底面における人的な施設や腐植土等がみられない状況は、17号墳西トレンチと一致する。

トレンチ3では、表土直下において地山に包蔵され

ている大量の花崗岩礫が検出されたが、明確な掘り込みは確認できなかった。

3・4号石材周辺の調査区では、西から東へ、北から南へと下る傾斜がみられた。表土と段丘礫層の間には、明黄褐色礫混じり砂質土(第48図谷状地形2層)とにぶい黄褐色礫混じり細砂(第48図谷状地形3層)が斜面堆積している。トレンチ3と同様に、明確な溝状の人工的な掘り込みは認められず、石曳き道としての加工は不十分である。また、4号石材のように、地山に一部が埋没したままの端石が残るほか、3・6号石材やその他にも多くの割石が点在している様子から、この調査区が石切丁場として使われたことは明らかである。石曳き道として使われた直接的な証左は得られなかったものの、その蓋然性は高いだろう。

ただし、谷状地形の現状は、17号墳の墳裾から東へほぼ直進しているが、トレンチ3より西

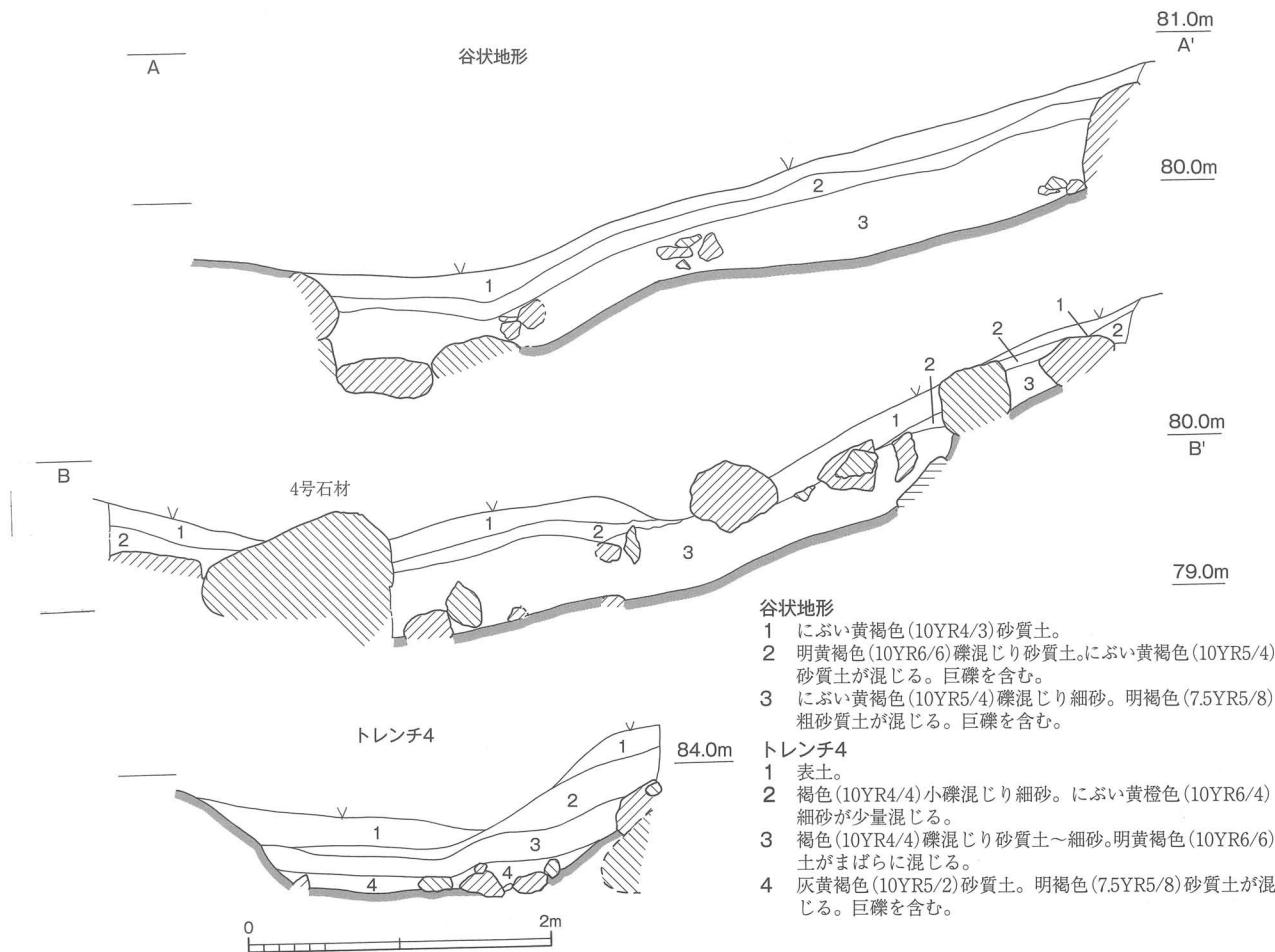
側で南に折れて、古墳状隆起や灯籠池の方向に伸びていたという考え方を示しておきたい。石材の搬出は、全国各地の類例からみて、地形が低くなると、枝道のような分岐がみられるからである。

なお、この調査区では、表採や表土中から出土した古墳時代の須恵器片が6点確認されていて、16号墳や既に失われた古墳に由来する遺物と考えられる(第53図3~8)。

小結 西から東に向かって下ってくる調査地北半部南東の谷状地形は、長さ約50mが検出されていて、調査地内の比高は約8mである。そのうち、17号墳の墳裾付近には、石曳き道の痕跡が見出せたが、それより東部については、明確な遺構としては捉えられず、灯籠池の掘削や堤の造成によって、石曳き道が既に失われていることも考えられる。ところで、西側については現状地形から読み取ることはできないが、確認調査時に、調査区西部の4トレンチや9トレンチ(第10図)において、埋没谷の兆候が認められたので、さらに西側に伸びていた可能性は考えてよい。

(4) コッパ集積群

本調査地内で確認されたコッパ集積群のうち、16号墳の石室内の1群は11頁・第21図で、1・2号石材の



第48図 採石遺構土層断面図 1 / 50

採石土坑に伴うコッパ集積群は44頁・第44図で述べたので、ここでは、17号墳の墳丘西半域において確認された集積群について述べる（第49図、図版7）。

コッパ集積群は、小谷状地形に向かって南南東方向に下る斜面に位置している。標高85.75m付近のグループ（I群）と標高85.50m付近のグループ（II群）の2つに分かれる（第45・49図、図版7）。I群は、0.8～1.0m大の自然礫・割石に囲まれるように、0.2～0.4m大のコッパが、1m四方の範囲にまとまっていた。II群は、I群から0.7mほど下った位置に当たり、0.05～0.25m大のコッパが、約2.5m四方の範囲に広がっていた。中には、Aタイプの矢穴痕を残すコッパも含まれていた。この部分に畦を残して掘削したところ、にぶい黄橙色砂質土と明黄褐色細砂が混じり合う（第49図1層（以下、コッパ集積群の土層については第49図に拠る。）上に多くのコッパが堆積していたが、その下位には、にぶい黄褐色礫混じり細砂と褐色細砂が混じり合う3層と、にぶい黄褐色礫混じり細砂の4層を埋土とする、深さ約0.4mの浅い土坑状の窪みがあり、この窪みの下位にもコッパが検出された。

これらのコッパ群は、17号墳の墳丘斜面において割石加工を行った痕跡であり、ある程度の選別を加えて、

大きめのコッパは上位にまとめて、小振りのコッパを土坑状の窪みに向かって遺棄したものであろう。また、II群のコッパ集積群の活動面（遺構ベース）が複数あることは、時差のみられる割石加工が複数回行われたことを示唆しているものと考える。

ところで、発掘調査によって、石切丁場跡でのコッパ集積群の検出が相次いでいる。まだ類例の乏しかった平成5年度段階の奥山刻印群K地区における毛利藩の石切丁場の調査段階では、工人の墓の推測もみられた〔第31集〕。その後、類例が増えるにつれて、石割りの工程で生じたコッパは、意識的に一ヶ所にまとめられたり、礫敷き面を作るように敷きつめられたりしている事例が10数例に達している。

このような事例から、石切丁場における製材品管理と共に、各種の廃材についても、処理や再利用に関して、一定の規範があったことが推察される。もちろん、コッパの再利用についてはいくつもの目的が考えられようが、その第一の意義は、放置したコッパによる足元の危険回避などのための片付けであろう。

本調査地内でみられた3ヶ所のコッパ集積群は、いずれも、安全確保のための片づけの色彩が濃い。また、16号墳の石室内への投棄は、石室利用の一類型として



第49図 コッパ集積部平面図・土層断面図 1/25

理解しておきたい。

(5) 古墳状隆起

灯籠池の北堤に接するように、古墳状隆起が2ヶ所認められた（第45・50・51図）。これらについては、古墳・採石に伴う地形改變・溜池に伴う堤といった多様な性格が類推できたので、その性格を明らかにすべく、確認トレンチ2本（「トレンチ1」・「トレンチ2」）を設けて掘削した。南側のトレンチがトレンチ1、北側のトレンチがトレンチ2である。

トレンチ1 16号墳から南西方向に約10m離れた位置に、直径10m、比高約2mの古墳状隆起があった。この高まりに設けた幅1m、長さ4mのトレンチが、

トレンチ1である。腐植土を基調とする褐色土と、花崗岩の風化した真砂を交互に斜めに搔き上げた状態が確認されたことから、灯籠池の堤を設ける際の盛土と判明した。なお、遺物は出土しなかった。

トレンチ2 トレンチ1を設けた古墳状隆起の西側にも、古墳状隆起があった。規模は直径10m、比高約2mと変わらないが、平面形はより整った円形を呈していた。この高まりに幅1m、長7mのトレンチを設けて掘削したところ、現地表下0.7~0.9mのトレンチの南寄りの位置に、花崗岩の板石が検出された。この板石の上面はほぼ水平で、その上に、地山起源とみられる明黄褐色砂質土やにぶい黄褐色砂質土の水平堆積がみられたため、埋没古墳の天井石の可能性が考えら



第50図 古墳状隆起と第16号墳（現地説明会）



第51図 古墳状隆起（トレンチ2）土層断面（北から）

れた。そのため、トレントの幅を2.5mに拡幅したところ、板石は1辺1m程度で、厚さは0.3mであることが明らかになったが、その性格は不明のままであった。そこで、直交する幅1.6m、長さ10mのトレントを追加掘削した。

その結果、この平石より西側は、明黄褐色の砂質土が僅かに西から東に下がる斜面堆積で、段丘礫層や段丘礫層の再堆積層と考えられる、安定した堆積状況を呈している。一方、平石の西端下には、西側の土層を切る比高1.5mの崖面があって、その最下部に腐植土層が堆積していた。この腐植土層を埋めるように、にぶい黄橙色を基調とする砂質土や礫混じり砂質土が高さ0.9~1.2mまで斜めに盛り上げられていて、その頂部に平石が置かれていた。この盛土中からは古墳時代後期の須恵器杯G蓋片（第53図2）が出土している。

トレント2で確認した盛土層は、トレント1より土を精選して細かい単位で盛り上げるなど、丁寧な盛土工法を探っているが、古墳とは考え難く、その性格を特定するにはいたらなかった。

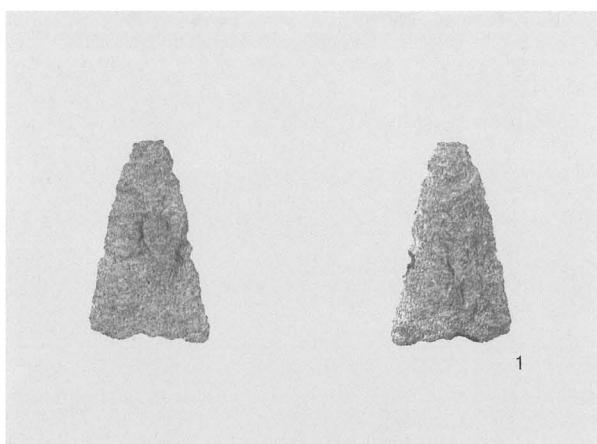
（6）出土遺物

ここでは、1・2号石材に伴う採石土坑床面から出土した石鎌（第52図）と、トレント2から出土した須恵器片（第53図2）、3・4号石材周辺の調査区における表採ないし表土中出土の須恵器片について述べる（第53図3~8）。

石鎌は、長さ2.7cm、幅1.6cm、厚さ0.45cm、重さ1.3gを測る。平基式のサヌカイト製石鎌である。

須恵器は、いずれも古墳時代後期のもので、古墳から流出したものといえる。

2は、灰色を呈する杯G蓋である。天井部を欠損していて、つまみは残っていない。3は杯H蓋の口縁部小片、4は無蓋高杯の杯部で、明瞭な沈線を有する。器面が黒光りする5は、高杯の杯部で、凹線が巡る。6~8は、甕の体部片である。6は焼成状態が良く、外面は黒光りするが、自然釉が剥離した部分は、光沢がない灰色を呈する。7は焼成が良く、一部に自



第52図 採石遺構出土石鎌

然釉がかかるが、器面は光沢のない淡灰色である。8は、淡灰色に発色する。

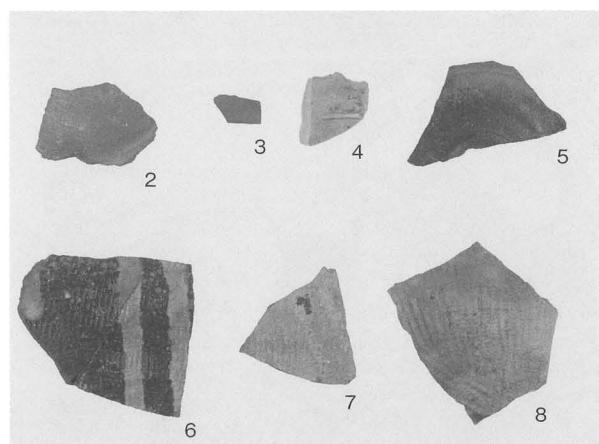
（7）石切丁場の形態について

本調査地内では、近世初頭の採石遺構として、関連石材7石と採石土坑、石曳き道、コッパ集積群など、特徴的な遺構を検出できた。このうち、採石土坑を伴う1・2号石材と、谷状地形内で確認した4号石材については、採石丁場そのものの様態が垣間見える。

徳川大坂城東六甲採石場の丁場については、「谷占有型」「点在型」「作業面造成型」「沢占有型」「尾根占有型」の5類型に分類される〔森岡2005、第61集〕。このうち、谷占有型は谷地形の斜面底から脇斜面、沢占有型は流水のみられる浅い沢、尾根占有型は高位の尾根上と、丁場の立地する地形が絶対視される。これに対して、点在型と作業面造成型では、前者は採石対象となる巨礫と割り取り作業のための足場・広さが確保できる状態であれば、とくに地形に因る規制はない。また、後者は採石対象となる石材に近接して作業面を造成する条件が整えば、地形による制約は少ない。

1・2号石材は、至近距離で確認されたが、母岩を異にする別々の丁場であって、たまたま小規模点在型の丁場が近接しているに過ぎない。また、4号石材は、谷状地形の斜面に位置しているが、谷状地形の窪みが小規模で、谷占有型に含めることはできない。つまり、これら3個の石材は、いずれも点在型丁場である。

ただし、一口に点在型丁場といっても相違点はある。1・2号石材は、採石対象となり得ない周辺の石材を除去して平坦な作業スペースを確保しており、明確な棚田状の造成は伴わないものの、作業面造成型に通ずる作業工程が存在している。4号石材についてみると、母岩から割り取った加工石材の調製は、傾斜地であることを生かして、石材を回転させながら滑り下ろすことで石材の向きを変えて不要部分を割り取ったことが推測できる。このように、点在型丁場については、立地を視野に入れた細分化を行うことで、より作業工程の具体化、詳細化が行える可能性がある。



第53図 採石遺構等出土須恵器

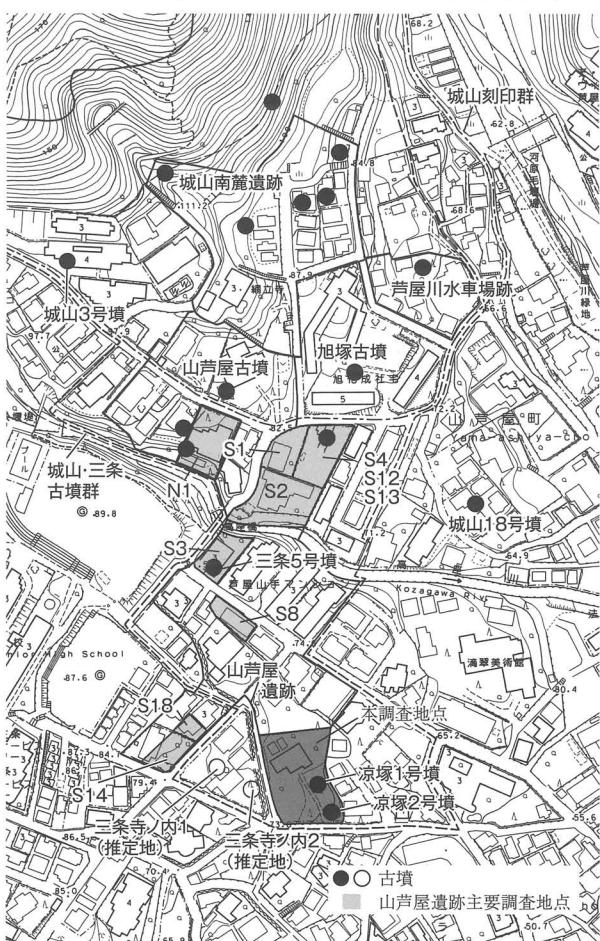
第3章 城山・三条古墳群第118地点の調査

第1節 調査の経緯・経過と方法

1. 調査に至る経緯

兵庫県芦屋市山芦屋町65-4、65-14に所在する当該地（敷地面積約2,700m²）は、斜面地形を生かした邸宅で、広大な庭園に2基の石室（涼塚1号墳・2号墳）が存在していることが知られていた〔第5集、森岡1984〕。また、周知の埋蔵文化財である城山・三条古墳群の範囲に入っており、山芦屋遺跡に隣接していることから、未知の古墳や縄文時代～平安時代にかけての遺構の広がりが予測できる地点であった（第54図）。

当該地において、地上4階地下1階鉄筋コンクリート造共同住宅の建築工事の計画が進捗し、本市教育委員会に埋蔵文化財の有無やその内容についての照会があつた。しかし、長らく分布調査などが行われておらず、涼塚1号墳（以下、「1号墳」と記述。）・涼塚2号墳（以下、「2号墳」と記述。）などの現状が不明であつたことから、平成26年（2014）6月11日に、本市教育委員会生涯学習課係長竹村忠洋（学芸員）ならびに同課嘱託（学芸員）白谷朋世、同課嘱託西岡崇代が現状



第54図 調査地位置図 1/5000

確認を目的とする立ち入り調査を行ったところ、①周知の石室2基の所在は不明であること、②庭園部分は大規模に旧地形が改変されているが、元和・寛永期の矢穴痕をもつ割加工石材2石が池辺の庭石として再利用されていることが確認された（第55図）。

平成26年（2014）6月16日に文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘届出書が提出された。これを受けて、7月4日～15日に竹村・白谷・西岡を担当として、石室の所在を追求し、他の包含層や遺構の有無を探る確認調査（トレンチ5ヶ所。調査面積20.06m²）を実施した（第56図）。その結果、1号墳・2号墳と推測できる石室2基と、東六甲採石場に伴う刻印石1石と矢穴石1石の所在を確認した。加えて、近代における庭園造成時の盛土が80～130cmに達することが明らかになった。

本市教育委員会では、工事によって1号墳・2号墳や矢穴石などの採石遺構の破壊が避けられないことから、記録保存を目的とする発掘調査を実施することとした。

2. 調査の経過

発掘調査は平成26年（2014）年10月1日～同年12月12日（実働46日）を行い、調査面積は約800m²となった。

10月1日に調査地内の伐採を開始し、翌2日に機材を搬入した。3日には基準杭を打設し、8日に調査区を設定した。10日から、遺構の掘削に着手した。調査は1・2号墳と各種石材を並行して進めた。11月6日には、1・2号墳の石室の写真測量を行った。掘削・図面作成・写真撮影を繰り返し、11月21日から2号墳の、26日から1号墳の解体に取り掛かった。掘削や図面作成の作業は12月3日に完了し、その後、石室埋土の水洗を行って、12日に現場を撤収した。

その後、引き続いて、図面や遺物の整理、発掘調査報告書の作成を行った。



第55図 確認調査時の調査地現況

3. 発掘調査の方法

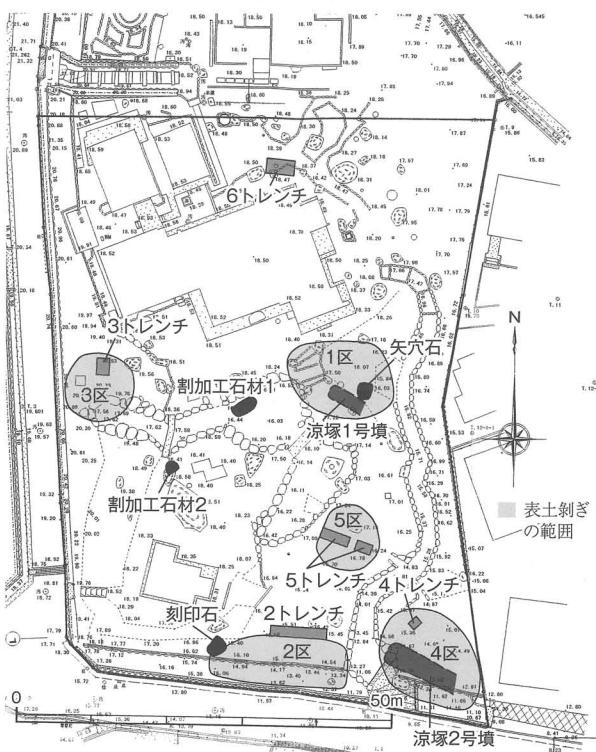
確認調査で確認した1・2号墳、矢穴石や刻印石などの採石関連石材に加えて、発掘調査時に新たに確認した礎石を対象として、調査区の割り付けと、基準杭の設置を行った。個々の調査区の主軸は、遺構を基準として設定したので、調査区それぞれに方向が異なる。1号墳では石室主軸を基準として、調査区全域に延長するとともに、同調査区に位置する矢穴石についても、畦を設けて、地山まで掘削した。2号墳は、石室の平面形が歪だったので、便宜上、仮の主軸を設定して畦の設定や断ち割りを行った。割加工石材1は、周辺の表土をすべて除去して、石材を実測した。割加工石材2、刻印石、礎石は、十文字に畦を設定して、掘削、精査や図面作成を行った。

なお、進入路が確保できないことから重機は使用できなかったので、表土掘削をはじめとする掘削はすべて人力で行った。加えて、古墳の石室解体、巨石の掘削も、人力で行った。

遺構の平面の測量、図化は、一部写真測量を導入したが、多くは平板測量及び手描きにて行った。土層の色調注記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄、1994)を使用した。

全景写真撮影は足場3段より行った。写真撮影は、デジタルカメラ、35mmフィルムカメラを用い、フィルムはリバーサル、カラーフィルムを併用した。主要な全景写真は6×7判カメラも使用した。

なお、遺構等の埋め戻しは行わなかった。



第56図 確認調査トレンチ配置図 1/800

第2節 発掘調査の成果

本調査地は、六甲山地前山南麓の北西から伸びてきた丘陵の先端にあって、前面には段丘崖が走り、地形が急激に変換する。調査地北寄りには、昭和時代からの既存建物があり、その南側には宏荘な庭園が広がっていた。庭園部分は、池の掘削や築山の造営などによって、起伏に富む地表面の変化は大きい。しかし、調査地の現況は、本来の地形を比較的残し、北西側が高く、南東側への下降をみせている。また、庭園内には花崗岩巨礎が点在しており、本調査地が、石室造営や採石活動に適する場所であった往時の様子が見て取れる。

今回の発掘調査によって検出した遺構を概括すると、2基の石室（涼塚1・2号墳）と採石関連石材である。さらに、他所から持ち込まれた可能性の高い石造物や奈良時代に遡り得る礎石も確認されたので、併せて紹介する。採石関連石材は、矢穴石1石、刻印石1石、割加工石材2石があり、中世段階の矢穴列痕が認められた1号墳の天井石も取り上げる。

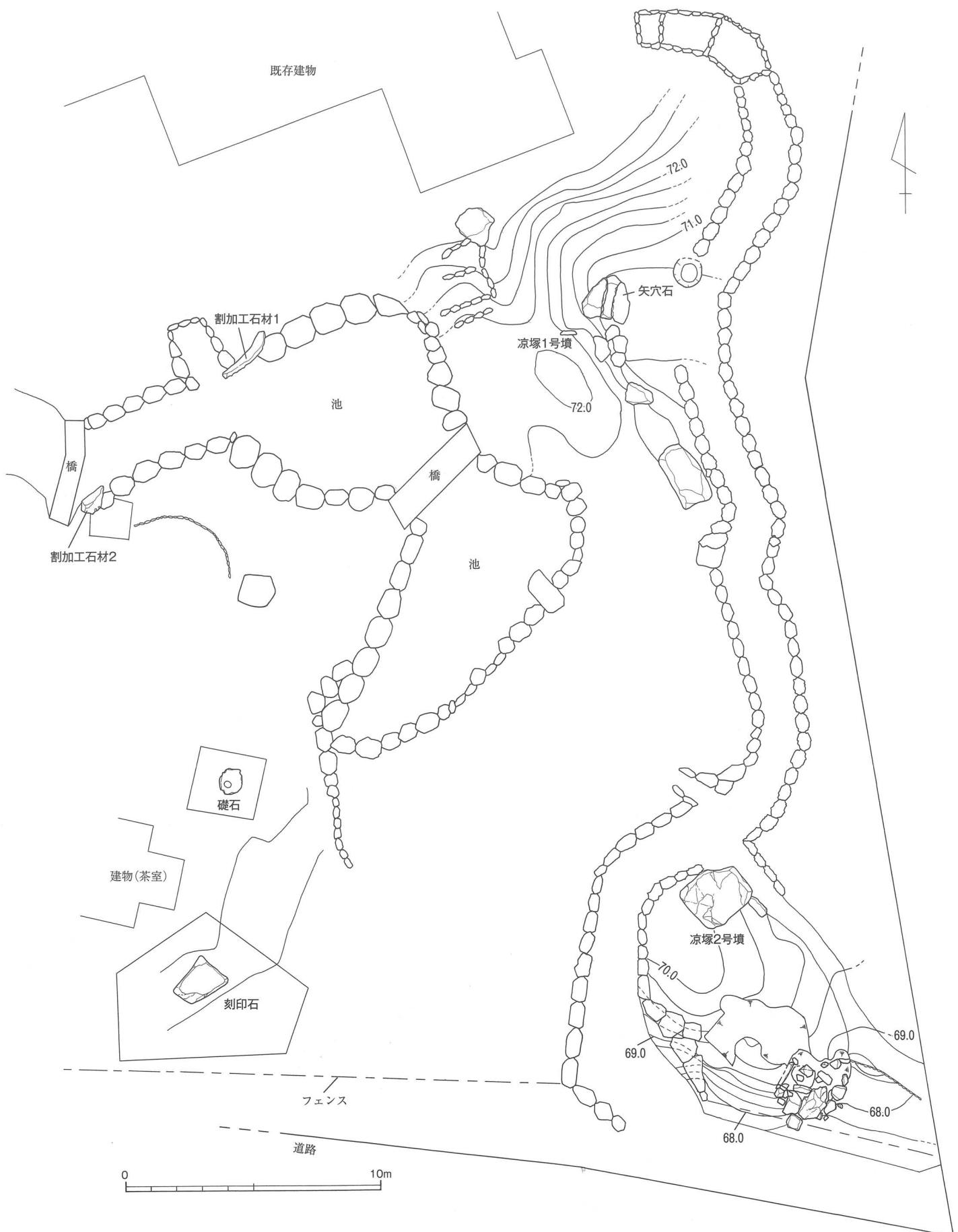
調査の主要対象とした1号墳は調査地北東部に、2号墳は調査地南東端に位置する。両者の墳間距離は30mである。矢穴石は、1号墳に北接するように検出された。割加工石材2石は調査地西側の池護岸石に、刻印石は調査地南西端の茶室前の景石にそれぞれ転用されていた。また、礎石は茶室の北東側に手水鉢として埋め置かれていて、二次的に造園と関わるものである。

以下、本節では、1号墳、2号墳、採石関連石材、礎石の順に記述した後に、調査地全体から出土した遺物について記述する。

1. 涼塚1号墳

本遺跡の周知は、昭和42年（1967）に遡る〔第5集〕。埋蔵文化時包蔵地としての扱いを早く示し、「S-2玄室のみほぼ完存」と記録されている。しかし、平成26年（2014）6月11日の立ち入り調査の段階では、その位置を確認することができなかった。このため、7月4日～15日の確認調査では、第5集や45年前の森岡の記録に基づく記述〔森岡1984〕を参考にしつつ、既存建物の玄関前面（第56図1区）の表土の除去を行って、その位置の特定を図った。その結果、玄関から門へと向かう階段を下りた東側の緩斜面において、石室の開口部が確認され、その所在が漸く明らかになった。加えて、開口部のすぐ北側には未知の矢穴石が位置するほか、墳丘上や斜面部分などに石製灯籠の部材が点在することも判明した。石室内部には土砂の流入はなく、幅約1m、高さ約1m、長さ2m余りの石室の奥に青銅製香炉（第76図）が納められていることから、余人によってある時期には「塚」と認識され、何らかの供養が行われていた様子がうかがえたことは興味深い。

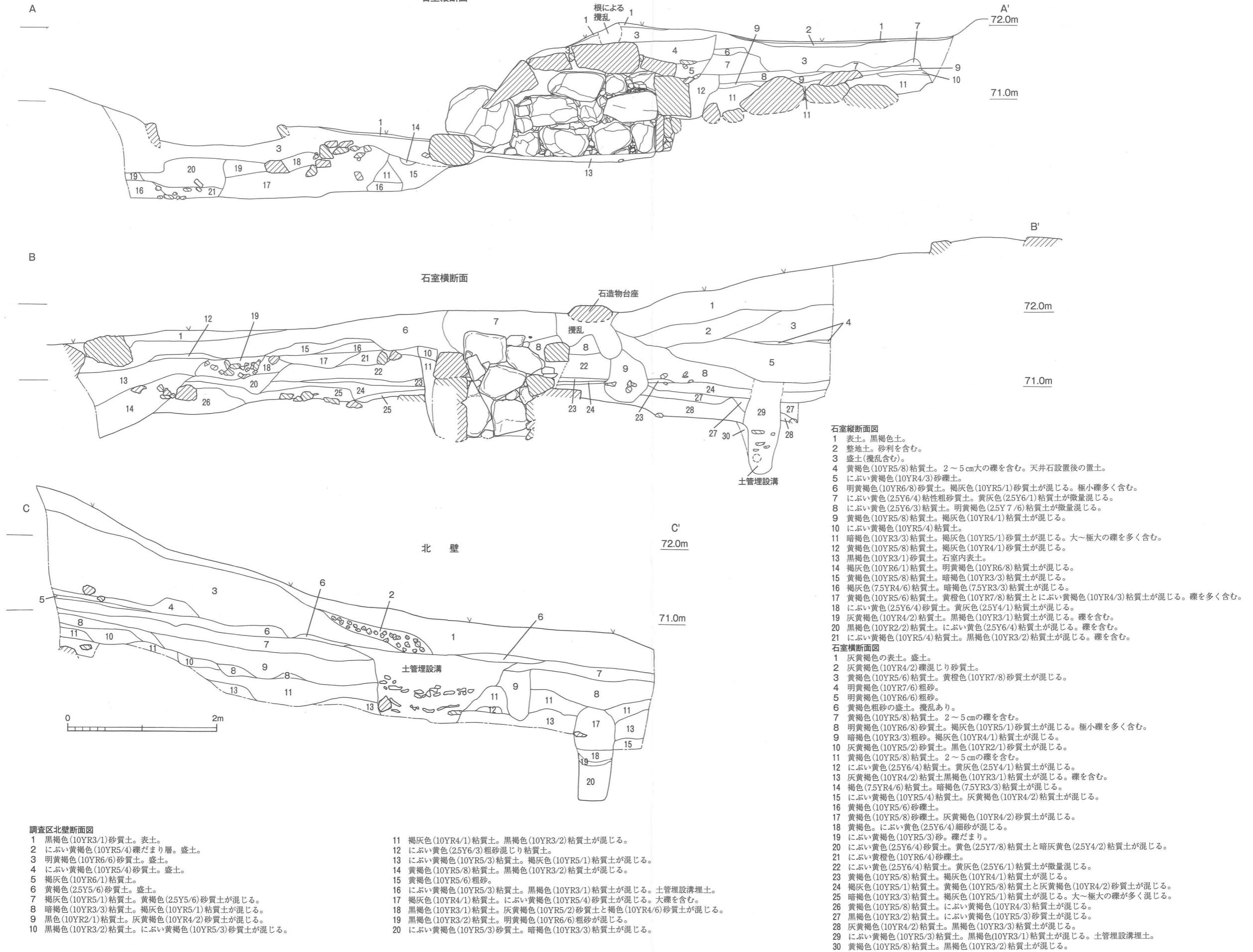
ところで、石室が極端に小さいことや壁体の用石方



第57図 発掘調査遺構・調査区配置図 1/200



第58図 涼塚第1号墳平面図



第59図 凉塚第1号墳土層断面図 1/50

法が通常の横穴式石室とはかなり異なることから、後世に大規模な改変を受けていることが推測でき、その性格自体が発掘調査の課題と認識された。そのため、具体的な内容や程度、時期の充実も意識して調査を進めることにした。また、石室に北接する矢穴石も調査の対象としたので、石室と矢穴石を含む範囲に調査区を設けて、石室主軸に沿う東西畦と、これに直交する南北畦を残して調査を進めた。

なお、報告に際し、1号墳は古墳であるという前提で、横穴式石室墳と同様に、「開口部」「側壁」「奥壁」「天井石」「墳丘」「前庭部」などの用語を使用するが、石室構築材を据え置くために掘られる「墓壙」については、後世の掘り直しも想定できることから、便宜上、「掘方」の語を用いる。

(1) 墳形と外部構造

確認時の状況 本墳は、北西から南東に伸びる尾根の先端である、標高71~72m付近の東向斜面に位置する。東面して石室が開口する（第57図）。

開口部は、最前列の天井石（天井石1）と開口部石、敷石がみえる状態であった。この開口部の前面には、門から玄関に至る通路が通っていて、開口部とこの通路の間は、前庭部を思わせる平坦面であった。墳丘は、東半域の残りがよく、直径6m、高さ1.5mほどの円墳状隆起が認められたが、西半域については、西側の池に伴う周遊路や北側の建物に伴う盛土によって埋立てられ、埋没していた（図版10）。

墳丘の層序 現表土の下には、攪乱を含む近現代盛土（第59図石室縦断面図3層、石室横断面図1~7層。以下、断りがない限り、1号墳の土層は59図に拠る。）があり、その下には、上から順に、黄褐色～にぶい黄色の砂質土（I層：石室縦断面図6・7層、石室横断面図8層。）、黄褐色～にぶい黄色の粘質土（II層：石室縦断面図8・9・10・層、石室横断面図22・23層）、褐灰色粘質土～砂質土（III層：石室横断面図24層）、黒褐色～暗褐色粘質土（IV層：石室縦断面図11層、石室横断面図25・27・28層、第60図5・6層）、黄褐色粘質土（V層：石室縦断面図15・17層、石室横断面図26・30層）が確認された。この内、I層とII層は明確な遺物包含層で、前者は墳丘盛土、後者は旧表土と考えられる。I層からは、縄文土器や古墳時代～奈良時代の土器と共に、中世の羽釜や東播系須恵器、青磁が出土している。また、III層においても、サヌカイト片や弥生土器、古墳時代～奈良時代の須恵器・土師器と中世の土師皿や羽釜、瓦器が共存している。一方、III層とIV層の層理面付近からは、サヌカイト片や石礫と古墳時代の須恵器片が出土しているが、この層位になると、中世に下る遺物は含まれていない。IV層本体やV層からは遺物が出土せず、層中に包含する礫の多さからも、地山と判断できる。

これらの遺物の出土状況や、層相から考えると、IV層上面が古墳時代の生活面であった可能性が考えられた。一方、腐植土層の様相を呈するIII層は、中世に下る遺物も含むので、中世以降の表土層と考えられる。II層については、III層の生活面上に施された人為的な置土であろう。

調査区北壁は、北側の既存建物に伴う盛土（調査区北壁断面図3~6層）が厚いが、その下には、III層に相当する褐灰色粘質土（7層）、IV層に相当する暗褐色や黒色の粘質土（8~11層）、V層に相当するにぶい黄褐色や黄褐色の粘質土（13・14層）がみられた。しかし、I・II層はここまで広がっていないので、墳丘の北限が量れる。また、V層の下に黄褐色粗砂（15層）が検出された。これはVI層ともいべき地山である。なお、調査区北壁沿いの東端では、直径1.3m、深さ1.7mを測る土坑を検出した。平面形状は正円形で、断面形は長方形である。北壁には遺構の一部がかかったのみであったため、IV層下部の11層上面から掘り込まれているようにみえるが、実際にはIV層上部の8層上面からの掘り込みである。その形状からは、井戸の可能性が考えられるが、素掘りで木枠等の施設や遺物はみられなかった。また、湧水が認められないので、井戸である場合には溜井と考えられる。IV層上面は古墳時代の生活面の可能性があることから、古墳時代の遺構とも考えられなくもないが、時期の特定には至らなかった。

基底面の地業 本墳では、腐植土（III層）などを除去して、尾根上部を平坦に整える整地を行っている。調査区内で確認できた範囲では、東西7m、南北8mにわたって、西から東に緩傾斜する基底面を造り出している。調査区西端はIII層が除去されているが、開口部付近では、石室の南側・北側共に、基底面となるIII層上面の標高は約71.25mである。掘方や前庭部はこの基底面より約1m近く掘り下げられている。前庭部の平坦面はV層（石室縦断面図15・17層）まで削平されていて、地山の上面レベルが70.25mと低くなる。

ところで、掘削時には、III層上面を石室構築時の地表面と考えていたが、土層の切り合い関係を検討した結果、石室の掘方が石室縦断面では8層上面から、石室横断面では22層上面から掘り込まれていることがわかった。どちらの層もII層に相当することから、II層が石室構築時のベースであったことがわかる。III層上面を整地してからII層を敷布して、基底面を整えたと考えられる。ただし、III層が中世の遺物包含層なので、それより上位のII層上面を基底面とする以上、現存する石室構築の年代を中世より古く遡らせることはできない。

墳丘の構成 層序のところで述べたように、墳丘盛土は黄褐色～にぶい黄色の砂質土で、小礫を含む傾向が認められる。石室横断面図19層は、「礫だまり」と

認識できるほど拳大から人頭大の礫が集中していたが、これもI層の範疇に含めてよいだろう。この他にも、墳丘内列石といえるほど安定した形状は示さないものの、墳丘の南側や西側には、墳丘の安定のために、大小の地山起源の自然礫を埋置した様子が看取された（巻頭図版4、図版11）。

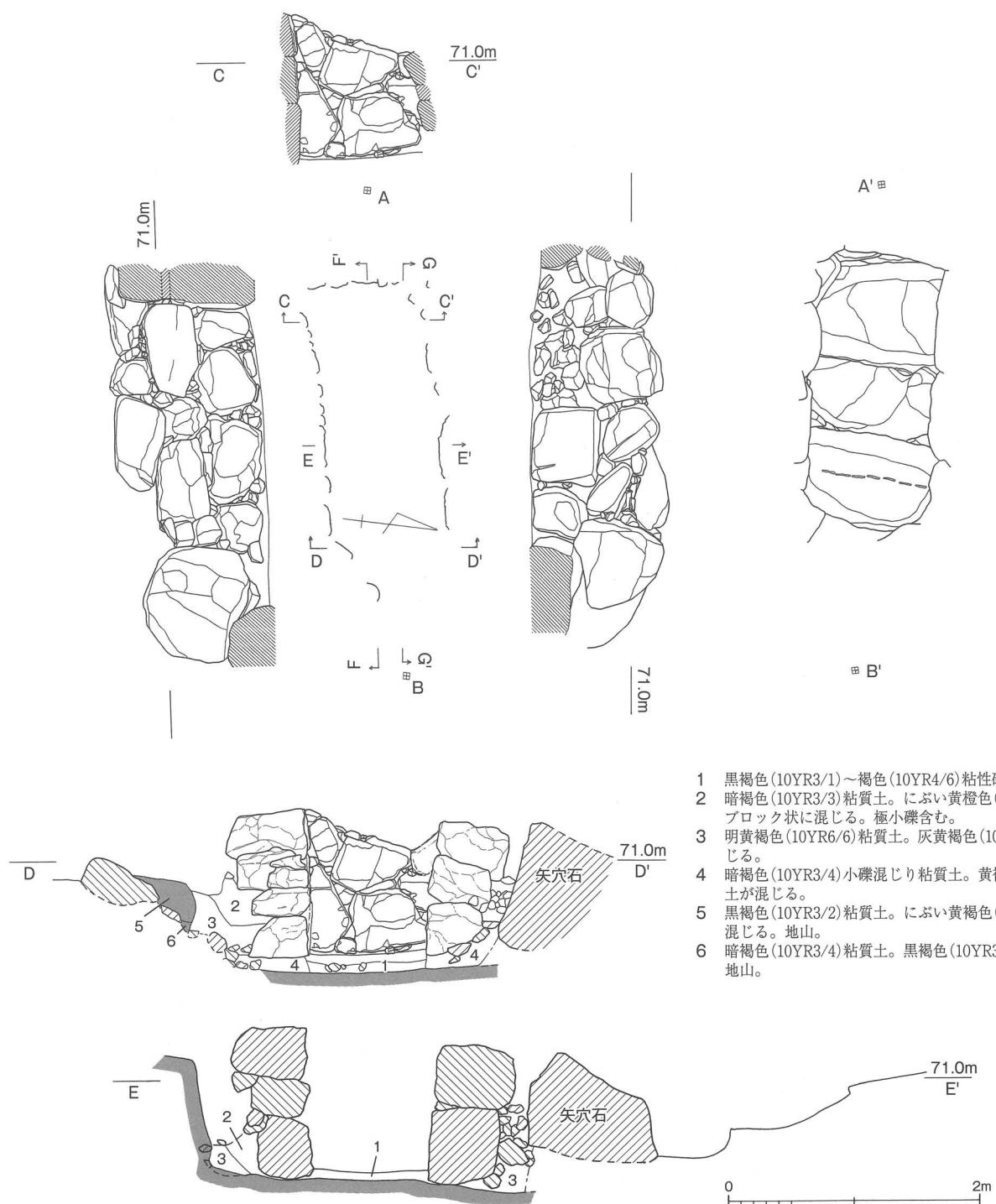
なお、墳丘周囲に周溝はみられなかった。

墳丘の規模 造園時の削平や埋没は認められるが、石室横断面図にみられるI層の広がりと、調査区北壁にI・II層が確認されない状態から、南北長8mと考

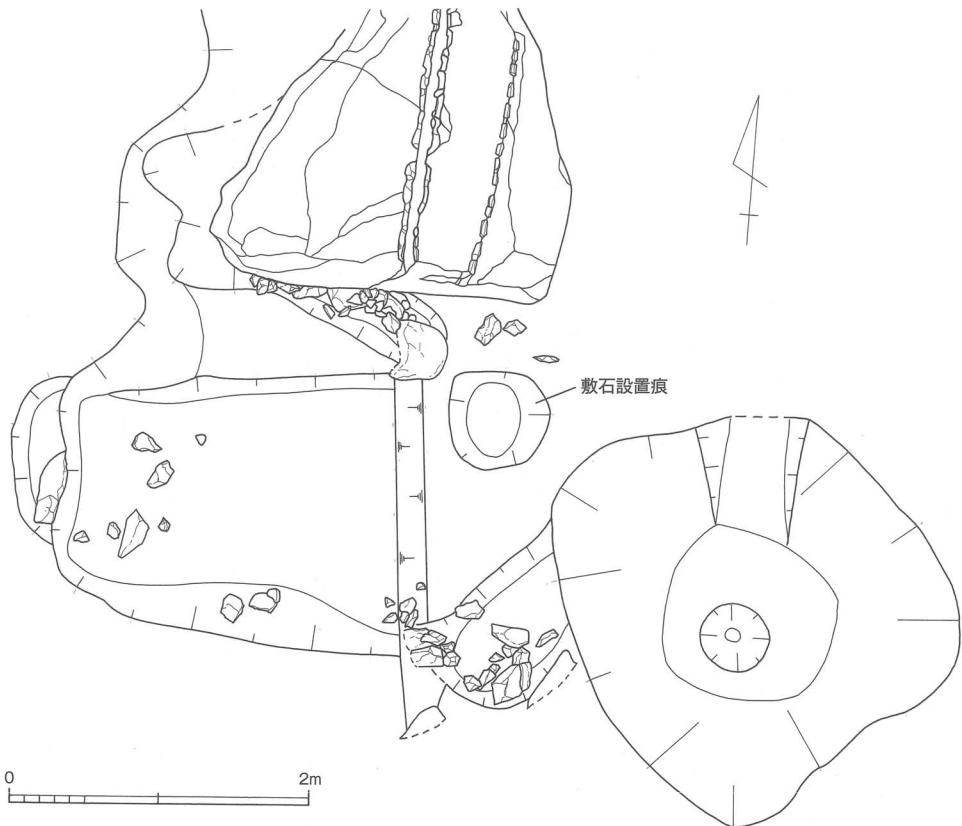
える。東西長については、西側の削平が顕著であることや、天井石上にI層が遺存していないため、根拠を欠くが、ひとまず、直径8m程度の円墳と想定する。

(2) 内部構造と遺物出土状態

掘方 東西長3.2m以上、南北幅約1.8mの掘方を掘削する。掘方の床面は水平だが、基底面が東側に下がっているので、奥壁側が最も深くて深さは1.1mで、開口部付近では0.9mとやや浅くなる。現存する石室の短さを考慮すると、本来の石室前面は既に失われてい



第60図 凉塚第1号墳石室展開図 1/50



第61図 凍塚第1号墳掘方平面図 1/50

ると考えられるので、掘方の平面形は長方形で、開口部が開放状態であったことが推測できよう（第59・61図、図版11）。

掘方底には、僅かに地山に含まれる自然礫が露頭しているが、全体に平坦で、標高70.25m前後に均らされる。側壁の基底石を設置するための溝状の掘り込みや、排水用施設はみられない。なお、前庭部南寄りにみえる直径2.5mの土坑や溝状の掘り込みは、前庭部に設置された花崗岩巨礫の設置痕で、近現代に下るものであろう。

開口部 最前列の天井石（天井石1）の前面が墳丘盛土から露出していて、その下には、丸みを帯びた1m大の開口部石を配し、モルタル、コンクリートで固定していた。前庭部に続く床面には、平面形が略方形で縦0.4m、横0.8m、厚さ0.6mを測る自然石を設置していて、これら4石に囲まれた開口部の空間は、幅0.5mと石室幅の約半分で、高さは0.4mと狭い（第58・59・69図、図版4、図版11）。なお、開口部敷石は土坑状の掘り込みを設けて据えているが、開口部石に伴う掘り込みはみられなかった。

石室の構造 天井石が構架した石室は東に開口していて、主軸をN101°Wに採る（第58～60・69図、図版4、図版11）。開口部が狭小で、石室内部も狭く、手測りでの作図が不可能であったため、座標系第V系に基づく写真測量を行ったが、奥壁・側壁と天井石の接点は図化不能であった。

石室の開口部石まで含めた長さは、右側壁で2.8m、左側壁で2.75mを測るが、開口部石を除くと、右側壁は2.0m、左側壁は2.1mと短く、石室前部が既に失われていると考えられる。床面の奥壁幅は0.8m、石室最大幅は0.9mであるが、側壁が上部に若干開くので、天井部最大幅は1.1mの計測値を得る。平面形はほぼ長方形で、無袖式とよぶことはできる。奥壁・側壁の高さは、最高で1.2mである。石室構築石材は、開口部直上の天井石を除いて自然面を石室内部に向いている。奥壁・側壁共に間詰石が目につき、左右の側壁では裏込めの様相が異なるなど、特異な構造である。

天井石 長軸を横位とする3石が構架されており、開口部側から、「天井石1」「天井石2」「天井石3」と呼称する。天井石1は、矢穴列を有する割面を石室の天井として用いているが、開口部に向かって石室高を減ずる構造になっている。なお、この石材は、矢穴列を有する割加工石材なので、3項で詳述する。天井石2は、底辺1.4m、高さ0.7mの仰角三角形の平面形を有する厚さ0.3mの板石である。天井石3は、縦1.7m、横0.85m、厚さ0.4mの直方体を呈す。さらに、天井石3の奥には、厚さ0.2mの板石を3枚並べて天井石の代わりとしている。

天井石同士の接点や天井石と側壁の接点には、隙間を埋めるために礫を徹底的に詰め込んでいる。

石室縦断面図には、これらの天井石を設置するため I層上面から掘り込んだ様子がみえる。奥壁直上に

にぶい黄褐色砂礫土（5層）を置き、その上に天井石も覆う黄褐色粘質土（4層）を積み上げている。現状では4層は天井石3よりも奥壁寄りにしか残っていないが、本来はすべての天井石の上に置かれていたと推測している。

奥壁 奥壁際の掘方は、基底石の裏側の幅が狭く、2段目の石材の裏側が広くなり、二段掘りを呈する。これは、基底石と上段に使用されている石材の形態に制約されたものである。基底石は板状の石材を2石立て並べていて、縦断面にかかるものは、幅0.6m、高さ0.6m、厚さ0.1mの薄い板石である。基底石の裏込めには、同様の厚さの板石や小さな円礫を詰め込んでいる。2段目の主要石材は、幅0.6m、高さ0.5m、厚さ0.5mを測る立方体に近い形状の石材で、この周囲には0.2~0.3mの石材を含む間詰石を多用する。2段目石材の裏込めにはⅡ層に類似する黄褐色粘質土（縦断面図12層）を用いていて、この裏込め土の上にⅠ層を積み上げている状態が確認できたので、現存石室の構築が、墳丘盛土の形成に先行していることや、天井石の架け替え時には、奥壁に手が加えられていない証左が得られた。

側壁 側壁は、Ⅳ層をベースとして積まれていて、間詰石を多用する。両側壁共に高さは最大1.2mあるが、右側壁と左側壁では全く様相が異なる。

右側壁は、開口部石の際を除いて3段構成である。基底石は、0.4~0.7m大の4石を用いて上面の目地を揃える。2段目は長軸0.6~0.7mの石材とその半分ほどの大きさの石材を、交互に横位置に積む。3段目は上面を揃え、天井石を直接乗せている。裏込めには、Ⅳ層に由来する暗褐色粘質土（60図2層）やⅡ層と類似する黄褐色粘質土（石室縦断面11層、60図3層）を用いている。

左側壁は、2段構成を基調とするが、奥壁寄りの1.1mの範囲には基底石が全くなく、拳大から人頭大の礫を積み上げてその代用としている。それより開口部側の基底石2石は安定した状態であるが、2段目には縦位置や斜方向の不自然な積み方がみられる。裏込めは、矢穴石との間に0.05~0.20m大の礫を詰め込む。

石室床面 地山を深く掘り込んでいて、その底のレベルは70.25~70.3m付近で、ほぼ水平である。その上に近現代に塚として祀られていた段階で形成された、層厚0.1mの黒褐色砂質土（土壤層：石室縦断面図13層、60図1層）が堆積している。粘土などを用いた貼り床は認められず、出土遺物は、近現代の香炉やレンガ、少量の陶磁器片に限られる。

（3）小結

以上のように、1号墳は、中世遺物包含層であるⅢ層形成後に、掘方の掘削や現存の石室の構築が行われたことが明らかになった。石室の法量に加えて、左側壁や奥壁の用石方法など、明らかに横穴式石室とは異

なる点が多い。加えて、天井石1は、その石質から、花崗岩ではあるが在地のものではなく、生駒石の可能性が高いので、遠隔地からの搬入品といえる（後述）。このため、古墳の天井石としては相応しくない。その一方で、右側壁については、横穴式石室の側壁とみても違和感はないという、対照的な違いも確認された。また、墳丘盛土（Ⅰ層）や旧表土（Ⅲ層）からは、古墳時代後期～終末期の遺物も多少みられたので、現在の石室を構築する前に、横穴式石室が存在していた蓋然性は大きい。とくに、固い地山を長方形に掘り込んだ掘方は、まさに横穴式石室の墓壙構築の手法に相当する。

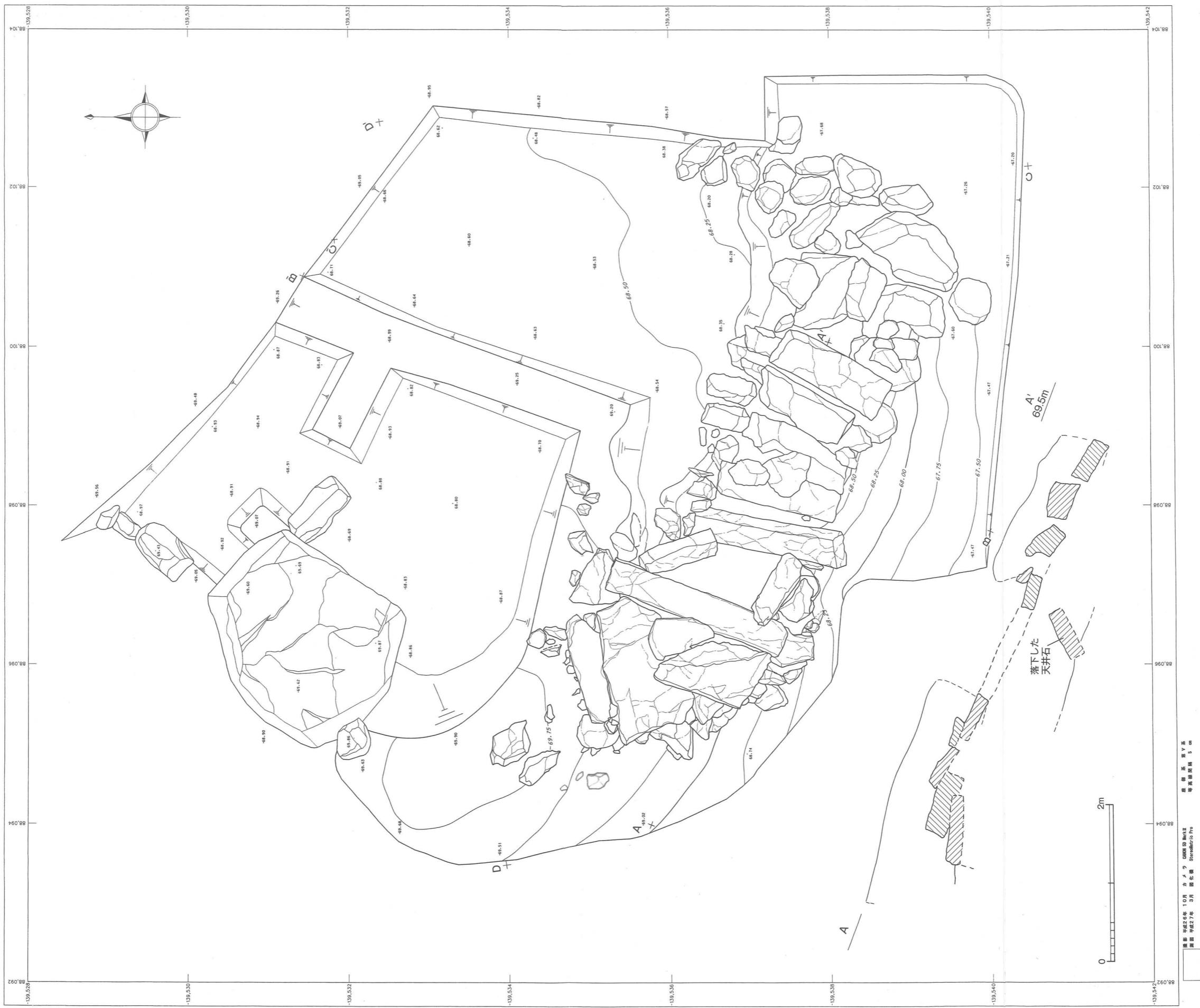
これらの情報の全体的な整合性を図ると、①掘方の位置に古墳時代に墓壙を掘り下げる、無袖式小石室墳が作られた。②中世以降で、近世や近現代も視野に入れた期間において、既存の石室の位置にⅡ層上面から掘方を掘開し、新しい石室を再構築した。この時、右側壁は本来の石室に近い積み方を行ったが、左側壁と奥壁は独自の方法で石積みを行い、墳丘を盛り上げて全体を覆った。③近現代のある時点で、墳頂部を掘り下げて天井石の架け直しや開口部石・敷石の設置を行い、現在の石室に改めた、といった3段階の変遷が考えられよう。

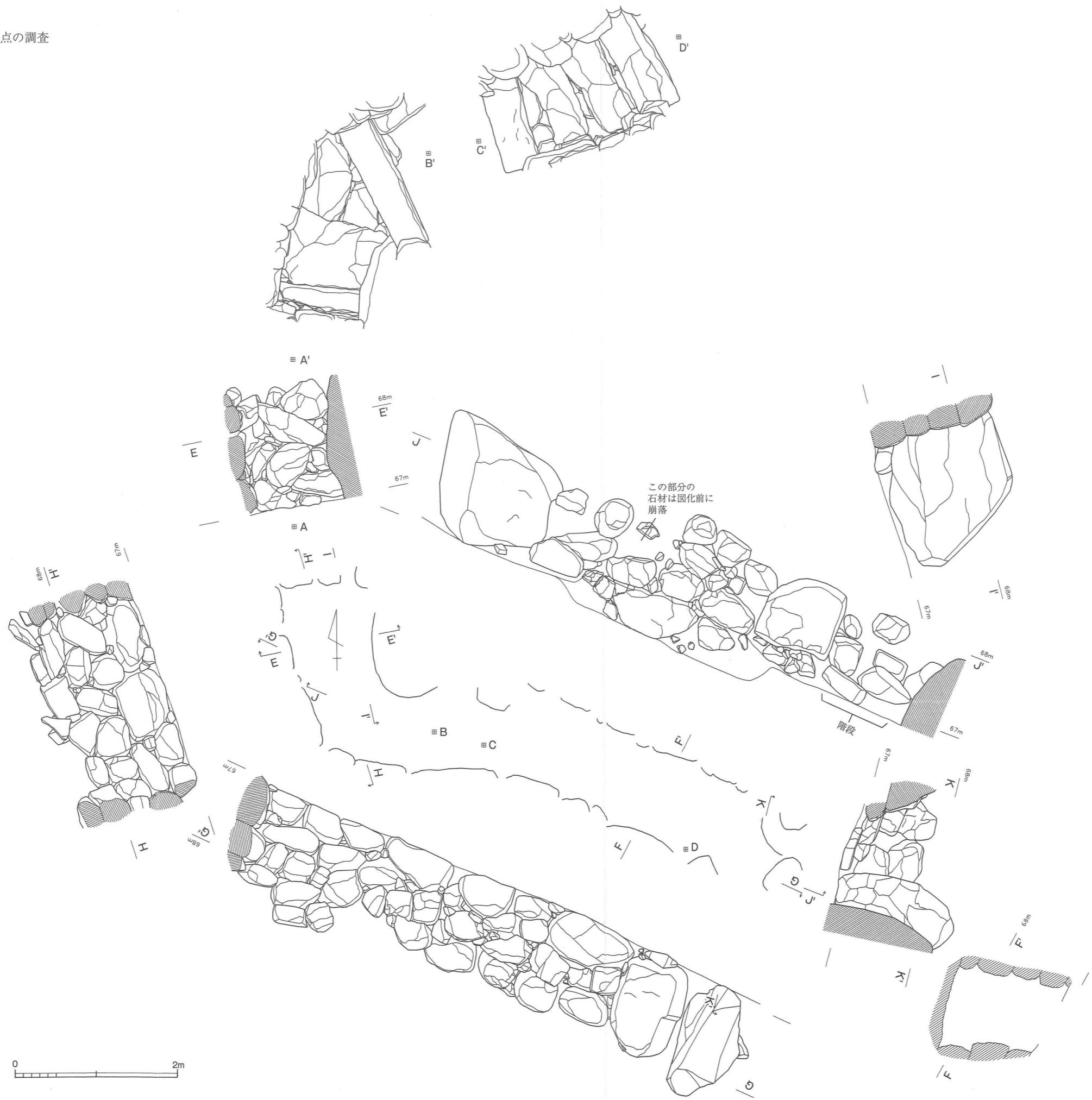
なお、本来の石室は現状より長く、矢穴石は墳丘内に含まれていたとみると、最初の古墳としての墳丘はやはり直径8mほどであったのだろう。

2. 凉塚2号墳

2号墳も、1号墳と同様に1967年刊行の第5集で、埋蔵文化財包蔵地として扱われており、「S-3 玄室、奥壁1部残存」と記録されている。しかし、立ち入り調査ではその所在が確認できず、確認調査における下草や低木の伐採によって、漸くその位置と状態が確認できる状況であった（図版10）。

南面する道路から門に入ったすぐ右手（東側）には、側面に花崗岩巨礫を積み上げた、築山状の高まりがあった。ここには庭木が生い茂り、地震被害として灯籠の部材が倒壊していた。天井石の一部は地表面に露出していたが、石室内に落ち込んだものも少なくなかった。それでも、石室内への土砂の流入は殆どなく、かなり旧態を保っているようにみえた。しかし、阪神淡路大震災の影響からか、両側壁が南に傾いていて、壁体は極めて不安定な状態であった。また、天井石が欠落した部分から内部を覗き込んだところ、南側に位置する右側壁は西側でカーブを描いていて、石室の平面形が「L」字状に折れ曲がっている様子が見て取れた。加えて、長さ約2m、幅約0.4m、厚さ約0.2mの四角柱に加工された延石を天井石として使用していることが明らかになったため、近現代において、貯蔵庫や防空壕として再利用するために、横穴式石室に大規





第63図 凉塚第2号墳石室展開図 1/50

模な改変を加えた可能性が考えられた。

そこで、本調査では、2号墳において、どの部分が横穴式石室の本来の状態を保っていて、どの部分が改変や後補であるのかを明らかにすべく、調査区を設定して発掘調査を行った。なお、1号墳と同じく石室内に香炉（第76図）が納められており、近年まで地域か地主の信仰の場であったことも確認された。

本墳においても、1号墳と同様に、「開口部」「側壁」「奥壁」「天井石」「墳丘」など、横穴式石室に準じた用語を用いるが、「墓擴」の語は用いず、「掘方」と表記する。

（1）立地と外部構造

確認時の状況 現存する石室は、段丘崖に斜めに造道された道路に面する築山にあって、標高68.0～70.0m付近を選地している（第57図）。墳頂は69.9mに達するが、天井石が崩落した部分は墳丘そのものも崩れていた。「L」字状に折れ曲がる石室は、東南東方向に開口していた（第62図、図版10）。現況において、墳丘は南北検出長8.0m、東西検出幅9.0mを測る。

墳丘の層序 土層確認のために設けた畦は、石室東部に直交するように設定したB-B'ライン（南南西-北北東）と、開口部付近を通るC-C'ライン（南南東-北北西）およびこれにほぼ直交するD-D'ライン（西南西-東北東）の3本である。これらの畦の土層観察によって、墳丘部分の層序は、以下のように分けることができる。

現表土（第64・65図1層。以下、2号墳の土層は第64・65図に拠る。）や造園時の盛土・表土（2・3層）の下には、墳丘盛土である明黄褐色砂質土～粗砂が積まれている（I層：4・5層）。その下には、調査区東部を中心に、近代土管理設溝の埋土がみられる（II層：6～10・8'層）ので、I層が近現代盛土であることがわかる。石室構築時の裏込めは、石室の南側では上から、暗灰黄色砂質土、褐色小礫混じり砂質土、暗灰黄色細砂である（III層：11～13層）。一方、石室の北側では、掘方内を暗灰黄色砂質土（11層）と灰黄褐色小礫混じり砂質土（20層：III層に含む）で埋めていて、石室掘方の北側法面には、暗褐色砂質土～細砂がみられる（IV層：21層）。石室床面に土壤層があるので、この石室内の床土をV層とする（15層）。土管理設溝と石室掘方のベースは、しまりのあまい自然堆積層を基調とする14・16～19・22層である（VI層）。VI層に含めた16層は、にぶい黄橙色～褐色礫混じり砂～砂質土の水成層で、ラミナの顕著な斜面堆積をみせる（第68図）。なお、22層は4層に酷似する。

I層からは、少量ながら古墳時代の須恵器高杯片と近代陶器が、掘方埋土（III層）からは、時期の特定できない土師器細片が出土している、II・IV・VI層から遺物は出土しなかった。

墳丘の立地と構成 2号墳は、東西に走る段丘崖の北側に位置している。この崖面は北から南に下る急斜面で、墳丘頂部と道路面の比高は約5mである。現況ではこの斜面には花崗岩巨礫による石積みがあって、法面を保護している（図版10下段）。石室は、法面のすぐ北側に、段丘崖面に並行するように築かれていて、墳丘は石室の北側にしか残っていない。墳丘の盛土は明黄褐色砂質土～粗砂のみで、しまりは悪く、不安定な状態である。現状ではこの盛土の層厚は0.5mで、墳丘の高さは約2mである。

（2）内部構造と遺物出土状態

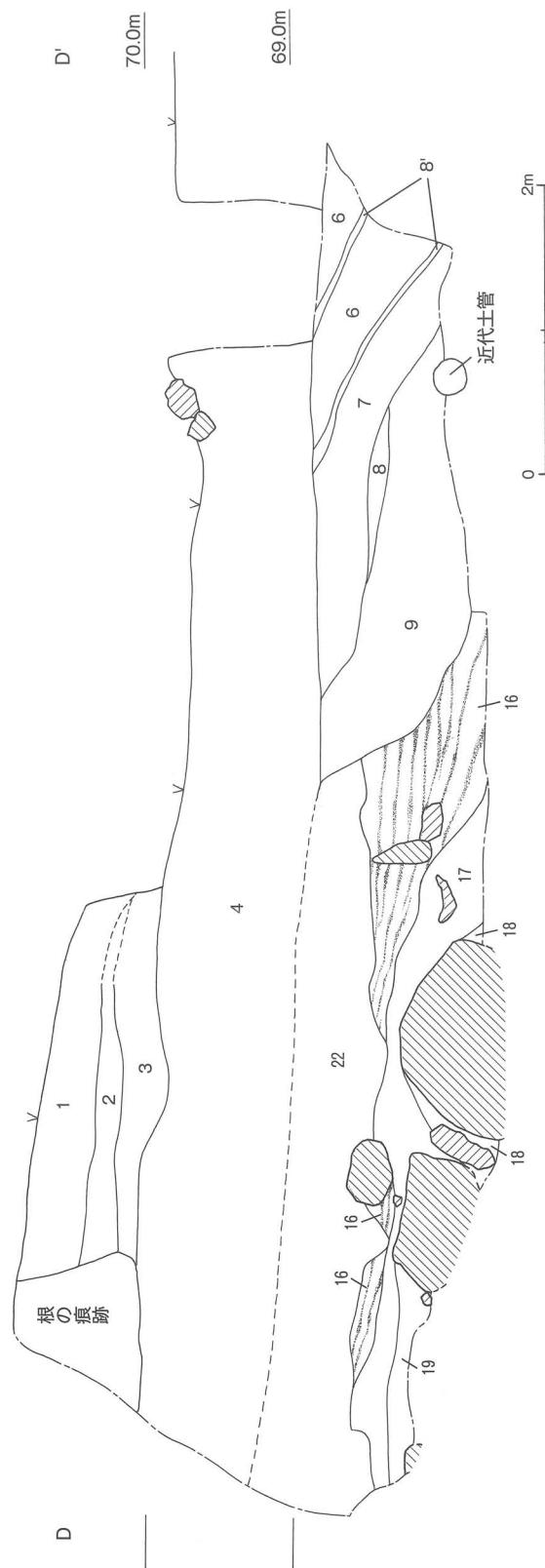
前述したように、2号墳の石室は、天井石の内部への落下や側壁の歪みなど、非常に不安定な状態であった。このため、石室の平面図や石室展開図は、写真測量を行い、補足的に一部を手測りで作図した。その後、天井石や安定の悪い側壁上部の石室構築材を除去し、安全を確保しつつ調査を進めた。その結果、石室は「L」字形よりもさらに複雑な曲り方をしていて、平面形は「L」であった。壁面の構造や積み上げ手法は、部位によって大きく異なっていた。そこで、展開図の立面図については、統一の主軸は設定せず、各部分において、側面の状態がわかるように部分分けした見通し図を作成し、合成した（62～66図、巻頭図版5、図版12）。

掘方 左側壁側には、VI層とみた22層（明黄褐色砂質土）上面において、掘方の肩部がみられた。長さは3.5mにわたり、その西端は、下部がVI層に埋没している花崗岩巨礫に達する。また、最深部の深さは1.4mを測り、VI層である14層（褐色礫混じり砂質土と黄褐色砂質土が混じり合う層）をベースとする。掘方の法面は土壤化によるものか暗褐色を呈している（21層）。掘方内埋土は、高さ0.8mまでを20層（灰黄褐色小礫混じり砂質土）で埋めて、その上に、11層（暗灰黄色砂質土）を置いている。右側壁側については、最上部に左側壁と同様に11層があり、その下に12層（褐色小礫混じり砂質土）、13層（暗灰黄色細砂）を積んでいる。右側壁側の掘方については、南側に肩部を持つものなのか、開口状態なのかは不明であるが、掘方の幅は最大4.0mを超えていた。掘方の床面のレベルはおおむね67.0mであるが、ベースの14層は締まりがあまい上に、ボルダーを含むなど、平坦面を造成するには不向きであったので、床面には凹凸がみられる（第67図）。なお、掘方の埋土からは、細片で時期の特定はできないものの、土師器片が出土している。

開口部 開口部の北側には、北から南に下ってくる石段があり、階段を下り切ったところが石室の開口部になっていた。庭園内の一施設として石室を利用するための加工が施されている。階段を下りたところには、長軸1.5m、短軸0.8m、厚さ1.0mの巨礫が倒れ込

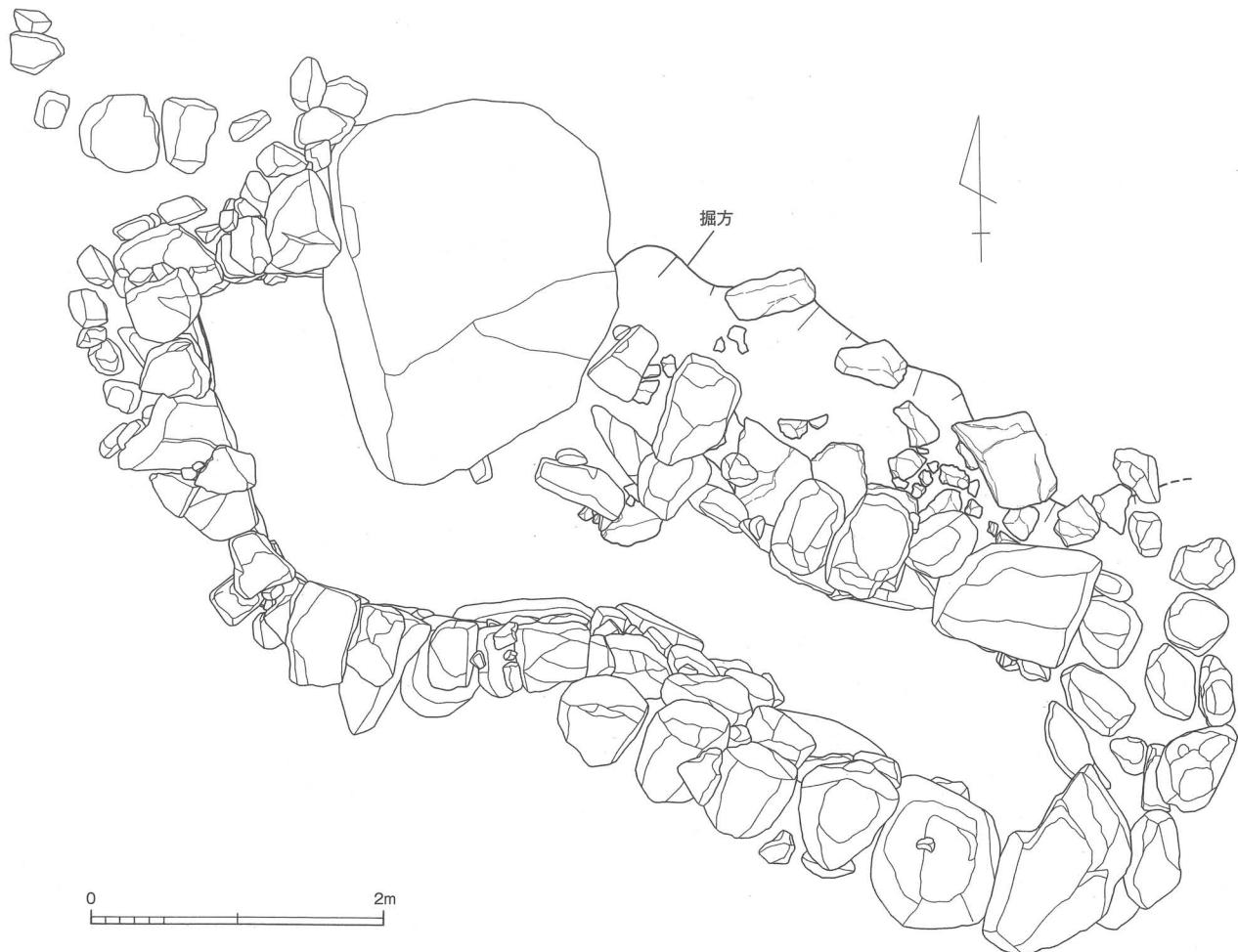


第64図 凉塚第2号墳土層断面図 (1) 1 / 50



- 1 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土。表土。
 2 黄褐色(10YR5/6)砂質土。灰青褐色(10YR4/2)細砂が混じる。
 3 黄褐色(10YR3/3)小礫混じり細砂。黒褐色(10YR3/1)砂質土が混じる。
 4 黄褐色(10YR6/6)砂質土と黄褐色(10YR5/6)砂質土が混じる。5mmの大の小礫を含む。
 5 黄褐色(10YR5/6)砂質土と明黄褐色(10YR6/6)細砂が混じり合つ。
 6 黄褐色(10YR3/3)小礫混じり砂質土～砂質土～砂質土が入り混じる。土管埋設埋土。
 7 黄褐色(10YR5/6)砂質土。明黄褐色(10YR5/6)砂質土が入り混じる。土管埋設埋土。
 8 明黄褐色(10YR6/6)砂質土。
 9 暗黄褐色(10YR4/2)細混じり砂質土。上管埋設埋土。
 10 暗黄褐色(10YR4/2)砂質土と暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土が入り混じる。土管埋設埋土。
 11 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土。黄褐色(10YR5/6)砂質土の小ロックを含む。
- 12 褐色(10YR4/6)小礫混じり砂質土。黄褐色(10YR5/6)砂質土が混じる。
 13 暗灰黄色(2.5Y4/2)細砂。暗灰黄色(10YR3/3)砂質土が混じる。微量の炭化物を含む。
 14 褐色(10YR4/4)細混じり砂質土と黄褐色(10YR5/6)砂質土が混じり合つ。
 15 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土。明黄褐色(2.5Y6/6)砂質土が混じる。炭化物を大量に含む。石室内床土。
 16 にぶい黄褐色(10YR6/8)～褐色(10YR4/6)細混じり砂質土。ラミナが顯著な水成層。
 17 黄褐色(10YR5/6)細混じり砂質土～砂質土。
- 18 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土～細砂。
- 19 褐色(10YR4/6)細混じり砂質土。明黄褐色(10YR6/6)砂質土が混じる。
- 20 暗黄褐色(10YR4/2)小礫混じり砂質土。黄褐色(10YR5/6)砂質土が微量混じる。
- 21 暗黄褐色(10YR3/4)砂質土～細砂。
- 22 明黄褐色(10YR4/2)砂質土。にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土が混じる。大量に礫を含む。

第65図 凍塙第2号墳土層断面図 (2) 1 / 50



第66図 凉塚第2号墳石室平面図 1/50

んでいた（第62・66図）。これは、本来、右側壁の東端に直立していたと考えられることから、旧に復した状態で石室展開図（63図）を作成している。この石材の西側にも、長軸0.6m、短軸0.5m、高さ1.2mの巨礫が開口部立柱石ともいえる状態で直立していた。また、左側壁にはこの立柱石と対面するように、長軸1.0m、短軸0.7m、高さ0.9mの立方体に近い石材が置かれていて、この部分がまさに石室への入口であることを強調している。ただし、この3石には、天井石は架かっていなかった。

石室の構造 歪な形態の石室であるが、開口部から3mほどは、西北西-東南東方向（N64°W）を主軸とする。次いで、約2.2mの長さで、東西方向（N85°W）を主軸とする。さらに屈曲して1.8mの長さで西北西-南南東方向を（N17°W）主軸として、奥壁に至るので、石室全長は7mに達する。石室の幅は概ね1.1mである（第63図・66図、巻頭図版5、図版12）。

石材は在地の花崗岩が多いが、他の石材も少量みられる。総じて、平らな自然面を内側に向けていて、割面を内壁面としているものはない。間詰石は小割りのものも含まれているが、基本的には段丘礫層起源の自

然石である。なお、屈曲部分の側壁には、一部にモルタル、コンクリートによる補強が認められた。

天井石 天井石は、調製された花崗岩の延石や、板石を使用していた。現況では、延石が8本と幅0.8~1.0m、長さ1.7m、厚さ0.2m程度の板石2枚が残っていて、石と石の隙間を塞ぐように、小礫が積まれていた。なお、延石には石の寸法「丈七尺、幅百三寸」の墨書がみられ、長さ約2m、幅約0.4m、厚さ約0.2mの規格品を使用したことがわかる。

奥壁 奥壁の幅は1.0m、高さは1.5mを測る。側壁は多少なりとも横方向に目地を揃えるためか、横位置に石を置いているが、奥壁についてはその意識は乏しく、石材の長軸を斜めに向ける落とし積みの技法が用いられている（図版12中段右）。この石室の構築技法は、間知石積みの影響も受けたもので、明らかに近現代に下ることを示している。

側壁 最大高は両側壁共に1.5mを測るが、右側壁と左側壁では用石方法が異なる（第63図、図版12）。加えて、左側壁は、北西-南東方向を主軸とする直線部分は石室構築材を積み上げているが、それより奥は、VI層に包含されていた巨礫をそのまま側壁に転用する

など、特異である。

右側壁は、基底石に比較的大きな石材を選び、横位置に置く傾向がある。基底石の幅は0.4~1.0m、高さは0.3~0.6mである。ただし、目地を揃える意識は十分ではない。東側の直線部分では、2段目以上も横位置を指向しているが、西側の奥壁に近い部分は、奥壁にみられるのと同じ、長軸を斜めに落とす技法も併用している。

左側壁の東部は、掘方の一部が深くなっている、この部分を埋めるように礫が投入されている。礫の大きさはまちまちで、幅1.0m、高さ0.5mの礫もあるが、拳大や人頭大のものが多い。あるいは、掘方掘削時の崩落部分を埋めたものかもしれない。この部分は壁体がとても不安定で、図化する前に基底石を残して上位の石材が崩落した。また、これより西側の巨礫は長軸2.5m、短軸2.0m、高さ1.5mを測る。西面と南面をそのまま側壁として利用している。

石室の東側と西側、あるいは右側壁と左側壁では石の積み方が大きく違う。これについては、東側が先に作られ、西側を後補としたとする見方もできよう。

石室床面 床面のベースとなる14層は、締りの悪い不安定な砂質土であった。この層の直上に石室機能時の表土である暗灰黄色粘質土（15層）が薄く堆積している。15層は炭化物を多量に含む土壤層で、石室内で火化行為が行われたことがわかる。粘土などを用いた明確な貼床は認められなかったが、床面レベルは水平を指向していて、標高約67.0mを測る。

なお、出土遺物は香炉やガラス片など、近現代資料のみである。

（3）小結

調査開始時点では全く予想していなかったことだが、2号墳については、既存の古墳を改変した可能性はおろか、その場所に古墳が築かれていたとする証左さえも得られなかった。石室の形態・構造もさることながら、何よりも石室の構築基盤となるべき安定した層がこの場所には存在していなかったのである。石室の



第67図 凉塚第2号墳基底石除去状況（東から）

ベースとなる自然堆積層は、明瞭なラミナが観察できるなど洪水によって形成された層を含んでいて、軟弱である（第68図）。通常の横穴式石室が、段丘礫層などの固く安定した地盤をベースとしているのとは全く様相を異にする。つまり、2号墳は、横穴式石室墳が築かれることのない場所に立地しているのである。これは発掘調査によって初めて明らかになった事実であり、近現代の石室造営を遺構として記録し得たことの意義は大きい。

また、2号墳の石室構造は、左側壁において基底石を欠く部分があったり、水成層中の転石をそのまま側壁として用いたりしているなど、横穴式石室墳のルールを逸脱した石材使用法が主体をなす。石室の平面形自体が蛇行を伴う「＼」形であるという点や、間知石積みを崩した落とし積みともいるべき壁体構造がみられることも重要である。しかし、在地の六甲花崗岩の自然石を使用するという点では、城山・三条古墳群内の古墳と共通の要素もみられる。開口部における羨門立柱石を思わせる縦位置の石使いや、目地の揃った右側壁の様相は、横穴式石室墳を見知っていた者による模倣とみることもできよう。あるいは、敷地内にあつた古墳を宅地化に際して壊す必要があり、その石材を転用して築かれたのが、この2号墳であったのかもしれない。それ故に、本来の古墳の被葬者に対する供養が必要とされたとも考えられる。今後も、近現代における2号墳の建造契機については、考古学以外に、民俗学、地誌学的な地域史の観点から検証を加える必要があるだろう。

加えて、その用途についても検討の必要がある。石室内に香炉が置かれていたことから、祠などの祭祀の場であったことは明らかであるが、近代の防空壕や山岳信仰などの修行場、倉庫等、多様な使用方法が想定されよう。防空壕であるならば、規模が大きいことから、共同用のものであり、大きく屈曲する平面形態は、爆風を壕内へ直接入れないための工夫とも考えられる。実際、第二次世界大戦時には、本調査地の近接地に爆弾が落とされたという市民からの聞き取りもある。ま



第68図 凉塚第2号墳基盤層の堆積状況

た、六甲山麓は、近世～近代において大峯講が盛んであった地域なので、修驗道に関わる者が使用した可能性もあるだろう。

3. 採石関連石材

本調査地点の北側にそびえる城山（鷹尾山）南側斜面から芦屋川扇状地上には、徳川大坂城築城石関連の採石場があり、城山刻印群や芦屋川右岸扇状地刻印群と呼ばれている〔第87集〕。本調査地は、従来、城山刻印群の範囲には含まれていなかった（第54図）が、本調査地より下位の扇状地においても、平成21年度の芦屋廃寺遺跡第115地点の発掘調査によって沢丁場が見つかるなど、芦屋川右岸の城山山麓においても、多様な採石活動が行われていた様態が明らかになりつつあり、刻印群としては二つに大別されるものとして理解されている。

本調査地点において、矢穴石・刻印石・割加工石材・矢穴列を持つ天井石といった採石関連石材の分布が予想以上の密度で確認されたことは、城山刻印群の範囲が、従来よりもさらに南の高位段丘面まで広がっていたことを明らかにした点で大きな意味を持つ。

以下では、個々の採石関連石材について述べる。

（1）矢穴石

調査地北東部に位置する1号墳石室の左側壁に接するように検出された花崗岩で、南から北に下がる上面は隅丸三角形を呈し、その面にAタイプの矢穴列が残されていた（第58・69図、巻頭図版4、図版10・11）。

検出時には、上面のほとんどが表土下にあり、掘り下げを進めて、長さ2.2m、幅2.26m、厚さ1.3mの巨大な自然石であることが明らかになった。また、石材の下部は暗褐色粘質土（第69図5層。以下、矢穴石の土層は第69図に拠る。）に埋没しているが、石際には石の見極めや採石加工のための掘り込みがあり、その部分に、黄褐色粘質土（2・3層）や灰黄褐色粘質土（4層）が堆積していた。5層は、石室床面のベースである暗褐色粘質土・黒褐色粘質土（第59図石室横断面図25・27層）に対応するもので、1号墳築造時の旧地表面より下位に位置する地山である。この状態からみて、この矢穴石が段丘礫層中に含まれる転石であること、1号墳の築造などでは移動していないことが確認された。しかし、2～4層が1号墳の墳丘盛土に相当するのか、墳丘盛土起源による再堆積土、再移動なのかは判断できなかった。

矢穴列は、南北方向に走るもののが2列あり、割石の南北に最も長い部分の列（矢穴列A）と、矢穴列Aから0.5m東側の列（矢穴列B）とが、並行して遺存する。矢穴列A・Bともに矢口が矩形をなす長方形の矢穴で、13個認められた。2列の矢穴列によって割り取りを企画した目的石材の大きさは、幅0.4～0.5m、長さ2.25m、

高さ2.0mなので、平石を意図したものであろう。矢穴列底の部分に亀裂が走っていて、とくにA列の亀裂は深い割面となっているが、石底までは達していないようで、作業は途中で中断したまま、放棄されている。

なお、矢穴石東部の表土直下において、牛の左上腕部の骨が1片出土しているが、時期を特定する共伴遺物はなく、近世以前に遡るものとは認め難い。

（2）刻印石

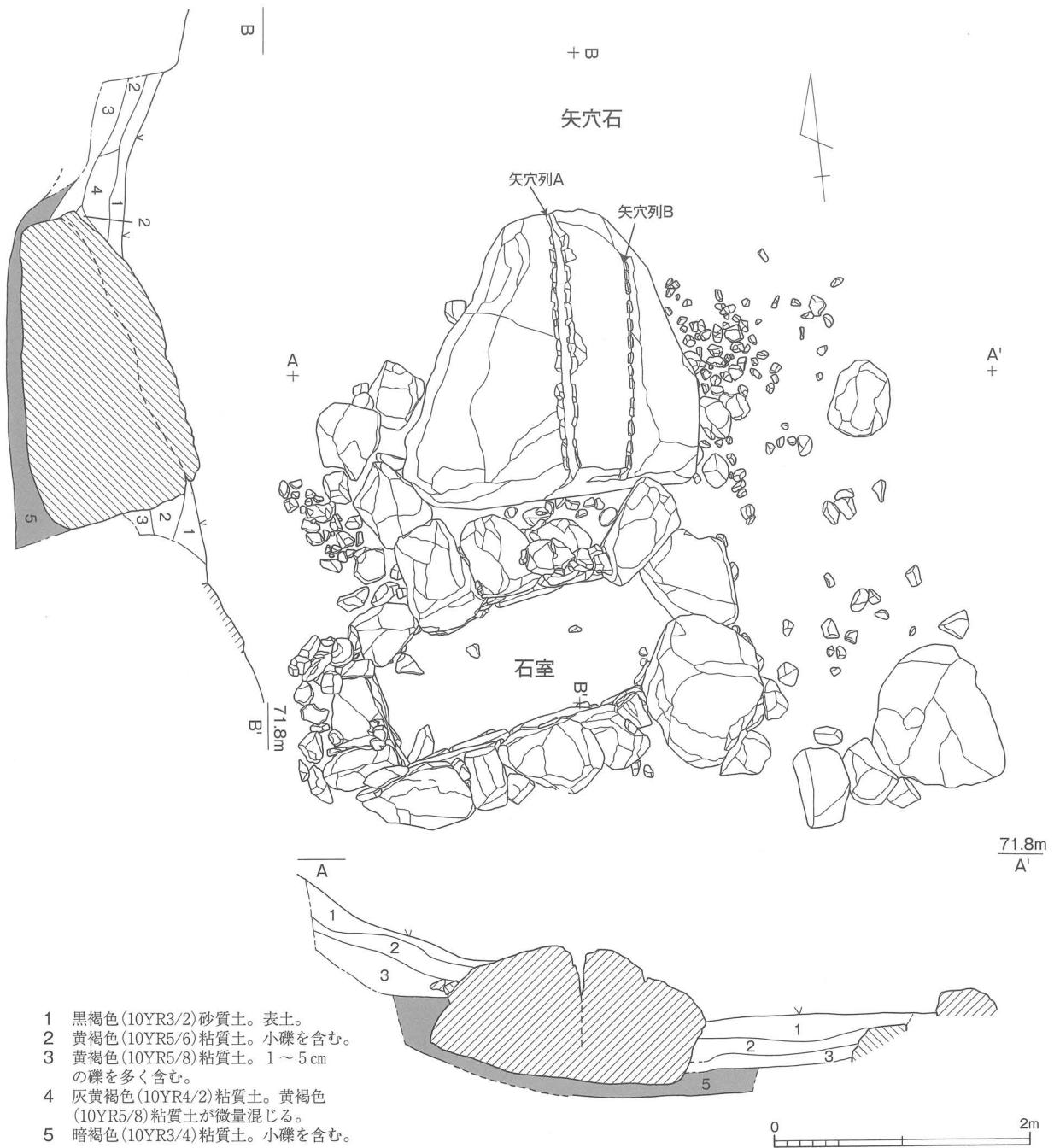
調査地の南西端には茶室があった。その前面の南東側斜面肩部において、刻印石1石を検出した。刻印石の上面は、平坦な自然面で、その形態は、長軸1.7m、短軸1.5mの略方形を呈する。刻印は、この面の中央付近で確認された。東面・南面・西面の3面がほぼ直立する自然石で、幅1.7m、奥行き長1.7m、高さ1.3m規模の花崗岩巨礫である（第70図、巻頭図版6上段、図版13）。

後述する礎石と共に、茶室の建設に伴って設置された可能性が考えられたので、原位置を保っているのか否かを確認するために、十字畦を設定して、周辺を掘り下げて調べた。その結果、傾斜面の黒褐色粘質土の上に、にぶい黄橙色砂質土・黄橙色砂・黄褐色粗砂混じり粘質土（第71図2～4・6層）を置土とし、刻印石の南側下部には、板状の自然礫を積み上げて安定を図っている様子が確認された。また、この置土内から、近現代の白磁片が出土したことから、庭園を造成する際に、この位置に据え置かれたことが明らかになった。しかし、岩質からみても、他所から運び込まれたとみるよりは、元々敷地内にあったものを移動したと考えられる。

刻印はこの石の上面中央に、「二」と「〇」（一文字一星）、「四」（四つ目）が重なるように近接して併刻される。「〇」の「一」部分と「四」の左下角の一辺が重なっていて、「四」の上に、より深く「〇」を彫り直した形である。

既往調査では、「〇」と「二」は主副の刻印セットになることが多く、「〇」が必ず大きい。奥山刻印群や岩ヶ平刻印群では、長州藩毛利家所用刻印の一例と考えられている〔第31・61・92集など〕。本調査地点の刻印石も左に「二」、右に「〇」が並んでおり、刻印は幅1.0～1.5cmの線彫りである。「二」は、上の線が4.8cm、下の線が7.5cm、「〇」は「一」が6.2cm、「〇」は直径8.5cmを測るもので、この種の刻印では「〇」が最小値を探る点が特異である。

一方、「四」は、幅1.0～1.5cmの線彫りで、一辺約8cmの略方形を「田」の字状に4つ並べるが、右下の一つは隅丸方形に近い歪なものである。四つ目の全形は長辺20cm、短辺16cmの範囲に収まる。平四つ目については、京極家に関連する刻印と考えられるもので、二家所要の刻印が重なっているのは、この石材の所有



第69図 凉塚第1号墳石室・矢穴石平面図・断面図 1/50

関係の変更など、因果関係を考える必要がある。また、前田家が小「○」を用いる城郭もあり、なお刻印の主体については、詮索が求められよう。

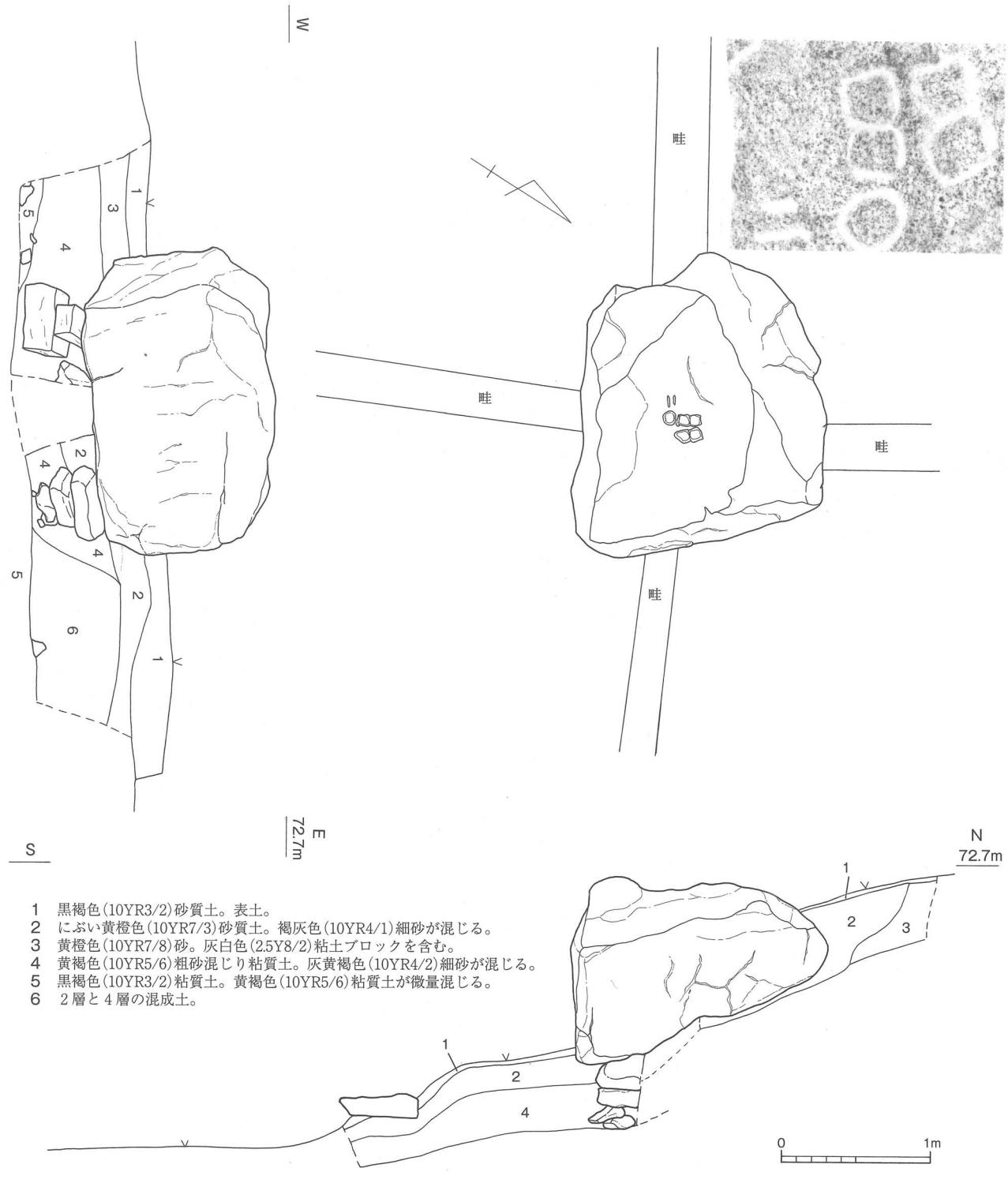
また、刻印石の規模や形状から、この石材が搬出の必要性のないもので、石切丁場の管轄や範囲を示す勝示石であったとみて、大過なかろう。

(3) 割加工石材

割加工の進んだ石材は、調査地西側の池辺の庭石に転用されているものも多く、池の北縁にあったものを「割加工石材1」、池の西部に架けられた橋の南寄りにあったものを「割加工石材2」と呼称する(第57・71図、

図版13)。この池は、深さが1.5mほどあり、池底から花崗岩巨礫を2~3段積み上げて護岸としたものである(第55図)。割加工石材1・2はどちらも最上段にあった。その他の護岸石材についても加工石材の可能性はあるが、調査時に新たな矢穴痕を持つものは確認できなかった。

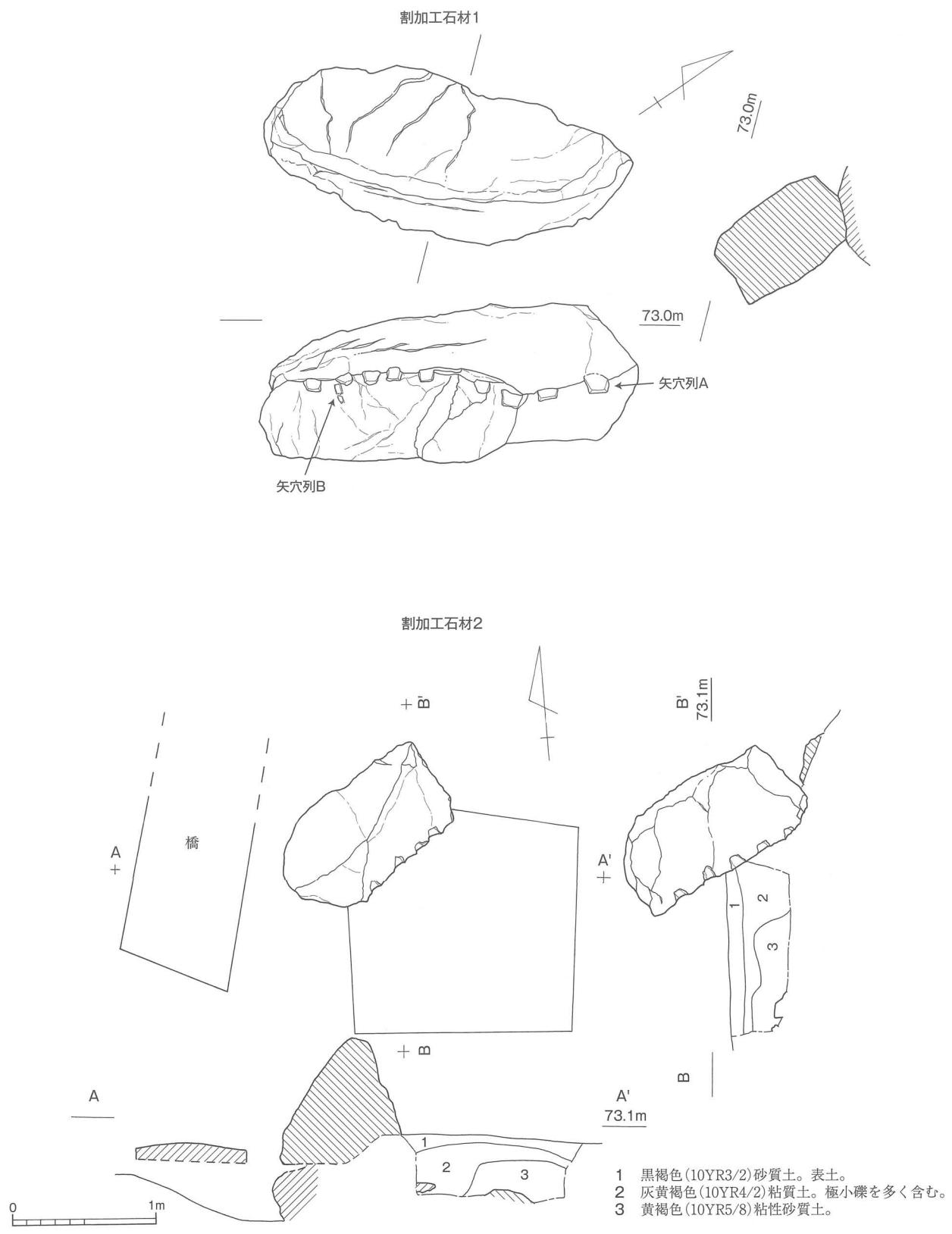
割加工石材1 池の北側護岸に使用されていたことから、採石活動時の原位置は留めていない。略長方形の割面を池に向けて俯き加減に設置したものである(第55図)。割面は、縦0.8m、横2.65mの略長方形で、上側の自然面から穿たれたAタイプの矢穴列痕(矢穴列A)と、それに直交するCタイプの矢穴列(矢穴列



第70図 刻印石実測図 1/40・刻印拓影 1/8

B) がみられた。矢穴列Aは、逆台形の矢穴痕が9個残る。矢穴列Bは2個の矢穴がみられるが、完全に彫られている矢穴が、矢口の長さ7cm、幅4cmを測る長方形であるのに対して、もう一つの矢穴は、矢口の形が橢円形に近く、長さ4cm、幅4cm弱しかなく、矢穴列を彫ることを途中で断念したようである。この石材の断面形は厚さ0.6mの長方形で、割面は1面しかなく、端石であることがわかる（第71図）。

割加工石材2 池の西部に架けられた橋の南側護岸に用いられているが、全体に風化が進行していて、石質は不良である。割面は縦0.7m、横1.7mの長方形で、長辺に5個のAタイプ矢穴痕が残る。岩質が悪く、矢穴痕のある割面ですら風化の進んだ自然面と見誤りそうなほど各面が荒れていたが、矢穴列は割面から穿たれたようである。断面は三角形で、厚さは0.8mを測る（第71図）。



第71図 割加工石材実測図 1 / 40

(4) 天井石

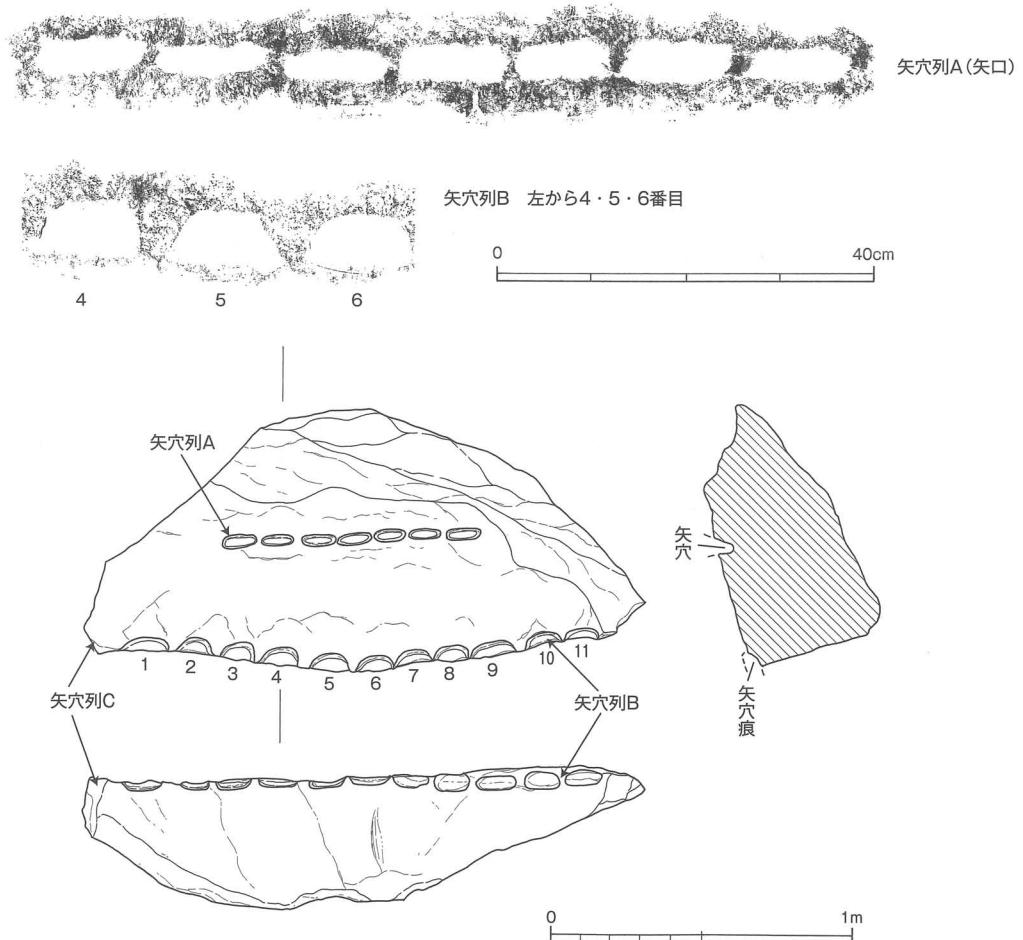
1号墳には3枚の天井石を構架していた。その中最も開口部側の天井石1は、石室天井部に矢穴列があることが、写真測量時に確認された(第60図)。このため、近世の徳川大坂城の石垣用石材の採石によって生じた端石などを、後に天井石として再利用したものと推定された。すなわち、1号墳は、江戸時代初期より後に天井石を架け直すような改変が加えられたものと捉えた。

ところが、石室解体に伴って、この天井石1の矢穴を観察すべく、天地を逆にしたところ、天井部に見えていた矢穴列は、矢口が隅丸長方形の矢穴7個を密に設けたものであることが明らかになった(矢穴列A)。さらに、この矢穴列が、浅い半円形や隅丸台形の矢穴痕11個によって構成される矢穴列痕(矢穴列B)によって先に割り出された割面を打面とすることと、矢穴列Aと同一面に、矢穴列Aと直交する方向に穿たれた矢穴痕(矢穴列C)が存在していることが確認された(第72図、図版13)。一方、石室構架時に上面になっていた面は自然面であった。

3つの矢穴列の中で最初に彫られたのは、矢穴型式からも矢穴列Bである。中央部が少し盛り上がる自然面に矢穴を彫り並べ、割面を作出している。この作業

工程を、母岩から供給される目的材を作り出すために不要な端部を割り取ったものとみるならば、天井石は端石の利用といえる状態である。この作業によって生じた割面は、新たに加えられた矢穴列Cによって幾らか幅を減じているが、底辺1.9m、高さ0.86cmの鈍角二等辺三角形を呈するものである。矢穴列Bによる割面は、石端から0.65mまでは直線的に割れたが、その先是歪な割面となっている。その後、歪になった部分を取り除いて、幅0.4m、長さ1.6m、厚さ0.4mの四角柱状の部材を得るために設けられたのが、矢穴列Aと矢穴列Cである。しかし、矢穴列Cによる小口部分の彫成は行き届かず、矢穴列Aによる石割は行われなかつたようである。

ここで注目したいのは、各矢穴の形態や法量である。矢穴列Aをみると、矢口の形態は、元和・寛永期に通有の長方形ではなく、楕円形ないし隅丸長方形である。第72図に矢穴列Aの矢口の拓本を掲げているように、矢口の法量は、左から順に、11.6cm×4.0cm、12.0cm×3.4cm、11.2cm×3.6cm、11.6cm×4.0cm、10.5cm×4.0cm、12.0cm×4.5cm、10.8cm×3.9cmで、矢穴間は、左から順に1.0cm、1.2cm、1.2cm、1.0cm、1.5cm、2.0cmと稠密な配置である。矢口の法量は、Aタイプの矢穴と変わりないが、矢穴間は1~2cmと短い傾向がある。ま

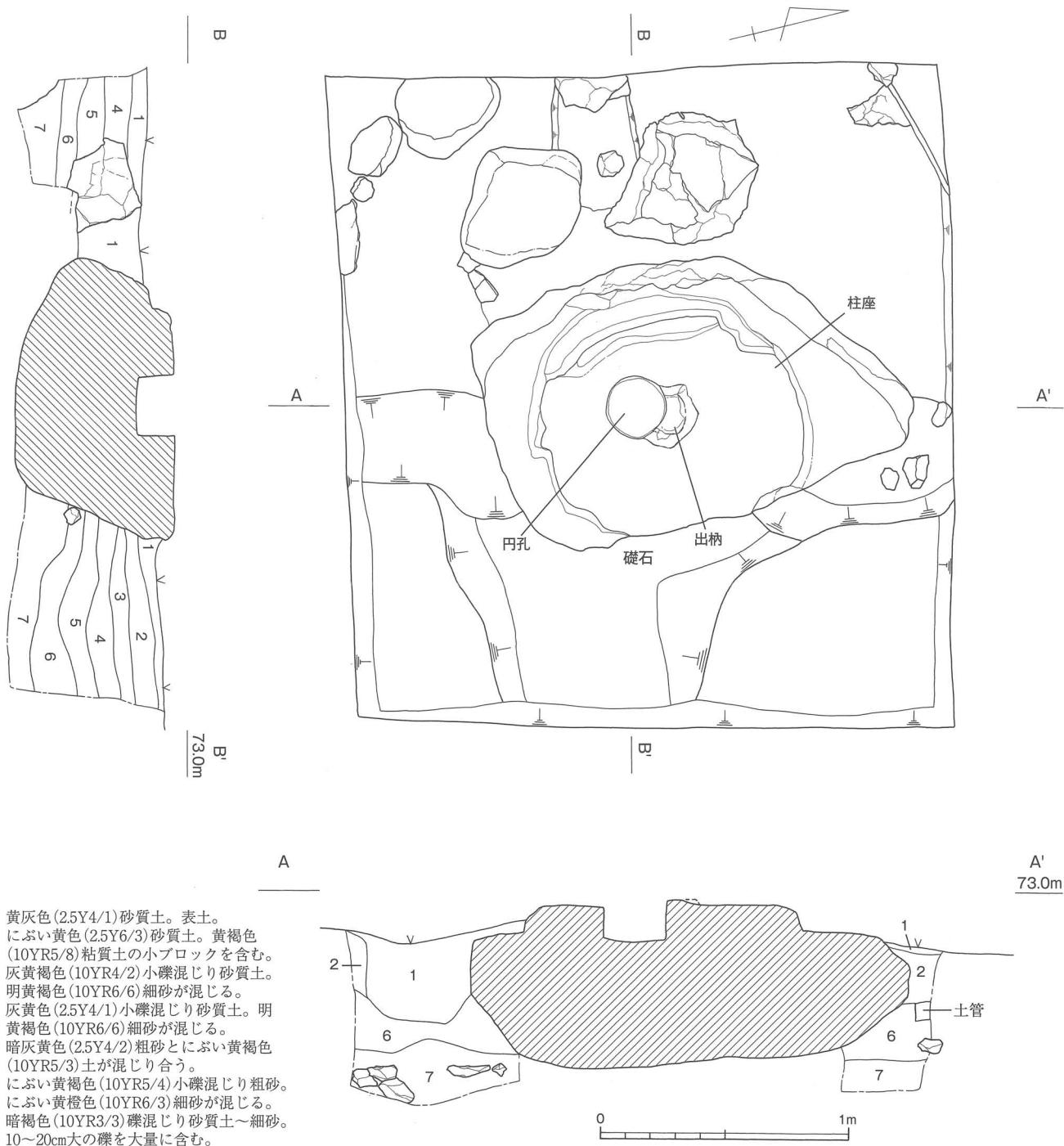


第72図 天井石実測図 1/25・矢穴拓影 1/8

た、矢穴列Cの矢穴痕は隅丸台形といえる（図版13最下段）。矢穴列Bについては、矢穴の平面形が、元和・寛永期の台形や長方形ではなく、浅い半円形や隅丸台形であることも確認された。第72図には、矢穴列Bの左から4番目から6番目までの3つの矢穴痕に限り、拓影も掲げている。左から、矢口長・矢底長・矢穴深度を測ると、11.2cm・7.6cm・6.0cm、14.5cm・6.0cm・5.5cm、12.0cm・5.8cm・7.2cmと、Aタイプより明らかに浅いものが目立つ。また、浅い半円形のものに比べると隅丸台形の方が、矢口が広く矢底が狭い傾向がある。いずれにしても、天井石に穿たれた矢穴は、15世

紀代以前に遡る古Aタイプ〔森岡・藤川2008〕である。

これまで、芦屋市域で確認された古A・先A両タイプの矢穴痕は、15世紀代の塚と目される元塚の発掘調査において出土した石仏〔第56集〕や路傍の石仏・芦屋墓園無縁仏など、石造物に限られている。天井石のような割加工石材は知られていない。今回確認された天井石は、当該期にこの地で採石活動が行われた証左といえそうに見える。しかし、石質は、地元の六甲花崗岩とは様相を異にしており、領家变成帯にかかる生駒山地系の花崗岩であろう。他地域から持ち込まれたとみて大過ない。



第73図 础石実測図 1 / 25

4. 磁石

調査地南西端にある茶室の北東側で確認された。茶室に伴う手水鉢として使用するために、花崗岩製の磁石の上面中央部に水溜の穴を穿ち、その西側には、磁石とは岩質の異なる45cm大の円礫と、65cm大の角礫2石が、手燭石や湯桶石といった役石として配されていた（第73図、巻頭図版6下段、図版13）。調査開始時点では、磁石は上面のほぼ円形の柱座のみが地上に露出していて、周囲の低位加工面は地中に埋められていた。

水平に据えられた磁石の中心を通るように十文字に畦を設けて、掘削を行ったところ、磁石のベース層は、庭園を造成した近代盛土の暗褐色礫混じり砂質土～細砂（第73図7層。以下、磁石の土層は第73図に拠る。）であった。また、磁石の脇には、層厚10～20cm程度に、にぶい黄色砂質土（2層）、灰黄褐色小礫混じり砂質土（3層）、灰黄色小礫混じり砂質土（4層）、暗灰黄色粗砂+にぶい黄褐色土（5層）、にぶい黄褐色小礫混じり粗砂（6層）が水平に積まれていた。この置土からは、土管が出土すると共に、磁石を固定するためにコンクリートが打たれていたので、二次的に埋置されたものとわかる。

磁石の平面形は歪な隅丸方形で、長軸1.78m、短軸1.2m、高さ0.66mである。上面中央部に、直径1.1m、高さ0.12mの円形の柱座を作り出し、その中心付近に基底部の直径0.25m、高さ0.03m以上の出柄を設けているが、後に出柄の中央から南にかけて、直径0.25m、深さ0.15mの円孔が穿たれているため、出柄は3分の2ほどしか残っていない。また、柱座の西側と東側には、柱座の端部を削り込むように、幅15cm、長さ約90cmほどの溝が彫り足されていて、柱座の平面形は「○」を呈す。これは磁石の上に立てられる柱に取り付く柱列配置や立壁の構造を反映したものであり、市内では初めての確認である。

磁石は、その規模・形態から、奈良時代の磁石の可能性が高い。加えて、花崗岩を用いていることからも、調査地から南南東方向に直線距離で400m、比高30～40m付近に位置する芦屋廃寺跡との関係を連想させる。当廃寺は、白鳳年間から中心伽藍が整備され始め、奈良時代に興隆したもので、この芦屋廃寺の磁石を、近代になってから当該地に持ち込んだことが推察される。

周辺の古代寺院では、東の伊丹廃寺（伊丹市）・猪名寺廃寺（尼崎市）も西の房王寺（神戸市）も、遠隔であることを踏まえての推定である。

5. 出土遺物

本調査で出土した遺物の総量は極めて少なく、コンテナ1箱分であった。1号墳・2号墳ともに石室内からは、近現代の香炉（第76図）とその台座に使用したとみられるレンガ、僅かな近現代陶磁器やガラスの細

片しか出土しなかった。しかし、1号墳の墳丘盛土（I層）や石室構築時の旧表土層（III層）からは、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・土師質土器・磁器・石鎌、サヌカイト剥片など、縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良時代・中世の多様な遺物が出土しており、当該地における重層的な人間活動の痕跡を認めることができる。また、2号墳の墳丘盛土（I層）からは須恵器と近現代陶器が出土している。

この他、刻印石の直下からは近現代の白磁片が、矢穴石東側の表土直下からは、牛の左上腕骨片（安部みき子氏鑑定）が、1号墳の調査区壁沿いで検出した井戸からは時期不明の土師器細片が出土している。また、池辺での表採であるが、「天正元年与次郎作」の銘文を持つ鉄製の灯籠笠部を確認した（図版14上）。市内では、市立美術博物館に天正年間の前例品のある鋳造品であるので、参考として付記する。

第74図には、1号墳の盛土（I層）や旧表土（III層）などから出土した土器類14点（1～14）と石器2点（15・16）、2号墳の墳丘盛土（I層）から出土した土器1点（17）を図示した。また、第75図には、1号墳の石室構築時の旧表土（III層）もしくは、旧表土（III層）と黒褐色粘質土（IV層）の層理面付近から出土したサヌカイト剥片（a～e）の写真を、図版14下段には、小片のために図化しなかったものの、種類や器形の判明する土器片（f～z）の写真を挙げている。

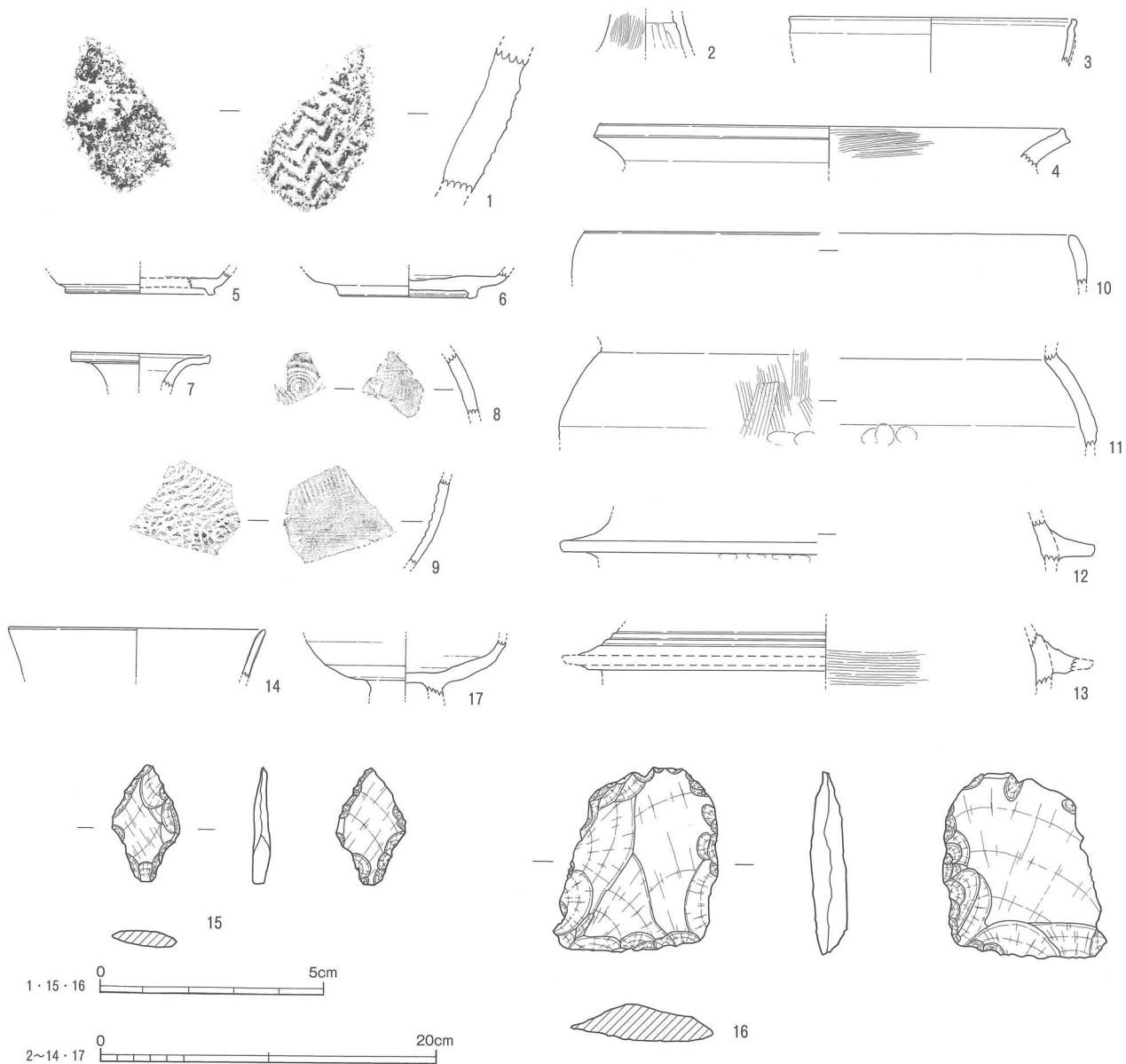
第74図の1は縄文土器、2は弥生土器、3・4は土師器、5～9・17は須恵器、10～13は土師質土器、14は磁器、15は石鎌、16は刃器である。各遺物の出土層位は、1・13・14が墳丘盛土（I層）、2・3・4・8・10～12・16が旧表土（III層）、7が現表土で、15は黒褐色を呈する地山（IV層）と旧表土（III層）との層理面付近で検出された。6・9は攪乱から出土している。5は石室開口部付近から出土したものであるが、層序は不明である。

1は、山形押型文土器片で、縄文時代早期中頃に遡る。墳丘盛土からの出土のため、縄文時代の包含層や遺構からの出土ではないが、山芦屋遺跡に関わる資料である。外面は黄橙色、内面は淡い黄灰色で、断面は縄文土器特有の暗色を呈す。胎土には微細な白色砂を含むが、明確な鉱物は含まない。施文は明瞭で、焼成は良好である。

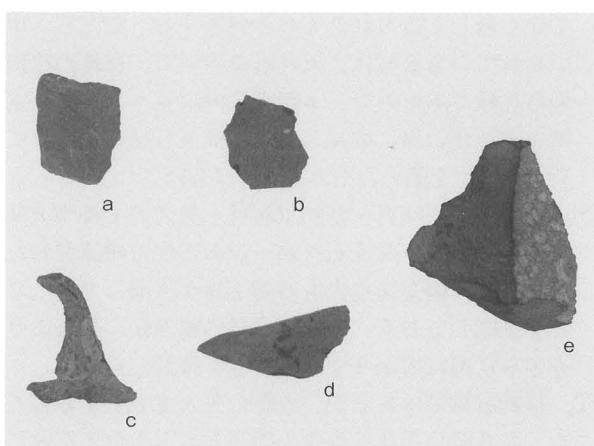
2は高杯脚部片で、中空で内面に絞り目がみえる。弥生時代後期のものである。

3は律令期の土師器杯である。磨滅のため調整は観察できないが、口縁端部の内側への巻き込みが明瞭に観察できる。4は律令期の土師器煮炊具の口縁部片で、長胴甕であろう。

5は細く小さな高台が、底端近くに付く杯で、奈良時代後半のものである。底部が完存していた高台付杯6は、攪乱からの出土であるが、底部が完存してい



第74図 出土遺物実測図 1/4・2/3



第75図 出土サヌカイト



第76図 石室内に置かれた香炉

る。ヘラ切り未調整の底部に高台を貼り付けた律令期のものである。7は長頸壺の口縁部である。口縁部は緩やかに外反して、端部は上方に立ち上がる。やはり律令期のものといえる。磨滅の顕著な8は甕の体部片で、内面の同心円当て具痕や外面のカキメが観察できる。9も甕体部片で、外面にカキメを施した薄手の体部なので、古墳時代のものといえる。

10は中世の鉢の口縁部であろう。11は壺の頸部～体部片で、外面にハケメと指頭圧痕がみえる。12は鍔部のみ残存する中世の羽釜片である。13は口縁部に複数の段を持つ羽釜である。

14は中国製青磁碗で、釉はオリーブ色を呈する。

有茎式の石鎌15は、長さ2.6cm、幅1.5cm、厚さ0.45cmを測る。サヌカイト製で、両面ともに大剥離面を生かした扁平な作りである。16はサヌカイトの剥片で、長さ4.1cm、幅3.3cm、厚さ0.75cmを測る。両面ともに剥離面に刃縁を作り出している。2側片を中心に、両面からの刃部形成のトリミングが施される。小型の刃器であろう。

17は2号墳の墳丘盛土（I層）から出土した須恵器高杯である。長脚二段透しの脚部を持つものである。ただし、同一層から近現代陶器が出土しているので、この須恵器を以て盛土の年代とは言えない。第75図に写真を掲げたものの中で最も大きい剥片eは、サヌカイトの原面を残している。縦3.1cm、横2.9cm、厚さ1.0cmを測り、断面は三角形である。

図版14には、この他にも、本調査地出土の土器細片21点の写真を挙げている（f～z）。それぞれの出土層序は、fが現表土、h・k・l・u・vはが墳丘盛土（I層）、g・i・j・m・n・o・p・q・r・w・x・y・zが旧表土（III層）で、s・tが旧表土（III層）と黒褐色粘質土（IV層）の層理面付近からである。

f・g・hは、古墳時代～奈良時代の須恵器杯口縁部である。i・jは播磨産とみられる淡灰色の須恵器杯体部である。kは古墳時代～奈良時代須恵器杯、lは律令期の須恵器壺であろう。mは中世土師皿、nは須恵器杯身、oは瓦器椀の口縁部、pは13世紀頃のものとみられる土師皿である。qは須恵器杯身底部、rは5世紀末～6世紀頃の須恵器甕体部、sは古墳時代須恵器提瓶片、tは古墳時代須恵器甕片、uは古墳時代～奈良時代の須恵器杯である。また、vは東播系須恵器碗、wは須恵器杯、xは古墳時代須恵器杯片、yは律令期の土師器杯口縁部片、zは古墳時代須恵器甕片である。この他にも、土師器や須恵器、瓦器の細片が少量出土しているが、第75図や図版14所収のものと、帰属する時期や器形に差異はない。

第76図の香炉は、左が1号墳の石室内に、右が2号墳の石室内に置かれていたものである。前者は高さ5.7cm、後者は高さ7.5cmである。これらは近現代の資料であるが、近年まで、両石室が「塚」として信仰の対

象とされていたことを示す資料である。

以上のように、1号墳の墳丘盛土（I層）からは、縄文土器や古墳時代～奈良時代の土器と共に、中世の羽釜や東播系須恵器、青磁が出土している。石室構築時の表土とみた褐灰色土（III層）にしても、サヌカイト片や弥生土器、古墳時代～奈良時代の須恵器・土師器と中世の土師皿や羽釜、瓦器が共存している。旧表土（III層）と黒褐色粘質土（IV層）の層理面付近で見出されたものは、サヌカイト製の石鎌と古墳時代の須恵器片のみで、中世に下る遺物は認められなかった。

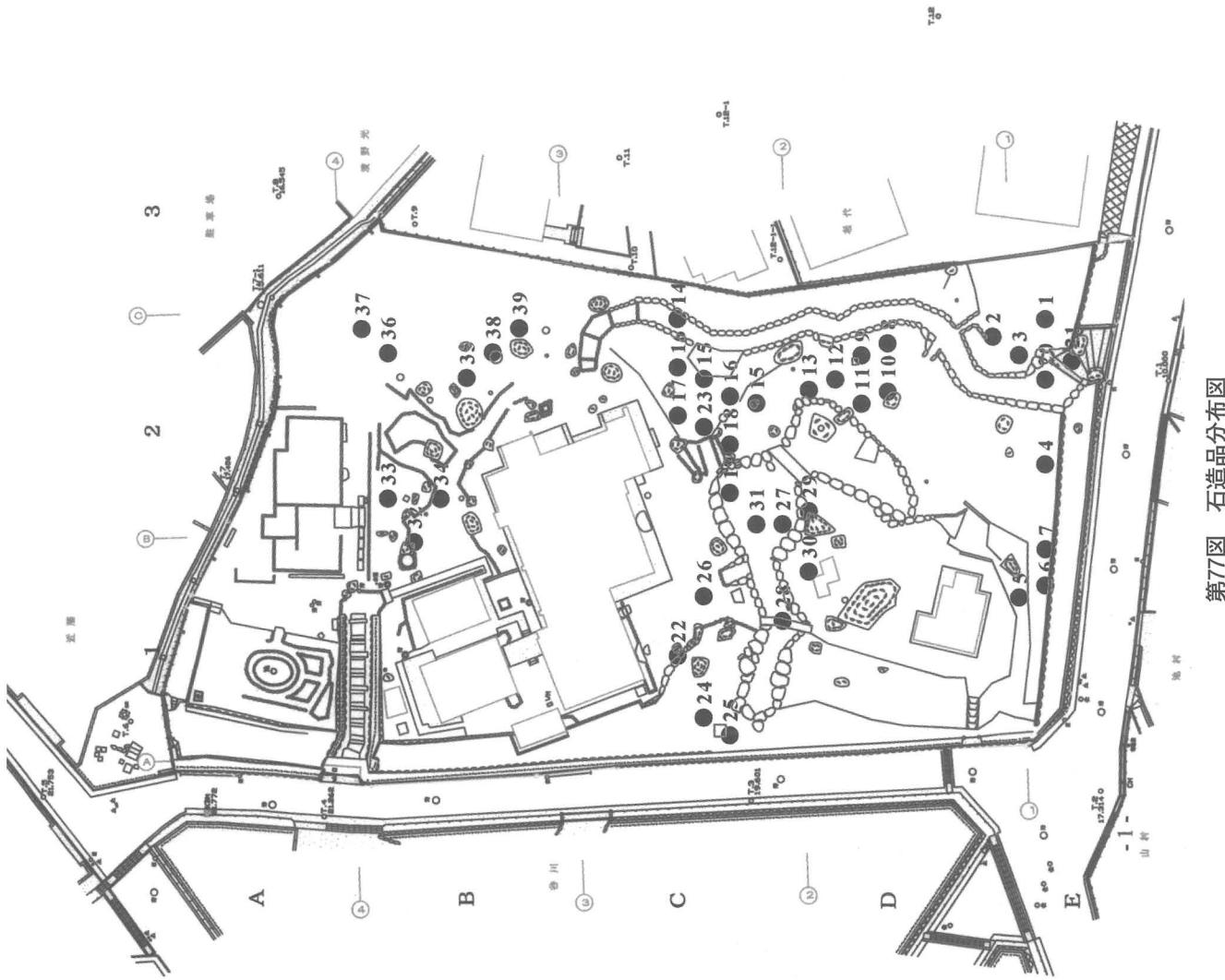
これらの遺物の出土状態から、石室構築の年代が中世より古くに遡ると明言することは難しい。しかし、古墳時代後期～律令期の土師器・須恵器が相当量存在するということは、本調査地点やその周辺に、確実に後期古墳・終末期古墳が展開していたことを示唆している。1号墳については、墓壙の掘り込みや右側壁の様相をみると、もともと小規模石室墳が存在していたものに中世以降に手を加えたと考える余地はある。

ところで、本調査地内には、造園に際して、数多くの石像物が配置されていた。その多くは灯籠であるが、多層塔や水鉢、縁石等もみられた。これらは、他地域から運び込まれた石材とみられるが、以下、位置図（第77図）と一覧表（表1）を付すにとどめる。

6. まとめ

以下に、調査成果を集約する。

- ① 縄文土器・弥生土器・サヌカイト片の出土からは、山芦屋遺跡の範囲が、当調査地点付近まで広がることが明らかになった。
 - ② 凉塚1号墳・2号墳は、石室の遺存が確認されたが、両石室を古墳時代のものとする根拠は得られなかった。ただし、1号墳については、本来その位置に石室墳が造営されていたものに、中世以降に大きく手を加えたとみる余地は残る。2号墳については、その形態・用石方法・基盤層の状態などから、近代になってから新しく造られたものと判断する。ただし、用いられている石材は、天井石を除いて、在地の花崗岩自然礫であるので、本調査地内に元々あった石室墳を宅地化の際に破壊し、その構築石材を転用して新たな石室を築いたとみることは容認されてよい。
 - ③ 矢穴石・刻印石・割加工石材・矢穴列を持つ天井石といった採石関連石材が一定の密度で確認されたことは、本調査地点にも石切丁場が展開していたことを意味しており、城山刻印群の範囲が、従来よりもさらに南に広がっていたことを確認した。
 - ④ 移動石材ではあるが、中世の矢穴痕を有する割石や、奈良時代の芦屋廃寺の礎石ともみられる石材の存在が明らかになった。
- なお、③・④の資料には、単体としても保存価値がきわめて高いものが、二、三含まれている。



第1表 石造品一覽表

番号	名称	位置	備考
1	灯篭	2E	利休好み灯篭1の地輪、反花紋
2	灯篭	2D	利休好み灯篭1の壺、蓮花紋
3	灯篭	2D	利休好み灯篭1の柱(竿) 節なし
4	延石	2E	長方形、延石2~4に繋がる階段
5	延石	1D	長方形、延石2~4に繋がる階段
6	延石	1E	長方形、延石2~4に繋がる階段
7	延石	1E	長方形、延石2~4に繋がる階段
8	灯篭	2D	西ノ屋形灯篭4:火袋下部、蓮花紋
9	灯篭	2D	西ノ屋形灯篭4:正方形に格子紋
10	灯篭	2D	西ノ屋形灯篭4:火袋上部
11	灯篭	2D	西ノ屋形灯篭4:壺
12	灯篭	2D	西ノ屋形灯篭4:宝珠・玉
13	灯篭	2D	西ノ屋形灯篭4:地輪・柱・受鉢、蓮花紋
14	灯篭	2C	春日型灯篭3の火袋、円窓
15	角柱石	2C	単純の墨石?、銘文あり
16	灯篭	2C	春日型灯篭3の受鉢(中台部分) 蓮花紋
17	灯篭	2C	春日型灯篭3の壺、藤手紋
18	灯篭	2C	春日型灯篭3の柱(竿)、節紋
19	灯篭	2C	春日型灯篭3の地輪、反花紋
20	灯篭	2E	利休好み灯篭1の受鉢、桐紋
21	角錐石	2E	2対門柱の左側
22	水鉢	1C	縁先手水鉢
23	灯篭	2C	春日型灯篭3の宝珠・玉
24	灯篭	1C	六角形雪見型灯篭の脚部分
25	灯篭	1C	六角形雪見型灯篭の受鉢・火袋・笠・宝珠
26	層塔	1C	九層塔(多重塔):基礎・塔身・相輪
27	灯篭	1C	池の中に受鉢と転倒
28	灯篭	1C	池の中に転倒
29	灯篭	2D	灯篭作者銘文「与次郎作」有
30	礫石	1D	腰掛待合建物の小型礫石、中央に脚穴
31	灯篭	2C	池の中に桃山形灯篭6火袋・宝珠と転倒
32	水鉢	1B	原位置で転倒。大型の水鉢、花崗岩製
33	灯篭	2B	原位置で転倒。笠の藤手は四方向
34	灯篭	2B	地輪・柱・受鉢・火袋・笠・宝珠
35	灯篭	2B	春日型灯篭11:地輪・柱・受鉢・笠
36	灯篭	2B	利休好み灯篭13:基礎を含めての部分
37	灯篭	2B	利休好み灯篭13:基礎を含めての部分
38	灯篭	2B	春日型灯篭11:基礎を含めての部分
39	灯篭	2B	春日型灯篭11:基礎を含めての部分

第4章 八十塚古墳群・三条古墳群・徳川大坂城石切場 発掘調査成果の総括と展望

第1節 岩ヶ平支群G小支群の発掘調査成果の若干の検討と二、三の課題

1. 岩ヶ平支群第16・17号墳2基の支群内における位置付け

(1) 前提となった調査環境

均質度の高い古墳群と調査概況 芦屋市東部から西宮市西端の六甲山地東南麓山裾の高位段丘面に展開する八十塚古墳群は、往時は総数100基を超える古墳時代後・終末期の典型的な群集墳である。摂津全体でもその名はよく知られており、1950年代からの発掘調査もかなりの蓄積を生み、1970年前後からの多角的な研究も一定進んでいる。現状における古墳の確認数は、70基にのぼる横穴式石室内蔵墳であり、発掘調査や確認調査が行われた古墳は、既に52基に達する。円墳系と方墳以外の墳形に関しては、小型の前方後円墳も一切存在せず、巨石墳など盟主的勢威を誇示する古墳も皆無である。ただし、木炭敷の竪穴系の極小石室は期を隔絶しての存在となる。これまでに伝統的な古式の木棺直葬墳の確認例もなく、内外の構造は、等質性の高い横穴式石室から成る群集墳と言える。

かろうじて残る景観的特性 今回の調査地点は、通称灯籠池を含む面積約6,200m²の地目山林を対象とする規模の大きい宅地分譲地のまとまった地籍の造成開発であり、最終的には2基の古墳の記録保存調査となつたが、いくつかの新しい成果を得たと言える。この地区一帯は、少なくともこの40年間、景観自体が不動を示す所であり、植物・水生・溜池諸施設・通時的水利権などの関連調査が事前に行われなかつたことは口惜しい。

(2) G小支群の選地環境及び存在意義

支群・小支群構造の把握 2基の横穴式石室墳は、行政上は第5集において既に公にされ、第11集における支群分けの記載や埋蔵文化財包蔵地分布地図で、より周知が徹底していたものである。1970年代前半には実際に歩き、中に潜り込んでの悉皆的な分布調査を行つておらず、発掘調査以外では周辺部での存在基数の増加はなかなか見込めないと思われた。未知数の多いこれらの群集墳の内部構造としての位置付けは、従前、群名自体の改称、地形と密集度に基づく支群・小支群レベルの掌握として順次堅調に進んでおり〔森岡1973・1979、第33集、第67集〕、G小支群の呼称とその包括性を変更することなく、本書でもこれを踏襲した。総じて指摘できることは、以下の3点であろう。

小支群の定立と小支群間にみられる発現差 第一点は、群集墳形成の最小的集団単位として生得的に設定している小支群構成墳の実態が、同時築造ではない存在形態を依然保つことである。6世紀末に築造された16号墳（有袖式）に対し、17号墳（無袖式）の造営はおよそ半世紀遅れ、7世紀後半に入る。この傾向は、発掘調査の進んでいるB・E・F・H・I・Jの各小支群ともよく類似した動態であり、経営期間にみられる空白期は重要な展開要素の一つと言える。隣接墳に連続的な築造契機が乏しいことにむしろ歴史的な意義を感じるわけである。

第二点は、幅広い岩ヶ平丘陵のほぼ中央を南東に貫流する通称ドンドン川に面した小微支尾根の両側において、支群内の古墳分布の稠密度が最も認められることにも意を払いたい。E・F小支群では、18基を数える横穴式石室墳が墳裾を接するように密集する状況が窺える。丘陵面では、傾斜変換に相当する地域であり、コンタが込み入る斜面角度を増す地形に意図的な築造をあえて加えていった経過を読み取ることが可能である。地形による制約とは裏腹な現象ではあるものの、ここではその有意性を強調したい。

第三点は、本小支群を含む緩傾斜地選地の小支群（A～D・H小支群）の古墳分布密度がかなり散漫な状況を呈して共通することである。墳間距離は平均40mを保つものであり、全般的に間隔が空く。これも偶然とは言い難い。第二点として指摘したE・F小支群の形成過程とは対極的なりようであり、岩ヶ平支群の高位部と低位部を分かつ特徴の一つでもある。G小支群はそのうち後者に属するものとして理解している。

なお、同一小支群構成墳の開口方位も有意性がみられることが多く、A類型よりB類型に近いA'類型の範疇で同類型として理解されてきたこと〔森岡1979〕を付記する。

(3) 岩ヶ平第16号墳石室の態様とその分析

特殊性としての左片袖形採用墳 本墳の横穴式石室は左片袖形を採り、用材を大きく欠くものの、構造的には畿内型石室の範疇で理解される（袖は通時的变化を示す区分なので、型式タイプではなく、形式フォームとして捉える）。袖諸形式のうち、左片袖形は八十塚古墳群内全体ではマイナーな石室形式であり、両袖形3例、左片袖形2例、右片袖形11例を数える。全国的趨勢である右片袖形優位の傾向にあって〔森岡1983c・1989〕、実数の上では稀少例と言える。袖の理解に関しては、〔白石1966〕に与する理解も立地要件から可能な事例にはなる点にも留意しておきたい。

16号墳石室は、玄室幅1.78m、玄室長4.00mを示し、長幅比1:2.24という数値となって、1:2ラインと1:3の古墳群内の基本的パターン〔第67集〕のほぼ中央に収まる。最も近似するものは右片袖形になるが岩ヶ平58号墳であり、石室各部位の計測値も10cm以内の微差でほどよく合致する。左片袖形の前例として唯一引き合いに出せる岩ヶ平5号墳は、玄室長が0.5m短く、石室全体の大きさにも同形式内でのランクサイズが認められる。女性被葬者の想定される5号墳との間には、別次元での相違があつてもよい。

壁体の構成 石室構築石材用石法に基づく群内壁面構成分類は、当古墳群の発掘調査データを網羅的に扱った〔森岡1979〕を嚆矢として、全国的な追研究〔太田2002・2007〕などで詳細を極めてきたが、畿内型石室の構築原理、範疇にあっては、一貫した発達や退行の方向性が判明しており、石室型式編年がおよそ完成の域に達している。

一般的に、畿内型石室は使用石材が小規模のものから、大型のものへと変化するのが常態であるが、著しい変化過程は今日袖部構成石材の変化をメルクマールとする研究〔太田1999〕が定着をみせており、より体系的な研究成果も著されている〔太田2007〕。また、近年では、片袖形の袖無し側の石材配置の変化に着目した異色な分析も進みつつある〔奥田2016〕。

本石室の場合は、やや変則的ながら片袖部に玄門立柱石が存在し、その上に直接羨道天井石が直接構架されるタイプであり、比較的新しい構造を示す。16号墳は、太田分類の袖部4類に比定し得、築造時期を示唆する。

(4) 岩ヶ平第17号墳石室の態様とその分析

無袖形に占める位置 本古墳の石室は無袖形である。幅1.20m、長さ5.50mを計測する大きさで、残存高は左側壁が最大で1.28mを計測する。

無袖形の石室は、原則的に有袖形からの退化傾向を追うことが可能であり〔森岡1984a、土生田1991〕、六甲山系の石室墳をモデルとした前者の分類案では、甲型・乙Ⅰ型・乙Ⅱ型の3類に類別した。本石室は敷石の見られる乙Ⅰ型ではなく、敷石が敷布されない乙Ⅱ型に適合するもので、单次葬の埋葬である調査結果ともよく合致する石室型式である点が強調できよう。岩ヶ平54号墳は無袖形偏在域では大きい印象を抱く主体施設であったが、本例はそれに伯仲する。

奥壁構成 17号墳奥壁の構成を基底主材と上載副材の組み合わせを基調とする2/1型と仮称し、群内で比較する。天井石まで残存する例を欠くため、苦楽園6号墳を典型とする主材全面の1大型は少数存在する(岩ヶ平55号墳など)。左右いずれかに縦石使いの補完材を充てる岩ヶ平15・53号墳、苦楽園1・5号墳は、1/1型・2/1型を補う以外に、1大型を補足する

ものもあり、多様である。本墳に近似する積み方のものは、岩ヶ平60号墳や苦楽園2号墳などが例示できる。

側壁弧状積み構築の変則性について 報告したように、17号墳の側壁は特殊な築壁工法が採用されている。

詳細は繰り返さないが、石室中央部から開口部に向けて施工された第2・3段構築にみられる築石の反りかえるようにして積む独特の方法であり、群内無袖形では初出例として強調しておきたい。さらに上部の石材には大きな制約を与えていることは、残存石材の様相からも看取されよう。他の無袖形と比較すれば、逆弧状の例が苦楽園1号墳左側壁に確認できるが、それは根石の配置に遠因があるので、本墳とも様相を異にする。

墳形の見究めと方墳志向の公算 無袖形石室によく採られる墳形の方墳採用は、その兆候が開口部列石存在の微証や直線的に造作の加わった東側周溝の様相にみられ、本墳もその蓋然性は高いと考える。石曳き道やコッパ集積部などの後世の遺構に伴う改変を引き算しつつの墳形復元への余地を多分に残している。八十塚古墳群では、看過できぬ数の方墳が既に確認されているからである。

改葬の可能性 石室最奥部には後に考証を加える古式の飛鳥時代土師器杯があり、穿って埋葬者の所持品と判断した場合、仮埋葬に携えた土器の改葬品とみなす考え方も提示できる。それでも本石室埋葬者が1名で、大勢を占める7世紀に大きく下降する収斂期を持つ須恵器群が、本墳の築造時期と推すことに大幅な狂いはなかろう。ただし、この土師器を杯Aとみるならば、年代の先行しない土器ということになり、年代の横並びする土師器・須恵器の一括副葬が支持される。あくまで、築造時期にぶれは出ず、単体埋葬を象徴するものである。

(5) 本小支群編成原理の一端について

類推される被葬者間の諸関係 発掘調査の結果、岩ヶ平16・17号墳の築造時期が6世紀末と7世紀中頃過ぎにそれぞれ推定され、半世紀前後の時間差が存在することが判明した。緩慢な時間的変化の中で緊結度の弱い小支群の形成が進んでいったことを示唆するが、副葬土器類の上限年代は580年代後半～605年(16号墳)と660年前後(17号墳)を示し、かなりの世代交替を示唆する。接近する次世代の造営とはみることができない。16号墳の初葬者と17号墳の被葬者が同世代の人物でないことはこうして明らかであるが、二次、三次の16号墳追葬者の中には17号被葬者と日常を共にするような関係があったことまで否定することはできない。ただし、これは生前の社会的位置を前提とした議論であり、墓制における実態は不分明に尽きる。

その間、畿内型石室の型式変遷は、型式を超えた形式レベルでも有袖形から無袖形に移行しており、木棺

材の厚みや副葬土器類の質・量、鉄製品などにも薄葬化の動きは認められる。例えば、提瓶から平瓶への器種交替が進行し、無蓋高杯なども低脚化や無窓化への変質も急速に起こっている。両墳間で被葬者、とくに古墳築造の契機となった人物の性格・階層や従属集団にも大きな差違がみられるようである。

無袖形乙型の時代と17号墳の築造 支群内において、有袖形→無袖形乙I型式ないしは乙II型式の変化が小支群内で完結する具体例はこれまでにも存在したことは既に記述した。その変化が一斉と言われる程に時間的小差になるか否かは、群集墳や支群単位の詳細な分析が今後も必要であり、八十塚古墳群全体の課題でもある。新興的な苦楽園支群（西宮市西端）の成立などを顧慮するなら、無袖式の採用は、群内の新支群の経営開始を契機として〔森岡1973・1979〕、既成支群の刷新を小支群単位で進めた造墓集団の墓制の動態と捉えることは許されるだろう。

（6）石室細部構造の分類上の位置と意義

岩ヶ平16号墳の石室規模と玄室クラス 畿内型石室の構造については、横断的な共通事項・属性が各部位に貫徹されることが最大の特徴とされ、構築情報そのものが畿内政権下の内部領域に精密に貫徹的に直接伝わったことが説かれている〔太田2007〕。議論され始めた古墳時代の畿内政権論自体の是非〔古代学研究会編2015〕については、この際措くとして、以下では、その論点も加味しつつ、西部摂津地域の既往データの中で岩ヶ平16・17号墳の石室規模から再検討しておく。先ず有袖形の16号墳を俎上に乗せてみよう。

完存しやすい玄室の長さの統計値は、0.4m間隔のヒストグラム〔第33集〕によれば、玄室長の高頻度分布域は3.2~4.0mに安定してみられ、次いで4.4mが落ち込むものの、4.8mにも大きなピークが見て取れ、総じて玄室長5.2m以上では極端に僅少化する。これをもって当地域の大型石室の範疇に含める弁別案は概ね首肯でき、16号墳は計測値4.00mなので、標準スケールの石室とみて差し支えない。

岩ヶ平17号墳の石室規模の理解と変遷上に占める位置 無袖形は石室の平面的な規模に留意しても築造微差の流れがあるようであり、苦楽園1・5号墳をモデルにするような大型クラスのものと、岩ヶ平24号墳を典型とするような小型のものが営まれている。岩ヶ平56号墳は後者の延長上に置かれることも容認されるプランであり、より大型で敷石を施すような岩ヶ平55号墳のような追葬証左を留める石室が型式学的には先駆する蓋然性も高い。それに先行して、甲型が存在することは、言うまでもない。

敷石床面と二次床面の存否問題 17号墳は割石などを散布した二次床面を敷設していないものと判断した。他方、群内にあっては、岩ヶ平15・54・56・60・61号

墳、苦楽園24号墳などの無袖形に敷石床面が認められ、岩ヶ平55号墳は、整正な並びの床石を持つ第1次床面の上に、さらに石材の散布が確認できる第二次面が存在する。55号墳では、初葬と追葬の関係が想定されている〔33集〕。54号墳石室の石室は大振りの割石3枚を含む敷石面が奥半分に偏在する。

（7）副葬品類からみた諸問題

副葬品目の特徴と類型化 通常、発達期の横穴式石室からは副葬品として、須恵器・土師器・耳環・武器（刀剣・鉄鎌）・工具（鉄斧）・馬具・鍛冶道具などがみられる。これらは大きく2類型に分けることは可能であり、土器類と装身具（耳環・玉類）が主体となるA型と土器類の豊富さに加え、装身具・武器・馬具が品目として顕在化するB型とがみられる。これは石室単位の固有の現象に留まらず、古墳時代後期の社会集団の編成階層や母体となる集落の性格の違いに根差して、いわゆる群集墳単位でも粗削りな識別は可能である。当方では八十塚古墳群は典型的なA型、城山古墳群・三条古墳群は象徴的なB型と理解されてきた。前者は一般集団を母体とするもの、後者は単なる群集墳としての一様の理解ではなく、盟主層独立墳の通時的累積を明示するものとの対比的説明〔森岡2002〕はその態様差を衝くものとして既にある。しかし、近年では発掘情報にやや変則例も看取され（岩ヶ平56・58・61号墳など）、これらに16号墳の副葬種目（馬具：宝珠鉢付花形飾り金具・鏡片・轡片）を加味すると、特筆すべき金属製品が入ってくる場合（双龍環頭大刀）〔第99集〕や馬具の複数のパーツが組み合ってくるケースもあって、A型を2区分する必要も生じてきた（装身具主体のA I型、武器・馬具のパーツが少量加わるA II型）。16号墳や61号墳の実情は、今後、A II型としての性格も絡み、被葬者の階層研究や副葬金属器類の流通・供給関係の比較調査をさらに深化させることが要請されよう。後期古墳における馬具の組み合わせについては、各地の比較研究が次々進められており〔尼子2003・2012など〕、芦屋地域のA II型は尼子類型区分との符号関係など、向後、より詳細な見究めが必要と思われる。

須恵器 本群集墳は陶邑編年T K43~T K217型式〔田辺1966〕併行期の土器を副葬することを盛行期間の示標とするが、本報告の2基もその例外ではない。副葬器種では石室内部の構成が杯H・杯G+無蓋高杯が多いことを特徴とするが、器種そのものは盗掘の禍に会いつつも16号墳が豊富であり、轡・台付轡や長脚の無蓋高杯・壺・台付壺なども加わる。杯Hの陶邑対比様相〔大阪府立近つ飛鳥博物館2006〕では、17号墳はII-6古段階のT G32やII-6新段階のT G61に併行する型式のものも含め、全く加わらない点が先ず重要であろう。杯H消費の著しい衰亡を示す。一方、16

号墳には、築造時期や先葬者に伴う一定量の杯Hが存在し、窯型式TK118併行資料（II-4段階）、TG63-I併行資料（II-5古段階）がみられる。また、杯蓋の天井部ヘラ削り面積が退潮を示す。總はII-5段階（田辺編年TK209型式古段階併行）の築造時期を示す牧野古墳（奈良県馬見古墳群）出土土器に相前後するものであり、6世紀末頃の他の器種類との共存関係は1世代以内とみて大過なかろう。

他方において、16号墳・17号墳では偶然にも近似する杯Gの組成に恵まれた。図示したように、16号墳羨道追葬棺の杯G蓋4点、杯G身5点（第25図）、17号墳造営時の杯G身6点、杯G蓋2点（第39図）であり、後者には対照的に無蓋無透しの低脚高杯が共存的に加わって、室内に用意副葬され、被葬者に備えられた須恵器としての淘汰度の高い型式から成り立っていた。大枠にあっては、両墳杯G類の異同も気にならないが、杯蓋・身の口径・器高・器形・製作手法には判然とした仔細枠での違いが認められる。

これら杯Gと対比すべき飛鳥編年では、飛鳥II段階が射程に入るが、最近はその3段階区分（古・中・新）が準用されるとともに、難波宮編年〔佐藤2000〕も参照される。それと同時に、矛盾も編年上の論争点になっている〔森川2015、佐藤隆、2015小田〕。陶邑編年の二様〔田辺1966、中村2001ほか〕は生産地の時間軸であり、文献史料とも参照を図った飛鳥京跡や難波宮跡は消費地編年であるため、その精緻度も大きなノイズとなって、追葬を伴う地方群集墳出土須恵器にどこまで有効な年代観を齎すかは疑問も多い。しかし、16・17号墳の杯類に関しては、微妙な差異が衆目を引き、二墳の関係性を言及する恰好の素材と言える。

報告の記載とも多少前後するが、16号羨道追葬棺に伴う杯G群は、最近の重見編年飛鳥II新段階の示標とされる水落遺跡漏刻貼石遺構の杯群に近い年代のもので〔重見2014〕、660年代におそらく一点を有し、遺構廃絶の667年を下限とする。対して、17号墳杯G群はやや新しい属性が複数個所加味される点に違いが認められ、飛鳥III古相域の参照枠が欲せられる。この一群に高台付の杯Bこそ伴わないが、飛鳥II新段階の様相を保ちつつも、667年以降に編年される飛鳥III古相にも一部併行関係や触れ合いがあると考えたい。難波宮III中段階の資料は、幅を有しており、飛鳥池谷と坂田寺池とに跨る触れ合い関係が強調されている〔佐藤隆2015〕。難波宮整地層中に水落遺跡階梯の資料があるとして、前期難波宮造営期の年代問題に肉迫する論〔白石2012〕にも批判が寄せられている論争下、650年代を要にIII中段階の位置付けやIII新段階の盛行などの諸現象が強く説かれる〔佐藤隆2015〕も踏まえる必要があるだろう。こうした細かな議論が横穴式石室墳では全く行き辛い限界も感ずるところであるが、難波宮編年〔佐藤2000・2014〕のIII新段階とも絡む須恵器

杯Gの副葬土器であることだけは、容認してよいのだろうし、改めての検討が期待される。

いま一つ問題点に言及するなら、川原寺下層SD020に代表され飛鳥I段階（下限年代640年）や山田寺下層整地層（641～642年）→甘櫻丘東麓焼土層SX037（645年前後）→飛鳥池遺跡谷SD809灰緑色粘砂（655年頃）→坂田寺石組池SG100（660年頃下限）とする飛鳥II古・中段階進行過程の杯G類を大きく欠いている点であり、器形を減少させ、頻度のセリエーションとしての衰減を明示する杯Hの共伴度も絶無であることとも背反しない事実が見過ごせない。つまり、たび重ねて強調するように、少なくとも半世紀近くの間を経て、16・17号墳の造営は、間延びした継起的展開を遂げるのであり、小支群経営の緩慢な時間的流れが逆に注意を引くのである。

土師器 問題視される17号墳出土土師器杯（第39図1）は飛鳥時代の金属器志向の精製器種群〔西1978・1982など〕のC形式とみれば、飛鳥Iでも前半期に遡上可能な部分要素を持つ。飛鳥地域の近年の編年研究〔重見2014〕では、小墾田宮推定地石組溝SD050出土土器・推古即位地豊浦宮下層土器（下限592年）・飛鳥寺西回廊基壇出土土器（592年前後）併行期のものとみられ、狭山池北堤窯年輪年代616年上限の飛鳥I新段階に下降する川原寺跡下層斜行大溝SD020出土土師器杯Cに先行する。畿内中央部からの搬入品もあり、製作年代は595～610年頃と捉えているが、石室内では質量・年代併せて過分に孤立化する。そこで、さらに暗文をはじめ細部手法や器形の検討を経て、翻つて杯A形式と捉え直し、飛鳥II新段階の帰属と見なせば、667年廃絶を下限とする水落遺跡配石漏刻遺構資料併行とみた須恵器杯Gの一群の年代とも大きな矛盾はなく、未共伴であった須恵器杯Bなどとの関係も有意性を保つ。

一方、16号墳出土土師器（第22図26）は、微細片ながら器高を減じ、放射暗文間隔の空く杯Cの退行型式とみて過誤ではなく、飛鳥IV新段階にまで下降するような資料も含まれていることになる。この時期の追葬を肯定することも容かではないが、本書では敢えて早期の再利用とみなしておきたい。

第2節 岩ヶ平における石切丁場の様相をめぐって

1. 複合遺跡としての群集墳と石切場

(1) 古墳と石材調達地

これまで、古墳と徳川大坂城関係の採石場を共に取扱いってきた、本市の60年にわたる埋蔵文化財の発掘調査活動は、他地域の先駆をなす点で異色のものである。花崗岩石材を共有し得る点で、複合遺跡としても常々複雑な絡まり方をみせてきており、今次調査も石

切場の調査としてXXV IIの通算報告番号が与えられるものであり、群集墳の記録保存調査とは別に、採石稼動のユニットを意識した調査を実施した。また、その領域を超えて結び付きのみられる石曳き道などが先行する古墳の経年変化と複雑に重複しており、遺構は寸断、断片化しているものの、要所を点綴する形での発掘調査を遂行した。

(2) 築城石の利用 豊臣から徳川へ

横穴式石室の用材も築城石と同様、黒雲母花崗岩や花崗斑岩であり、その部材が転用を受ける公算は非常に高い。実際天井石の多くを完全に失った石室が目立つ岩ヶ平支群では、徳川期の大坂城石垣再利用は天井石にほぼ限られ、壁体構架から外しての円滑な割石工程を示す例は、その多くが原位置から大幅に移動したものとみなされる。しかし、石室の構架材は角石や角石材には必ずしも適したものではなく、かろうじて一部の築石利用に留まっていたと考えられるし、石室原位置状態での割加工は全くないに等しい点には留意すべきだろう。より古い粗割加工石や自然石そのものを用いる頻度の高い豊臣大坂城期の再利用においては、尻を持つ控えの長い横穴式石室特有の側壁体石材が対象になる可能性はあるにせよ、石室の解体に踏み切るような大規模な石材採取には消極的だったと思われ、矢穴技法の施工も抑制されている関係から、確実な割加工は同様に確認されていない〔藤川1972、森岡2015〕。

2. 1・2号石材の残存状態から

(1) 現状確認状況と調査進行後の相違点

表面観察では、発掘にかかる前から視認されていた1・2号石材周辺の採石単位は、築城石確保を狙いに据えた単材を対象とした割石工程を示すユニットであり〔森岡・天羽2009〕、現状での広がりも16号墳の選地が旧地表の巨礫の転石群を回避しつつ行われたことを考えさせる。調査前の態様認識は、母岩を要に据えた採石土坑で、周辺において回転割加工を進めたことが予測された。同時に姿態の大部分が自然埋没する1・2号石材が同一母岩から生じた石材との理解を基礎に置いて発掘を進めたので、石材間の接合関係さえ当面は意識した。

採石ユニットの実態 結果としては、1・2号石材共に高位段丘礫層中の巨礫であり、池田分類〔池田1998〕の類型○(1m大以上)に属する転礫で、「大割れ」に帰属するものであり、表六甲東部一帯では普遍的な存在の自然礫である。点在型の丁場に分類できるものであり〔第60集、第61集、森岡・天羽2009〕で数多く例示したように、岩ヶ平刻印群の台地面各所で確認されている。したがって、当該資料は母岩2石が関わった石切丁場と考えられ、採掘土坑との関わりをみせる

1号石材は、既に長径4mの母岩の端材と化しており、効率の良い石材調達が行われたことを暗示する。一方、居座るよう遺存する2号石材は母岩そのものの残核であり、築石(平石)2石分以上の調達活動を示唆する。しかし、全体として石目や作業手順など不良要素が数多くみられる石材であり、想定した目的材を確保できずに終わり、遺棄に至ったとみられる。これも当初は3mクラスの転礫であり、岩ヶ平刻印群に広く普遍的に分布する。

以上のように、石切場の最小単位として位置づけられる遺構が確認されたわけであるが、発掘調査することで理解度の誤りもこうして刷新され、新たな意義が強く伝わってきた事例の一つとして評価されよう。

(2) 刻印の存否について

刻印の探索 検出された矢穴技法は、〔佐藤2015、森岡2015〕で技法名として固定的概念の再定義を行った。これに拠った割加工中途の石材や端石は7石を数えるが、刻印がみられるものは全くなかった。したがって、調査地の石切丁場の稼働主体を明示する資料を欠くことが遺憾である。

割丁場内での位置付け ちなみに、200m前後の近傍の刻印石の刻印種を検索すると、○八・井桁・刀鍔・雁・斧・半円・コ字形・串団子・○鍵一・四角に点と多様であり、特定種がけっして偏在するわけではない。しかし、これまでの研究〔藤川1982、大阪歴史学会編2009、第42集〕からは、因伯鳥取藩池田家が丁場割された谷筋との結び付きが強く、鍔・雁などの存在が共通刻印として注目される。この地区以東にあっては、築城石や刻印石そのものが希薄になっており、岩ヶ平丘陵の縁端では、丁場が具体的にどのように割り振られて経営されていたかは、不詳な点が多い。

(3) 矢穴技法の所用年代と矢穴型式の検討

調査地で最も普遍的にみつかった加工石には、12世紀末以来、近畿地方に定着した矢穴技法が認められる〔森岡・藤川2010〕。夾雜するCタイプを除けば、Aタイプが中心であり、慶長5年(1600)あたりから急速に普及する型式である〔森岡・藤川2008〕。確認された矢穴・矢穴痕・矢穴列痕を有する石材は、7石に限られるが、近世初頭に点在型に分類できる丁場〔60集、61集、森岡・天羽2009〕がさらに数多く展開していたことが推定し得る。Aタイプは矢穴口長辺8~12cm、同短辺3~5cm、深さ5~13cmが主体をなし、標準タイプのものが目立つ。矢穴痕には矩形は少なく、底部隅丸の逆台形が支配的で、これらは慶長後半期に遡る指摘も多いが、六甲山地東部では、調達石材の規模からも、原則として徳川大坂城第一期工役以降のものと考えており、元和・寛永年間を大枠での稼働期間と捉えている。

3. 石曳き道の確認と丁場間の有機的関係

(1) 丁場割の混融エリアと山出し

岩ヶ平刻印群は、西日本でも明瞭な藩経営の石切丁場の集合体であり、幕藩体制下、10藩近くの外様の国持大名の丁場割が実修されている。その確認の端緒は古川久雄の研究〔第42集〕にあり、以降の刻印発見例を加味してその統括化と検証を進めている〔森岡・藤川2008、森岡2012〕。その境界が自然地形を基盤とすることは瞭然であるが、榜示石の立地点と調達石材の刻印分布の両面からは、尾根状地形が第一義をなすことが明らかで、開析谷に向かう両側斜面域に一体的な丁場を持つ。ただし、その傾向は現状では刻印群の高位部に顕在化するものであって、台地端部に近いエリアではその徹底が曖昧となり、その分、刻印自体の純粹度も勢い低下する。海出し場の刻印組成が既に協業的集石の態様を示唆するように〔森岡・古川1992〕、長州藩毛利家の完結的経営〔白谷2012、森岡2012〕を除く、山出しの場としての集約度が当地点をも覆う地域で進んでおり、本地点では藩割的な丁場構成などの規範的要素を提示できる実態に乏しい。

(2) 断続的検出の石曳き道と岩ヶ平刻印群第84地点

石切丁場への連続性

16・17号墳の南側を蛇行する窪地の連続する路道は、石材の分布やコッパの集積単位のありようとも有機的に関連する枝道小径の石曳き道と推定して大過ない。その連続部は、市道を越えて岩ヶ平刻印群第84地点の段丘崖を下刻する谷地形へと連なるものであり、多くの転轆利用の証しは既に報告済である〔60・61・63・64・73集など〕。

第3節 城山・三条古墳群における後期古墳の伝聞・伝承・史料と群集墳の評価

1. 何がどう伝えられたのか

(1) 近代開発前後の芦屋川上流域とシヅメ塚

シヅメ塚の旧観と伝承を載せる地誌・山論図 二つの調査地については、昭和戦前までの周辺開発が古墳群との関係である程度掌握され、景勝の地でもあるため、住宅開発に伴い古墳の発掘がしばしば行われている。地名として遡る「シヅメ塚」は、どこまで辿れるのか。山論関係の近世史料である程度信頼できるものに、寛政3年（1791）のものがあり、「庄」の境目上に遺存することが判明する。これを史料の上限とする。明治44年（1911）の『西摂大観』郡部卷〔仲編1911〕には、東の越木村から西の三条村に至るまでに「塚穴数百」の存在を記述し、旧蘆屋村の「コンコン塚」及び三条村の「シヅメ塚」のごとき「窟塚」が「城

堡」や「穴居時代の遺蹟」などの表現をもって、多様な性格付けが行われていることが知られる。「烏塚」なるものの存在もしかりである。最も関心を引く部分は、「精道村の内大字三條村のシヅメ塚石窟塚などは壮大なる構造」としての部分であり（同書墳墓の項）、その言に基して、当地を44年前に踏査し、古墳が横穴式石室墳とみてよいかの判断を企てもしたが、邸宅内に石材をふんだんに用いた「イシムロ」への理解を現状からは掴み難かったのが偽らぬ結果である。当時は、しばしば「墳石」の用語が登場し、これらを「庭園石垣に用ゆるは遺憾のこと」とされる。

シヅメ塚から涼塚へ 「シヅメ塚」が漢字を用いた「涼塚」として顔をみせるのは、大正後半期に作成された『武庫郡誌』〔武庫郡教育会編1921〕が初出とみられ、名の由来を示唆する「昔時老松鬱蒼、巨巖青苔を波り涼風慮に徹し、夏尚暑きを知らず。されば涼塚」の一文が載る。「城山の麓」と、明確にその所在を記し、「其数二十」を数えるというから、場所的には城山古墳群を指し示すようにも受け取れるが、「城主瓦林正頼の防禦に供せし塹壕」という認識にも一驚を感ずるものがあろう。

2. 涼塚の具体像と確認情報の一致

(1) 大平山南麓の古墳

今は会下山と呼ばれる場所も、かつては「大平山」と称されており、旧三條村の小字「塚穴の場」がその麓にあると注目され〔細川1963〕、堀米吉氏邸内に保存される涼塚1基と、後に横田氏所有地門付近の1基がより具体的な記載として、当事業地内における石室の存在を彷彿とさせていた。細川談を聞いてからの踏査活動も重要で、このたびの調査結果との異同を論じる上にも欠かせぬ視認が加わったのである。その後、改変後に立ち入る機会を失うことになったが、最後の情報は確認調査との整合性把握にもなお有効であった。

(2) 三条古墳群構成墳としての理解

昭和12年には、『兵庫県武庫郡精道村土地宝典』が著され、小字「涼塚」がみえる。昭和初年以前からの地名であるが、ここに至って、山芦屋町65が特定をみることになり、1975年にも踏査の機会を得ることになった。三条古墳群の一員としての理解がその後、40年ばかり続く定点の分布調査であった。

(3) 発掘調査の結果

前章で報告したように、副産物の成果はいろいろとあったが、2基の古墳は、現状では非古墳扱いとなった。

3. 新出刻印石がもたらす諸問題

(1) 「一に〇」の小形刻印と平四つ目結

これまで予想しなかった地域において、発見された

この二種の刻印も多くの問題群を林立させる。

第一点は、芦屋川右岸地域に刻印群の区分問題があげられる。現在、当地域には、二つの刻印群の設定が試みられている。高座川以北の城山刻印群と同川以南の芦屋川右岸扇状地刻印群であり、後者は発掘調査の事例が加わっての進捗とみてよく、妥当な追加成果と言えよう〔第87集〕。二つの刻印群には「〇に離れ十」の共通刻印があるので、立地に基づく分離以外にこうした中間地点の様相を論議することは非常に難しいが、既に遊離した石材でもあり、両者の総合的な理解に立って考えるほかない。

第二点として、刻印種からみた性格付けが挙げられる。「一に〇」は奥山刻印群に圧倒的多数が偏在しており、長州藩毛利家の所用刻印と想定されてきたが、その大きさは、〇の直径が8.5cmを測り、最大値40cmを超す一文字一星刻印中、最も小さいものとなって、データ上は大きく孤立する。また、同時に確認された平四つ目結の刻印も小形の歪んだものであって、京極家所用刻印に比し、整正さが全くみられない。ただし、二つの刻印の位置関係からは、角立ち四つ目結ともタイプを異にし、平の要素を負うものと解される。こうしたことから、前者については、前田利常などの家中築城体制との関連で使用される事例が大変気にかかる。六甲山系の石切場では、その類縁的刻印も存在する蓋然性が大きいからである。

(2) 矢穴技法をとどめるその他の加工石

刻印石が全く孤立するものでなく、石切丁場に存在したことを明証するのが、旧邸内で3石を数えた矢穴痕・矢穴列痕・矢穴列を用いる石材である。大半がAタイプに属するが、古Aタイプの生駒石も確認しており〔森岡・藤川2010〕、花崗岩の豊富な表六甲の住宅地にわざわざ運ばれた石材としても注目された。これらの石材は、確実に築城石として機能を前提に残石化したことは確実である。

引用・参照文献目録

- 浅岡俊夫 1981「鷹尾城」『日本城郭大系』12 大阪・兵庫 新人物往来社
- 芦屋市 1971『新修芦屋市史』本篇
- 芦屋市 1976『新修芦屋市史』資料篇1
- 安達厚三・木下正史 1974「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60巻第2号 日本考古学会
- 尼子奈美枝 2003「三河における後期古墳の階層性：馬具所有形態の類型と石室規模の相關関係から」『関西大学考古学研究室開設五拾周年記念 考古学論叢』 関西大学文学部考古学研究室
- 尼子奈美枝 2012「但馬における後期古墳の階層性」『菟原II - 森岡秀人さん還暦記念論集 -』 菅原刊行会
- 池田 碩 1998『花崗岩地形の世界』 古今書院
- 勇 正広・藤岡 弘 1976「古墳時代」『新修芦屋市史』資料篇1（考古・古代・中世） 芦屋市役所
- 大阪府立近つ飛鳥博物館 編 2006『年代のものさし - 陶邑の須恵器 -』〈大阪府立近つ飛鳥博物館図録40〉
- 大阪歴史学会 編 2009『大坂城再築と東六甲の石切丁場』ヒストリア別冊
- 太田宏明 1997「畿内型石室の属性分析」『千里山文学論集』58号 関西大学大学院
- 太田宏明 1999「畿内型石室の属性分析による社会組織の検討」『考古学研究』第46巻第1号 考古学研究会
- 太田宏明 2002「3 類型化による群集墳の検討 - 西摂地域を中心として -」『八十塚古墳群の研究』〈関西大学文学部考古学研究第7冊・芦屋市文化財調査報告第33集〉 芦屋市教育委員会・関西大学文学部考古学研究室
- 太田宏明 2007『横穴式石室と畿内政権』学生社
- 奥田智子 2016「横穴式石室からみた境の意識について - 畿内の主要な片袖式の横穴式石室から -」〈古代学研究会2015年度 2月例会資料〉古代学研究会
- 小田弘樹 2014「考察 土器群の位置づけ」『奈良山発掘調査報告』II - 歌姫西須恵器窯の調査 - 奈良文化財研究所 編
- 小田弘樹 2015「飛鳥・藤原・平城地域とその周辺の土器様相」『第19回 古代官衙・集落研究集会 宮都・官衙・集落と土器 研究報告資料』 奈良文化財研究所 編
- 関西大学山芦屋遺跡調査団 1983『兵庫県芦屋市山芦屋遺跡 S 4 地点現地説明会資料』 芦屋市教育委員会
- 紅野芳雄 1940『考古小録』 西宮史談會
- 古代代学研究会 編2015『シンポジウム古墳時代における政権と畿内地域 資料集』
- 古代の土器研究会 1992『古代の土器 1・都城の土器集成』
- 古代の土器研究会 1993『古代の土器 2・都城の土器集成 II』
- 小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究 - 日本律令の土器様式の成立と展開、7~19世紀 -』
- 佐藤 亜聖 2015「中世日本における採石技術の展開と東アジアの採石技術」『第1回中世採石・加工技術研究会発表資料』 中世採石・加工技術研究会
- 佐藤 隆 2000「古代難波地域の土器様相とその史的背景」『難波宮址の研究』第十一 大阪市文化財協会 編
- 佐藤 隆 2003「難波地域の新資料からみた須恵器編年 - 陶邑窯跡編年の再構築に向けて -」『大阪歴史博物館研究紀要』第2号 財団法人大阪市文化財協会
- 佐藤 隆 2004「8世紀の須恵器編年と難波宮・平城宮の並行関係 - 陶邑窯跡編年の再構築に向けて・その2 -」『大阪歴史博物館研究紀要』第3号 財団法人大阪市文化財協会
- 佐藤 隆 2014「難波地域の土器編年からみた難波宮の造営年代」『難波宮と都城制』 中尾芳治・栄原永遠男 編 吉川弘文館
- 佐藤 隆 2015「難波地域から出土する土器の特徴とその暦年代」『季刊 明日香風』134号 公益財団法人古都飛鳥保存財団
- 重見 泰 2014「後飛鳥岡本宮と飛鳥淨御原宮 - 宮殿構造の変遷と『大極殿』出現過程の再検討 -」『ヒストリア』244号 大阪歴史学会
- 島田貞彦 1928「本邦発見の竈形土器」『歴史と地理』22-5
- 白石太一郎 1966「畿内の後期大形群集墳に関する一試行」『古代学研究』42・43合併号 古代學研究會
- 白石太一郎 2012「前期難波宮整地層の土器の暦年代をめぐって」『大阪府立近つ飛鳥博物館 館報』16
- 清家植直 1919「釜及竈形土器の新発見」『考古学雑誌』9-8 日本考古学会
- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群』I 平安学園考古学クラブ
- 仲彦三郎 編 1911『西摂大觀』郡部 明輝社
- 中村 浩 2001『和泉陶邑窯出須恵器の型式編年』芙蓉書房出版
- 長町 彰「摂津山芦屋古墳調査報告」『考古学雑誌』18-11 日本考古学会
- 西 弘海 1978「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告 II』 奈良文化財研究所
- 西 弘海 1982「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』 小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会 平凡社
- 西 弘海 1986「土器様式の成立とその背景」真陽社
- 白谷朋世 2012「徳川大坂城東六甲採石場に伴う番所を探して - 朝日ヶ丘遺跡出土遺物をヒントに -」『菟原II - 森岡秀人さん還暦記念論集 -』 菅原刊行会
- 土生田純之 1991『日本横穴式石室の系譜』 学生社
- 藤川祐作 1972「摂津大坂城（六） - 芦屋山中の採石場 -」『城と陣屋65号』 日本古城友の会
- 藤川祐作 1982「徳川大坂城 東六甲採石場（西宮市所在）」『西宮市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』 〈西宮市文化財資料23号〉 西宮市教育委員会
- 藤田和尊 2006『古墳時代の王権と軍事』 学生社
- 藤原2002「7 群集墳と群集窯 - 八十塚古墳群出土須恵器

- 器と周辺の生産地の関連から－」『八十塚古墳群の研究』〈関西大学文学部考古学研究第7冊・芦屋市文化財調査報告第33集〉芦屋市教育委員会・関西大学文学部考古学研究室
- 細川道草 1963『芦屋郷土史』芦屋史談会
- 松本百合子 1991「B 耳飾」『古墳時代の研究』第8巻
古墳II 副葬品 雄山閣
- 宮代栄一 1993「中央部に鉢をもつ雲珠・辻金具について」『埼玉考古』第30号 埼玉考古学会
- 宮代栄一 2010「有機質の鉢ないし座を嵌め込んだと考えられる雲珠・辻金具について－古墳時代馬具研究における微細な有機質痕跡の観察法をめぐる一考察」『九州考古学』第85号
- 村上 隆 2002「古墳時代の金・銀製耳環の材質と製作技法をめぐる考察」『奈良文化財研究所紀要2002』独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所
- 武藤 誠・森岡秀人 1976「文献解題 吉岡昭とその遺稿について」『新修芦屋市史』資料篇1 芦屋市
- 森岡秀人 1973「向こうの山に群がる黄泉国－六甲南麓群集墳解明への一素描－」『芦の芽』24 芦の芽グループ
- 森岡秀人 1979「VII総括－八十塚古墳群の展開と岩ヶ平支群のもつ意義－」『芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査』〈芦屋市文化財調査報告第11集〉芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1983a「山芦屋遺跡N地点緊急発掘調査」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和55年度』兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1983b「山芦屋遺跡S1地点緊急発掘調査」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和55年度』兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1983c「追葬と棺体配置－後半期横穴式石室墳の空間利用原理をめぐる二、三の考察－」『開設三周年記念 考古学論叢』関西大学文学部考古学研究室
- 森岡秀人 1984a「表六甲東麓における群集墳の動静」『歴史と神戸』125 神戸史学会
- 森岡秀人 1984b「旭塚古墳および城山・三条古墳群をめぐる諸問題」『兵庫県芦屋市旭塚古墳－表六甲城山群集墳中の一巨石墳の測量調査とその考証－』（－研究会発足20周年記念－）武庫川女子大学考古学研究会
- 森岡秀人 1985「山芦屋遺跡（S3地点）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度』兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1989「群集墳の形成」『古代を考える 古墳』白石太一郎編 吉川弘文館
- 森岡秀人 2002「摂津・八十塚古墳群と菟原郡葦屋郷・賀美郷周辺の古代史」『八十塚古墳群の研究』〈芦屋市文化財調査報告第33集・関西大学文学部考古学研究第7冊〉芦屋市教育委員会・関西大学文学部考古学研究室
- 森岡秀人 2005「石切丁場の出現－徳川大坂城・芦屋市東六甲石切場の発掘調査から－」『国際シンポジウム韓国の倭城と大坂城 資料集』倭城・国際シンポジウム実行委員会
- 森岡秀人 2012「徳川大坂城石切場の山出し・海出しにみられる協業の問題－長州萩藩毛利家家内組丁場編成考－」『西国城館論集』Ⅱ、中国・四国地区城館調査検討会
- 森岡 2015「大型硬質石材の採石活動に占める矢穴技法の特質と意義」『河上邦彦先生古稀記念献呈論文集』論文集刊行会
- 森岡秀人・天羽育子 2009「丁場類型によりみたる花崗岩の石切場」『兵庫発信の考古学 間壁葭子先生喜寿記念論文集』間壁葭子先生喜寿記念論文集刊行会編
- 森岡秀人・藤岡 弘 1980『城山古墳群緊急発掘調査概報』〈芦屋市文化財調査No.8〉芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・藤川祐作 2008「矢穴の型式学」『古代学研究』180 古代学研究会
- 森岡秀人・藤川祐作 2010「矢穴調査報告」『額安寺宝篋印塔修理報告書』大和郡山市教育委員会
- 森岡秀人・古川久雄 1992「芦屋市立美術博物館野外歴史資料展示における近世考古資料の一例－兵庫県芦屋市吳川町出土の大坂城再築関係石材について－」『阡陵』（関西大学博物館学課程創立二十周年記念特集）関西大学
- 森川 実 2015「飛鳥の土器と『飛鳥編年』」『季刊 明日香風』134号 公益財団法人古都飛鳥保存財団
- 山芦屋遺跡発掘調査団 1983『山芦屋遺跡S3地点の発掘調査概要』芦屋市教育委員会
- 吉岡昭 1944『考古隨録』〔遺稿・和綴墨書〕
- 《芦屋市文化財調査報告目録》
- 第1集『芦屋市史追録』第1号 有坂隆道編 村川行弘著 1959年刊行
- 第2集『大阪城と芦屋』村川行弘ほか 1962年刊行
- 第4集『朝日ヶ丘繩文遺跡 八十塚古墳群』村川行弘・橋爪康至・藤岡 弘・安田博幸 1966年刊行
- 第5集『芦屋市埋蔵文化財包蔵地台帳 八十塚E号墳発掘調査報告』村川行弘・佐々木幸雄・藤岡 弘 1967年刊行
- 第11集『芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査』森岡秀人・古川久雄編 1979年刊行
- 第13集『兵庫県芦屋市六麓荘町174番地所在 八十塚古墳群発掘調査概報－岩ヶ平支群F小支群西地区の緊急調査成果概要－』森岡秀人編 1983年刊行
- 第14集『埋蔵文化財調査メモリアル'80～'85』森岡秀人編 1986年刊行
- 第20集『芦屋市八十塚古墳群岩ヶ平支群第10号墳の調査－古墳損壊に伴う確認調査の結果－』古川久雄編 1990年刊行
- 第22集『平成3年度国庫補助事業 芦屋廃寺遺跡ほか発掘調査概要報告書 月若遺跡第12次地点 月若遺跡第14次地点 八十塚古墳群岩ヶ平支群第50号墳』森岡秀人・白谷朋世編 1992年刊行
- 第25集『平成5年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調

- 査概要報告書 六麓荘町94番地（八十塚古墳群・徳川氏大坂城岩ヶ平採石場）』 森岡秀人・白谷朋世 編 1994年刊行
- 第27集 『平成7年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査－震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認（試掘）調査－概要報告書 寺田遺跡（第40・41・47・52・55・57地点） 芦屋廃寺遺跡（W地点・第29・38地点） 月若遺跡（第20・25・28・30・33地点） 打出岸造り遺跡（第1地点） 打出小槌遺跡（第17地点） 金津山古墳（第9地点） 久保遺跡（第15地点） 山芦屋遺跡（S8地点）』 森岡秀人・木南アツ子 編 1996年刊行
- 第31集 『徳川大坂城東六甲採石場I－芦屋墓園拡張工事に伴う奥山刻印群K地区内の事前発掘調査－』 森岡秀人 編 1998年刊行
- 第33集 『八十塚古墳群の研究』〈関西大学文学部考古学研究第7冊〉網干善教・米田文孝・竹村忠洋・太田宏明・海邊博史 編 関西大学文学部考古学研究室 2002年刊行
- 第42集 『平成13年度国庫補助事業 徳川大坂城東六甲採石場II 岩ヶ平刻印群（第11次）発掘調査報告書』 古川久雄 編 2002年刊行
- 第44集 『徳川大坂城東六甲採石場III 岩ヶ平刻印群（第12次）発掘調査報告書－芦屋市六麓荘浄水場高区配水池（水道施設）築造工事に伴う唐津藩採石場跡の発掘調査－』 古川久雄 編 2003年刊行
- 第60集 『徳川大坂城東六甲採石場IV 岩ヶ平石切丁場跡－芦屋市岩園町宅地造成工事に伴う埋蔵文化財事前調査の記録と成果－』 森岡秀人・坂田典彦 編 2005年刊行
- 第61集 『徳川大坂城東六甲採石場V 岩ヶ平刻印群（第85地点）発掘調査報告書－長州藩毛利家石切丁場跡における発掘調査の成果－』 竹村忠洋・白谷朋世 編 2006年刊行
- 第63集 『八十塚古墳群（第106地点）発掘調査報告書－八十塚古墳群岩ヶ平支群第10号墳と徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群の調査－』 白谷朋世 編 2006年刊行
- 第64集 『徳川大坂城東六甲採石場VI 岩ヶ平刻印群発掘調査報告書 第32・33・45・67・70・79・81・91地点－平成9・11・14・15・16年度国庫補助事業－』 森岡秀人・竹村忠洋 編 2006年刊行
- 第67集 『八十塚古墳群・岩ヶ平石切場（徳川大坂城東六甲採石場VII）－岩ヶ平第45・46・58号墳と第108地点の発掘調査成果－』 森岡秀人・坂田典彦 編 2007年刊行
- 第71集 『芦屋川水車場跡発掘調査報告書－城山古墳群第20号墳と芦屋川水車場跡の発掘調査成果－』 竹村忠洋・白谷朋世 編 2007年刊行
- 第73集 『平成18年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書－徳川大坂城東六甲採石場VIII－ 三条会下遺跡（第2地点） 岩ヶ平刻印群（第122地点） 岩ヶ平刻印群（第124地点） 岩ヶ平刻印群（第126地点）』
- 森岡秀人・竹村忠洋 編 2008年刊行
- 第77集 『旭塚古墳 城山古墳群発掘調査報告書－第1・2次確認調査結果の概要と多角形終末期横穴式石室墳の保存調査－』 森岡秀人・坂田典彦 編 2009年刊行
- 第78集 『平成14年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書－震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査とその成果－ 城山南麓遺跡（E・F・G地点） 冠遺跡（第23地点） 芦屋廃寺遺跡（第81・88地点） 月若遺跡（第74地点） 寺田遺跡（第144地点） 津知遺跡（第123・187地点） 打出岸造り遺跡（第38・39地点） 久保遺跡（第47・48地点） 打出小槌遺跡（第36・37地点）』 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦 編 2009年刊行
- 第79集 『平成19年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査報告書 寺田遺跡（第191地点） 山芦屋遺跡（S14地点）』 森岡秀人・竹村忠洋・守田めぐみ 編 2009年刊行
- 第84集 『平成20年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 城山南麓遺跡（K地点） 芦屋廃寺遺跡（第108地点） 月若遺跡（第102地点） 寺田遺跡（第197地点） 岩ヶ平刻印群（第169地点）－徳川大坂城東六甲採石場X－』 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦・白谷朋世 編 2010年刊行
- 第88集 『平成21年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 岩ヶ平刻印群（第176地点）－徳川大坂城東六甲採石場XIII－ 芦屋廃寺遺跡（第113地点） 打出岸造り遺跡（第56地点）』 森岡秀人・坂田典彦・白谷朋世 編 2011年刊行
- 第92集 『徳川大坂城東六甲採石場XIV 奥山刻印群第112地点調査報告書－市立芦屋病院内毛利家石切丁場の榜示刻印石－』 竹村忠洋・坂田典彦・西岡崇代 編 2012年刊行
- 第99集 『八十塚古墳群第145地点発掘調査報告書－八十塚古墳群岩ヶ平支群第60・61号墳の調査－』 白谷朋世 編 2014年刊行
- 第102集 『平成24・25年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書－八十塚古墳群（第145地点）』 西岡崇代 編 2015年刊行
- 第103集 『平成26年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 八十塚古墳群（第154地点） 寺田遺跡（第227地点） 山芦屋遺跡（S18地点）』 竹村忠洋・西岡崇代 編 2016年刊行

図版1 八十塚古墳群第153地点（1）現況



調査地現況（南東から）



第16号墳現況（西から）



調査前の第16号墳石室（南から）



調査前の第16号墳石室開口部（南から）



第17号墳現況（北西から）



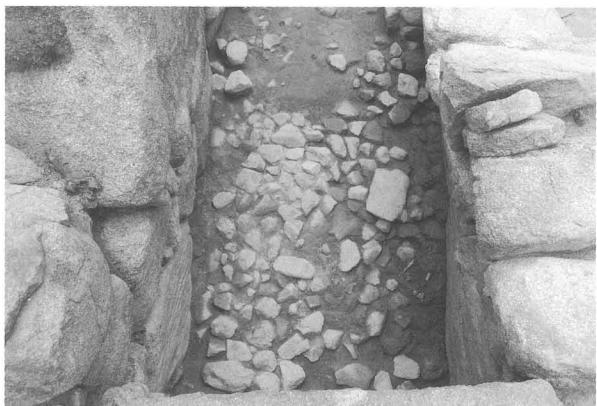
調査前の第17号墳石室（南東から）



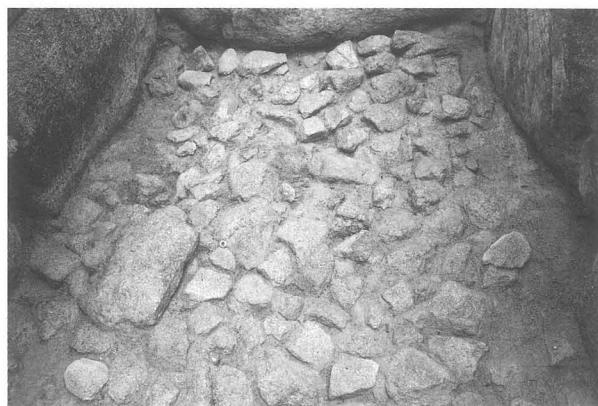
石室内コッパ出土状況（南から）



奥壁付近の遺物出土状況（南から）



石室床面検出状況（北から）



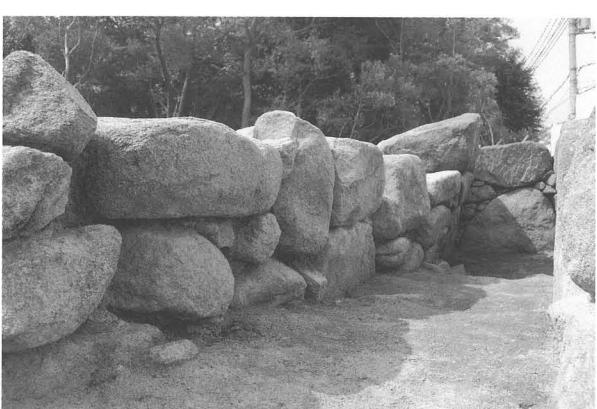
石室床面検出状況（南から）



奥壁（南から）



奥壁と左側壁（南西から）

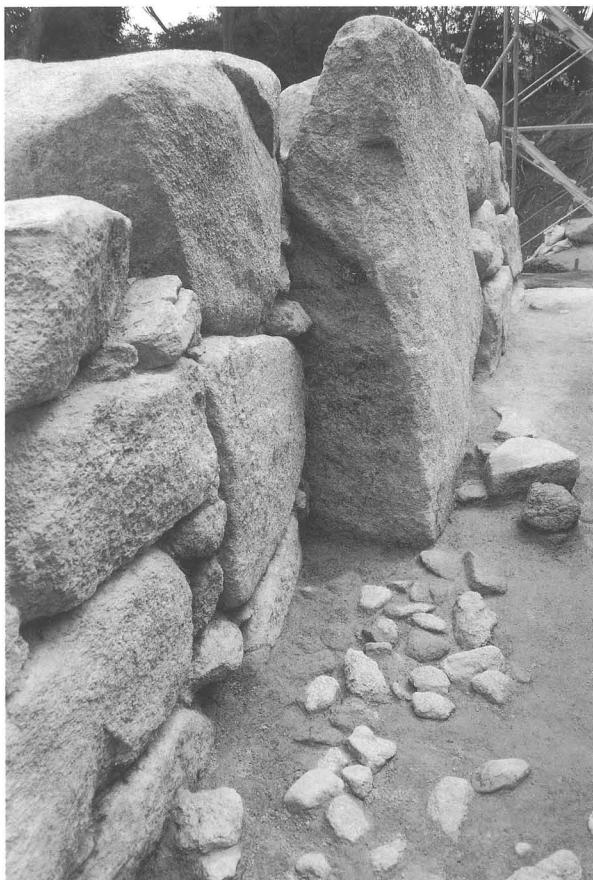


右側壁（南南東から）



左側壁（南南西から）

図版3 八十塚古墳群第153地点（3）岩ヶ平支群第16号墳



石室左袖部（北から）



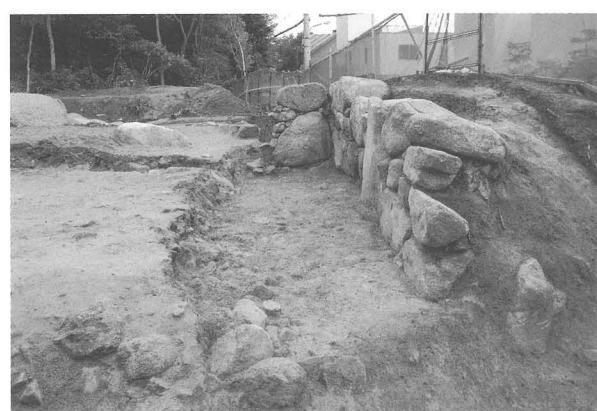
羨道遺物出土状況（南から）



羨道遺物出土状況（南東から）



墓壙検出状況（南から）



右側壁基底石除去状況（南から）

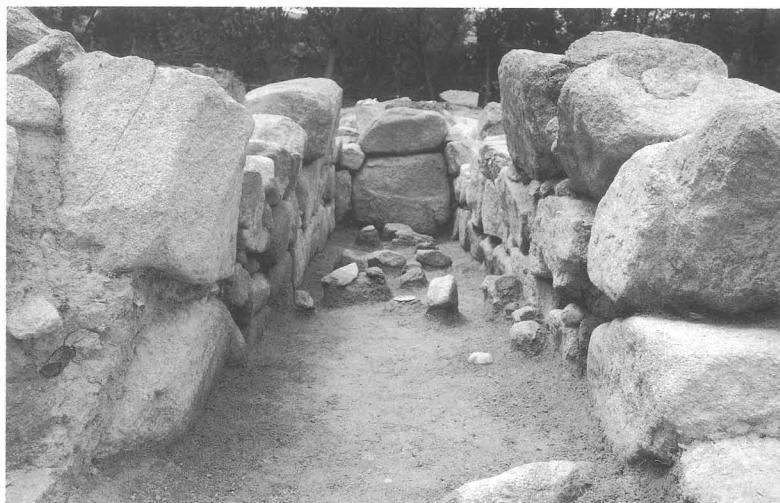


奥壁裏の土層（西から）



石室横断面土層断面（南西から）

図版4 八十塚古墳群第153地点（4）岩ヶ平支群第17号墳



石室内遺物出土状況（南東から）



奥壁付近遺物出土状況（南東から）



須恵器出土状況（南東から）



前庭部遺物出土状況（南東から）



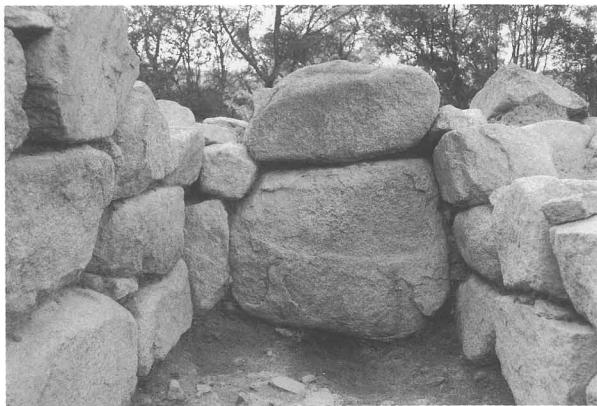
前庭部遺物出土状況（北西から）



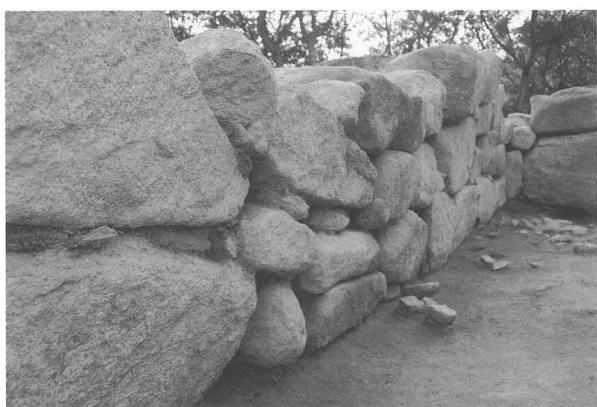
石室横断面土層断面（南東から）



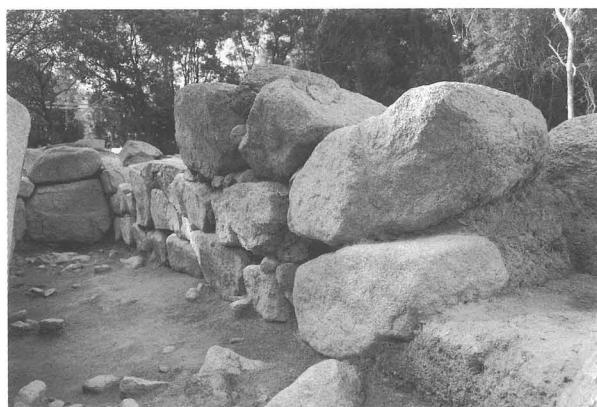
墳丘内列石（北西から）



奥壁（南東から）



右側壁（東南東から）



左側壁（南南東から）



墓壙検出状況（南東から）



基底石除去状況（南東から）



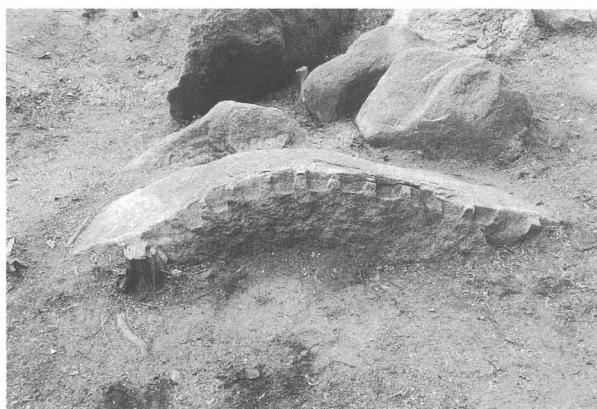
墓壙埋土（南南東から）



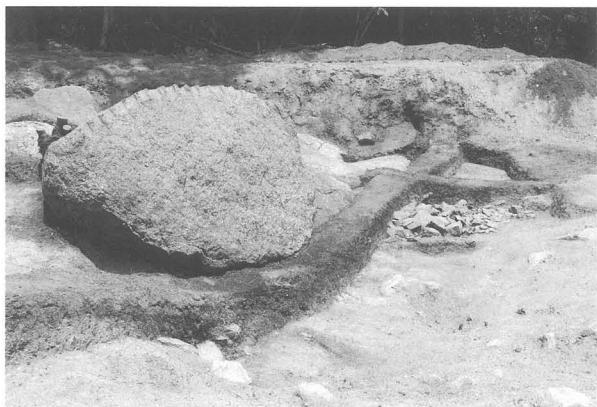
西トレーンチ掘削状況（南南東から）



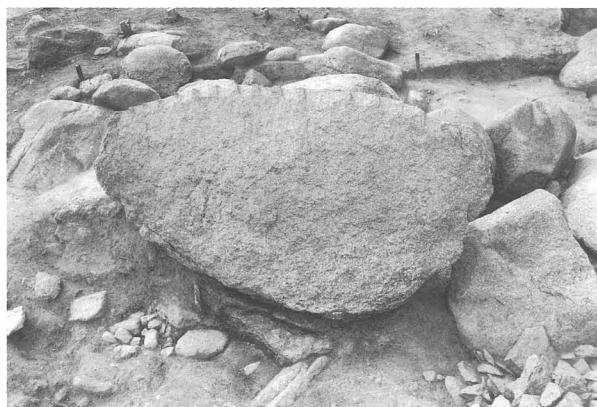
1・2号石材現況 (西から)



2号石材現況 (北から)



1号石材とコッパ集積群 (南から)



1号石材 (南東から)



2号石材掘削状況 (北から)



2号石材掘削状況 (東から)



コッパ集積群検出状況 (南東から)



コッパ集積群掘削状況 (東から)



谷状地形現況（南東から）



3号石材（北東から）



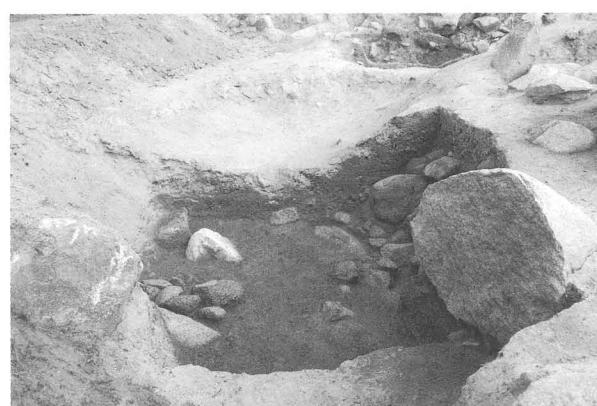
4号石材（北から）



5号石材（東から）



6号石材（西から）



7号石材とトレンチ4（東から）



17号墳墳丘上のコッパ集積群（II群）（南西から）



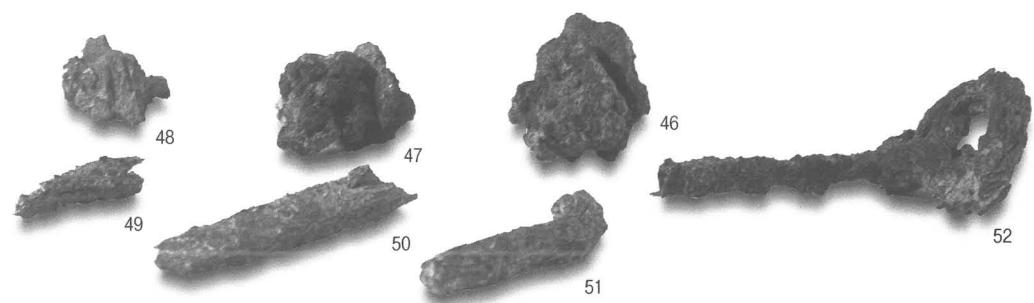
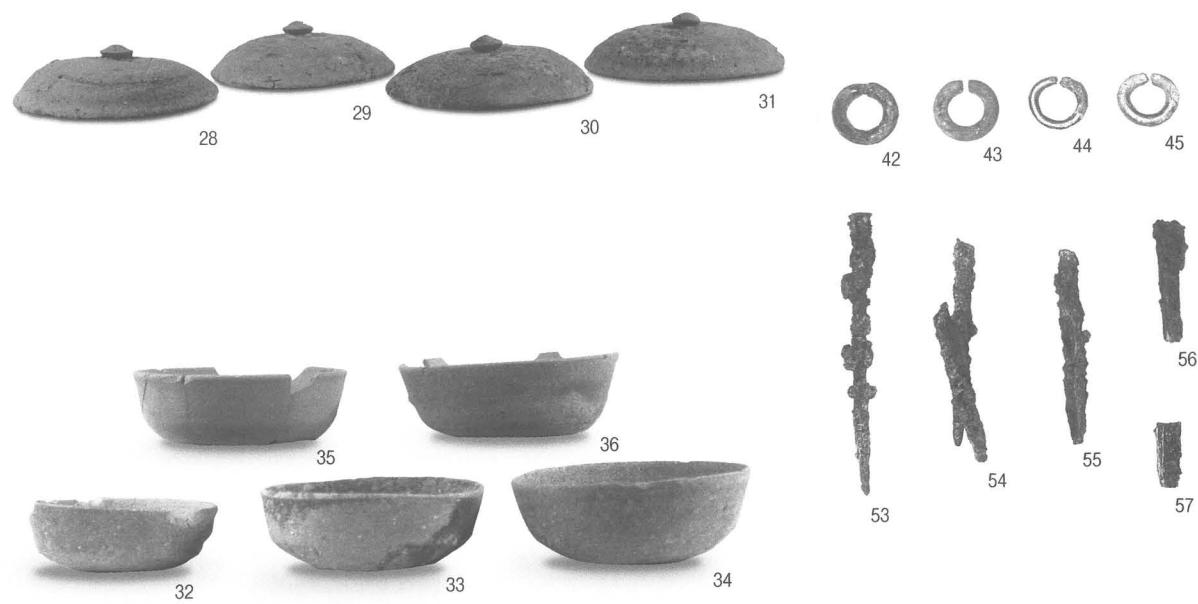
Aタイプ矢穴痕のあるコッパ

図版8 八十塚古墳群第153地点（8）出土遺物（1）



岩ヶ平支群第16号墳出土遺物（1）

図版9 八十塚古墳群第153地点 (9) 出土遺物 (2)



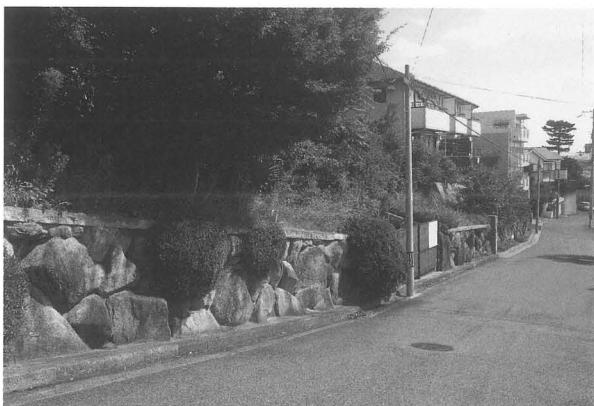
岩ヶ平支群第16号墳出土遺物 (2)



岩ヶ平支群第17号墳出土遺物



涼塚1号墳・2号墳現況（北から）



調査区近景（西から）



涼塚1号墳現況（南東から）



涼塚2号墳現況（北西から）



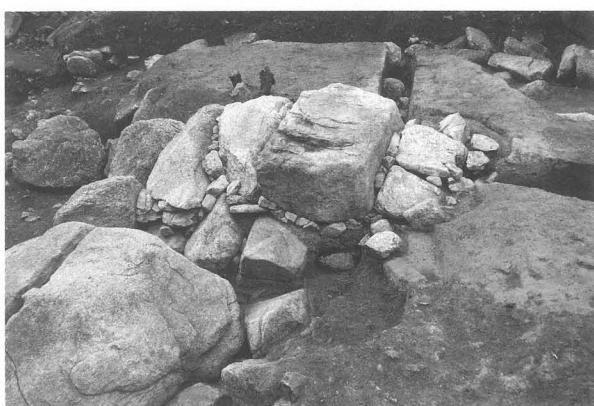
調査前の涼塚2号墳石室（東から）



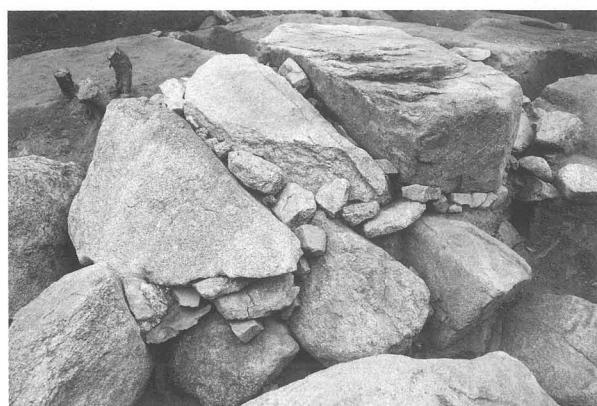
涼塚1号墳全景（北から）



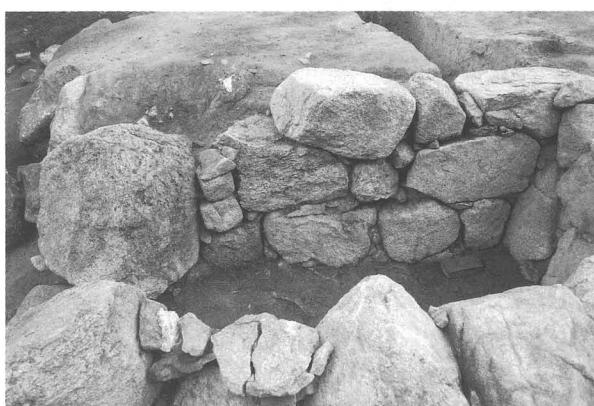
涼塚1号墳と矢穴石（東から）



天井石検出状況（北から）



天井石検出状況（北東から）



右側壁（北から）



左側壁（南から）



開口部付近からみた石室（東から）



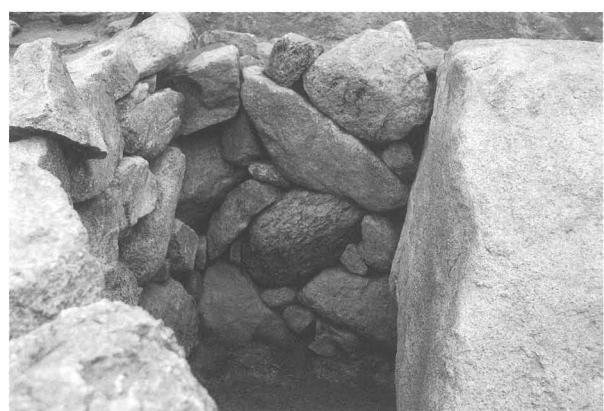
基底石除去状況（東から）



石室全景（北西から）



奥壁側から開口部を望む（西から）



奥壁（南東から）



左側壁（南西から）



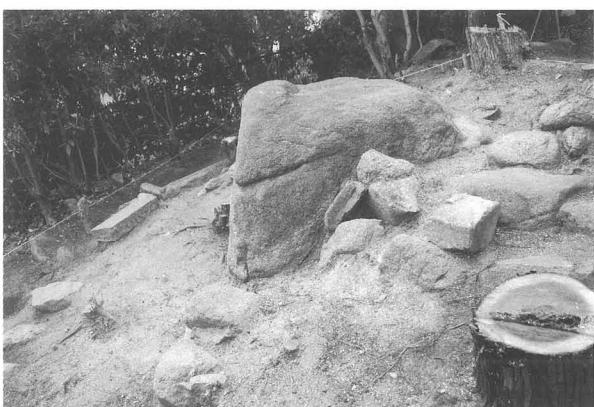
左側壁部分（南から）



割加工石材 1 (南東から)



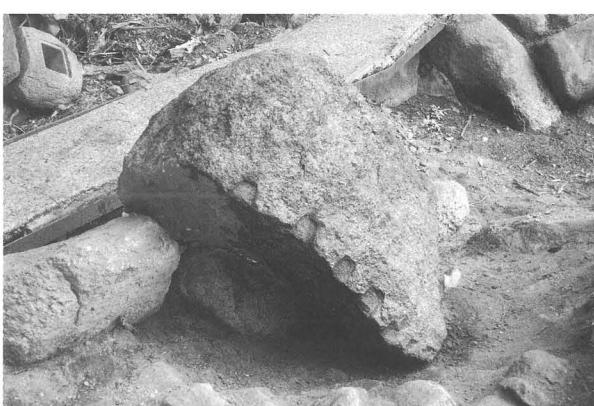
割加工石材 1 掘削状況 (西から)



刻印石 (北東から)



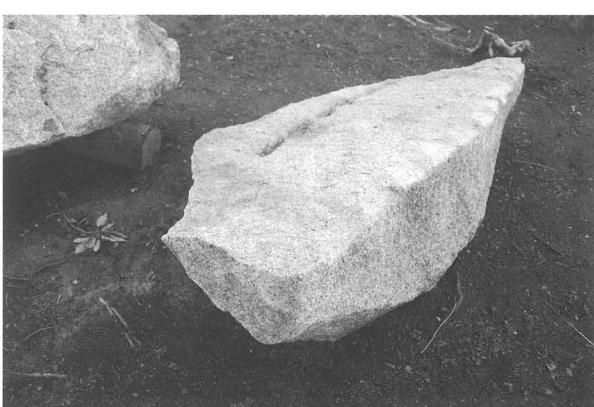
刻印



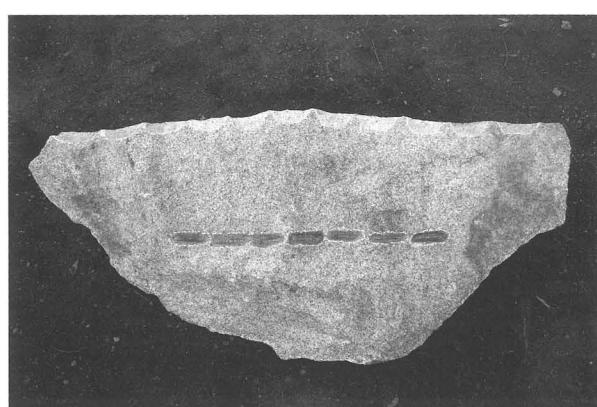
割加工石材 2 (南東から)



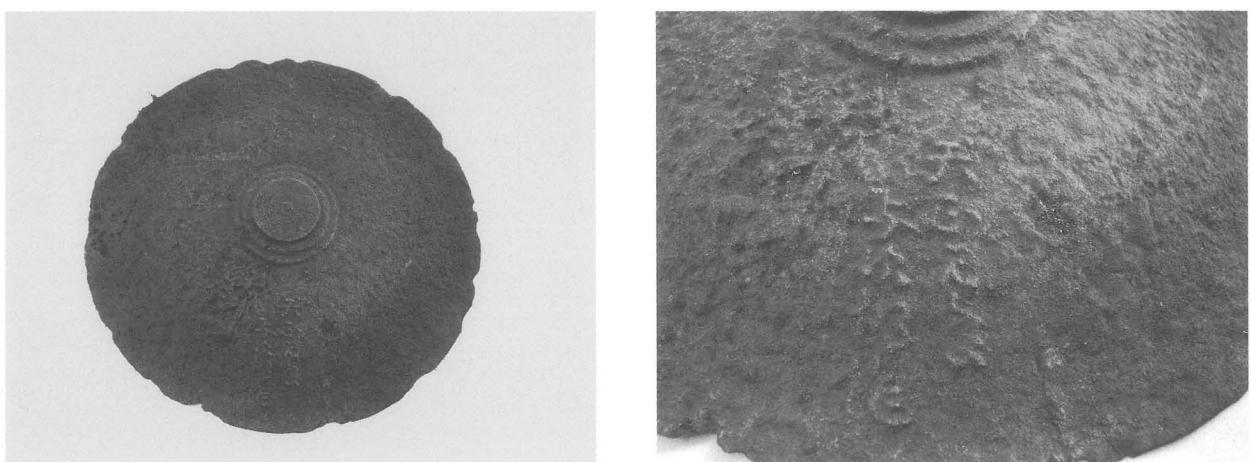
礎石掘削状況 (南から)



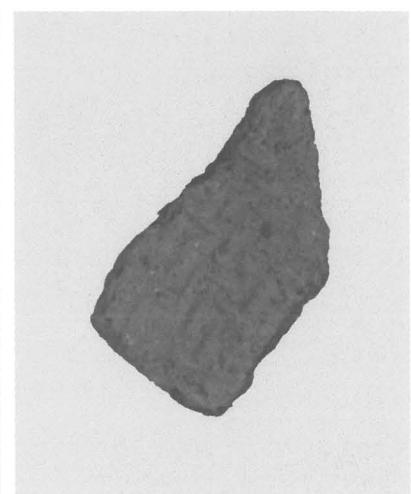
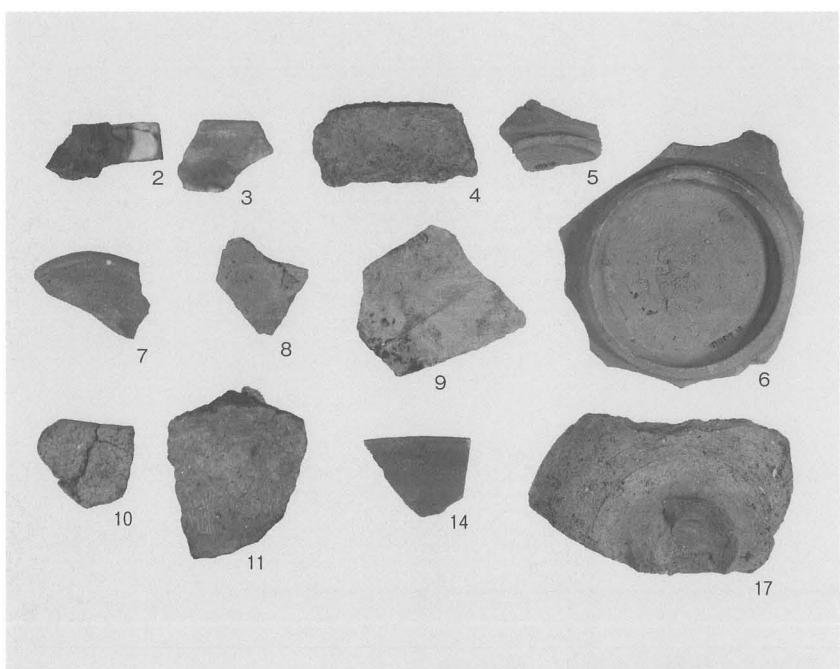
1号墳の天井石



1号墳の天井石の矢穴



鉄製品



縄文土器

土器類 (1)

土器類 (2)



芦屋市文化財調査報告 第104集

平成26年度

芦屋市内遺跡発掘調査報告書

八十塚古墳群第153地点

城山・三条古墳群第118地点

平成28年（2016）3月31日 印刷発行

発行 芦屋市教育委員会

〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号

TEL. 0797-38-2115

印刷 ウニスガ印刷株式会社

〒677-0054 兵庫県西脇市野村町大坪471

TEL. 0795-22-3226



Ashiya Archaeological Record 104

2016.3

Ashiya City Board of Education, Japan